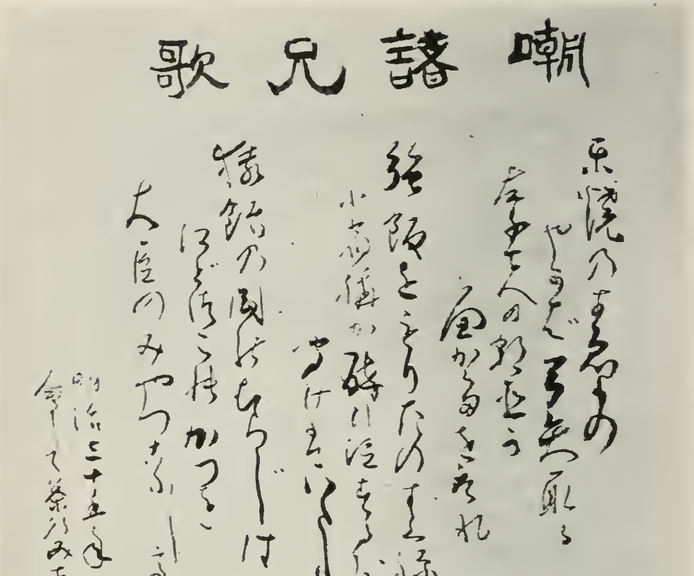
帝室技藝員
東京美術學校教授
香取秀眞著

正岡子規を中心に

學藝書院藏版



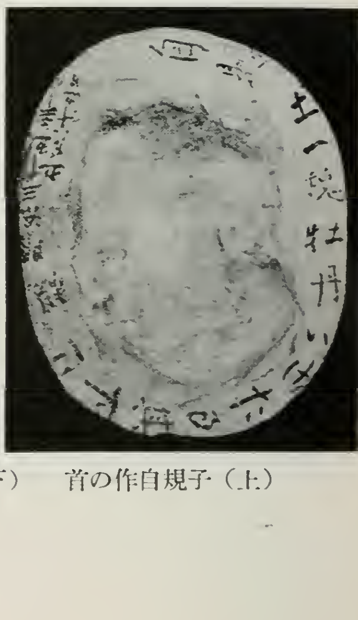
子規の筆蹟　（明治三十五年）



子規の畫（明治三十四年）







（上）子規自作の首　（下）秀眞作子規床上の像と裏



明治四十一年九月子規七周忌の小集寫眞（根岸草庵）

（右より）生島巴子　古泉千樫　石原純　安藤默坊　鈴木約房　齋藤茂吉　安江不空　香取秀眞　木村芳雨　森田義郎　坂井久良岐　伊藤左千夫　蕨桐軒　蕨眞一郎

巻頭の言葉

御病床の正岡子規先生を中心に歌會を催したことは、明治三十二年三月から始まつて翌年十月まで約二十回であつた。少ない時で四五人多い時でも十三人は超えなかつたやうである。子規全集の年譜によつて數へて見ると歌會に出席した全人員は前後を通じて二十七名ばかりであつて、その内飄亭、青々、碧梧桐、虚子等の俳人諸君を除けば凡そ二十名である。勿論この二十名の内には格堂、潮音、一五坊、不可得などの俳人も交つてゐるが、むしろ歌の方に親しみが深い人々である。

歌よみ仲間の故人となつた人々では、左千夫、芳雨、節、茂春、蕨眞、安民、潮音等の諸君で、現存者は割合に多く十三名を數へ得る。しかし殆ど音問が絶えて只ひとり大阪の安江不空とはたま〳〵手紙のやりとりがあるばかり。

第一回の歌會は明治三十二年三月十四日で、この時の會者、先生を初めとして、秀眞、麓、鹿洲、芳雨、黒井恕堂の六名。恕堂は未知の人、丁度來あはせたものかと思ふ。

第二回の四月十八日にも六名で、飄亭、青々が見えた。五月六月は歌會がなかつた様子だ。

第三回の七月二日には七名、新しく大橋文之、原安民の名が見える。

第四回八月二日には增加して十一人、これは前月二十四五兩日に歌會の結果を「短會小會」と題して、新聞「日本」に掲げた爲であつたらう。新しい顏ぶれは潮音、一雄、虚子である。

第五回九月三日は八名、格堂、一五坊の名が見え出した。

第六回十月一日には墨水、不可得、湖月、三子が新しく見える。墨水、湖月は俳人である。

第七回は十一月一日十名、新顏なし。この月十三日午後先生は本郷に麓を訪ひ、十六日小石川に秀眞を訪はれた。

第八回十二月三日九名、興安嶺、茂春の新しい顏が見えた。

改暦明治三十三年一月七日の歌會には、前後に見ざる十三名の會合、この時始めて左千夫の

顏が見えた。日本新聞で募集した「新年雜詠」の發表されたのはこの月二日であつた。それに同君の歌が二首のせられたのを機縁として來る事になつた。

二月四日、十一人。三月四日七人。四月一日の歌會に始めて節が見えた、節が最も年少者であるといふ事であつた、彼はこの年二十二歳。

四月十五日はじめて萬葉集輪講會を催す、會者先生をはじめ、秀眞、左千夫、一五坊、茂春不可得、格堂、三子の八名。輪講會はこの歳八月十五日迄五回ほど續いた。

この月廿九日、格堂が先發して本所に左千夫を訪ふ事となつて、丁度往き合せた私は先生の御供をして人力車を連ねて出た。左千夫不在。龜井戸天神に詣で境内の茶屋に憩ひ、再び左千夫の許を訪ひ夜ふけて歸られた。

五月五日麓に寄せた手紙に、十三人の歌人を植物と忠臣藏の役割に見たてたものがある。歌人を知つてゐる者にとつて、その見たて方が如何にも適切であるのに驚かされる。

麓　五疊半の茶室の紅白薔薇　鹽屋　判官　一力　亭主

秀　眞　天の香具山の眞榊　勘　平　足利　直義

不可得　尼寺の百日紅　　鷺坂伴内　力彌
三子　西洋料理室の鬼百合　　桃井若狹助　小浪
潮音　腸胃病院の庭の梔子花　　顔世御前　藥師寺
格堂　竹藪の水仙花　　加古川本藏　石堂馬之丞
芳雨　改良理髮店の福壽草　　定九郎　お石
安民　幼稚園の立葵　　原郷右衛門　駕舁
鹿洲　巡査派出所のしだり柳　　大野九太夫　駕舁
茂春　緣日の美人草　　お輕　神崎矢五郎
煙村　孤兒院の木蓮花　　與一平　一力藝者
興安嶺　掃溜の大根花　　猪　天河屋儀平
左千夫　牛小屋の裏の白蓮　　高師直　となせ

大星由良之助の役割には爭ひ起り候ため衆役者一日代りに相つとめ御覽に入候

これ等の歌人は何れも數回歌會に出席してゐた事がわかる、節は見立ての中にない。

同月六日の歌會には十名の會合者があつた。この席上の雜談中、第三回の募集歌「櫻花」の發表されたその內に、安江秋水の名があつた。秋水は木村芳雨の近所に住むらしい、と先生の云はるゝまゝに、芳雨が一度秋水を訪問して、歌會に誘ひ出したらよからう、と云ふ事であつた、その爲七月一日の歌會に初めて秋水が來た。

五月二十日の萬葉集輪講會は、夜に入りて俄に雨、左千夫、茂春、格堂、一五坊等は遂に先生の御宅に一泊する事となつた。翌二十一日拂曉、先生は庭前を眺めて立どころに雨中卽景十首を作られた、更に興に乘じて線香一本を期して煙十首を課した。この興味多き會合に私は不幸にして缺席した。

六月三日先生は麓宅の園遊會に赴かれた。歌人以外麓の知人等を交へて三十人の會者であつた。有名な歌玉の歌十二首の先生の御作はこの時のものである。その內歌人名をよみこみの歌が四首ある。

歌玉は色々あれど秀眞のは白く左千夫は黑くしありけり

格堂はルビーか巴子はトパッツかあるじ麓は出雲青玉

茂春、節、一五坊、不可得四つの玉飛びて當りて碎けて散りぬ

うただまの潮音、三子その色は眞白ふと眞赤白斑と

この日上總の蕨眞が、左千夫を介して入門した。

八月五日の歌會に義郎、島堂の初顏がある。十月の歌會後は先生宅に歌會も、萬葉集の論講も行はぬ事となつた。歌人中、節、格堂が最年少者であつたが、義郎が來るやうになつて義郎が最年少といふ事であつた。彼は二十歳、だが秋水は十九歳の筈。

歌會は中止されたが、情誼に厚い歌人等は絶えず根岸を音づれた。

以上で正岡子規先生を中心に歌を以て集まり來つた歌人の全部を擧げた。健在者十餘人を數へ得る中に岡麓は人も知る「アラ、ギ」の重鎭であり、秋水は安江不空の名を以て大阪にあつて畫筆をとる傍、同人を引率して歌を毎號「阿迦雲」に揭げてゐる。赤木格堂は鄕里備前に、不可得は高野山大學の學長として淡路洲本町千山千光寺の住職和田性梅僧上、山本鹿洲は釜石町なにがし神社祠官、興安嶺矢野勘治は大阪正金銀行支店長、巴子西田捨次郎は外交官、三子山田麒太郎は福嶋に、一五坊藤木睦之介は北海道に、森田義郎東京に。日々にうとくなつて年

賀狀の往復もあるかなし。三十五年間遇はぬ人もゐる。

上ニシテ田安宗武下ニシテ平賀元義歌ヨミ二人

とは明治三十三年、八月十三日格堂への返書中にあるもの、先に源實朝を賞揚し、萬葉集に就ては文字語句の解釋以外、その眞髓をつかむ事を敎へて、こゝに根岸派の基礎を置かれた、先生を以て萬葉模倣とした當時の多數は實は誤まつてゐる。併し三十餘年後の今日になつて、萬葉研究の盛大なのは端を先生に發してゐる。當時萬葉集を以て耳遠く古典に過ぎないとけなしてゐた歌學者は、今では古往今來萬葉に勝る歌はない樣に云つてゐるのは時代とでも云はうか。

ことの序にこの第二隨筆の內容に就て釋明をして置く。先の第一隨筆として出した「ふいご祭」と同樣に鈴木惠一君に依て大部分を蒐集され、柴田宵曲君も數篇を筆寫して贈られたもので、隨感隨想、詞藻、古美術行脚、などゝ大略の分類は鈴木君によつてなされた。一應眼を通した時に破棄すべきものが多數であつたが、既に印刷されたので、どうにもならぬ。まゝよ死

後に出された全集と思へば何でもない。前生の恥の清算帳だとあきらめよう。

文章を書く事はむづかしいと思つた、併し子規先生の門に遊ぶやうになつて、先生の作らるゝ寫生文の言文一致體ならば書きやすい、何でも書いて見たくなつたのは、これも歌道と同樣に、子規先生の御高恩であつた。それでゐて明治二十五六年頃の大八洲學校での國文の感化でもあらうか、なまぬるい和文體を手習する氣で書いたりなどした。要するに文章體でも、口語體でも何れも中途半ぱで終つてしまつた。先生に今少し文章道に就て教へられて貰ひたかつたと後悔しても追ひつかぬ。止ぬる哉。

子規先生の指導によつて、悟り得て作つた和歌三千數百首の中から選び出した二千餘首の私の全歌集「天之眞榊」も全部校了になつてゐる。これは私の文學的事業の一端を示すもの、不日上梓の豫定、一讀を賜らば幸である。

昭和十一歳舍丙子一月元旦

香取秀眞

正岡子規を中心に　目次

隨感隨想

詞藻

古美術行脚

正岡子規を中心に

索引

口繪挿繪

（をはり）

正岡子規を中心に

香取秀眞 著

隨感隨想

萬葉集中の畫題

近來繪畫展覽會などへ行つて見ると、山水花鳥などの外の畫、則ち、歷史畫とか、風俗畫とかいふものゝ畫題は、多くは陳腐であつて、頗る畫題の選擇に窮してゐる樣である。これは畫工の眼界が狹いのと、一つは讀書しない爲である。歷史畫を作る者が、歷史や其他の書物をも見ないといふのは、如何にも譯の分らぬ話ではあるまいか。余は萬葉和歌集を繙いて見る度に、若し畫筆をとる事が出來たならば、集中の面白い事柄を、悉く畫にして見たいと思うて居たのである。折ふし畫をかく友人などに話して見るが、誰もかゝない。それでこゝに面白いと思ふ事を拔き出して、廣く大勢の人に相談せうと思ふのである。集中には種々雜多な事柄があるので、それを片つ端から一々拔いて行くと、錯雜して何が何だか分らなくなるから、今項目を分けて、其下に類を聚めて見ようと思ふ。

第一　故事

此の項目の下には、神話めいた事や、小說めいた事を述べようと思ふ。

松浦佐夜媛、これは人が多く知つて居る事であるから略す。

水江の浦島の子、これも人の知り切つて居る事であるから略す。

勝鹿の眞間の手兒奈、是は市川の先の下總東葛飾郡眞間といふ處に居た娘のことで、娘を東言でテコナと云ふたのである。此の手兒奈に就て、どんな事があつたであらうかといふと、九卷に長歌が一首、短歌が一首ある。

その歌は、

雞が鳴く東の國に　古へにありける事と
今迄に絕えず云來る　勝鹿（カツシカ）の眞間の手兒奈が
麻衣に靑衿つけ　ひたさをを裳には織著て
髮だにも搔きは不梳（ケヅラズ）　履をだにはかで行けども
錦綾の中につゝめる　齋（イヘ）ひ兒も妹にしかめや

望月のみてる面わに　花の如く笑みて立てれば
夏蟲の火に入るが如　湊入りに舟こぐ如く
ゆき隠れ人の言ふ時　幾時も生けらぬ物を
なにすとか身を棚知(タナシリ)て　浪の音のさわぐ湊の
奧津城に妹がこやせる　遠き世にありける事を
昨日しも見けむが如も思ほゆるかも

反　歌

かつしかの眞間の井見ればたちならし水をくみけむ手兒奈し思ほゆ

この歌の大意は、關東に其昔あつた事だと云うて、今に至る迄、絶えず云ひ續き語り續けて來た、彼の眞間の手兒奈は、どんな樣子であつたかと云ふと、麻の衣に青い襟をつけて、至極ツマラない身なりをして、髮の毛なども櫛を入れた樣子もない、そして履もはかないで跣足であるが錦綾の中に包んだ大切な兒も、この手兒奈には劣つて居て、其の顔などゝ云つたら、滿月の樣な所謂天平式で、（萬葉集で美人を形容する時は必ず滿月の如しと云つて居るし、眉を形容しては三日月ではなくて遠山のぼつとした事を云ふ、正倉院の美人畫の屛風の丸顔の美人をいつも思ひ出さ

せる）花の開いた時の樣に美しく笑を含んで居る。其容子のよいのにこがれて、夏蟲が火を慕うて來るか、さもなくば湊へ舟が入り込む時のやうに、澤山の男どもが私かに言ひ寄つて來る。併しながら手兒奈は、人世朝露の如しで、幾許時も生きて居るものではない、誠に世はつまらないものであると悟つて、遂に浪打さわぐ眞間の入江に身を投じて死んでしまうたと云ふことが、遠い昔にあつたのを、昨日か一昨日見でもした樣に思はれるわい、といふ意である。反歌の方は、葛飾の眞間に有る處の井戸を見ると、いつも〳〵水仕事などしてゐた、手兒奈の事を思ひ出す。といふ意である。

茲で一寸ことわつて置くが、此の手兒奈の居た時分には、舟橋邊の海が、遠く眞間あたり迄入り込んで、入江になつて居たのである。次に手兒奈に關しては第三卷にも、山部赤人が手兒奈の墓を過ぎた時の、長歌が一首、短歌が二首ある。

いにしへに有りけむ人の　しづ幡の帶解きかへて
伏屋立て妻とひしけむ　葛飾の眞間の手兒奈が
奧津城(オクツキ)はこゝとは聞けど　槇の葉やしげく有るらむ
松の根や遠く久しき　事のみも名のみも吾は忘らえなくに。

反歌

吾も見つ人にも告げむ葛飾の眞間の手兒奈が奥つき處

かつしかの眞間の入江に打ちなびく玉藻かりけむ手兒奈し思ほゆ

長歌の大意は、昔ある男が、しづはた織の帶を解きかへて、自分の女房を捨てゝ迄も、家一軒をこしらへて、手兒奈を妻にせんとしたといふ、此の眞間に、今は空しく手兒奈の墓があるばかりで、共に昔の人等は影も見えないが、槇の葉の繁き如く、繁くあまねく云ひふらした事や、又松の根の如く、遠くも長くも語り來つた其等の事柄と、手兒奈の名は忘るゝ事が出來ない。又反歌は初のは分り切つてゐる歌で、次のは、

今見れば葛飾の眞間の入江の水中に靡いてゐる藻がある、此の藻を昔の手兒奈が刈つたであらうが、其の手兒奈の事が思はれる、と云ふ意である。

更に遡つて見ると、手兒奈の存生頃の葛飾の歌が四首程ある。是は十四卷の東歌の中にあるので、三首は手兒奈に關係した歌である。

葛飾の眞間の手兒奈をまことかも吾に寄すとふ眞間の手兒奈を

これは手兒奈の靡かぬのが有名であつたので、その手兒奈を、本當に私に靡かせてくれるとい

ふが、其は誠實の事であるかしらといふ意で、當時の俗謠に唄つた物であらう。

かつしかの眞間の手兒奈が有りしかば眞間のおすひに浪もとゞろに

葛飾の眞間には名高い美しい手兒奈がゐる爲に、入江の浪までがさわぎ立つて、どん／＼寄つて來る、といふ意である。

あの音せず行かむ駒もが葛飾の眞間の繼橋やまず通はむ

あの音は足の音で、足音のしない駒は欲しい物である。なぜと云へば、眞間の繼橋の板橋をいくつも渡つて行くと音がするから、一人こつそり通ふには足音のしない駒がほしい、といふ歌である。繼橋には種々の說があるが、昔の眞間は細い入江がいくつもあつて、其には各〻板橋が懸けてあつたので、つぎ／＼に橋が有る故、つぎ橋と云つたのである。

扨これだけの材料があつたらば十餘圖の畫も、立處に畫く事が出來ようと思ふ。次は

蘆屋處女（又は菟原處女） これは攝津國菟原郡葦屋の里にあつた話である。卷九に、長歌が二首、短歌が四首あつて、十九卷にも、大伴家持の長歌が一首、短歌が一首ある。今一々歌を揭げるのは面倒であるから、只其事柄をのみ述べる事としよう。

昔攝津國菟原郡葦屋の里に一人の少女が居た。此少女は、七八歲の幼少な時から、髮をたかね

て結ぶ頃の年頃になる迄も、隣の家の人目にさへ懸らないで深窓に人となつた。コンな譯である
からどうにかして一度見たい物だ、などゝ云ふ人が澤山あつて、中には言葉を交へる人もある樣
になつた。其中に殊に深く交際をした人が二人程あつた。其は智奴男と云ふのと、莵原男とであ
つた。

其二人が、大いに競爭を初めて恐ろしいことになつた。この二人の男は、イザと云へば太刀の
柄へ手をかけ、又は弓を執り、靫を負うて迄、戀の妨する奴原は目に物を見せんと云ふ氣色で、
少女が云ふ事ならば火の中にも、水の中にも這入らん意氣組で競爭した。此の有樣を見て、其の
少女は泣き悲しんで父母に語るには、賤しい此の身故に二人の大丈夫が爭ふのを見ると妾は此の
世に生きた空がない。一層の事此の身が黄泉へ旅立ちしたならば、自然爭ひも止む事であらうか
ら、妾は父上母上には何とも申譯が無いがアノ世で待ちます程にと云うて、泣く〳〵父母に別れ
て、波打寄する海岸に出で、水に靡く玉藻の中に身を沈めて死んでしまうた。此事を傳へ知つた
智奴男は、寸暇もあらせず、あと追うて身を投じた。スルト今一人の莵原男は、天を仰ぎ、地に
叫んで、齒がみをして、アンナ智奴の奴原に先をこされては居はせぬはと、云つて、懸佩の小太
刀をオツ取つて、續いて海に投じた。是に於て二人の男と女との親族共相會して永き後の世に、

コンナ事があつたと知らせ傳へるために、少女の墓を眞中に造り、男の墓を左右に造つて、後世に傳へた。スルト墓上の木が成長して、片枝が智奴男の墓の方へ靡いてゐる。と云ふ事實である。此事のマツト悉しい事は、何か他の書物で一度見た事があるが今思ひ出せない。支那にもこんな事があると見えて、古詩などに往々見掛ける。

櫻兒　以上述べ來つた所の手兒奈や、蘆屋少女は、昔あつた事を後人が歌に作つたものであるが、櫻兒と云ふ娘に戀をしてゐた、二人の男が作つた二首の短歌がある。

茲に櫻兒と云ふ少女があつた。其時に二人の壯男が居て、共に此娘を挑んだ。其張合つて挑む有樣と云つたら、娘の身として見て居られない位で、命掛けで競爭して居た。そこで櫻兒が獻欷して曰く古來から今日迄、一人女の身として、二人の男子に嫁した話は見もしなければ聞きもしない、と云つて、何れか一方へ往けば、一方は非常に立腹するであらう。これは到底二人を和らげると云ふ事は出來難い事である。噫どうしたら良からうか、もし妾死したならば二人の男達が互に挌鬪する事が止むであらうと云つて、遂に林中に入り樹へ掛つて自ら縊死してしまつた。所が此事を聞いて哀慟血泣して、各〻心緒を陳べて歌うた。

春さらばかざしにせむと我もひし

櫻の花はちりにけるかも

と一人が歌を詠んだ。此の意味は、春が來て花が開いたならば折つてかざさうと思つて居た櫻の花が、散つてしまうた、と云うて比喩の體に歌うたのである。處が今一人の男が、

妹が名にかけたる櫻花さかば常にや

戀ひむいや年のはに

吾が戀ひ慕うた櫻兒は遂に死んでしまうた、せめて櫻兒と云ふ名の櫻に關係せる櫻の花が開いたなら、其の櫻花を妹と思つて、來る年も來る年も、眺めも仕ようが、しかし櫻を見る如に、つねに戀しさ慕しさがまさる事であらう、と云つた樣なことで誠に氣の毒な事件である。

鬘兒　カツラコと云ふ娘のことで、是も櫻兒に似た事である。

鬘兒といふ娘子があつた。處が三人の男があつて、此の娘子を聘せんとした。そこで娘子が歎息して云ふには、一女の身は消え易い事は丁度露の樣なものである、三雄の志は石の樣に動かす事が難い、一層此の身は死なうか、どうせうと、思ひ沈んで步むともなしに、耳梨の池（大和國十市郡）のほとりへ來た。種々に思ひ亂れた末、遂にフラ／＼と妙な氣になつて、耳梨の池へ身を投じて、池の藻屑となつた。其時三人の男等が哀頽の至りに堪へずして各〻思ふ所を陳べて歌

うた、其の歌に曰く、

耳なしの池しうらめし吾妹子が
來つゝかづかば水は涸れなむ

是は一人の男の歌うた歌で、吾妹子（吾妹子とは上代は女を親み云ふ時の詞で單に妹といふ場合もある）の縵兒が、この耳梨の池へ來ながら思ひ餘つて潜いた時に、池の水が涸れて呉れたならばよかつたものを、水の澤山あつた爲にとう〳〵死なしてしまつた、此の池がうらめしい、耳梨の池がうらめしい、といふ歌である。今一人の男が歌は

足曳の山縵の兒今日往くと吾に
告げせばかへり來ましを

此の男は、どこか他所へ行つてゐたものと見えて、縵兒が今日死にゝ行くぞと云て、吾が所へ告げて來てくれたらば、他所から還つて來べきものを、居ない爲にとう〳〵死なしてしまうた。と云ふ歌である。縵兒と云はんが爲に『足曳の山』といふ冠詞を置いたのである。次の今一人の男は

足曳の玉縵の兒今日のごといづれの隈を見つゝ來にけむ

と歌うた。これは男が耳梨の池へ來ながら詠じた歌で、人情の機微を穿つた名歌である。歌の意味は、自分はカウして、今日此道を、妹が身を投じた耳梨の池へ行きつゝあるのである。縵兒が耳梨の池へ行く時も、道の隈々を見つゝ、物思ひながら行く樣に、アノ可愛い縵兒も物思ひながら行く時に、ドの邊を見ながら行つたであらうか、今自分は縵兒が此世の見納めの日に、行きつゝありし此道の隈々を見ながら行くのは、一種云ふべ可らざる感慨があると云ふ意で、頗る微妙な心の底を、三十一言に云ひあらはしてある。

以上の事どもは、如何にも悲慘な事件ではある、これ等の事實をつらまへたならば、人一人かからが、景色を添へようが、畫をかく人の働きで、どんな傑作でも出來ようと思ふ。マダ此外にもあるが、故事の分は此位で置かう。

第二　作　家

これは萬葉集中の重だつた歌人で、畫題になりさうな歌を、詠んだ時などを主として紹介しようと思ふのである。

磐姫皇后　此の御方は、仁德天皇の皇后樣で、葛城襲津彥の女であらせられて、仁德紀や、古

事記を見ると委細にわかる。萬葉卷二に

思二天皇一御作歌四首

君が行きけ長くなりぬ山たづの迎へか
行かむ待ちにか待たむ

ありつゝも君をば待たむ打靡く吾黑髮に
霜の置く迄に

かくばかり戀つゝあらずは高山の
磐根し卷きて死なましものを

秋の田の穗の上にきらふ朝霞
いづへの方に我戀やまむ

何れも天皇を慕はせらるゝ御歌である。仁德紀と合せ見たならば、色々面白い事を發見するであらう。

聖德太子　此の方の事は書物にも色々あるし、畫にもよくかいてあるので、今更取出でゝ云ふ必要はないが、只一首萬葉にある歌を紹介しようと思ふ。

上宮聖德皇子出二遊竹原井一之時見二龍田山死人一悲傷御作歌一首

家ならは妹が手まかむ草枕旅にこやせる此の旅人あはれ

此の歌は誠に結構な歌で、此の歌の大意は、自分の家で病氣になつたのならば、女房が手を枕として介抱もよく屆く事であらうが、旅に出て病氣で死んでは、誰もみとりをする者もない。誠に氣の毒なこの旅人であるわい、といふ歌意で、五句の七言であるべき所が、九言になつてゐる爲頗る崇重で、さすがは聖德太子の御歌と敬服の外はない。近來しば〳〵太子が死人を見てゐられる圖があるが、多くは不感服のものゝみである。

額田女王　此人は鏡王と云ふ人の女で、藤原鎌足の室の鏡女王の妹で、天智天皇にも、天武天皇にも召されて夫人となつた人で、頗る才女であつたらしい。

天智天皇遊二獵蒲生野一時額田女王作歌

あかねさす紫野ゆきしめ野行き野守は見ずや君がそでふる

此の歌は皇太子大海人皇子が、あちこちと袖を振りつゝ、額田女王の目につく樣に步いてゐた

時に、そんなに袖を振つて、あやしい事をなさると、野守が見て氣がつくとわるい、と云うて、暗に天智天皇といはずに、野守と云つたのである。袖を振ると云ふのは、此頃人を招くとか、戀人に思を通ずるとか云ふ時の素振である、其時大海人皇子、此時は皇太子であつたので、答歌がある。

紫のにほへる妹をにくゝあらば人嬬
故に吾戀ひめやも

明日香宮御宇天皇とは、後に位に卽かせられた天武天皇の御事である。此歌は人の妻であるからと云うて、にくゝなければ戀をする、と云ふ意で、口にするのも如何な譯であるが、此の二首の歌などは、壬申の亂と多少の關係のありさうな歌である、額田女王の才女たる所以もこれ等を考へるとよく分る。此の時の獵の事は、書紀にも見えてゐる事で

七年丁卯夏五月五日天皇縱二獵(カリシタマフ)於蒲生野(カマフノニ)一于レ時大皇弟諸王內臣及群臣皆悉從焉

とある。萬葉の歌と合せて見ると、此時の獵の有樣が、眼に見える樣である。

此他歌は多くあるが、畫題にはどうかと思ふ。只一首コンナのがある。

額田王思二近江天皇一作歌一首

君まつと我が戀ひ居れば我が宿の
すだれ動かし秋の風吹く

允恭天皇の妃であらせられた衣通姫（ソトホリヒメ）が、天皇を戀ひ奉るあまりに『我がせこが來べき宵なりさゝがにのくもの行ひ今宵しるしも』と云ふ歌がある。是は『前賢故實』などにもあつて人のよく知つた事であるが、此事實とよく似てゐるのが、額田王の歌である。しかし衣通姫のは二月の事であるが、これは秋である。

大津の皇子　皇子は天武天皇の第三の皇子で、其容姿は檣岸（タカクサカシク）て音聲が俊（スグ）れて朗（アキラカ）だと申す事で、才學があつて、最も文筆が御すきで日本で詩を作つた初めの人は弘文天皇と此の皇子である。朱鳥元年十月謀反した爲に逮捕せられて、次の日譯語田（ヲサダ）の家に死を賜つたといふ事である。萬葉巻の三に

大津皇子被レ死（ミノカラシムル）之時磐余（イハレノ）池陂（ニテ）流レ涕御作歌一首

百傳（モモ）ふいはれの池に鳴く鴨を今日のみ
見てや雲がくれなむ

あの邊の地理をよく心得ないから分らないが、嘗て敏達天皇の宮居は磐余の譯語田の宮である

事を思ふと、コノ譯語田の家といふのも、或は磐余の池に近い處であつて、家を出ればすぐに堤へ出られる處かと思ふ。扨て『百傳ふ』はいはれの枕詞で、いはれの池に鳴いてゐる鴨を、常々は樂しくもをかしくも見てゐたが、最早吾命もこれ限りで、明日は雲にかくれてしまふ命であれば、いはれの池の鴨も今日は見納めである、といふ、誠にあはれの深い歌である。

皇子がヲサダの家で死なれる時に、皇子の妃、山邊皇女が、被髮で素足で走つて來て、殉死された爲、見てゐる人々が、みんなすゝり泣をしたとの事である。

大來皇女 大來(オホク)皇女は大津皇子の御妹で、伊勢の大神宮の齋宮である。大津皇子が死を賜ると聞いて、十一月に飛鳥の都へ來られたのである。

大津皇子薨之後大來皇女從二伊勢齋宮一上レ京之時御作歌二首

神風のいせの國にもあらましを何しゝ

來けむ君もあらなくに

見まくほり吾がする君もあらなくに

なにしか來けむ馬つかるゝに

思ふに、皇女は大津皇子が謀反して、捕へられたといふ事を聞いて命乞ひの爲に、伊勢からい

そいで、大和へ來られたのであらう。此の歌で見るとどうもさうらしく考へられる。神風の伊勢の國から、はるばると自分は何をしに來たのかしら、大津の皇子が此の世に居ないと知つたならば伊勢に居るのであつたものを、というて歎息したのである。

今一首は、自分が見たい遇ひたいと思ふ大津皇子は居もせないのを、何だつて馬疲らしに來たのであらうか、自分ながら馬鹿げてゐたわい、といふ意で、馬に乘つて、いそいで伊勢から大和の飛鳥へ來た有樣が見える。

大津皇子と、大來皇女とは、大へん仲がよかつたと見えて、嘗て大津皇子が竊かに伊勢へ行つて、皇女に遇うて其の歸る時に、皇女が歌をよんだ事などもあつた。

柿本人麿　此の人麿の傳は殆ど分らない。只萬葉集に多くの傑作が載つて居るため、千古の歌聖と稱せられて、世人に知られて居る人である。種々と萬葉集に依つて調べて見ると、此人は持統文武の兩朝に仕へた人で、役は舍人をして後に石見の國の掾か、目の役になつた人で尤も位の低い人であつた。此人の歌は悉く名歌であつて、一首としてつまらないのはない。『過二近江荒都一長歌』とか、『從二石見國一別レ妻上來時歌』とか、最も長い百四十九句の『高市皇子尊城上殯宮之時歌』とか、其他の長短歌は悉く金玉ならざるはなしである。是は唯歌がよいとして置くばかり

でなく、皆立派な畫題になると思ふ。西行法師の鴫立澤の樣な陳々腐々たる畫題よりか、ずつと新で、且つ自由な圖がつけられる事と思ふ。それに又、人麿は日本最始の大文學者、大詩人で、二千年來此人の上へ出る詩人は、日本にはまだ出ない。貫之や、定家や、法師の西行を畫く前に、先づ人麿を畫くべしである。

過二近江(ノ)荒都(ヲ)一時柿本朝臣人麿作歌

玉たすき畝火の山の　橿原の聖(ヒジリ)の御代ゆ
あれまし〻神の盡(コトゴトツガ)樛の木の彌繼々(イヤツギツギ)に
天の下知し食(メシ)しを　空に見つ倭(ヤマト)を置きて
青丹吉奈良山を越え　いか樣(サマ)に思ほし食(メセ)か
天さかる鄙(ヒナ)には有(アレ)ど　岩走る近江の國の
さゝ浪の大津の宮に　天の下知し食(ノ)しけむ
天皇(スメラギ)の神(カミ)の命(ミコト)の　大宮はこゝと聞けども
春草が繁く生ひたる　霞みたつ春日(ハルヒ)が霧(キレ)る
もゝしきの大宮處　見れば悲しも

反　歌

さゝ浪の志賀の唐崎さきくあれど
大宮人の舟まちかねつ
さゝ浪の志賀の大和田よどむとも昔の
人に又もあはめやも

カイ摘まんで、此歌を解釋すると、

畝火山に鎭まり居ます神武天皇の御代から引き續いて、代々の天皇が大和に都せられてあらせられたのを、其の大和の國を捨置いて、奈良山を越えて、何と思し召した物やら、片田舍の近江國の大津へ都を移されて、天下を治められた天智天皇は、マア如何なる御考へであらせられたのであらう、その天智天皇の大宮の跡はこゝであるとは聞いてゐるが、又此處が宮殿の跡ぢやと人は云ふけれども、イカに荒れ果てた有樣であらうか、トテも都の跡などゝは思へない……マア此の有樣は、春の草は一面に生じてゐるし、其上を霞が深く立ちこめてゐる、いかにも心さびしい事である。大宮のあつた跡を見ると、色々昔の事を思ひ出して、悲しい事であるワイ。

反歌の方はへ反歌と云ふのは、支那漢詩の騷體に於ける亂の樣なもので、長歌に云ひ盡してない

事などを云ひ、同時に調聲を整へる爲のものであるといふ說がある)。

さゞ浪は冠詞で、志賀の唐崎は、昔、都のあつた當時のまゝであるけれど、今は大宮人が居ないで、舟遊びなどをせぬ爲に、舟を待ちかねて困つてゐるらしく見える。

今一首のは、

志賀の湖水は風波も立たずに、大宮人を遊ばせんとして、靜かに淀んでもダメダ、又たとひ淀ますともダメダ、何故かと云へば、都は已に此處ではないから、昔の大宮人などはトツクに居ないから、到底遇ふことが出來やしない。と云ふ意味である。

次に『從二石見國一別レ妻上來時之長歌二首並短歌四首』を擧げようと思ふが、餘程長くなるから玆には長歌は擧げずに、只其歌の大意をのべて、短歌四首を出さう、長歌の意は、

石見の國の、角(ツノ)の浦もないし干潟もないと、人は見るであらう、よし浦はなくも干潟はなくも渡津の荒磯には、青い〳〵玉藻や、奥津(オキツ)藻が朝夕風に靡き朝夕浪にゆられてゐる、其の玉藻の浪と共に靡き寄る樣に、吾に靡き寢し妹を、只一人殘して置いて、京都へと發足するのであるから、後髮を引かるゝ樣な氣がして、道の隈々毎に振り顧ると、段々と妻の居る里が遠くなつて來て、其のみならず、高い〳〵山をも越えて、自分は來つゝあるのである、家に

置いて來た妻は、丁度夏草が太陽に照らされてしなびる樣になつて、吾を忍びつゝあるであらう、其樣が一目見たいものである。一層此の途中の山が、自分と妻の居る家を遮ることをせなんだならばよく見えもしよう、いま〳〵しい山である、靡いてしまへ此の山。

といふのが長歌の大意である。初めに角の浦を出て、其邊の光景をのべつゝ、玉藻の靡く樣にと云つて妻の事を云ひ出して、段々山川を隔たる事を述べつゝ、結句で『靡け此の山』と結んである此結句七言、千鈞の重みがあると云つて學者の稱讚する所である。反歌の二首は

石見のや高角山の木の間より我が
振る袖を妹見つらむか

笹の葉はみ山もさやにさわげとも
吾は妹思ふ別れ來ぬれば

といふのである。今一首の長歌は略して、唯其の反歌二首を擧げよう。

靑駒の足搔(アガキ)をはやみ雲井にぞ妹が
あたりを過ぎて來にける

秋山に落つる黃葉はしばらくは勿散(ナチ)り

亂れそ妹があたり見む

以上の歌は、人麿が石見の國司の廳から朝集使の役で、朝廷へ行く時の事なので、時候はいつかと云ふと、十一月一日である。其故に『秋山に落つる黄葉云々』の歌のある所以である。此時の妻と云ふのは任地にある時相知れる婦人で、妾である。人麿の本妻は、此頃大和の布留の社の邊りに居たので、久しぶりで上京した夫と、乍ちに逢ひ乍ちに別れなければならぬ事を泣いて、次の様な歌がある。

柿本朝臣人麿妻依羅娘子與二人麿一相別歌一首

勿思ひそと君は云へども遇はむ時
何時としりてか吾が戀ひざらむ

婦の別を惜しんだ時、人麿が妻を慰めて、自分の事をソンナに心配せいでもよい、ワシはぢきに歸つて來るから、身體を大切にしてゐるがよい位の事は云うたであらう、ソコで妻が、思ふ勿れ、心配する勿れと、あなたは云はれるが、何時遇へるのだか分らない、分らないから其間は戀せずには居られないではありませんか、と妻は其の心細さを歌つた。嗚呼此の情思纏綿たる別辭は、遂に忌はしい讖をなして、人麿は石見の國へ下つて、終に和銅二年の頃、年四十七

八歳で歿してしまつた。

鴨山の岩根しまける吾をかも知らずて
妹がまちつゝあらむ

とは人麿の辭世である。

この外歌聖人麿の歌は數多あつて、殊に『妻死之後泣テレ血ニ哀慟作歌』などゝいふ歌は、人をして涕涙の滂沱たるを禁ぜざらしむといふ樣なのがあるが、餘りくだ〳〵しくなるから、人麿の事はこれで止める。

此の外萬葉集中の作歌で名高い人は、

大伴旅人 などがある。是は『前賢故實』などにもあるから略して、其の外萬葉集の後半を大成した、

大伴家持 が居る。此人は奈良朝の最も繁盛した時から、延曆四年迄生存した人で、萬葉集中に載つてゐる歌は、天平八年から、天平寶字二年迄二十三年間だけが載せられてある。デあるから歌の數が非常に多い。前半期の歌は、多く人麿赤人の模倣で、そして又種々な許多の女との贈答を以て埋められてゐる。後半期は越前の守に任ぜられたり、因幡へ任ぜられたりしてゐに、旅

に居ての詠歌が多い。

萬葉集に現はれたる家持は、如何なる人であつたかと云ふと、丁度在原業平朝臣と云つた様な頗る遊冶郎然たるものである。或人が嘗て評した事がある、家持は屹度業平よりも優れた美男子であつたらう。何故かと云へば、其歌の多くは女子との戀歌の贈答であるのを以て見ても分ると云つた。兎に角女子との關係は甚だ多い様である。尤も此時代の美術品を見ても分るが、頗るハデヤカで、

青丹よし奈良の都はさく花の
にほふが如く今盛りなり

とか、

もゝしきの大宮人はいとまあれや
梅をかざしてこゝに集へる

と云ふやうに世界的開化と、日本的文化が調和されて、宮殿や、衣服や、調度などは、華麗燦然たる物となつた。遊戯には、碁も、雙六も、彈弓も、投壺もあつて、朝廷では、唐樂、百濟樂、高麗樂、伎樂などの樂人が置かれてあつたりして、ゴク太平無事であつた爲め自然婦女子や、朝

廷の官人などは歌でも讀んで、互に意中を通ずる樣の事は、あり勝の事であつたらう。家持が越前へ赴任したり、因幡へ行く頃は、そんな歌もなくなつて眞面目な役人であつたらしいから、ツマリ紅顔の少年で、內舍人をしてゐた頃に、業平云々の評が適切であらう。

次に今一部類をあつめて終る事としよう。

第三　滑　稽

これは歌としては頗る滑稽であるが、畫にしたらばあまり滑稽でないかも知れないが、彼の時代の人間の樣子の一部分を窺ふ事が出來ようと思ふ。

池田朝臣と大神朝臣奥守

池田朝臣（名忘失也）嗤ニ大神朝臣奥守ヲ歌一首

寺々の女餓鬼申さく大神の男餓鬼給りて

其の子產まさむ

鼻の上が赤い池田の朝臣が、大神の朝臣奥守にわる口を云ふには、寺々にゐる尼等が大神の男餓鬼を貰つて、子を生みたいと云つてゐる、と云うて嘲弄した。スルト大神朝臣奥守が、此頃大

分寺々で佛像の製作をやつてゐるが、萬一彩色の爲に赤色が不足ならば、アノいつも〳〵赤くしてゐる、池田のアノの鼻の上をほじくつてやるがいゝといふので

　佛造る眞朱(マソホ)足らずば水たまる池田の
　阿曾が鼻の上をほれ

よく繪卷物などに、大きな鼻をして、しかも其鼻が眞赤な人を書いてあるが、奈良朝にもなかなか居たものと見えて、次のも鼻赤連の歌である。

平群朝臣と穗積朝臣

　　平群朝臣嗤歌一首
　わらはだち草は勿(ナ)刈りそ八穗蓼(ヤホタデ)を
　穗積(ホツミ)の朝臣(アソ)が腋草をかれ

平群アソは、鼻が赤くて、穗積のアソは腋の毛が餘程澤山あつたものと見えた。そこで平群の朝臣が自分の事は棚へあげて置いて、子供たちよ、野原で草を刈る事はやめて、アノ腋の毛の澤山生えてゐる、穗積のヲヂサンの腋草を刈つてやるといゝ、と云つた。さうすると穗積朝臣が負けぬ氣で

いづこにぞ眞朱(マソホ)掘る岡こもたゝみ
平群(ヘグリ)の朝臣が鼻の上をほれ

と返歌をした。ドコに赤土を掘る岡があるか、それはこもたゝみ、(枕詞)平群の朝臣の鼻の上が赤土が澤山出るだらう。ぢやに依てアノ鼻の上を掘つてやれ。

次は白い〳〵顔の人と、眞黑い顔の人との贈答である。

ぬば玉の斐太(ヒダ)の大黑(オホクロ)見る毎に巨勢の小黑
しおもほゆるかも

是は、大舍人、土師宿禰水通(ミユキ)、字は志婢麻呂(シヒマロ)と云ふ人があつて、色が大いに白かつた。其の白人志婢麿が、同役の大舍人、巨勢朝臣豐人と云ふ人の、黑色を笑つて歌つたのである。斐太の大黑と云ふのは、巨勢の朝臣よりも一層顔色が黑かつたので、カウ云うてやつたのである。所が巨勢の朝臣が答へて歌つた、

駒造る土師(ヘシ)の志婢麿白にあればさもほし
からむ其の黑色を

駒は埴輪の駒で、埴輪は土師氏の造る所であつたので、此の志婢麿は埴輪を造つてゐたので

はあるまいが、或は土師姓である所から駒造ると云つたのであらうか。

法師のひげ　奈良朝時代佛教の頗る隆盛の結果は、僧侶の數が非常に多かつたもので、其内には種々な容貌の者も居たであらう。是は其の一斑である。

法師等が鬚の剃杭(ソリクヒ)に馬つなぎ痛(イタ)くな
引きそ法師泣(ナ)からかむ

太い針の様なひげを、綺麗にでも剃つて居るのならばよからうが二三分生えて、いかにもトゲトゲしくて、丁度杭見た様であるから剃杭と云つたのであらう。鬚の剃株に馬をつないで、其馬をヒドク引張るな、法師が泣くぢやらうと、僧を嗤笑したのである。

痩人吉田連石麻呂　吉田連老(オユ)と云ふ人があつて、名は石麻呂と云つた人である。其老が身體甚だ痩せて、大食するけれども、丁度饑饉年の人見た様であつた。ソコで大伴家持が二首の歌を作つて笑つた。其の歌に

石麻呂に吾もの申す夏やせによしと
いふものぞ鰻(ムナギ)とり食(メ)せ
痩々(ヤスヤス)も生(イ)けらば有らむをはたやはた

鰻(ムナギ)を捕ると河に流るな

前の歌は意は分明である。次のは、痩せながらも生きては居られるものを、鰻を捕つて食へと云つたとて、ソンなに痩せてゐて河へ入つたらば、水に流されるかも知れないよ、といつたのである。鼻の上の赤い人、腋毛の多い人、白い人、黒い人、髯のイタ〳〵しい荒法師、餓鬼の如く痩せた人、是等を集めて一幅の畫にしたならば、餘程面白い奇妙な畫が出來る事であらう。

以上部類を分つて述べ來つた外に猶あるけれども、繪畫には全くシロトの考であるから、果して畫家の一觀を煩す價値があるかどうかは分らないが、只畫にしたらば面白からう、又幾分か畫題を擇ぶ時の參考にもなるであらうか、と云ふ考へから、ツマラぬ事ながら、萬葉集から僅かな事柄を引きぬいた譯である。コレデ萬葉の趣味は盡したと思ふ人があると、ソレハ大なる間違であるから、終に臨んで一寸ことわつて置く。

（明治三十七年三月、校友會雜誌）

書齋の裝飾

書齋の裝飾の仕方といふ御諮問をうけ候處、一々細かく申上候ては甚だ面倒なり、且つは畫を以て說明致さでは相分り申まじく候間、ホンの小生が欲しく思ふ書齋のあらましを申述候。

室は一軒別に立てるかさもなくば母屋へ渡り緣をつけて往來致樣致度、南向にて四疊半に床の間も押入も附度く候。西へ低き窓一つほしく候。扨て机に向ひ居ながらあちこちの本箱から本を取いだし度候へばこれはテーブルに椅子と致したる方始末よかるべく候。扨て室內の裝飾を申せば最もアツサリ致し度候。あまり裝飾し過ぎたるはきらひに候。書齋をかざり立て候は書物もよまず筆もとらぬ者の致す所に候。室內の裝飾のかはりに室の外へは孟宗竹を植ゑ度候。春は筍が出で、夏は新竹の露はら〳〵とちり、秋は古葉のさら〳〵と音たてて窓の障子を打つなど、最も趣ありてよろしく、冬は雪折の音によみかけた本のどこまで讀んだか忘るゝに至る樣な驚き方を

するのもよろしく、晴れては雀のちう〳〵鳴くなんど、月夜には竹のゆら〳〵する影が室に落ち來て窓の障子が明滅するといふ様なるが望ましく候。故鄕の竹林を思ひ出でて貸家ずまひの家にて、心の內にゑがきたる設計、大略如斯御座候。早々。

（明治三十七年八月、馬醉木）

光琳の畫について

光琳の畫について思ふ所を述べよとの事に有之候まゝ左にいさゝか彫塑の側より感じたる事ども申上候。小生は今迄たび〳〵經驗致し候事に有之候。それは今茲に置物を作らんと存じ候と思召候へ、先づ粘土なり蠟なりを以て初一念を無造作につくね出したと思し召し候へ、全體の形といふものより外現したのではなく候へども、いかにも自分の考へ通りに出來て、これなれば近來の傑作だなどゝうぬぼれも起り候位に候。さて次々に一部分づゝの細小部分より作り初めて、漸々面部より腹部足部と作り行くに從ひ、最初の全體の形のよさ、よく趣の現はれたる事などはなくなり行きて、スッカリ出來上る頃には、まるで初めと違つたものになり終り候事に相成候。尤もこれは技術の下手にもよるべく候へども、全體の形といふものに重きを置かで、小部分に力をいたす爲に御座候。扨て飜つて思へば光琳の畫といふもの、光琳が最初に感じたまゝを直ちに色

を以て、ベタ〳〵と塗りたるものと思はれ候。これ小生等の最初につくねたる形、無造作につくねたる置物と趣を同うし居候ものと存候。光琳は一寸眼に見て感じたるまゝを色を以て畫にかきたる人に候。小生は眼に見て心に感じたるまゝを、細部にかまはず大體の形に重きを置きて、土乃至蠟などをもつて、モノを作らんと存じ居候。早々。頓首。

（明治三十六年十二月、馬醉木）

來迎寺まうで

十一月初め金工の作品のみを見ようと思つて京阪地方へ行つた。大阪の友人西原猪太郎氏が、江州坂本村の素封家中村氏から、其の御抱へ鑄物師村治茱の監督を托されて居て、時節柄日吉の紅葉がよいから、是非遊びに來いと招かれて居る。丁度幸ひであるから共に行かうではないか、と云ふ相談を受けた。此の時余は奈良へ來てゐたが、匆々奈良を出で京都を過ぎ、馬場停車場で西原氏と會して、共に大津へ出て、大津から汽船に乘つて坂本へ著いたのが夜。明くれば十一月の十二日、日吉神社の鳥居の內外、道の兩側、照りに照つて居る紅葉を見ながら、此の日は日吉神社と延暦寺の寶物を見て、午後西原氏は京都へ歸つた。此夜余は本家の中村氏方へ泊められた。翌十三日の午後、中村庄藏氏に案內されて西教寺と、來迎寺を音づれた。

西教寺を出ようとすると、今朝から曇つてゐた空から、ボツリ〳〵雨が降り出した。庄藏君がお寺で傘を二本借りて、一本を余に貸して呉れた。坂本西敎寺と、大字を記した番傘をさして、綺麗に紅葉した山門を出て、もと來た道を引き返した。小川の流れてゐる處から左へ、川添の田の畦を行く。關東邊ではもの珍らしい石川の流れ、水が綺麗で、處どころ大石にさへられて、瀧になつたり、淵になつたりしてゐる。しばらくして川を離れてそこら一面黄金に實つた稻田の細い路を行く、足袋が濡れぬ樣にと庄藏君が注意してくれる。やつとの事堤の路の少し廣い處へ出た。

『これから行きます來迎寺は、この山が信長に燒かれる時延暦寺などの坊さんたちが、結構な佛さんや寶物などを、來迎寺へかつぎ込んだといひますから、來迎寺には古い〳〵信長以前のお堂が、國寶になつて有ります。鑄物のものなども西敎寺などよりも多いでせう』など云ふ樣な事を語りながら、いつの間にか來迎寺の南側へきた。南側の門を這入つて、御茶所見た樣な處のわきを拔けて、本堂の前へ行く甃の上へ出た。箒目正しい庭の白砂の、しと〳〵雨に半ば箒目の消えたのをわき目に見て玄關へ通つて刺を通じた。

座敷へ通される。狩野繪風の屛風が、座の一方に立てゝある。其の傍に張り交ぜの小屛風が立

てゝある。誰かの手紙らしい物が二葉、其外歌の短冊。すり寄つて手紙を見ると、松蕈を贈られた禮狀らしくて狩野某畫伯から來迎寺方丈へ宛てた古い手紙であつた。人の足音がするから座に歸つてゐると一人の男が唐金火鉢を出して引込む。今一葉も狩野某の手紙である。日本繪畫史の史料がこんな所に張り付けられて居るわいと思つて、よくも見ずに座に歸つて居ると、やがて一人の坊さんが黑の法服で出て來た。

恭しく挨拶されて『今朝程御手紙でありました故御待受け申しました……住職は法用でおいにく不在でありますから』といふ樣な事を云はれて、サテ『ドウ云ふ物を御覽になりますか』といふ。『左樣ですか、當寺には金屬のものと申して別段御覽に入れます樣なものは何もございません』とソツケなく謝絕されさうである。余は御當寺には國寶に指定されたと云ふ香爐や、鍍金佛や、其他結構なものがあると云ふ事を聞き及んでゐる事から、大阪や奈良を見物する際にも、何もないと云はれる個人の家や、古社寺などで、頗る珍らしい品物を見た事やら、素人考へでつまらん物だといふてゐるものに、存外結構で歷史の考證になるものなどが多くあつた事などを述べてどんなつまらんと思ふ物でも拜見したいからと懇々と述べたてたし、庄藏君もしきりに傍から懇願してくれた。『左樣ですか、當寺にも二三點はございますから、それでは……』というて引込

んで行つた。『わたしトコへは碁の會やら、弓の會やら、鑄物を見たいなどいうて、いつも來られはつてゐながら、アナイに眞面目顏せいでもよろしからうに』などゝ庄藏君がつぶやいてゐる。勿論こゝは巨勢弘高の十界の圖が非常な評判で、東京あたりでは、來迎寺と云へば十界の圖を思ひ出す位の寺であるから、十界圖はそッちのけで、金氣の物を見せろなどゝいふのだから、執事先生ちと小癪に障つたものだらうなどゝ余がいうてゐると、寶藏の鍵をガラン〳〵と音たてゝぶらさげた坊さんが二三人出て來て、一禮して裏の方へ出た。そこへ執事先生が出て來て、『只今こちらへ出します間本堂の方を御案内致します』というて先に立つて案内される。一間へだてゝ本尊の安置してある處へ行つた、うすくらい處だ。執事先生蠟燭へ火を點してゐる間に、余は御厨子の戸が閉されたまゝの本尊へ禮拜し終つた。

左側の小高い臺に佛像が一二體、その中央三尺位のを蠟燭をかざして『コレは國寶に指定されました地藏尊、この光背が金屬製であります』といふ。手燭をかりて見る。成程舟光背の丈が三四尺ばかりのもの、頗る精巧な切り透しの唐草で化佛のあるべき處々に、光背の地よりもやゝ高く、硝子を嵌入した直徑七八分位の丸いものが凸起してゐる。今迄見たものゝ內で類品を求めると、大阪四天王寺の寶物中、大さは是よりもずつと小さくて六七寸位であるが同樣舟光背であつ

て、それは銀製であつた。その天王寺のとよく似た作物である。此の他奈良西大寺の興正菩薩感得の舍利塔といふものゝ作行きと同樣らしく思はれる。それでこの地藏尊の樣式を見ると、至極綺麗なやり方で、鎌倉以後の樣式である。依つてこの舟光背が、宋元の影響をうけたものゝ作行きで先づ足利頃の物であらうと思つた。材料は何かしかと分らないが、鍍金製である。或はこれは銅を切り透した物ではないかと思はれる。誠に見事な光背でありますというて大略余が考を聞かせた。執事先生少しく得意らしかつた。

本尊の右手の方に大小の佛體四五體、其の中で五尺位の木像の觀音をさして『これは菅公の御作といふことでやはり國寶になつて居ります』と云ふ。もはや金氣のものがないから此處を出る。奥書院の床わきの違ひ棚の下に、二尺ばかりの唐金製の麒麟の大香爐がつくねんと坐りこんでゐた。色の眞黑な頗る手ウスの蠟型鑄ものであつた。明末から淸初頃の出來かしらん、世間で所謂カラ物といふやり方だ。併しながら、今頃東京邊にでもあると、本所邊の安物と見るべきものであると思つた。さて元の座敷へ歸らうとすると、本尊の安置された北隣の室の九尺床一ぱいに今藏から出された寶物が陳列されてあつた。何はサテ措き、大急ぎで床の間の正面へ坐つて見初めた。最初に手に取つたのが、龍首の流口(クチ)の付いた水瓶、コレは結構だと思はずロ走つた。全體

の形は首の細い下ぶくれのいはゞラツキョウか無花果の實なりをして、底は伏せ蓮華の臺が取りつけてある。上部の蓋が失せたと見えて、錦やら綾やらで、間に合はせの木の蓋の不恰好なのをくゝり付けてあつた。上唇の長い龍首の出來工合は一見して鎌倉以前らしい、が高臺に蓮華をつけた樣式は奈良法華寺の正中二年京法花寺の彫り銘のある牡丹唐草の花瓶に似てゐる。蓮華の作行はそれよりも一層手强い、そして色は傳世古色である。タゞ呆然見とれて、兩手に持つたきり。庄藏君が『そんなによろしいか』と首をさし出していふ。良いの良くないのつて、この樣式の水瓶は天下絕品だ、か樣な絕品を、ドウして東京邊の物好きが、大さわぎやらんのかしら、と今迄うしろに坐つて居られる事も知らなんだ執事先生を振りかへると、先生の外に一人二人の坊さんたちも居られる。『これは一體灌頂用の道具で、祕密具でありますから、今迄他には一切見せませんでした、この蓋は西敎寺へ貸したきり、それなりに西敎寺へ傳はつて、西敎寺では蓋のみが國寶になつてゐるといひます』といふ樣なことを語られた。高臺の裏を見ると、切銘があつた。

菩薩戒尼法海

造此水瓶一樣二隻

三聖寺布薩公用者

建治と云へば元寇のあつた前の年號である。私に年表を出して見ると、丙子は建治二年である。後宇多天皇の卽位二年で、弘安四年夏の頃といふ軍歌にある年の六年前、日蓮上人の入寂した七年前に當る。豈珍重すべからずやである。これは彼の正中二年京法花寺の銘ある花瓶よりも、丁度五十年以前の製作で、古器物を鑑定する人などの最上な手本である。この龍の首だけ見ると、或は藤原式だなど〻鑑定すまい物でもない、何せよ結構な水瓶だ。庄藏君にものさしを渡して量つてもらふ。總高さ七寸、口徑外部にて一寸九分半、胴の最も太き部分の周圍一尺一寸五分。略圖を手帳に記して次のものを見る。

唐銅製舍利塔　二重屋根、破風作りの建築を、蠟型で作つたもので、蠟の燒箆目が殘つてゐる所から見ると、鑄放しらしい。色の工合は水瓶は常に人の持つた光澤があるが、是は數百年自然についた傳世色で、中々面白い。緣の下に小さな獅子が一疋寢てゐる。この塔は支那製かしらん建築の樣式が明臭い樣でもあるが、とまづ明製だらうとダラウ極めをする。庄藏君傍から『これは支那ですやらう』といふ。九輪の上の水烟まで、總高さ一尺三寸八分。

唐銅製獏の香爐　高さ七寸、國寶になつてゐるとの事であるけれど、これが國寶ならば、奥書院

の麒麟の大香爐も國寶にしてよいと思つた。元は鍍金であつたかしら、處々金色が見える。『バクと云ふのは何です』と庄藏君が聞く、之を書けば邪氣を避くとも云ひ、又能く惡夢を食ふとも云うて支那人の想像の獸である、さうして、熊に似て象の鼻、犀の目、牛の尾、虎の脚と云ふのが貘の形容であるけれども、これは一本の角があるし、何だか分らんものだと云うて、ゴマかした。

閻浮提金の藥師如來　丈一尺三寸八分ばかり『エンブダゴンといふのは何ですか』と庄藏君が聞く。又例のナマモノ知りをひそ〳〵と、閻浮、木の名で提は州だといふことだ、佛書に此の州の上には閻浮樹の林があつて、その林の中に河がある、河の底に金砂がある、それをエンブダ金といふて、それは佳品だといふことを云つたので、つまり銅製などでも金性の佳いのをいふわけだらうと余は云うた。この藥師如來は普通の金銅製で蓋し鍍金佛である。此の種のものは奈良で多く見たから珍しくはないが、奈良の新藥師寺の香藥師如來と比較して、香藥師は朝鮮くさく、これは支那くさい。それは何でさう思つたかといへば、前から見た時に、股の間の襞積が兩膝の間あたりへ、まとまつて來てゐる工合が、唐招提寺の佛像などによく似てゐるからである。しかしこれは研究する價値が十分にあるものである。一寸持てるかと思つたらば、ナツカ〳〵、四五貫目はありさうだ。庄藏君持ちかけて見て一寸持てない、置いて目を丸くした。

此の佛像を見てゐる最中、執事が、何とかを持つて來いと云ひつけてゐたが、同じ床の上へ置かれたのが、日常用ゐてゐる手燭であつた。三ツ足の上へ花瓶の小さいのを建てゝ、其の花瓶へ蓮の葉の開いたのを挿してあつた。其の開いた葉に添へて、蓮の蕾と卷葉と、蓮の實と、三本を挿しそへてある意匠で、ナカ〳〵面白い。殊に三足の蕨手の樣に曲つた、其の曲線のまとまり工合などは、決して近世のものではなささうだ、支那製であるならば、宋元などゝ見るべきものである、色は日常用ゐてゐる割合には光澤がないが、黑さびの古色などは何とも云へぬ味ひがある、コンナ結構なものを、ナンデ平常用にお使ひなさるかと云ふと、『そんなに宜しいものとも思ひませんでありましたから』と執事が答へた。余は古い結構な製作を、つまらぬ物と思つて毎日御用ゐにならずに、斯樣な物は以後は御寶藏へ御しまひになる樣にと、じやうだんを云うた。

香爐　天祿といふ獸が山を背負うてゐる形とも見える。黑味がちの光澤ある色合、これは疑ひもなく支那製であらう。古くて元代か、ナンどと覺束なくも一人ぎめをやつた。大きさは手のひらを開いた位。

西洋臭い支那臭い、一種異樣な琺金香爐と云ふものがある。餘程不思議なものだ。ドンな傳來かと思うて執事に尋ねると『箱の蓋に何と書いてあります』といふ。成程傍にある箱蓋裏に

水野中務少輔忠德
　妙見尊へ御寄進

と二行に書いた下へ少し大きく琉金香爐とあつて、更に行を換へて、違つた書體で

　此度來迎寺住物寄附　一如院舜洞

妙見尊といふのはどこの妙見尊やら、此の來迎寺に妙見尊があるとか云うてゐるが、此度來迎寺へ寄附するといふのは何だか妙である。水野忠德、何時頃の人であるやら一寸分らない。箱の底をひつくり返して見る。

　文化七庚午年仲冬

水野忠德といふ人が妙見尊へ寄進した時やら、來迎寺へ再び寄附した時やらしかとしない。箱書の文字をよくよく見くらべたならば文化云々の書風と同筆であるかゞ判然したらうものを、此時丁度執事が、どことやらにある龍の三具足を持つて來いと他の者へ云ひつけてゐるのが耳に這入つた爲、雨もよひの日はそろ〳〵暮れかゝるし、御寺の暗い廣間で光線は充分でないし、當寺には二三點しか無いなどいうて置きながら續々出すらしいし、日の暮れない內とあせるものだから、字體とか書風とかいふ穿鑿は又の事として大いそぎで略圖を手帳へひかへる。全體の形は、

四角な臺付きのコツプの形であつて、それに西洋くさい耳が兩々相對して付いてゐて、山高なりの蓋がかぶせてある。金著せの切透しの唐草文様が全面にあつて、透しの下は銀の板見た樣なものを張つてある。どんな道具で彫刻したのやらと、顯微鏡で見るけれども、著せてある金が厚い爲、金の溜りが邪魔をして、一向道具のあとが分らない。廣く世間のものを見てゐる內には類品が出て來るかも分らん、マア〳〵それ迄は製作年代も何もかも、疑問である。

松蟲の鈴といふのと、他に鈴が一つ、それは眼にも這入らんで今出して緣の明るい方へ並べた龍の三具足を見る。

此の龍の三具足の花瓶は尊式の形で、支那風の地紋、わるく云へば大阪出來の安物風のものへ妙な一風かはつた龍を卷きつけてある。高臺の裏に朱で書いたらしい文字があるが判然しない、賓用と云ふ文字がかすかに讀める。口徑五寸六分、高さが一尺二寸。

香爐は四足で長方形の鼎式で、其の足が鬼である。鬼の顏や體格がなか〳〵よく出來てゐる。胴には薄肉の波の模樣が鑄出してある。耳は覆輪の中へ唐草の簡單なのを鑄透してある。蓋にすかしがあつて蟠龍をツマミにしてゐる。總高さ五寸六分、蓋と胴との合せ目までの高さ三寸四分、胴の長い橫の部分が四寸。

燭臺の最上部は蓮の葉の開いた樣なもので、其の下に龍が卷きついてゐる。それを獅子が二疋で後足のみで立つて前足で捧げてゐて、更に其の下にクリカタの六角めいた臺があつて、全體を受けてゐる、わるく云へば頗る當世の横濱行に似て居るものである。高さ一尺四寸。

この三つの中で香爐の作が一番まとまつてゐて佳い。さて此の三具足は、何の時代、何處の製作であらうか、三具足を龍でまとめた意匠などは慥かに、文化文政以後の事で、整珉などが、十八番ものである。しかしこれは整珉あたりのものよりも、龍などは遙かに古風で、殊に香爐の足の裏などは、整珉などに比べると餘程氣韻がある。

或は支那製の最も近い淸の初葉あたりかしらん、と思ひながら、どこかに銘がありさうなものと、香爐の底を見るが見あたらない、燭臺にもない、夕ゞ花瓶の底の邊に、朱書の外に墨がきらしいものが見えるけれど、一向判然しない、人じらしな事だワイと、フト箱を見ると、箱には蓋もない誠にツマラヌ入箱であつて、横手に、

龍　三　具　足

といふ大きな箱がきの文字に眼がとまつた。其の箱へ手をかけて、引き寄せて中を見たが、香爐の灰がこぼれたか、灰が少しと紙が一二枚。大文字と反對の側を見たが何もない。箱のふちを片

手で提げて、中の灰がこほれない様にと底を見た。文字がある。

此龍之三具足江州志賀縣來
迎寺江爲西乘作後世菩提
奉寄進者也□正□□丁亥
十一月吉辰
深暹花押

草書ながら西乘作と作者名が讀める。讀めた所で、今迄につひぞ聞いた事も見た事も無い名前だ。ハテナ……深暹といふ人は坊さんらしいが此寺の代々の內にあるかしらといふ樣なことを尋ねると、今まで片隅につくなんで居た色の白い坊さんが、『深暹さんの事がナンゾありますか』というて執事の人や庄藏君やで、首を集めて箱の底をのぞき込む。『ナル程』『ハア』『深暹さんは今から三百年程前二百九十年ばかりでありますから、マア〳〵三百年程になりますやろ』と色白の坊さんが云うた、執事が『この箱の底にコンナ事あること一向知らなんだ』など云ひ出して、物珍しく寄つてたかつて見たが、肝要な年號の處が分らない。それは蟲が食つたのではないが不明の文字の處は木がエグレてゐる。正の字のつく年號で二百年以上の年號は、正保といふのが

後光明天皇の卽位元年から同四年に亙つて、四年が丁亥の年である。丁度今から二百五十七年許りになる。萬一正保とすると、其の上の一字が何字やら分らない。其の以前では天正である、天正十五年が丁亥で、後陽成天皇の卽位元年である。もし天正として讀んで見ると、正の上の字が僅かに殘つてゐる一畫二畫で、天とよめる、正の下は何かと判じるとむづかしい拾の畫の殘片かと想はれる、これはたしかに天正拾五年であらう、もしこれを天正拾五年としたならば、今を去る事三百十七年許りになる。深遲上人が三百年近き以前に入滅したとすれば、上人の入滅以前約二十餘年に此の龍の三具足の箱書が出來たものと定める事が出來る。して見ると、天正年中、蠟型鑄物師に西乘といふ者があつたのだ、ア、不可思議なことになつたわいと、內心非常にうれしくて、何か人々がいうてゐる樣であつたが一向耳に這入らなかつた。丁度中村氏の本家の方から小僧さんが傘と高下駄とを持つて來たというて、余等の爲に座敷の隅の方に居た。執事が『あこの鐘に何か銘があつて古さうですが』と云ふので、行つて見る。緣の天井に釣るされた鐘を椅子を足臺にして、まだ短いので、庄藏君と小僧さんと椅子をつかまへてくれて、周圍の彫銘をよんだ。石田三成やら、明智光秀やらの寄進した鐘であつたが、西乘といふ蠟型鑄物師を發見したので、こんな鐘などは、更に記憶に殘らない。

厚く禮を述べて、庄藏君と小僧さんと三人、元來た南手の門を抜けて田圃へ出る。堤へ上る雨が小降りになつて、うすく雲ぎれがして堤の兩側に植ゑた櫻と楓が紅葉した下を行く。西乘々々というて見て、うれしくてたまらない。庄藏君が、『西乘といひますのは上手なのですか』といふた。そこで余は今余等のやる蠟型鑄物といふものは、元祿以後長崎邊から傳つて來たものとばかり思つてゐた事から、德乘といふ人が長崎人で、其の子に龜女といふ女鑄物師があつた事、文化文政頃、名高かつた整珉、貞乘などは、其の長崎傳來の手法を傳へたものだらうと思つてゐた事、然るに三百年前、西乘といふ人が、どこの人か知らないが、蠟型鑄物をやつてゐた事を今日初めて發見した事、そして余等が今迄、ヤレ明末だの清初だのと支那製にしたものゝ內には、必ず西乘などゝいふ人等の作つた物があつたに違ひない、現に今見た貘の香爐や麒麟の香爐、二重屋根の舍利塔などは、三具足と同作でないかしらんと思はれることなどを話して、鑄物の鑑定の上に、一道の光明が輝いて來た事など、うれしまぎれに餘計な事迄語り出してゐる內に、稻田の黃色な中を過ぎていつのまにか本家の門口へ歸つて來てゐた。

（明治三十七年十二月、校友會月報）

（附記） 後年に至り西乘作は西乘坊である事が明白になつた。

魚袋式文鎭

竹柏會大會の記念に、からかね鑄物の文鎭あつらへらる。

竹柏園主の「思ひ草」よみながら、意匠のたすけにもと探せど、織物或は花瓶などの模樣にするならばと思ふものあれど、さて文鎭にするには如何あらんと思ふものゝみ、かねて鑄もじの意匠のたすけをすべく知れらば、さる似つかはしき歌ども歌集のうちに集められ給ひけむものをと口惜し。

「七里にきこゆる緒琴」といへる「妻琴は昔ながらにたてにけり」といへるに心とめて考ふるにふと思ひつきぬる事こそあれ、過ぎつる旅に、琴平なる神寶のうち、延喜頃のものと傳ふる和琴ありき。木理などあらはに、年月永く水にひたりたる船板なせるなり。それよからんと、圖一つものす、なぎ一枝折りそへて。

狩衣きたるみやびかなる人ひとり、みづから、さくはうしとりて、神樂歌など口ずさむ。乃ち笏拍子をものす。

束帶の時に石帶につけて帶ぶる、魚袋などこそ面白からめとそれまた一つものす。

嚴島神社の古琴の硯の事思ひ出して、集古十種の文房具の部を見る、あまりよろしからず、これよりもと「古玉圖」を見る。

兩面同じ彫文なる鱗符と云ふもの、或は虎節といふもの、又は舞戚など皆とり〴〵に面白く、初めより一ひらづゝ見もて行く。鳳首もて飾れる佩玉あるはくさ〴〵の帶鈎、みなとり〴〵に面白しとも面白し。

石崇後閣美女數百人、皆帶美玉鸞鳳之佩などいへる雙鸞の佩玉、又は魏文帝の美人薛靈藝に賜へりといふ、靑玉の雙魚佩といふもの、その美しさ如何ばかりなりけむ。碧玉あるは白玉をあつかふ玉造ならば、今は直ちにこの佩などやものすべからむ、されど物さびたる鑄物はさるあでに美しきものは望みなし、如何なれば、鑄もじなどになりけむと、たゞ大凡の形をものしたる圖譜なれど、古へ支那の工人等は、驚くばかりの技をもちたるものかな、今の世は開けたる世と云ふ、今の世の百工は進みたりといふ、されど今作りなすものに、この「古玉圖」にものせる十が一だ

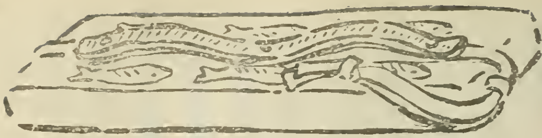
に及ぶものなし、あはれ三千年以前に生れざりしが口惜しとも口惜し、などゝあらぬ物思ひにふけりつゝ、しばしまのあたりの事など忘れつ、獅鎭、天祿書鎭、辟邪書鎭、はた眠羊書鎭、などもあれど、かゝる類ひは二百三百の數を作らむには、あまりにわづらはし。

甘青玉瑯玕書尺といふものあり、竹の二節三節の間を彫刻せるものにて、文鎭にも適へり、こを唐銅もてつくり、青竹色に傳色せば妙ならむと、卽ちことふりたるものなれど、蝸牛一つとまらせて圖をものす。

やがて古玉大琴の圖はありけり、長五尺五寸、濶七寸九分、高五寸一分と記せり、同じく漢淮南王墓中より出でたりと云ふなりき、小さく縮めて描き見るに、和琴と同じ樣に見えて、からめきたるだけが和琴よりも見劣りせらる。笙はいかに、阮咸といふもの正倉院の御物にも見えたりそは如何あらむ、琵琶などもよろしからむ、さてはあまりに樂器の共進會めきたり、且つはこの日朝より圖をものし初めて一日は暮れぬ、やみなん〳〵とて、ものせる圖ども、更めてものするに、窈窕子はあまりに簡單なれば省きぬ、和琴と、魚袋と、竹に蝸牛の三圖を描きて、使をもて竹柏園に贈りぬ。

やがて魚袋などやよからむ、それ二百五十ばかりほしといふ、大會の日までは二十日間なり、

一日十づゝ作らでは間にあひ兼ねつ、今迄數多きもの作りたる事なければ、如何にせんと思ひ煩ふ。さてあるべきにあらねば、原町なる關保之ぬしを訪ひ、魚袋の事どもつばらかにたづねて祕藏せらるゝ金魚袋と銀魚袋と、二つ借りうけて歸る。



そも魚袋とは初めは、唐の制をうつし、魚符といひて、諸臣が宮中出入の時、合せ見て符契として用ゐられ、之を袋に盛りて、帶につけしを魚袋といひしが、終には其の本義を失ひて形も異なりて唯無用の裝飾具となりけるにこそ。節會大嘗會などの式日に、束帶の時石帶といふものゝ第一第二の石の間に結び付けて、右の腰に帶ぶるもの。關ぬしより借りたる銀の方其形よろしければ、よく見るに、長さ三寸ばかり幅一寸ばかり、厚さ七分ばかりの銅匣の、錫を塗飾せるに、白鮫の皮もて四面を張り、魚の形の銅に錫を塗りて銀に見ゆるを、表に六つ、背に一つ著けて皮の紐もて提ぐる樣しなしたり、又其の表の皮紐の抑へには、横に筋多く入れたる、金物を、二た處そりをつけて打ち付けたり。さてこは則ち銀魚袋とて諸臣四位以下の著くるもの。金魚袋といふは、其の魚金にて（或は鍍金もあるべし）諸王の五位以上、諸臣の參議、三位以上のものこれを著くるなり。さ

て銀魚袋を傍に置きて、蠟もて小さく作る。元より文鎭に應用するなれば、長幅厚さなどは、吾思ふまゝなり。蠟もて作り終へつれどかく一づゝ作りなば、一日に一つもむづかしかるべし。よしさらばこを雌型につくらんと、次の日粘土もて、四つ五つ雌型をつくる。則ち表の型は、魚六つならべて中央に皮あるさま。

皮の抑への金物と、皮の結び目つけたるとを三つの雌型に作る。

裏の型は竹柏會記念と篆字もてしるし、また秀眞作としるして肩に丙午春と入る。

粘土の型を日に乾かし、炭火に燒きて陶物のごとくし、雌型は作り終る。やがて蠟もて押し込めて拔く事瓦煎餅といふものを、鐵の型よりはぎとる時の如き用意はとゝのひぬ。表裏及び皮など組みたてゝ試に一つを作りみる。

さて用意はとゝのひぬ、蠟型になれたる人傭ひて夜に日をつぐ、十或は十二三拔きたる頃は、陶物の型、或は割れ又は細き所などかけ損じて用にたゝず、再び雌型を造り三度四度と造りて日に一度は造りて蠟煮る鍋の下の炭火にかざし置きて、乾しては燒く。斯くては間にあふまじければ、いそがしといふ友又ひとり、無理にたのみて、手のある人は、女といはず、男といはず子供といはず、大人といはず、そこらにあるは皆引とらへて手だすけとす、かくて初めに成りし五十ば

かりを、細砂を舂篩したるを泥として塗り、日に干せば自ら乾燥すれど、あやにく二日三日雨にてさる業もし得ず、かわかぬ型を、松薪の上に並べ、石もて圍ひ、松炭の火となりたるを入れて鑄型をやく。二時間ばかりの後焼き終り、吹子もて銅を湯と溶解しやがて一つ一つ鑄型の焼きたるに注ぐ。水にひたして冷し、型を割れば、六つの魚も、裏なる文字も、いたく爛れて、中には紐のなきもあり、何れも何れも用にたゝず、しばしあきれてものをも云ひ得ず。こは餘りいそぎて、型の乾燥せぬに焼きたれば、蠟の爲に型の土の煮えたるなりけりと思ひ返す。出來たる蠟型は泥土もて塗り、一日二日乾しては焼きて鑄る。鑄ては、鎔銅を注ぎたるユグチと云ふを切り放ち、針の束ねたるもて隅々の土を掃ひおとし、銅のあまりて型の割目に出でたるコウバリとなん云ふものを、鑽もて切りのぞき、磨き、焼き、再びみがく。かくて色をこそつくるなりけれ。これすなはち蠟型の鑄ばなしといふものなり。

彼方に蠟の型五十、こなたに六十とつかはして鑄さしめ、二百あまり五十の數のとゝのふ迄は心も心ならざりしかど、月のかはらむとする夕終に鑄終りぬ。二日三日の後、傅色し終りぬ。かくて竹柏園に持て行きぬ。初めの吾が思ひし如きものにはあらざりけれど、日數なきに、あまた作りつる事にしあればさは思ふまゝなるべしやはとて、ひとり心になぐさめぬ。

過ぎつる四月八日の日、洋服きたる人、袴羽織の人、ひげ蓄へたる人、學生らしき人、はた花の如く美しき人どもの袂に入りて、其の人々の家にもて行かれつらめ。永く机上の珍としてめでらるゝもあらむ。かゝるむさくるしきものは妾が手だにふるゝも心地よからずなど仰せられて溝に打捨てらるゝもあらむかし。その一つ〳〵の行くへ、やがて吾が夢路に立ちふさがりて、魚袋式文鎮後日夢物語など云ふ、芝居の筋がきめきたるものとやなるべからんか。木蘭の花盛りなる庵にて、かくなむしるし終りぬ、あなかしこ。

（明治三十九年五月、心の花）

佐倉より

拜啓。昨四日夕菖蒲湯にも入らで急に思ひ立ちて佐倉へ參り候。故園の春色深く今朝目さめて父が手植の牡丹の手のひらを結びたらん如き紅の蕾に對するめざましさ、朝つゆのケシ粒よりも細かきが一面に置きたるうるはしさ、朝日のさしきて花びらの一ひらづゝ開く心地よさなど、花のあたりをさまよひて牡丹の變化を見つつ興じ申候。眞名子、正彦達者に候。鎭守の銀杏の若葉黃ガチの色に候。

鳥居氏の見送り明日との事送つて行けさうに候、今日歸京致候。五月五日正午、佐倉にて。

（明治三十九年六月、日本美術

珍しき朝鮮古美術を觀る

五月二十一日正木東京美術學校長より、左の如き案內狀に接し申候。

友人黑田太久馬氏韓國より歸朝珍奇の古磁器古銅器古鏡等携歸候に付來二十三日午後一時同氏宅に於て同好者の爲展覽の儀依賴候處快諾を得候間御淸閑も候はゞ同日時御光臨可被下候。

依て今日四ツ谷見附外まで電車にて參り、黑田氏宅を音づれ刺を通じて韓國將來品拜看を願候。奥座敷に通され候處、正木校長初め博物館の美術部長今泉先生及び學校の石川光明、竹內久一の兩先生及び關保之助氏、並に近頃田端臺に陶磁器の窯を築かれて四月下旬初ガマを燒かれて好結果を得られ候板谷波山君及び都新聞の岡本氏等、皆々斯道に名高き人々參り居られ、靑磁を處せまき迄陳列せられたる座敷の一隅にかたまり合ひて、丁度小函の內なる銅製の幾十本かの匙を見らるゝ所に候。コリヤアどうも正倉院御物がコンナに出られては閉口だ、などと今泉先生の聲が

致し候。關氏席を讓られながら小生に申され候には、先づ氣附藥でも飮んでから、落ち付いて御覽なさらないと眼を廻すといけません、などゝ申され候。其の匙と申すは色多くは古銅器家の所謂漆黑色と申す色にて、形はキヤシヤに、柄頗る長く、製作ウス手に、よくもコンナに薄く出來たものだと驚嘆の外なく候。中に最も評判よきは、その皿狀をなせる內面の中央に、たてにシノギあるものに候べき。主人申され候には金物專門の人が見えたれば、あちらの座敷へは金物類を並べ申さんとて次の間に行く、人々ぞろ〳〵と次の間に行く。主人黑田氏一々取出され候を見れば、銅製の箸幾十對、其色琅玕なせるあり、翡翠の玉の色なせるあり、漆黑もあれば靑綠色なるもあり、皆とり〳〵に珍しきもののみに候。形は平常用ゐる火箸のやゝ長き位のものにて、頭部に二三の切り込みたる筋あるあり、中程に切り込みあるあり、又中にヒシヤゲたる形のも有之候。次に陸續出され候を見れば、古鏡に候。漢唐の鏡も數點交り居り候。小生は嘗て他所にやゝ長方形にて、薄く兩面に鏡の如く光澤ある平盤を見たる事有之候、鏡なるべしと想像致し居候處、今こゝに其と同じ樣なるもの數點拜見仕り候。想像せる通り鏡にて、韓鏡なる事をたしかめ申候、一方の端或は兩端等に小さき穴有之候、紐通しの穴に候、この內に圓形の兩側に天部の佛(ビシヤ門天)を蹴彫にせるを見かけ申候、關氏申され候には、サア大變鏡面に佛像を彫る事は日本固

有のものと思ひたるにコレは朝鮮からもかゝる鏡が出ては、本家爭ひをしなくてはなりません、これは慥かに日本を眞似たものでせうと、申され候。今泉先生傍より、ソレは何れ日本が眞似をしたので、支那か朝鮮が本家だらう、さう〳〵日本がえらい譯でもないからなど〻カラカヒ申候。ナニさうではない、ナニさうだ、などと火花がちり申候。火花を散らす事はこれのみにては候はず。日本鏡の鎌倉以後に見掛くる菊模様の圓鏡有之候、日本鏡によく似て餘程妙なものに候、關氏は一見韓國に於ける日本模造なりと申候、此時にも矢張り今泉先生が當の敵に候ひき、先生曰く支那鏡に似たものは支那模造だと云ふし、日本に似たものは日本模造としては朝鮮の立場がなくなる。ソレは可哀さうだと申され候、イヤこれは模様の風がどうしても日本だ、日本鏡にしては模様が鮮明でないから朝鮮模造に違ひない、イヤさうぢやない、併し二人で今議論をした處でそんな事をやつて居た日にやとても見切れない。議論は他日として置くがマアさう〳〵朝鮮を日蔭者にしては氣の毒だなど〻申され候、今泉先生及び關氏などの出られ候會は、如斯いつも〳〵議論百出に候由誠に賑はしき事に候。

博物館の高橋健自氏、平子鐸嶺氏、和田千吉氏など參られ候、少々遲れて赤堀又次郎氏も見えられ候。

兎に角朝鮮鏡はどこからどこ迄がそれで、支那はこれで、日本がこれだ、などと明白な斷定を下すは今容易に出來不申候。

主人の殊に推奬せられ候ものは、青銅製の毛拔に候ひき、青く錆びてさはらばホロリと損ぜん樣見え候へども、彈力もありて今以て、用に立つべきものに候ひき、珍しきものに候。

佛像類數點、多くは背部に穴ありて所謂朝鮮式なる事爭ふ可からざるものを見受け申候、此内所謂骨董家などの六朝佛と稱する側のものを二三見受申候、佛像は何れも寸より三寸位に候、大きなるものは無之候。

其他ロクロ細工の精巧なる事を證すべき食籠樣の銅鉢も有之候。水瓶の形のよきが有之候、當に水瓶と申候へども古代の神罇と申事に候、嘗て山吉氏の博物館に寄托せられ候ものと同一形に候、今手にとりて熟視致し候事甚だ幸に且つ有益の事に候ひき、流口はアトより取りつけたるものに候、頂上に細くのび上りたる口は、取りはづし出來るものと思ひたるに、是は鑄付に候、底板は矢張りアトより入れ候ものに候、其他蓋に萬字の透しある香爐及び蠟型鑄物と見るべき丈七寸ばかりの塔置物など、見るもの毎に珍しきもののみに候。

又もとの室に戻り、今度は青磁を見初め候、皿の類ドンブリの類を初め、凡數百點、何れより

見初てよきか分り不申候。其内に最も珍なるは、去年丁度薨後九百七十年になる某王の墳墓より出でたりと云ふ靑磁の器數點、皆所謂雲鶴手と稱するもの丶由にて、彼の象眼入りに候、今泉氏の話に、臍の緒切つて以來發掘物や其話などを何遍も見たり聞いたりするが、コンナ立派なしかも手强いやり方の雲鶴は始めて拜見しましたと、一方ならず稱讃なされ候ひき、磁器の事など小生は一向存じ不申候へども、其模樣を見る時は、成程他の雲鶴手とは異なり、形も模樣も古雅なりと見受け申し候。九百七十年前と云へば、支那は五代唐の代、我國にしては朱雀天皇の御代に候。

今日は計らずも正木校長の肝煎にて、かく結構の品々を食傷する程拜見、何よりうれしく候。のみならず、昔は娘を賣つて迄も飮み候と申す人參湯を振舞はれ候儀、返す〳〵も難有存候、飮み終り今泉先生申され候は、先々娘も賣らずに人參を御馳走になつて、其の上高麗窯の作品も澤山拜見するし、こんな結構な事は一生涯に復とはないなどと申され候、誠に其の通りに候。

黑田氏の宅を辭して表通りに出で候處、忽ち關氏の動議にて、右へ曲りたる處の平山堂とか申し候骨董店を見舞申し候。石川先生早速棚の高麗窯の酒罇らしき物をとり見られ、コリヤア全體何ダネと申し候に、店の主人申され候には、其は高麗燒でございますと、先生曰くサウカ後來の

戒となる様に聞いて置いたのダと、竹内先生卽ち曰く、道理でカウライ（往來）に向いて置いてあると思つたと、今泉先生笑ひながら曰く、今日は洒落が內攻して居たものだから一時に出るわ出るわと申され候、面白き半日の會合に候ひき。

一同四ッ谷見附に立ちかへり、街鐵に乘り候は今泉先生一人、余等は外濠線にのり申し候、先づは右申上げ候、早々。

（明治三十九年七月、日本美術）

一

啓、十三夜の明月を見たる明くる朝家を出で、當地海軍工廠造兵部へ參り候、二三日滯在、其後は鎌倉一見の積りに候、さてこゝの用事は横須賀鎭守府高等官一同より前官長に贈呈のカザリ時計の色つけの爲に御座候、材はホウ金に候まゝうまく行くかどうかはやつて見た上の事に候、明朝まで入用道具取揃ふ筈なれば、いよ〳〵明日より著手致申し候、先は右御報迄。

十月三十一日夜七時、サガミ三浦郡船越。

二

今朝は西から日が出申し候、七時から工廠へつめかけ午前は銘などを刻み、午後二時頃よりいよ〳〵色つけに著手致し候。どうしても色の乘らぬ地金に有之大頭痛に候。明二日今一應試みる積りに候、夕六時重き足引きずり歸宿。かへり見れば十五夜の月海角にかゝり居候、旅館ならば酒一合といふ處なれど夕めしは役所ですませ候事なれば誠につまらなし、昨夜は床の間にありし「堀部安兵衞義勇傳」をよみ切りて寢申し候、今夜は錢湯へでも行き源氏節でもきゝに參らんかと存じ候、コノ家の小娘只今三味のケイコ。

十一月一日夜七時、さねさしさかむ三浦半島のかたすみにて。

三

ア、今日はくたびれた。ヨク〳〵がつかりした。正午頃とても色はつかぬ。吹き直した方よかるべしと申出で、爲に技手先生及び技師と部長殿と會議をされる始末の處、折角色付に來てつかぬといふも殘念ダと思ひ、少々いぶしをかけ試み候處案外の好結果、大滿足、早速それ〳〵の人來て見て、先づこれならばよかるべしとの事、日のくれ〴〵迄にやつと付終り候。

明朝は鎌倉へ立戾り見物する筈に候、草々。

十一月二日夜六時、相州三浦郡ふなこし。

四

指折數ふれば十四五年にもなり候はん、東都の青年彫刻家十數名と共に此の鎌倉に遊び、寺々の御佛拜み廻り候。その一度見てし佛たちに今日再び御目にかゝらんとて今朝田浦驛をいでゝ只今九時こゝに著いたし候、多分十時半の新橋下り列車にて塑造家渡邊長男君及び、國學者山田孝雄君とこゝに落ちあふ筈に候。

平城平安兩京の古名作は數多く見居り候へば、今度は源右府が居りし以來、北條九代が執權たりしこゝの古美術品をよく〳〵見極め候覺悟に候、ひまあらば御來遊如何、今夜こゝにとまるつもりに候。

鶴岡八幡の銀杏はまだもみぢしません。

天長節朝十時、鎌倉八幡前角正。

五

山田君、渡邊君を停車場に迎へ、晝食の後八幡を初め白旗神社を見、西の方小袋坂を越えて閻魔堂、建長寺、明月院、淨知寺、圓覺寺を見、日暮れてやつと宿へ歸り候。くたびれたと長男君申居り候。

四日は東の方面、杉本觀音堂、報國寺、淨妙寺、明王院、五大堂まで行き、引きかへして鎌倉の宮圓覺寺又引きかへし荏柄天神より賴朝の墓、寶戒寺、南へ日蓮辻說法の跡、日朝樣より妙本寺にて又引きかへし、壽福寺、實朝の唐草ヤグラ、淨光明寺を見て一度角正へ歸り申候。十一月五日。

六

午後四時車を走らせ大佛、長谷寺を見て（但し文永元年の鐘の模樣などすりて、小生たうとう觀音を拜み不申）六時三十八分、極樂寺より電車にて片瀨へ、それよりこゝへ、只今晩飯中、一杯傾け居候、波の音聞え候、隣室に何かけしからぬ三味の音致し候。

鎌倉は吾等程、寺々を拜みたるもの數多くはあるまじく候、此の善因に依て極樂往生うたがひなきものなり、あなかしこ。明日は歸京。

十一月四日夜七時半、江の島岩本院。

（明治三十九年十二月、日本美術）

雅邦翁の瀟湘八景

上野公園のもとの料理店、梅川の大廣間に、雅邦翁の瀟湘八景の額のあつた事は、多くの人が知つてゐるであらう。彼の畫があそこの女將市川駒女史の手へ這入つた因緣話をするのである。
去年の十二月の幾日であつたやら、中村好古堂が札元で、某華族の骨董競賣のあつた時である。午後から早崎稉吉君と連立つて見に行つた、正木校長に出遇うた。見てしまつてから三人で兩國橋を西へ渡りつゝ校長が、梅川が近頃此邊へ開店したと云ふから晩飯を食ひに行かうと云はれた。余等は卽ち御供をすることになつた。八景の話はこれから始まる。
校長が、女將は今日は內かと聞くと、給仕の女が參詣に參りましたというてゐた。丁度飯の半ば過ぎ頃であつた。只今主人が歸りましたから直ぐに御目通りに伺ひますと、女が云うて來た。間もなく女將が見えた。八景の話はいよ〳〵是から始まる。

まあようこそ御出で下さいました――此間は電話で誠に恐れ入りました――いえ實は大變御待ち申して居りましたが――まあ惜しい事を致しました。……何實は何も御構ひ申しは致しませんが丁度あの時は榎本さんとそれに下條さん（或は平山さんなりしか）などが大層待ち兼でいらしつたものですから――又どうぞ何分――えつ今日ですか、いえ毎月御參詣に參るものですから――それに雅邦先生の御病氣見舞に伺つたものですからツイこんなに遲くなりました――先生ですか――今日は大層御宜しいとか申されまして――左樣でございます御目に懸つて參りました――まあ彼の分ならば段々御宜しい方で御座いませう――おやもう御飯を召上つてしまつたのですか一人でお喋りをして居て一向氣が付きませんでした――ちよいとアノ何や此の間北海道から送つてくれたアノ林檎を持つて御出よ――イエ私が剝くから小刀を添へて、ア丶妻楊枝もよ！

雅邦先生とは古いお馴染ですよ、いえ先生の方では御存じないので――私がまだ柳橋に居た頃ですわ、ですから先生もあれほど御名前の世間に響かない時分です。一體私は觀音樣が信心であつたものですから、魚籃觀音の畫を一幅欲しいと思ひまして、其頃何となしに雅邦と云ふ名が氣に入つて居たので或男に話しますと、それでは僕が雅邦にたのんでやらうと云ふんで、それならばこんな圖につてんで、私がどてらを著たまゝ片手に炭取をさげて、一寸身體を捻つて、顏だけ

眞向きになつて、其男の人に見せたらば、まあそつくり私の思つた通り描けて來たのですよ、所がネあなた、知らない時と云ふものは本當に失禮な事をするものでしてネ、いよ〱御禮といふ時になつて、何位御禮をしたらばと云ふと、其世話して吳れた人の云ふのには、マア三圓も包んだらば、と云ふのでせう。マなんて御安いものだらう、併しあんまり少な過ぎはしまいかと思つたもんですから、少しばかりの御菓子の折を添へて上げたのですよ。それがしばらくの間に、えらい先生にお成りでせう、さうかうして居る內に私もあゝして上野へ店を開く樣になつたのですがねえ――其魚籃觀音ですか、えゝ今でも大事にして居ります。さあどうぞ召上つて下さい――イエ何ですか、北海道から贈つて吳れたのですがさうですか、おいしかつたら澤山召上つて下さい――ハア其山水の掛物ですか、さうです、以前から持つて居りました、今では雅邦先生の山水は、此幅ばかりになつてしまひましたから私は大事にして居ります。

林檎を剝いては余等にすゝめる。旨いから直に食つてしまふ、又剝いて吳れながら話す、話はいよ〱本題に入つた。

あの瀟湘八景ですか、いえなか〱賣りません。あれは先生の御內へ御納め致しました。それに就きましては私も色々と考へましたのですよ、サ又剝けました。今度は仲のいゝ樣に三つに割

りました、どうぞ一つ宛――あれがあなた上野の山をしまふ時に、五百圓で賣れといふ人があつたのです。さうして居る内に今度は八百圓出さうと云ふ人が出て來ましたのです、さうなると私も私ですネ、千圓が二千圓でも此畫は賣れませんと云つたものです。さあさうなると置場所が無くなる、あれを掛けて置くだけの屋體骨の家などへは今度這入れないとなつて、あれの處置に困つたのです。併し私はちやんと考へました、兎に角あの山の梅川をやり初めに、あの畫を私風情が買込んだものゝ、とは云へあの當座といふものは女將お前が横濱で三百圓で買つたといふ畫はどれだ、どこにあるか見せろつてんで、皆さんが御尋ねになる様な譯、御蔭であゝして繁昌したのも、あの畫と私が何か深い因緣があるのと思つたものですから、幸ひ先生もまだ御壯健でいらつしやるし、先生の御家へ御納してしまふのが一番だと思ひまして、たうとうそんな事にしてしまひました。先生も何か禮に畫いて下さるとの御話で御座いましたが今日も、女將お前にはすまないと申されましたけれど――ナニ御病氣ですし御禮を戴く積で御納めしたのではありませんから――さあ大分たまりましたからどうぞ召上つて、あ御茶を召上りますか、御湯がさめましたから只今少々……。

ほんにあの畫では私も不思議ですよ――あの時は何か女中を連れて横濱へ買物に行つたのです

是まで來たのだから美術院の展覽會を一寸のぞいて行かうと云ふんで這入つたのです、丁度又其の日限りで閉會するとかいふのでせう、所があの畫が賣れて居ないのですネ、あれだけ評判で居てあれだけの先生の畫が横濱まで持込んで賣れないとは、マ何て云ふむごたらしい世の中だらう、と一圖に私はあの畫の前で考へ込んでしまつたのです、さうして賣約所へ行きましてネ、私は雅邦先生の瀟湘八景を買ひたいと思ふのですが、今懐に百圓しか無いのですけれど、東京へ歸りますと直ぐに電報爲替でなり送金しますが、それで宜しう御座いますかと聞くと、二つ返事で宜しう御座いますといふのでせう、たうとう女中にも何にも御晝飯もたべさせず東京へ歸つて來たのです、所が後で大變な事になつたのですよ。

何でも其頃大阪の村山龍平さんが、何か雅邦の畫で少し大作をと云つて探して居らつした時ださうでして、岡倉さんの御世話で、其の瀟湘八景が欲しいとか云ふのであつたさうですが、私が百圓の手附を打つた少し後で、岡倉さんが大變お困りだつたさうでして、手を換へて、私へ御掛合があるのでせう――それはかうなのですよ、私が百圓御納めしてあるでせう、先方樣で云ふのはアンナ山水などを女が買つたつて仕方があるまいから、あの代りに下村觀山さんの元祿美人を買へ、モウ百圓出せばそれで宜しいから、と斯樣申されるんですね――イエ岡崎雪聲さんが御使

者なんですよ、それで最後には、それではアト百圓出さなくとも宜い、あの元祿美人を百圓にまけて置くからさうしろと云ふんですネ――私はそんな事を云はれたもんですから猶々頑張つて居て承知しなかつたんですよ――左樣ださうですね、女の人が雅邦先生の畫を買つたとか云ふので新聞なんかでは大變な評判だつたさうですネ――何新聞でしたか私が大きな畫を背負つてゐるポンチ畫がありましたよ、馬鹿にしてゐると思つてました。

あれを掛ける時なんかも、先生が御出で下さいまして何處が宜からう、此處が宜からうと仰しやつて、たうとうあの舞臺の所へ掛けたんですよ、女將は林檎をむく手を止めない、余等もむけると食ふ。

何時頃でしたか、勿論山へ行つてからでしたが雅邦先生の何かの、宴會があつたのですね。まだ先生の御顏を存じません時でした、私は古く畫いて頂いた魚籃觀音の掛物を其會の御座敷へ知らないふりをして掛けて置いたのです。そして女中に氣を付けさせて居ますと、會が始つて皆さんが御揃になる、先生が床の間の魚籃觀音を御覽なすつて一寸考へて御出でになる。傍の人にこれは古く柳橋の或女からだというて賴まれた畫だが、廻り廻つてこんな處へ來て居る、と云つて御話になつた事を、女中が注進しましたから、私は心の中で一寸面白く思ひましたから、程經て

御挨拶に出まして、古い以前に先生に御厄介になりました魚籃觀音の持主で御座います。といふとさうであつたか、あの三圓のナニはお前であつたかと申されました時は、顏へ火を付けられた樣になりました。その當座三圓の女はお前かでほんに可笑う御座いました。

鉢に堆く盛られた林檎は已に食ひつくした、女將の話もこれで一段落をつげた。瀟湘八景と梅川の女將といふ題目は、榮太樓と是眞の枯木に烏の話とよく似た題目である。畫界の好話題である。

お立ちで御座いますか――御かまひも致しませんで――何や御三方お立ちよ――……どうぞ御近い内に――左樣なら御機嫌よう……外へ出ると隅田の川べりに師走の夜風が寒く吹いてゐる。兩國橋の上を電車が寒さうにすう〳〵と往復してゐる。

（明治四十一年三月、日本美術）

梅川の女將、市川こま女史は、晩年上野公園東照宮畔に、「梅川」といふ貸席を出して居た、美術家には廣く知られた女將であつた。昭和九年二月十五日八十歳で歿した。

五日は九時の汽船にのる、處が九時にも出ず十時にも十一時にも、十一時半ヤツト出帆。イクツカの停泊所を過ぎイクツカの泥掘機械の運轉するを見つゝ風もなき利根川を甲板に寐ながら下る心地よさ。笹川とかいふ處にて數日許り前高等商業の生徒ボートに乘つて來りしが風波のため二人溺死せるよし、幾艘かの小舟にて幾人かの人等あちこちと川筋を探し居候、氣の毒の事に候。松岸と申す處の川べりに宮めきたる家二軒、人々尋ね候へば遊女屋との事に候。此頃の「ほととぎす」の小說によくある潮來の遊女屋の事などかきし處を想像致し候。午後三時半銚子著、四時半犬吠岬著、丁度燈臺の火がつき候時に候ひき、今度の旅行は主任の白濱先生、次に先發として敎務の羽田先生、余は只香取神宮參拜したさにはせ參じ候迄に候、早々。

○

今六日、犬吠岬の旅館を出でゝ燈臺見物。
ランプの火長三寸五分、火口の光二百二十燭光。
鏡面に映ずる火力、六萬七千五百燭光。
火光の達する距離、十九海里四分の一。(約十里)
御影石の階段、九十九。
燈臺の基礎より頂上迄高さ、百一尺八寸。
レンズ及び其他の機械は明治六年佛國より輸入。
レンズのみの價、其頃にて一萬圓。
明治七年十一月十五日、初點火。
一の光より次の光迄の間三十秒づゝの廻轉。
右等の說明をきゝて下る。
其より海岸寫生をしつゝ外川を經、高神に出で六里の路を飯岡著、頗るくたびれ申し候。
宿は東屋、こゝに五助と申す三十七八にもなるらん男有之候、白痴なれども音樂に妙を得たり
口笛を吹き緣側の板を指頭もて打ちつゝ里神樂の眞似は甚だ神に入り申し候、又太鼓を肩にして

飴屋節を上手にうたひ申し候、又ラッパ節は珍無類なり。

銚子名ブチュ何々ヂョー

山十のチチョウにカチの屋根

イチの鑵詰カチヲブチ

赤い電チヤのチヤチヤマ藷

右は銚子名物の謠に有之候へども、斯様に歌はれては何が何やら更に分らず候。本歌は左の通り

銚子名物何々ぞ

山十のひしほに甍の屋根

鯨の鑵詰鰹節

嗅天下にさつま藷

赤ら顔の大きな鼻に目尻をさげて舌足らずにうたふ所見ものに有之候。

海上郡飯岡町玉崎神社前、東屋にて。

○

七日夜來の雨猶やまず結足して立出づ、五助先生生徒諸子を送り、店先にて送別の意を表しさ

びたる聲にて銚子名物をうたふ。
余等は不幸雨具の用意なきにより車を雇うて飯岡停車場へ走らす、代赭色にかれたる草に雨の露のかゝりたるさま得も云はず美し。
停車場の近くに鳥をうる家有之候、大鴨一番一圓五十錢は甚だ安し、山兎一羽五十錢、これは安い樣で高いとの評判に候、汽車の棚の下に鴨をぶら下げ兎をつるしてつれ〴〵に寫生致し候。さて申し忘れ候へども此の汽車は飯岡を發して、只今歸京の途につきつゝ有之候ものに御座候。
小生は諸君と別れて佐倉に下車佐倉の養家を音づれ申候。父及び正彦丁度小生と同じく四日にこゝをたちて掛違ひに上京のよしに候、夕方歸宅なされ候、鴨を料理して一家五人祝杯を擧げ申し候。
八日朝歸京仕り候、今回の旅行中珍しくも十數首の歌を拾ひ申し候、早々頓首。

（明治四十一年三月、日本美術）

奈良修學日記

仕事するにものうき土用の曇日和に、本箱の中の古手帳など繰りひろげたるに、十年ばかり以前に書きたる、奈良の修學旅行の日記を見出でたり。幾年月の重なれる雲霧を透して、古き記憶をたどれば、こは余が母校を出づる前年明治廿九年のことゞもなるめり。此頃は卒業期に入りて教官に引率せられて行くにも非ず、長き暑中休暇を親しき友達と共に旅行せるなりけり。今より思へば此行以來、余が頭腦は奈良の古美術に支配せられ了れるなり。（戊申七月念四日序）

七月廿五日、夜九時五十五分、松原象雲君と共に新橋發。

同　廿六日、朝九時名古屋著、十時半彌富著、汽車不通、渡船場迄人力車、過日來の雨にて大洪水

の木曾川を渡る。桑名停車場迄車、宮川驛に著、山田一志町吸霞園に宿る、福地(復一)先生の紹介なり。

同　廿七日、外宮參拜、浦田町に寓せらるゝ先輩志賀靜山君を訪ふ。晝餉を饗せられて共に内宮參拜、志賀君に別れて余と松原君と皇學館なる大塚君と共に二見浦見物。

同　廿八日、朝六時五十分宮川を汽車にて京都へ、奈良へ。奈良は若草山の麓八文字屋へ泊る。

同　卅　日、東大寺南大門の仁王を見て驚嘆。

八月四日、法華寺へ、西大寺へ、招提寺へ。

同　六　日、興福寺へ。

同　七　日、法隆寺へ、大黑屋へとまる。

同　八　日、櫻井驛に、山田先生、大村先生、村尾君松原君余と五人(突として山田鬼齋大村西崖兩先生並に村尾平吉君現はる、蓋し六七日の頃古社寺寳物取調の爲、兩先生の奈良へ來られたるに隨行して、初瀨多武峯に賽せんとする也)たば市へ泊る。山田先生夜二階より落つ。

同　十　日、大村先生と共に余松原君三人大阪へ。一心寺、舍利寺、鐵眼寺等を見る。大村先生は京都へ。余と松原君大阪を見物して夕方京都へ、柊家別莊に山田先生村尾君並に大村先生等

と落ち合ふ。

（日は闕けたれど、松原君と余は諸氏に別れて四明嶽に登り坂本に下り唐崎に一泊、次日大津より疏水を下り京都へ、その日直ちに奈良若草山の麓なる八文屋旅宿に歸る。）

八月十四日、休み、終日ひるね。

同　十五日、ヘナ土を買はんとて奈良の町中を探す、なし。戒壇院の後へ行き地をほりて少しく得たり。八幡社の傍又氷屋の邊にても。

同　十六日、寫眞屋工藤へ行く。

同　十七日、ヘナ土持て三月堂へ行き、日光月光の面貌を寫す。

同　十八日、興福寺南圓堂前の銅燈臺の獅子模造、夜牛肉屋を探しあるきて見あたる。

同　十九日、博物館へ、夜猿澤の池畔に涼む。

同　廿　日、秋篠寺へ、土を持て伎藝天女の顔を模す。

同　廿一日、同上、なか／＼六ケ敷て閉口。

同　廿二日、同上、松原君は本尊藥師をうつす、これも成らず。

同　廿三日、余一人郡山に行き西の京へ向ふ、途中瓦屋にて土を買ふ、土を何にするかと瓦屋不

審顏して居たり。藥師寺に至り神功皇后像模造の許可を得て、瓦屋にて買ひたる土を以て縮寫し始む。此夜郡山へ引かへして菊屋へとまる。何とか云ふ寺の庭に男女入り亂れたる盆踊あり。

同 廿四日、藥師寺へ神功皇后像うつしに行く。夜郡山へ歸る。

同 廿五日、正午迄に神功皇后像模造し終る。城の口のアンコロを、松原君の土産にと貰うて奈良に歸る。

同 廿六日、休み。

同 廿七日、法隆寺へ。

同 卅 日、二百十日大暴風雨、春日の森大樹多く吹き倒されたり。

同 卅一日、一人三月堂へ、口占一首。

○晝もなほ暗く小雨のふる寺にひとりし居ればこほろぎのなく

二月堂なる茶場の娘の愛らしきが三月堂の不動の脇士に似たり。

九月一日、朝若草山へ登る、夕白毫寺を尋ぬ。

○白妙の衣手さむし眞萩ちる高圓山の秋の夕風

同 二 日、一人新藥師寺へ、土にて不動尊の顏を寫す。

同　三　日、松原君と共に新藥師寺へ、余は不動の脇士を寫し、松原君は十二神將の甲冑の著法など寫生。

同　四　日、終日休み、此宿なる八文字屋に、嘗てより郡山の島岡氏なる少年、脚氣なる姉と、其母と三人、余等の隣室に居たるが、今は姉なる人も病よろしとて常に余等の室に來れるが、今日は郡山の盆踊敎へばやとて姉弟共に踊りぬ。此夜戒壇院の西方なる、某寺に盆踊ありと云へば、人々と共々見物に行く。二月堂なる茶場の美しき兒も交りて踊り居たり。

同　五　日、松原君と共に新藥師寺に再び不動の顏うつしに行く、此日雨なり。

○見渡せば高圓の山雲きらひ高畑の里時雨ふるなり

同　六　日、晴、南山城の淨瑠璃寺を訪ふ、松原君は行かずと云ふ。島岡氏を誘ひ二人して行く。道にまよひ鳴川村に出で里人に敎へられて漸くに至る。朝八時より正午迄かゝる。此寺に有名なる吉祥天女あり。住僧懇切に拜觀を許され、又九體の阿彌陀像ある本堂に案內せられ、池をめぐりて塔婆のある傍に至りて緣起を說く事詳なり。午餉もてなされ二時間許り遊びて歸途につく。萩の花、撫子の花など、數多折りて奈良坂迄來るに夕立に遇ふ。

同　七　日、新藥師寺へ、歸り來れば島岡氏の姊君今日歸り行きたりといふ。余等も明後日あた

り歸京せんとするなり。

同　八　日、朝若草山の嶺に登る、此日頃行き馴れたる寺々に名殘を惜しみつゝ、

〇奈良坂は雨にけぶりて明日越えん木津の川瀨はおぼろなりけり

朝飯後歸京の支度に多忙なり、郵便局へ爲替を取りに、寫眞屋へ勘定に、新藥師寺の施餓鬼に。模造したる佛像の首など入れんとて行李を求めて歸る。夕方八文字屋を辭して停車場に至る。過日來の風雨の爲め東海道不通なりといふ。歸京の旅費は一杯にて學校は一兩日中に始まる、如何にせんかと余と松原君と兩人暫時啞然、さて神戶より汽船にて歸京と一決し、大阪に出でむとす。大和川水あふれて汽車不通一二ケ處。神戶行の汽車も不通なり。

同　十　日、郵便船に便乘して漸く神戶著。

（明治四十一年九月、校友會月報）

大吉祥

萬蓋器有展覽會

人間稀有珍品衆

ふたあるものといへど、敢てくさきものの意にはあらず、金銀寶玉異香のたぐひを納むるうつはの心なり。

されば人々の家々にはなくてかなはぬものにて、その作人は當世名うての人々のもの多く陳ねたりとなり。

てんらんくわいのはじまりは、大正元年十二月五日よりといふ事なり。

招客自臘月五日

珍品をあつめたる場所は新橋際、京橋八官町吾樂殿なれば賑々しく來観したまへとなり。

會場八官町吾樂

運勢

◎此句の上と下とをよめば萬人を招きあつめ會するもの一日樂しと云ふ事なり◎此札を受くる人は立身出世のていなれど吾樂へ行かざれば始終の心ざしとげがたし◎物事萬成就する理なればゆめ吾樂を見わすれ玉ふな◎よろこび事、師走正月吉◎病人本服す、吾樂を見ざればあやふかるべし◎待人冬至すぎ◎うせもの出づべし◎望事萬事ふたあるものの如く叶ふ◎そしよう事、あらそひ事は吾樂のものを買ひ玉はゞ勝つべし、ゆだんすべからず◎屋づくり、わたまし、むことり、よめとり、人をかゝへ、旅立、年始、歳暮の贈答品は吾樂の品に限る、その外は悪し、◎生死は

十に九はよし、併し吾樂を見ざれば危き事あり◎道具は金物、塗物、やき物、様々萬ふたある物よし、又床の置物などもならべたり。

（大正元年十二月）

（附記）

この廣告は半紙半截大の用紙に、薄色にて結城素明畫伯の意匠になる蓋ある器物を描きたるを下繪として、それに社寺などにて出す神鬮札にならひて、大小の文字を組み合せたるを印刷したるもの。

住友家の古銅器その他

前略

大阪は住友家の支那古銅器を見る好機會ありし爲に參り候。周漢時代の優秀品はなか〳〵少くて百三四十點の內約一割位と見申候。地文深く到底今日の手際にても六かしきものかと存候、結構なものは少なく候へども、それでも十數點有之候事を思へば、先づ奉天の何とやら閣のものをのぞきては世界一のものと考候。旣に審美書院印刷にて其等のものは泉屋淸鑒と題し、古銅器と鏡と四册の美本になりて往々世の中に有之候へども、今回は國華社より更に立派なるものを出し候筈に候。併し右は何れも賣品にては無之、住友家主人の物數寄にて知己へ夫々頒與のものゝ由に候。

京都にては中華民國の人にて、當時黑谷に住はれ候、羅振玉氏藏の鏡の鑄型だけを見せてもら

ひ申候、石の型と申傳居り候も、石の樣に堅くやきたる煉火石見た樣なものに候、一つの型にて何面も鑄候ものと考候。模樣の綿密なるは如何樣、彫り込めた型ならずば出來不申候の想像よく適中し候。つまり雌型に細かき細工の出來うる事が漢鏡の特色に候。

又、同地にては釜師大西清右衛門氏祕藏の釜の圖卷物一二卷をよく〳〵精細にしらべ申候、これは其內小生が鐵釜（卽ち茶の湯用）を鑄試みる支度に候。

近頃日本鏡を鑄る祕傳を覺えて試み候、どうにかかうにか行く所頗る妙にて候。今少々熟練したらば、古人をしのぎ可申候、拓本は二三御目にかけ申上候。鏡師、佛具師、釜師をひとりにてしめ申候意氣込にて候。

貴地方にて古き茶釜の賣物はなく候や。殊に繪文樣のある蘆屋手のものが欲しく候。御見當り次第御報被下度候。參考に三つや四つは所持したきものと存居候。此頃は欲氣が出て何でも彼でも金氣の古いものはほしく相成候。

例のあみだ如來座像は、上品上生のあみだにて普通人の拜むべきものにあらず、素人には不向のもの、寺に納むるか外國人に賣候方よき事と存候、其內其運びに致すべく候。早々。

（大正五年十月、北越新報）

小川松民の歌の短册

ある日某短册商から電話で「松民とある歌の短册が三葉出たが、明治の金工家ださうだが如何なる人か」との問合せだ、そこで「勝珉といふのは彫金家で海野氏を稱し、東京美術學校教授で帝室技藝員でもあつたが、松民といふのは蒔繪師の小川松民であらう」と答へてやつた。

兩三日經てその短册商が二葉屆けて來て「一葉は植松包美さんに御わけ致しました」といふ。短册の裏には、

明治年間蒔繪師　小川松民筆跡植松包美鑑之と、ちやんと植松さんの鑑定がきがしてある。蒔繪師だと答へたから、早速植松さんの處へ飛んで行つて鑑定がきをして貰つたと見える、商賣人は早い事をやるわいと感心した。そこで私は早速植松さんに電話で、松民の手跡の事やら作歌をした事やらを一應敎へて貰つた。同氏の電話には、

松民のお母さんは常々の慈訓の內に、男といふ者は手跡が下手だと人前で飛んでもない恥をかく事があるから文字を習へよとさとして居たといふ、作品の箱書やこの短冊の書風で見ると小堀遠州の字を習つたものと見えて定家様である。歌は誰に教はつたか分らない。

といふ意味の事であつた。そして付け加へて「君は字が下手でも歌のよい短冊を持つて來いとの短冊屋への註文であつたさうだが、僕の採つた一枚は歌がよいのでとつたのでは決してないからネ」との云ひ譯であつた。

私の手に這入つた二葉のうち一葉は赤塚自得氏に懇望された。三葉の內二葉とも現代蒔繪界の長老の所藏となつて松民も喜んで居よう。

春草の題の、「雨ひと日ふた日重ねてほの〴〵とみとり色そふ野邊の春草」とある分が植松氏所藏で歌がらも一番よい。實はしてやられたと思つて居る。次の「青柳の糸ほころひて袖がうら長閑けく匂ふ梅の初花」は、掛け詞だけのもので私には氣に入らない。次の春情在鶯といふの題「梅やなき目にとふ春はおほけれところやすます鶯のこゑ」の二句はきらひな詞だ。四句の「心憩ます」も變である。「心やすまず」とも取られてまぎらはしい。歌よみの歌でないからこんな非難はする方が無理かも知れない。兎に角松民の短冊は珍品だ。

短冊蒐集家の話によれば、近代で名のある人は、大概は短冊がある、「篆刻で有名な中井敬所に歌の短冊があるよ」と三村竹淸君が云つて居た。

終りに松民の略傳を記して置くが、これ以上には分らないのだ。

松民(ショウミン)は江戸神田住煙草入の金具師小川忠藏の子で通稱を繁次郎といひ後に吉阿彌と稱した。十六歳で原羊遊齋の弟子の中山胡民の弟子となつて蒔繪を習つた。二十二歳の時が明治維新である。二十四歳の正月八日に師匠の胡民が六十三で歿した。明治初年の正倉院御開封の頃に、金銀平文の七絃琴を模造する事を命ぜられた、其の他諸侯の祕藏せる重寶類の模造をしたのが何れも帝室博物館の藏品となつて居る。模造で終始した樣であるが、少し早死をして惜しい人だ。

子爵松平忠正の片輪車手箱
子爵土井利興の浮線綾手箱
伯爵松平直亮の片輪車手箱
帝室博物館藏散蓮花經箱

この四品は今に博物館の列品中にある。同館藏の內、金地螺鈿浮線綾長方形香箱の箱書には明治九年一月小川松民造としたものがある。明治九年米國費府の萬國博覽會には自ら渡航した。明

治二十四年五月三十日に淺草馬道七丁目の宅で四十五歳の前途ある齡で歿した。この年七月十三日には有名な柴田是眞が八十五歳で歿して居る。是眞と松民とは四十歳もちがつた年輩であつたが、明治二十三年第三回內國勸業博覽會が上野公園で開催された年の十月に、相協力して日本漆工會を創立した。龍池會が十二年に創められ二十年に日本美術協會と改稱され、織物協會が十七年、彫工會が十九年、母校の授業開始が二十二年一月で、母校の美術工藝科の內に金工漆工の二部を置かれた時、松民は母校に敎鞭を執つた。

松民の人となりに就ては非難なきにあらずと「工藝鏡」に載せられて居る。如何なる非難があつたのかは古い人たちに聞いて見ねば分らない。氣の毒な事を書かれたものだ。

（昭和五年一月、校友會月報）

板谷波山君の柹の贈物

今から三十四年前、明治二十七年七月、東京美術學校を卒業した人々に、圖畫師範の白濱徵氏、奈良美術院の新納忠之助氏、漆工の石井吉次郎氏など約二十名ばかりの人が居た。波山君もそのうちの一人である。

卒業製作をしてゐらるゝ頃、しば〳〵波山君等の木彫室に行つて見た。新納氏は波濤の上に乘つて錫杖を横たへた蘆葉達磨を、板谷君は元祿美人を作つて居たのが、特に記憶に殘つて居る。私等は先輩新納氏等とは根津の美術講習所に合宿して同じ鍋のものを喰つて居た關係上、最もねんごろにして吳れられたので、同氏を訪ふ事を口實として、卒業製作の木彫室に、のし〳〵と這入つて行くのを常として居たのである。

氏と波山君とは、その卒業製作の示すが如くに、趣味も性格も、氷炭相容れずと云ふ間がらの

やうに私等の眼には映じてゐた。一人は鹿兒島人、一人は水戸である。

月はゆき、年は去つて十餘年を經過した。

貧乏に貧乏を重ねて、二年がゝりで田端に夫婦窯が築かれた。色々と燒いたものが、少しも買手がない。たま〳〵得意なものが出來て、某先生の紹介で〇〇堂に賣りに行つて、やつと一圓五十錢で買つて貰ふやうな始末だ。丁度私が一月かゝつて作りあげた得意の香爐を某店の主人が褒めちぎつて置いて、さて、やつと三圓にしか買つて呉れなかつたやうなものである。今と違つて展覽會が屢ゝあるではなし、註文があるではなし、作品を米鹽の料に換へるのも骨を折らねばならない時節であつた。

絣の著物たゞ一枚を、冬になれば裏をつけ、夏になれば裏をはがして六年間著つゞけた。六年目にはぼろ〳〵になつて、到底つくろひの仕樣もなくなつて、その忠義な絣に泣く〳〵ひまをやらなければならなかつた。

下駄を買ふ錢がなくて、窯場で穿く冷飯草履をつゝかけて外出する始末。

窯から作品が出るやうに、子供はいくらでも出來る。それがみんな男の子とある。米が無くなつて、小麥粉を團子にして、幾日かを過すうちに、モウ團子はいやだと子供等が泣きだす。

食ふものが無くて、せめて出來の氣に入らぬ作品であつても、懇意の人に買つて貰ふやうにしてはどうかと家人が云ふのを聞いて、家人の不在を見計つて悉く破壞してしまつた事もある。

大勢の男の子達がまた頗る元氣で、いつでも著物は泥だらけ、履物があるかないか知らないが跣足のまゝで家へかけ上る、庭も座敷も區別なしの遊び樣だ。

故石井士口君この當時フンガイして曰く。板谷の噂も仕方のない噂だ、たまには子供等の著物の洗濯でもするがいゝヂヤないか、何も亭主の仕事の手傳ひをするからなんかとソレは口實だヨ、女房は女房の役がある筈だ、板谷の躾がわるいから、あんなざまに子供をして置くのだ。

奈良に在つて、古佛像の修理に從事して居られる古拙新納忠之助氏、たま〳〵波山窯を訪づれて、贈るに五十金を以てした。正直一圖の波山君はたゞ贈らるゝ理由がないと固辭した。古拙氏は情義共に濃厚な薩摩人である、一度出した贈物を引込める人ではない。徐ろに云つて曰く、大勢の子供が可哀さうぢやヨ、君は製作に沒頭しチヨレばヨカあらせんか、この金は子供等に贈るンヂヤヨ……其後月々十金づゝ二年間奈良から金が來る。正に滿二年間。

波山君の家に、たま〳〵國元から送つて來た柿の實があつた、すゝめらるゝ儘にたべた古拙氏コンナ甘い柿は奈良にもあらセン、としたゝか褒めた。此の後幾年、來る秋毎に、うまい柿の實

の大箱が、奈良の古拙園へ鐵道便で著く、差出人は波山宅とある。
法隆寺の有名な天蓋が、修理のため明治時代に下された周圍の瓔珞の玉に、黃、黑、靑の陶器の玉が著いて居るのが不足して居る。（赤玉は釉藥の發明がなかつた爲にない）その玉を補ふ事を、古拙氏がわざ〳〵京都を振すてゝ、波山窯にたんのだ。波山窯の初めの素燒はその玉を燒いたのだ。飛鳥時代の遺品には、波山窯で補の印を押して作られたものを以て補つたのである。法隆寺のあるかぎり、友情の籠つた玉をつゞれる天蓋は金堂を莊嚴にする事であらう。好事家の間に、法隆寺トンボと珍玩せられる樂燒の玉は眞物の天蓋の玉である。
或る時古拙氏香取宅を訪ふ、曰く、板谷君から毎年々々柹の實る頃には柹を贈られて居る、モウ澤山だから君から贈らぬやうに云つて吳れヨ。この事を波山君に通ず。波山君曰く、
貧乏で、もてなすものも無かつた時に、うまい柹だと云つて食つて吳れた柹だから、今はモハヤ食ひあきたかも知れないが、僕が生きてゐる間は贈らせてくれ給へ、アノ時の五十金は死んでも忘れる事は出來ないよ。
四人の男の子がありながら、波山窯を相續する者のないのを古拙氏は殘念がつてゐる。今の波山と別趣の二代目もがなと遙に波山窯の烟突を望んでこの一文を草した。（昭和二年七月、工藝時代）

詞藻

私が東京へ初めて出て來てからもう八年になりますが、八年前の十二月の十五日でした、國の父が病氣だからすぐ歸るがいゝというて、兄から使をよこされました。もし大病とでもいうて電報でゝも知らせがあつたのならまだしもですが、十二里もある道をしかも使の者がてく〳〵歩行いて來た所を見ると、これは最早此の世に無い者としか思へなかつたのです。使に聞けば今朝出る時の模樣では決して〳〵そんな事は無いとのことでありましたが、そんな事を爭つて居る時ではありませんから直ぐ歸りました。其頃は私の國へ行くにはまだ鐵道も無い時分ですから市川まで車で參りました。それからは野道へかゝつて七八里の道を歩行きました。事によると死なぬかも知れない。併しどうだかなどゝ、其事許り繰りかへしてあるきました。今思ふとまるで夢中に歩いたのでした。兩國を午後五時頃に出たのでしたが、家に著いた時は丁度十一時頃でもあり

ましたらうかしら、よくも覺えませんでしたが、何せい餘程夜が更けて居た樣です。それに村の事ですから猶更のやうに感じました。家に這入らうとして胸の動悸が非常に高まりました。近所の人などが三四人ゐましたがごく靜でした。ハヽア大病人がある故皆が靜かにしてゐるのだなと思つて此時迄一心に亡くなられた事と思つてゐましたが事によるとゝいふ念が起きまして、サアどちらがどうとも自分で判斷が付かなくなりました。其内に座敷を通つてづか〳〵と父の寢てゐるらしい方へ行かうとしたら隣の酒屋のかみさんがゐてマアとんだ事になりましたと云つたのです。から云はれた其時不思議に其處へ坐つてしまつて、長々御世話樣になりましたと云つたのは自分乍ら何の事やら分りはせんでした。母も弟も其處に居ましたが、オウ〳〵よく歸つた來た、おとつさんはあつちにといふものだから、アヽよかつたまだ遇へますワイと思つて、すつと奧へ通つたら、プンと線香の香ひがして兄や醫者などが二三人枕許にゐられたのです。全體死んでから生きてか、どうしたのだらうと坐りましたら、兄が非常に言譯をするのです。今朝使をやつたのも實は早まつたかと思つた位であつたのだが、先刻六時頃息を引きとられたのだ。こんなに急にいくのなら、使は三時頃に大丈夫著いたらうと思つたから、電報も何も打たなんだのだ。死目にあはせないと云つて惡く思つてはこまるからと頻りに云つて聞かせられたのです。もうかうなる

と悲しいやら何やら一向分らぬ樣になつちまつたのです。此夜の事でした。母と兄として云ふのには、實はまだ佐倉の方へも知らせをしないのだが、お前が歸つてからと思つてゐたのだ、今夜は晩いから明日使をやる事にしようと思ふがどうだらうと。それから私はいひました。常の事なら明日でも明後日でもよいでせうがコンナ事は夜中だつて夜明だつて決して猶豫なんどしてゐられる場合ぢやありませんから今すぐ使をやつたらいゝでせう。さうすれば明日は早く佐倉から出て來ますから、萬事相談なども出來ますからと云つたのです。そんならさうしようといふんで男を一人と三右衞門伯父さんと二人に往つて貰はうといふ事になりまして、私が伯父さんの家迄使にいつたのです。まだ伯母さんが起きてゐましたから、コレ〳〵で佐倉まで伯父さんに行つて貰ひたいのですがといつたら、もう大分遲いだらう何時だかと云つて伯母さんは外へ出たのです。何かしらと思つて一緒に外へ出ると、木小屋の後の藪の中の胡桃の木の上に傾いてゐる三梃の星を指して、三梃のお星樣がもうあすこだから間もなく一番鷄が鳴くだらうが、それぢや兎に角おやぢを遣ることにしようからといふので私は引きかへしました。此の時から今年まで八年の間西へ傾く三梃の星を見る度にきつとこれだけの事柄が心に繰りかへされるのです。(はんこ)

(明治三十二年十月、ホトトギス)

谷中のお寺を借りて下宿して居た頃であつたが、本所まで用があつて兩國橋を渡つた。向島あたりへはぽつ〱人が出ようと云ふ陽氣のいゝ時節であつた物だから、丁度今、橋の下を屋根舟が一艘、三味線ひいたり、唄つたりして、川上へのぼる所であつた。フト見ると、屋根のひさしの兩側へ、犬張子の大きいのやら小さいのやらをべた一面にぶら下げて有る。何の洒落か知らないが不思議な洒落樣も有つた物だ、と思つて本所へ行つてから話の序に聞いて見た。スルト「それは只の船遊びではない。一體東京では兒が產れて、女は三十一日目、男は三十三日目に、お宮詣りと云ふのをするが、其日に其子を親類中つれてあるくのだ。さうすると其の家々で、犬張子をくれるのだ。まあ山の手の方ぢやあ車でゝもあるくが、この邊では今兩國で見たといふ樣な風に船などで遊山かた〲出掛けるのだ」と云ふ事であつた。……二三日經ての事、お寺へ子供

の葬式が來た。小さい棺の上へ例の犬張子の大きた奴が三つばかりのせてあつた。ヤア此間の兩國の子供が死んだのかしらと思つた。………翌日佛壇に子供の位牌と例のワン〳〵がころがつてゐた。三つばかりになる寺の女の兒が毎日々々ワン〳〵を持つて遊んでゐた樣であつた。(盤古)

(明治三十三年一月、ホトトギス)

十日　晴　朝飯を食つてゐる處へ牛の註文主が來た、まだ出來上らない、今日やつと吹くのですと云つて、昨日の夕方ヤカマドへ入れてあるのを見せて色々言譯して歸した、間もなく彥次郎が來てヤカマドへ火を入れた、丁度八時であつた、コークスが足らないと云ふので少々こまつたが工面して買つた、香爐の仕上をしながら吹を手傳つてやつた、午後二時頃から型へ色が這入り掛けたから爐の方へ火をいれて例の通り梅吉に吹子へかゝらせた、そして自分はコークスを入れたり地金をおろしたりした、ユ（鎔銅）が出來がたになつたからと云うて彥次郎にヤカマドを崩させて型をさまさせた、ユを注いだのは三時半頃であつたらう、二貫五百目のユがほんの一二百目位したか殘らない、あんまり飲み過ぎた樣だが此分なら品物は出來たらう、今日の吹きは昨日のよりか型が一つだつたから氣樂だつたが、彥次郎はひよつと鑄損ひでもあつてはと云ふので、昨日

の小物のごて〳〵あつたのより心配だと云つてゐる、ヤカマドの跡の火を消さずに粘土製の虎の置物を燒きにかゝつた、燒しめ屋で劒呑だと云つてことわられたのを鑄物師が引うけて燒くなんてあんまり大膽ですねと彥次郞が笑つてゐた、日の暮々牛をわつた、甲張一つさゝない上々の出來であつた、彥次郞がほく〳〵喜んで歸つた、虎はだん〳〵熱を持て來てうす黑くなつて來たから、もうしめた、煉瓦で圍つて炭をどんとかぶせて上へ瓦をふせて置いた、九時時分には盛んに火がほこつてゐたが、十時頃に見舞つたらばもう下火であつた、寢ようとしたら或男と職人とがやつて來て、要作と云ふ越後出の蠟型鑄物師ですが置いて下さいと云つて來たが、食はせる事もむづかしいのでことわつた。

十一日　晴　朝起きるとすぐ煉瓦を取りのけて虎を出した、まだ熱かつた、眞白に燒けてゐたが土のつけ方が不慣れな人の作つた物だから處々にひゞが入てをつたが、しかし上燒だつた、此分では根岸の先生の首も燒けぬことはなからうと考へた、今日も香爐の仕上をした、彥次郞は昨日の牛やら一昨日の琵琶法師やら五具足やらの甲張をはつツたり中子を落したりして日方をかけて見たらすべてゞ一割に近い吹べりだつた、あんまりへりが强いので地金の目方のかけ違ひぢやないかなどゝ云つてゐる所へ無得がやつて來た、此の間吹てやつた鰒を持つて來て云ふには、今

戸へやつてそれで女型を寫しとつて澤山焼かせうと思つてやつて置いたら、あまり精巧なので女型に取り悪いのでこれを手本にして別に鋺をこしらへてそして女型を造つたさうだ、そらア實に不細工なものが出來ちまつたなどゝはなして夜おそく歸つた。

十二日　雨　桔梗形の花生の色付をした、こやつは倒れさうな感じがして商人にはうれない奴だ、梅吉に小さい花生の中子を込めさせる。

十三日　曇　香爐が出來掛つた所へ久しぶりで麓君が來た、左千夫君も一緒に來た、そろ〳〵日の暮であつたから妻に牛肉でも買つて來ないかと云ふと、さうは思つて居りますがおあしが足りないと云ふ、其内に歸つてしまつた、彦次郎が金をかしてくれと云ふ、金は一文もないから鶉を賣つて來いというて持たしてやつた、夜十時になつても歸つて來ない、すぐ自分の内へ歸つたと見える。

十四日　曇　朝彦次郎が鶉を持てやつて來た、どうしたと云うたら直段が折合ひませんから賣らずに來ました、そして今日か明日あすこの主人が觀音を見に來るさうですと云ふので、それで先安心した、香爐をやいて色つけをした、蓋は水の透しで撮みは鴛鴦で鑄出しのまゝ胴の觀世水のあたりへ大小いくつとなくいゝ工合に出て居る玉金をはつらずに置いた爲、それが水玉の樣で

頗る面白い、蓋と胴がすこし釣合がとれぬ樣であるから、色で釣合ふ樣にしたらば少しは見られる樣になつた。

十五日　曇　今日は休日だけれどせう事なしに三足の花生の仕上にかゝつた、梅吉にやはり一輪瓶の中子をこめさせながら敎へてゐた、午後になつて十日の晩に來た要作がまたやつて來た、自分は細工場に居たから仕上をしながら色々話して見た、師匠といふは越後大久保の鑄物師である事、佐渡の琢齋は大久保から出た事、東京の鑄物師が用ゐる眞土とは眞土が違ふ事、蠟型鑄物は東京ではまだ見ない事、重に花生や香爐や火鉢や何かの蠟型鑄物をするが置物めいた物は知らぬ事、今年の四月初めて上京して初め淺草に、次に本所の或出來合鑄物師に、今は安物鑄物師にゐる事、師匠は安物を造らぬ事、氣に食はぬ物はたゝきつぶす事、藏を持ツてゐてそこに品物をならべてある事、年々米の百俵以上あがる事など話が其からそれへと移つた。御宅は今迄居た鑄物師とは違つて出來る物が上等だ、そして蠟型鑄物の樣だから是非使つてもらひたい、としきりにたのむから內がせまい事や、手間は澤山出せぬ事仕事は念入りにする事などを云ひきかして暫時ゐるがいゝと云ふ事にした、今晩から置いてもらひたいと云ふからそれもゆるした。夕方彥次郎の來ると云つた人が觀音を見に來た、感心して見てゐた、自分は大に得意であつたが値が高いの

で考へて見せうというて歸つた、ひどく失望した、夜彥次郎へは金を工面して屆けてやつた。

十六日　曇　朝觀音を引かついで兩國へ持つて行つて或家へ見せた、こゝでもと見かう見てつく〴〵感心の體で、如何にも落ちついた色の工合がいゝと云つて只色ばかり外ほめない、それで結構に出來てをります、どうもわざ〳〵御持下さいまして御見せ下さいまして誠にありがたう御座いますと云つて買はうといはぬから、いやならよせといふ氣で風呂敷へ引くるんでかつぎかへした、兩國橋の上へ來ると、誰やらが自分のかいた畫扇子を投げた話を考へだして、いま〳〵しいから風呂敷をといてザブンと川へ投げ込まうかと思つたが、まあ〳〵やめよう、これが自分の唯一の財產だから、しかし此川へ投げこんだら幾日かの後佃島あたりの漁師の網にかゝつて引あげられて、月島邊の廣々した處へ小さな御堂が出來て、御利益がある爲忽ち淺草の觀音樣見た樣な大きな御堂に建てかへられて、初めて臺座の銘に依て自分が作つた事が知れて、一夜の內に自分も立派な家へ這入る事が出來て、借金は無論の事蝙蝠の地金も返ると工合がいゝがなあと、今直ぐ賣つて金にしたい觀音樣を幾年後か知れぬ出來ない相談を考へて、てく〳〵步行いて歸つて來た、觀音樣のばちが當つて近來の樣にこまるのかしらと思つた、丁度正午頃客が來た、根岸へもゆけなかつた。

（明治三十三年十月、ホトトギス）

一月十日　釣燈籠を込める、兼さんに水盤の開きの方のナカゴをやらせる、明日の夕方頃吹きたいたものだと話して夕方兼さんが歸った。余は十一時まで梅公を相手に夜業した。

一月十一日　朝飯を食ひながら新聞を見ると、今日は舊の十月廿一日であつた、廿一日は弘法大師様の日だから、今日の夕方吹きをしたならば鑄損なひでもなけりやいゝがと例の心配をし初めた。萬一吹く様に成つたらば成つた時の事として、余は釣燈籠へかゝる、勇作は今日は最早喉も痛くありませんからと云ふ故、水盤の臺の方の仕上をやらせる、兼さんが夕方歸る頃までには、ナカゴへクロミを塗つて、吹くばかしには成つたが、最早日が暮れた故、幸ひの事にして吹きを明日にのばした、扨明日いよ〳〵吹きの日とすると、左千夫君の釜の蓋も吹きたいし、鈕も造り直したいと思つて、釣燈籠を止めて、夜になつて、眞鍮のトリメを切り直して、型を引きながら、

鈕をこしらへ直して、塗り込めて、蓋の裏と表の型も出來上つたのが、丁度四時であつた。

一月十二日　朝六時半に起きて細工場へ火をおこす．去年の暮蠟型を燒き流して、非常にあせつてやつたからではあつたものゝ、二度まで失敗したやつを今度は總型で薄く吹かうと云ふのであるから、矢張心配だ。この位の大きさで、總型でふくのは今度はじめてゞあるから猶の事である。序に釜の蓋だの、硯だの小物を三つ四つ、これも總型でやる事にして、十時頃から正午頃までに皆湯を入れてしまつた、早速水盤をこはして見ると、薄いせゐか小さな穴が二つばかり明いただけで、綺麗な鑄出しであつたので大に安心した。

さうして初めて正月を迎へた樣にうれしかつた。丁度左千夫君が麓君を訪ふとて立ち寄られたから、蓋も好結果で有つたというて見せた、すると、此の蓋が出來たらば早速此の間の釜を持つて行つて、根岸の先生に茶を馳走する積りだから、早くやつて呉れなくちや困る、と今日もせきたてられた、午後は休業として風呂へ入つた、いよ〳〵氣分がせい〳〵したので余も左千夫君の跡を追うて本郷へ行つた。

十三日　釣燈籠、夜十一時まで夜業。

十四日　釣燈籠のナカゴへかゝる、今夜は兼さんに十一時までゐてもらつて、水盤の開きの方

をむいてもらつてしまうた、それから開きと臺とのすり合せが大へん面倒なので、余は十二時までかゝつてやつと合ふ様にした、明日一杯にあげちまひたいので今夜は勇作も一緒に徹夜する事にした。

十五日　午前零時から水盤を糠味噌燒にする、朝明までに臺の方のドウズリがをへた、鑞付をせんけりやならん處があるから、外手町へ勇作に持たせてやる、兼さんがやつて來たから開きの方をドウズラせた、余は燈籠の中子をけづりながら、兼さんと色々の話をした、兼さんは余の仕事に熱心なのに非常に感心したさうで、今の若さに夜も寢ずにやるのに驚いた事から、余がいくら働いても借金がふえるばかりだと云答に就て、多くの資本を持つてやらねばとても利益が有ると云ふ段にはならぬ事、佐野の何とかいふ鑄物師は一日置に五百貫づゝの銑鐵をおろす事、其度毎に二百圓の純益が有る事から、兼さんは鑄物師はつく〴〵こりたから、自分の息子は跡を繼がせずに、菓子職にした事から、計らず兼さんの身の上話を聞いた、兼さんは重に出來合物を造つてゐたので、廿五六の時分には二階建の家を造つたり、三間に三間半の細工場を建てたりして、盛にやり初めたがどうも面白い結果が見えなかつたといふ、それがと云ふ物は、品物が、はけが惡くて原價よりもいつも引込んで賣る始末で、とても思ふ様には行かなかつた、尤もたまにはいゝ

錢にも成る事が有つたが、いつも手間損で賣る、それが重なり重なり追々借財がふえるばかり、そこへ持て來て或年の秋の大風に細工場をつぶされて、型や何かを澤山こはされて、非常な損害を被つてから其が不幸の手初めに、三四年の間に父が死ぬ、母が死ぬ、其から間もなく兼さんが使つてゐた職工がにせがねを吹いて使つた爲、嫌疑を受けて未決監へ九箇月もたゝき込まれて、家のくらし方は火の車になつたとやら、出ると間もなく、或人の借金の證人に成つてゐた所から借主が返せないので、兼さんに掛つて來る、どうにもかうにも仕樣が無くなつちまつたのであつたさうな、それからといふ物は、仕事をする張合も拔けちまつて、ぶらぶらやつてゐた所へ、古川の鑛山へ器械の修繕に這入る事になつて、先づ一安心と思つて、三年ばかりゐる内に其の山もやめるので、兼さんも暇が出て、其からしばらく一人稼に大宮へ來てゐたのであつたが、そこも思はしくないので、たうとう國の女房や子供と相談の上、色々の事情からこの東京へ出て來る事に成つたのであるとか。東京へ便つては見たが、會社も二つ程ことわられ、他の鑄物師でもこの不景氣なのでことわられて、致方なしに安宿にとまつておでん屋を初めたさうな、尤もこの兼さんを世話した人から、おでん屋をして居た事は聞いてせめて食ふだけでもいゝから口のある迄といふ事で、此の間から來させてはゐるが、かう云ふ身の上を聞いて同業者ではあるし、殊に五十

に近い年輩に見受けるしいかにも可哀さうでたまらなくなつた、若し余が不足なく暮せる身分であつたらば、兼さんのすきな程いゝ手間を出すのであるが、去年は夏から秋へかけての大失敗につゞいて、妻にも子にも別れる始末、それに去年の暮の鑄損や何かで、三度の飯を一度にしても苦しい家計であつて見れは、なか〳〵人處ではないのである。アヽどこか兼さんを入れるいゝ口は無いかしらん、可哀さうである、若し余がこれから先、こゝにも居られなくなつて、兼さん見た様に一人うろついてあるく樣になつたら、どうであらうか、決して無いとも限らない、兼さんの身の上話は兼さんだけの事と聞き流す事が出來ない、丁度余の未來記であるのかもしれんと思つて、思はず涙を落した、いつも涙ぐんでくしや〳〵してゐる兼さんの目先にも涙がたまつて居たので、國に居る女房や子の事でも考へてゐるのかしらんと思ふと一層氣の毒であつた。余はしばらくだまつて居た、落付いてよく考へて見ると兼さんなどはたゞ製作して、それが金になつて、金がたまればいゝのである、職人である。しかし余は少し違ふ、成程食ふだけの金は是非ほしいが其の上は決して望まない、食ふ事の方法さへ立つたらば、思ふ存分寫生をやつて、其の上で生涯の大作を試みたいのが願である、併しながら親を養ひ、女房や子を養ふ事に、一生終りやしないかしらん、と考へると最早何もかもいやになつちまふ、もう〳〵何もかも考へまい、馬鹿になつ

て勉強してゐればどうにかなるわい、と考へ直して、しばらくやめてゐた中子をけづり初める。午飯をしまつたが勇作が歸つて來ない、あまり長すぎるから梅公を迎へにやつた、歸つて來たからすぐ色付を初めさせた、夕方やつと出來上る、夜になつて奥へ持つて來て見る、形が頗る珍しい、しかし惜い事には胴が細過ぎるのと、耳が一寸ばかり短くて細く、臺の方のすかしがかけさうでけんのんな事が氣になる。先方からよこした圖の時にはこんな事が分らなかつた、夜持つて行くのは何となくいやであつたが、炭屋へやる金が是非入用なので、八時頃註文主へ持つて行く、何とか小言をいはれるかなどゝ思つて、風呂敷を解いて、だまつて出した。丁度店に大勢の者がゐたが、皆だまつて、上から見たり、横から見たり、ランプを近くへ寄せたりして見て居る、大へんよく出來ました、どうも蠟型鑄物師にたのむと此の六角の角々が眞直にたゝないでこまりますが、是なれば結構です、さぞ御骨折でしたらう、といはれたので大にうれしかつた、それから當時出來合物では何が一番多く賣れるかだの、何だのといふ話から、金物屋が近來は大へんこみであるといふ話、其から燈籠の圖を見てもらつたり何かして、近年の博覽會へ大きな物を出したいから、是非造つてもらひたいなどゝ色々な話をして、十一時代金を受取つて歸る。

十六日　皆々やすむ、余は先月から本月上半期の製作品の工手間や何かをしらべて、午後向島

へ五具足の箱を持つて行き、それから今戸の橋を渡る、川の中程へ出て堤の上を見ると、言問の少し下の處に人が黑山の樣に立つてゐる、船頭の言ふのには新造が小袖ぐるみで身投してゐるのであるさうな、惜しい事、堤の上で氣がついたら行つて見るのであつたのにと思つた、三谷堀といふを初めて通つて、吉原堤へ出て、麓君のすきなおはぐろどぶのふちを通つて龍泉寺町から坂本へ出て、上根岸に先生をたづねようと思つたが、先をいそぐので新坂を上り、御靈屋の前から谷中美術院に梅村をたづね、駒込に安民をおどろかした、やうかんを食ひ、茶を飲みながら、函館の人田中僊山翁の蠟型の座像を見る、余はこの人が畫が巧者で寫眞などもよくとるといふ事を外で聞いた事があつたが、今安民が此の人の像を造るのに計らず出會つて、頗る奇遇を感じた、以前安民が幕末の名士澤太郎左衛門の半身の肖像をやつてゐた事があつたが、それより遙かに作柄がいゝ、しかしほめると直ぐ大氣焰を吐くだらうと思つて、いゝともわるいとも言はない、今月の末には出來上るから君の方へすぐ送るが、早速吹いてもらふ事が出來るか、と聞くので、末ならば今やつて居るものが皆上つちまふから、早速かゝれるといふ、それから梅公が蟲喰硯を吹いた事やら、南部の鐵瓶の蓋のつまみを、譯のわからんものをこしらへた事、左千夫君の釜の蓋を三度造りかへた事など話して、日が暮れてから歸る、途で雨響が湯島へ歸るのに連立つて本郷

の通りへ出る、雨響は近來大に悟つたと云つてゐた、つまり自分が非常に下手な事、學校の教授の方法がわるい事、常識のない教員が、學校は辨當をくひに來る處らしく考へて居る事、今の生徒がます〳〵氣の毒である事、世の中へ出てとても食へぬ事、職工になつてどこかの工場へ出たい事、などを話して來ると、雨がぽつり〳〵降つて來た、湯島天神で別れると雨がます〳〵はげしいので、車に乘つて歸る、梅公が淺草で見て來た芝居の話をきいて、細工場に火を見廻る心配もなく、らく〳〵床につく。

（明治三十四年二月、ホトトギス）

一月十日　絹マネを飾ひ、カミツチをこさへる。

一月十一日　前田の叔父さんが、内に有る丸い木の硯を、こめて唐銅で吹いておくれ、褒美をやるからつてそいつたから、旦那にそいつて朝からこめる、夕方ナカゴを込める、こはれたから又ナカゴをこめる、丁度三邊目に型の方もこはれかゝつたから、旦那に直してもらつて、夜十二時頃やつとナカゴをこめた、今度はこはすといけないから、旦那にナカゴのけづりをやつて貰つて、あたしは先へねる。

一月十二日　水盤の吹きをするので、コークスを割つたり吹子を吹いたりして、あたしの硯へも湯を注いて貰ふ、蟲食ひ見た樣な硯が出來た、さうしたら旦那は、「是は面白い硯が出來た、わたしが仕上げてやるから、蟲食ひの處は土でたして、さうして込め直しな、なぜつて込め直した

のを叔父さんにやるがいゝ、叔父さんなんか蟲食のないのがすきだらうから」といはれた、夕方早く細工場をしまつてお湯へ行く、夜お婆さんに連れられて足袋屋へ行く、十六日にはく股引をあつらへてくれた、それからかみい床へ行く。

一月十三日　クロミがないから炭粉をつく。

一月十四日　今日も炭粉をつく、お使ひの行きがけに門の處でおひねりを拾ふ、五錢の白銅が二つ有つた、歸つて來てみんなに見せると、勇さんが「菓子をかつちまへ」といふ、すぐ買ひにいつて細工場でみんなでたべる。

一月十五日　朝、炭粉を少しばかりスキヒしてクロミをこさへる、午後勇さんが水盤の色付をしてイブシをかけるのを手傳ふ、夕方水盤が上つたので夜なべはおやすみ、夜足袋屋へ股引を取りに行く、明日は十六日で、やどりだからうれしくて床に這入つてもねむられない、去年のお盆には壽座へ這入つたけれど、明日は淺草へいつて見ようと思つて、いろんなことを考へてゐる内に少しばかりねた様に思つた。

一月十六日　もうお婆さんが起きて、早くおまんまをたべさせてくれゝばいゝのに、今朝はなぜまだ起きないのだらうと思つて、寢かへりなんどしてゐると、勇さんが「梅公又小便ぢやない

か、起きてして來なよ、よツてば」というた。もう寢小便なんか、しやしないのに、やたら起すから起きて便所へ行く、早くお婆さんが起きてくれゝばいゝと思つて、障子をびしやんとひどい音をさせたら、お婆さんが「梅やまだ三時ぢやないか、もう一度寢入こみな……その內に起きてやるから」といはれた、まだ夜中かしら、早く夜が明ければいゝと思つてたうとうねられない、明るくなつたから誰よりか一番早く起きて、そしておまんまをたべて、新しい綺麗な著物を著て、股引をはいて、新しい足袋をはいて、下駄の新しいのをはいて出る、今日は表が大へんにぎやかであつた、兩國へ出ると大へんな人ごみであつた、どこかのをぢさんがあたしのがまぐちが懷から出さうになつてゐるのを敎へて吳れた。それから淺草橋を渡つて、眞すぐいつて、淺草座へ這入る。追ひこみは一杯でことわられたから立見を三幕見る、おかみさんが自分の子を殺したり、何かして、仕舞に其のおかみさんが殺される所をやつてゐた、それから蕎麥屋へ這入つておそばをたべて、觀音樣へいつたら、小屋掛なんかしてあつて、佐倉宗吾が磔になつてゐる所や何かの看板が出てゐるから這入つて見たら、なんだい人形が動いて、いろ／＼な芝居見た樣な眞似をしてゐるのよ。それでも三枚橋だの、それから船頭が綱を切つて宗吾を渡す所だの、それから殿樣のとこへ化けて出るとこだの、いろんな事をやつた、面白かつた、そこを出て、又さつき寄つた

蕎麥屋でそばをたべて夕方內へ歸る。（十二歲、梅吉代筆）

（明治三十四年二月、ホトトギス）

麥丸の姉様

苗代の苗も、今は早とるべくなりて、蛙の聲、朝となく夕となく聞えつゝ、田植うるべき六月も近づきぬ。吾が少さき胸にゑがゝれたるは麥丸の姉様なり。去年の田植には、麥丸の叔父様の處より、手助けにとて、美しき姉様來たまへり。色など白くて、織色木綿の著物裾短かく、著なしたるに、同じ色の手甲をかけて、赤き色の襷かけたる、吾が目にはいとよく似つかはしく、美しく見えけり。田植終へて今日は歸らなむとしける朝かへさじとて吾は泣きけり。母君などかれこれなぐさめ玉ひけれど吾は誰がなだむるをも聞かざりけり。姉様も困じ玉ひけむ。終に共に麥丸にゆき玉へとて、村の端まで背負ひて、吾を伴なひたまへり、村はづれの茶店にて、菓子など

くさ〳〵買ひくれけるに、麥丸にゆく事打わすれて吾は、そこより歸りけり。

今年も來玉ふらむ姉樣は、日每日每待つかひもなく、來玉はざりけり。などて麥丸の姉樣は來玉はぬかと母君にとひまゐらせけるに、去年の盆すぐる頃、隣村へ嫁入らせけるよとのたまふに、嫁入とは、いかなる事にか、嫁入したりとて田植には、來られぬ譯はなし。おとな（下男）に馬もて迎ひにやり玉へとて、すねまがりけり、指折り數ふれば吾が五つ六つの時なるべくや。

行々子

打開けたる野川の川淀、そこには蘆原の眞青き影の丈高くて、川波に蘆の群立ちうつろふ影ゆれて、幾筋となく蘆のうねるを、しばし舟とめウツトリとして、眺めてあれば、いづくともなく聞ゆるよしきりの聲、遠くまた近く、正午の日影は舟べりにさしたり。

舟大工

岩戸の渡には、湖水にのぞみて大なる椎五六本かげをひたせり。そこをすこしはなれて松はえたる丘の影の、水にうつりて青き處には菱の花一面にさきたり。舟尾より佐倉に至る舟の中にて

午餉すとて菱の中に舟をとゞめけり。大きなる椎の木陰には舟大工の舟に釘うつ音、拍子をかしく、丘に木立にこだまして、波にひゞく。いつ思ひいでても幽かに清らかなる趣なり。

片おもひ

遠き處に轉任とやらし玉ふ篠原樣の御孃樣、先の程母人と共にこゝに立ちよらせ玉ひて、是非にあなた樣にあうて別れたいと仰せられた故、妾がお宅へ伺ひましたに、何れへかお出との事にて、本意なく戻りまして、お孃樣へ申しましたに、お孃樣の仰せらるゝには、あなた樣にあはで別るゝ事かとて、母人にそむかせ目にあまる涙を一つ二つ落させ玉ひけるよと、遊ぶ茶店の老婆が物語なりけり。惜しき事してけり。かくしらば遠く遊びにはゆかぬものをとて、悔めどもせんなし。吾が常に用ゐたる毛絲の手袋も靴下も、只何となしにその人よりもらひけるなりしが、今こそ思ひあたりけれ。いつぞや運動場にて彼の人いひけるは皆の人、夜學にとて勝浦先生がり行きたまふに君もゆかせ玉はずや、君のゆきたまはゞ、妾もといひしことありけり。その女十五、吾は十四の春なりけり。後の戀とやいはむか、戀は人の教ふるなりけり。

鶯

菜の里の何とかいひけむ家に一夜ねて、朝げまだあけやらぬに、ひとり夢路を辿りつゝ街道の裏手をかへることありけり。葛飾の野べ、菜畑麥畑の打かすみたるに、朝の冷やかなる風心地よく目の覺むる心地のしてけり。

　妹にわかれ里のうら道朝くれば田なかのもりにうぐひすのなく

まことならなくに「妹」のうたをぞよみける。

紅梅

蛙の聲、枕にかしましきまでにきゝなさるゝに眼をさませば、雨なりといふ。つれの人たち今日一日こゝにくらさむといふに同じて、一室に打ちつどひながら春の朝雨にふりこめられて酒くむのどけさ、庭の紅梅にしたゝる露の玉、苔もくれなゐにそむかとぞ見き。

轡蟲

月あかく窓にさし入る夜ふけ、人の行き來もたえたるに、蟲賣の聲しければ、はしためにに買ひとらせて、月さす窓につるしけり。夜もやう〳〵にふけゆきて、月はいよ〳〵すみわたるに、なき出したるはくつわ蟲なりけり。むつごとのそれもきゝわかぬまでに。

池邊の松

常にかよひなれたる道を一年あまりとだえて、或日ふと去年のこと偲びつゝ行くめり。その家はあとなくなりて、板のかこひのみぞしたりける。板のすき間より見入りたるに池のほとりに昔見し松のみぞくねりける。わが思ふ人は、いづれにか行きけむ、誰をかまつらむと、松にとはむも恥しくて。

（明治三十五年二月、心の花）

吾等は南山城の名所舊蹟、あまねく經めぐりて、友の二人は奈良より京へ、吾等は三人大阪にまはり京にめぐりあはむの約束にて別れぬ。

夏の暑きに大阪のはしよりはしに古き寺のみ佛ををろがみて、其日の夕方京につきて、なにがしの旅宿の別莊に入りぬ。奈良にて別れたるもの又こゝに會ふ、夕餉の前に麥酒飮むべくそこの女にいひぬ。

四五本の麥酒持ちはこびたる人の白き顏に白きもの薄くほどこしたればいとゞ美しく見ゆるに白地の涼しげなる浴衣にうす紫の帶しめて、いよゝ品高く見えける。京には美しき人居けりと、しばしその女のする樣をのみ打見ゐたるに、彼の白き、細きかよわき、かひなには麥酒のビンのキルクぬきえぬなりけり、われためし見むとてビンの口にキルク拔く器具のさゝれたるまゝを乞

ひ取るに彼が握りゐたる處、はやくもすこしぬくもりゐたるまづうれし。麥酒の泡立つを各〻コツプにうけつゝ話は大和のものがたり、大阪のものがたりに人々醉ひめぐりそめぬ。吾は人の物いひ少しも耳にいらで、彼の女のせん樣をのみぞ見ゐたり。人々の笑ふ毎に少し打ちほゝゑむけしきいはん方なくうれし。

某の師と某の師とはさすがに年たけたまひたれば、早くも吾うつゝなきを見て、いと興あることに思ひたりけむ、やたらと女に命じて吾に杯をすゝむ。某がいふ樣、君とこの人とはいとよく似たり、鼻の高き工合はさながら兄弟の如し、口もよく似たり、眼は君の方まされり、眉は君のは男らしくてこなたのは女にいとよく似合ひたり。吾等は初めてこなたを見たる時君の妹かとも思ひきなどいふ、笑ひくづれてひやかされたるに、醉はいよ〳〵まさりて其場に堪へずして終に一人遠ざかりてゐひたふれぬ。

朝起きてうがひせむとて行きけるに、宵の人盥に冷やかなる水たゝへて吾を待ちゐたり、宿の人ども吾顏と見くらべつゝ何事をかさゝやきぬ。何とはわかねどあまりの恥かしさに二階へ走り上らむとして「ホンによく似て…………」といへるを耳にしぬ。

晝はひねもすそこゝめぐりありきて、夕暮には歸りて人皆とともに麥酒をのむに彼の人傍に

居けり。いつもキルクはわがぬくなりけり。

或夕、手紙したゝめむと吾は吾が室にひとりありけるに、彼の人何事すとにか入り來りぬ。吾はしたゝめ了れる手紙を封じて、彼が今吾衣たゝみたるにこれ出してよとたのみけるに、いらへしつゝいひけるは、今朝某樣の仰せられけるはかなたにゐたまふ三人の人たちは東京へ、こゝにゐたまふ、某樣とあなた樣とは再び奈良へ行きたまふとか、そはまことにやといふ。さなりとこたへけるに、奈良にはいつまでゐたまふや。歸りたまはむ日は又立ちよらせたまはむやなどいふ所へ友どちの入り來にければいで去りぬ。

旅館の別莊とはいへ同じくはたごやなり。さればはたごに召し使はるゝ女にはいと靜かなるさがなりなど思ひければ、他の女に聞けば十ばかりの時こゝの家にきてより今に至るまで、みだりなる事もなくやさしき人なれば、老たる主人夫婦の君たちにいたく可愛がられ、さながらむすめの如くになどいふ。名は何といふやといへば笑うていはざりけり。

一日つれ〴〵なるまゝに日記など記しをへて、一人の友どちと物がたりしゐけるに、美しき人は階段の欄干にもたれて葭戸のすき間よりこなたをかいま見る樣なり。立ち行きて戸あけて入りたまへと云はむとしつるに早くも下り行きけり。

六日ばかりありて吾等二人は、他の三人に別れて奈良に歸らむと思ひたちけれど、何となくこの家立わかれうかりき、かくてあるべきにあらねばいよゝ立ちいでんとしけるに友なる男、いまだ比叡の山に登らねばともに登りたまへといふ。吾はかつて月あかき夜登りける事のあれば、白川より行く道はよく知りたり、されど近道は他にあらずやと例の美しき人にたづぬれば、こゝよりは白川にゆく方近し、大原の方は景色よろしとはきけど道けはしと聞くなどいふ。

小倉の袴裾みじかに駒下駄の緒の太きを求め辨當をも命ず。折にすべくやなど例の美しきがいふ。否々折は都めきたれば竹の皮に吾等が頭ほどなるにぎり飯二ツ程あればよろし、お茶は佃煮めさずや、否とよ梅干五つ六つと古漬の厚ぎり十ばかり早々つくり玉へと吾等二人は庭に下り立ちてせきたつるに、しばらくして竹の皮包持ち來り風呂敷につゝみてくれぬ。

水、水、麥酒の空瓶に水をと友のいひければ、否水にては惡しければ湯を入れてよと吾がいふに湯は冷えて少しにほひあれば茶ぞよかめると美しきがいふ。さては不思議の事いふものかな、茶は冷えたらばうまかるまじといふに、いえ〳〵こゝの人たちの山などにゆく折は皆茶をこそ瓶につめてもつなれとて、早くかなたにかけ入りて影もなし、直ちに麥酒の黑き瓶ならで綺麗なる白きに茶を入れてもて來ぬ。今はぬくけれど山にてのみ玉はむ程には冷えてあるべしとてさし出

だす。あまりのさわぎに三人の人たちあきれゐたり、家の主人はじめ多くの者ども皆そこにゐならべり。

三人の同行の人に別をつげ宿のものにいとまつげて家の門出でぬ。美しき人は門の外まで、一人出でゝ吾等が路を曲りて見えずなるにふりかへれば會釋したかと見るまに曲り角曲り隱れぬ。

あつき山路ふみわけつゝ四明ケ嶽のいたゞきに立ちて今朝のにぎり飯くひつく、例の綺麗なる冷茶の瓶の口ひらきて口より直ちに飲むに、うまき事たとへむやうなし。その瓶大事に風呂敷に包みて、坂本に下り唐崎に宿りて次の朝、唐崎にて又、例の瓶に茶を入れさせて、大津にいで京をへて奈良に歸る。唐崎の冷茶は京の昨日のに比ぶべくもあらず。

京より携へたる冷茶の瓶は東京へもてかへりて土産ばなしの種となりぬ。あはれ七年の昔語り吾も人もふけたりな、冷茶のぬしはいかゞしてけむ。名は何といふらむぞ。

（明治三十五年八月、心の花）

鐵道馬車

御殿場驛より少し走りたる馬車が、初めて休みたる立場よりは、馬の歩み捗々しからず。曇りてむし暑ければ、車の中堪へがたし、などて馬を走らせぬならん、走りなば、少しは涼しかるべきをと一人が云へば、田舍の馬車はおほむねこんな者なりなど一人がいふ、田舍の故に非ず、上り路なれば走り得ぬなりけり、うべ歸り道には馬を車の後につなぎて、車は馬をひきつゝひた走りに目もくるめくばかり走りたるにても急なる坂なるが知られぬ。汽車の中にて飲みたる酒のいまだ盡きざるに、山北の鮎すしさへありければ、一行六人の者ども酒のみつゝ行く。馬車道の左右には、撫子、虎の尾、野菊、葛花、名も知らぬ花、いろ〳〵に咲き亂れていと美し。このあたり

大山なり、このあたり富士が根なりなど、人の敎ふれどすべて白雲にかくれて見えず、道はコークスの細かきを散らせる如く萩など小さくひねこびて咲く。籠坂峠越ゆる時馬車道は振さけ見る山の中腹なりけるに如何にして馬車はこゝを越ゆらんと疑ひしも、一歩は一歩よりおそく、休らふ事度々なりけるも、からくして峠の中程まで引きのぼる、水打かけたらん樣して玉なして落つる汗、馬の四足よりしたゝるをいたはりて傍に解き放ちたるに、其處に居ける馬丁の云ひけるはこの馬の腹の鞴(ふいご)に似たるをかしさよなどゝざれ言を云ふ面惡さよ、馬はしばし立ちたるまゝ、息つき荒く、草もえはまざりき、馬を換へて更にのぼる、されど吾等は馬のあはれに覺えければ、徒歩にて折々車を押しやりつゝ峠をのぼりけり。

籠坂を雨かも過ぎしいなを〳〵甲斐のめごまのあせの雨かも

かご坂のたむけのぼらふ甲斐駒のやさかつく息雲とたなびく

月見草

家異なりたる夜はいつもねられぬに、わけて夜のものくさければ寢心あしくて、戸のすきまほの〴〵と明るくなれるに起きいづ。家の前に山川の水流れたり、二筋に分ちてかなたには水車を

かけたるに大きなる車の水ふりこぼしつゝめぐる心地よさ、こなたの一筋は低き瀧を落したり、瀧の水に手洗ひ口すゝぎて、裏にいづれば、玉蜀黍の畑、大豆畑は朝霧こめ露したゝりてわけ行く袖もうちしめる程なるに、畑の盡くる處芝生になりて、そこに黄なる花、六つ七つ咲きたり、何ぞと近よれば、朝霧がなかに露にぬれたる月見草なりけり、

三國第一山

北の登山口なる吉田、扶桑教の遙拜處の庭は、吾等が銅碑を建てん事を托されたる處なり。正午の休みに皆々と、そこに隣れる淺間神社に詣づ、空晴れわたれる日さへ小雨そぼ降らん杉の木、檜の木のしみ立つ中に、霧藻の苔ふかくむしたる宮居、見るからに神さびて尊し。十かゝへにもあまるべき杉の木檜の木靑雲をつらぬき、六丈の大鳥居『三國第一山』の額をかゝげて白雲たなびけり、石の水盤、石の橋、古朴にをかしき燈籠、彩色せる珍しき燈籠、もの皆雪に曝され雨に洗はれて幾年かへたらんかと、おのづから尊さをますたねならぬはなし。

火　祭

なまよみの甲斐不二の根の北口の吉田の里に火祭わが見つ
八尋殿産殿もゆる火のなかに御子あれ出でし神わざぞこれ
軒ごとにたつるかゞりの燃ゆる火の火照がなかを神輿わたらさす
火須勢理のほすせるほのほ富士がねの天雲をやき甲斐の空やく
ぬば玉の夜空にほてる白雲に黒けぶりなびきさ夜ぞふけぬる
天つ神の幸火なればも雨にけず風すさぶともあらびせなくに

水ごり

いまだくらきに、ゆうべより宿れる一心教の人だち、今日は登山すとて起きいでゝ立さわげば共に起きいづ。例の瀧に顔洗はんとゆきて、其のほとりに立ちたるに、瀧の中より忽ち二人の人あらはれいでぬ。手に金剛杖をつきて御山の方に向ひ御祓ののりと言をぞ聲高に稱へける、見ればば同じ一心教の先達の人々なりけり。登山の朝は先達になるもの必ず水あみて、みそぎする例と見えたり。

さら〳〵と流るゝ川に。いさゝかもけがれなかれと。富士がねの垂水の瀧に。身をすゝぎの

りと言のり。さきかれと山行く人の。神の名たゝふ。

川口湖

船津といふ處にあり、舟をうかべて卯の嶋といふに渡る。嶋のひろさ一丁あまり、高さ五六丈もあらんか、雜木生ひしげりて頂に辨財天女を安置す。

うきじまる卯の嶋木ぐれ小萩さきしげみのかげに名知らぬ鳥なくうのしまはともしき小嶋霜ふらばもみでん嶋ぞ川口がなかに

母の白瀧

卯の嶋をはなれて川口村に渡る舟中、こゝに來て初めて雲の晴間より、日の照りたるにあひぬ。川口の何とかいふ家にいこひて、午餉の用意命じて、吾等は母の白瀧といふに行く。山を登る八丁、瀧の音そこにきこえて草木は瀧のしぶきに常に風たつ様なり、やがて岩角にいでゝ瀧に向ふに瀧は三段に流れたり、上なるにはえ行かねど身錄行者のまな娘阿萬女が行せる處とか、そこへはあやふき梯子をよぢ、鎖をたぐりて行くに、鈴打ふりつゝ行かねば這ふ蟲のわざはひに逢ふと

か、中なるに、傍に祠ありて萬栲幡乳々姫の命をまつれり、下なるにこそ岩角傳ひに行けば僅に身をかゞめて水にうたるゝ處あるなれ、すなはち人々と共にそこに下りて汗をぞ洗ひける。

垂乳根の母のしらたき白栲の木綿織りかゝる母のしら瀧

姫神をまつる白瀧あなに要しあやにかなしき瀧の名ならずや

故里に久にあひみぬたらちねのかげにやたつか母のしらたき

鮒のやきもの

瀧より歸りて午餉するに、鯉のあらひ、鮒のあらひ、鯉こくなどゝ凡て川口の湖より捕へたるものゝみなり。中に鮒をひらきたるがありけり、初めの程は誰も箸を下さゞりしが、吾先づくひけるに頭といはず骨といはず、ぱり〳〵と香ばしき音して味世の常ならずうまし。やがて人々も食ひつゝこは酒のさかなには此上もなきものなりなどゝ、見る〳〵七人の人々の皿に影もとゞめずなりき。いかでかくは骨もなき樣に食へるぞと問ひたりしに、主人鼻たか〴〵にいひけるは、東京の御客樣は誰一人ほめぬ者もなし、これ吾家の唯一の料理にこそとて燒方など細かく敎へられたり。

花野

川口をいでゝ再び舟に乘り船津にかへる。こゝより胎内に行くに、强力の翁、川口の酒の醉や發したるらん足よろめきつゝ、玉蜀黍の畑桑の畑をいでゝ野の細道つたひに、先に立ちてすたすたと行く。吾は美しくさきたる草花幾色やあるらんと目にふるゝかぎり手折りつゝ行く、連れ立ちたる人どもゝ、此やいまだ折らぬめり、こはいかになどゝ共々に手折もて行くに、强力の翁道やとりちがへけん、野にゐる里人に問ふ樣なり。やがてあまり右へそれたり、左へ行くなりけるよとて、更に左へ左へと行くに、今日の接待掛ともいふべき某の翁いとしりへにありけるが、やゝいきどほろしき面持して眞先に立ちて行くに、やがて胎內の正しき道に出でたり。吾等の二三十種にもあまるべき草花を手折持ちたるを見て翁いひけるは、神信心である く者が道の草葉一つたりとも折る事やある、この親爺は六十になれど、こゝの御山へ來て未だ一本の松の葉すら手にせる事なし、この花はみな咲耶姬樣のものなり、神詣でするものが神樣の物とる事やあるとて聲高にのゝしられたるに驚きて、二人三人手に手にもてる花ども、そと道のかたはらの草村の中になげ入れたり。こゝより再び强力を先立たしめ、某の翁はいとしりへになりて行く、やがて吾と

岡崎大人と翁と三人しばしやすらふ內に先立ちし四人のものと強力とは影も見えずなりたるに、雲低く野つらに垂れてこし方行く先更に見え分かず、雨さへ降り來ぬべき景色なれば、いそぎ行くに道二筋にわかれたり。追分の石文だになし、先に進みたる人々は何れの道をか行きけん、問ふに人なし、見れどもも雲たち塞ぎぬ、呼べどこたへなし、花野の露にこほろぎの鳴音のみ、さけべど對へなし、只山彥のかすかに雲の中に聲あるのみ。こゝら一面綺麗なる芝生になりて、一二尺芝生を拔き出でたる草の末には悉く花さきたり、桔梗の花山菊といふ花紫に、をみなへし月見草黃に、姬百合、釣鐘草、撫子の花なんど白雲のさ霧がなかに咲き亂れたる美しさ。吾はしばし道の知られぬも忘れて眺めゐたるに、二筋の中の中程にたちて翁のりと言をぞ稱へ出でける、吾も心ひそかに、神を念じける。

白雲の花野が中の夕きりに道のしらなく鹿さびおらぶ

しばらくたゝずみたるに右の道のかなたに當りて人聲する樣なり。山彥にあらぬをたしかめて右にすゝむに三四町先に、人々やすらひ居たるに初めて心落付きて追ひつきぬ。

胎內

大地を。やきつくさんの。神あらび。神のなごめて。こゝゆやらひけん。もぬけ穴。ほら穴。幾世かへぬる。

加倶土のさけぶいぶきをこゝゆかも空にはなちし火口あなかも

火の神のあらびはやみて三千年をへにけん火口玉水わくも

御内院開闢記念碑

廿六日扶桑教遙拜所に、銅碑たて終りて建碑式のみ祭行ふ。卽ち作歌

富士の根の高根の火口。雪のみぞ時じく積る。岩こそはそこにしもあれ。雲ふみて岩角をよぢ。下り開き底ひ極めて。神まつる小澤の大人の。功勳をしたゝふる銅碑は、富士の嶺のさ殘る雪と。とはに消えめやも。

登山

八月廿七日未明、皆々と共に起き出づ、今日の先達たる松浦の翁と共に岡崎大人、例の瀧壺に水垢離せさせ玉ふ。吾等は心をのみ清めつゝ、行裝漸く成りて朝五時といふに出で立つ。朝霧に

つゝまれたる吉田を、いつか再び相見んの名殘をとゞめて、扶桑教遙拜所に參拜し岡崎大人が技倆の、千載の雨露にも朽ちざる銅碑の、朝露にしとゞぬれたるをかへりみつゝ、森の中を富士嶽神社に參拜し、やがて裏に出づれば、吾等が乘るべき馬七つそこに居りぬ。こは如何にして乘るぞ。いとあやふし、落馬すべう覺ゆなど口々にのゝしりつゝ乘る。吾はいと先に、次に某、次に誰と最後に松浦の翁續きたり。そがしりへに、今日の强力に雇ひたる男と其の息子にやあらん十七八なるを三人從へたり。馬は寄り來る蠅を口もて振りかへりざまに追ふに、時にふり落さるゝ事ありと聞きつれば、吾は馬方に命じて檜の小枝を葉ながら折らせて、そをもて馬の左右の首の蠅拂ひやりつゝ、ゆくら〳〵松の林を行く心地、えも云はず鄙びてをかしく覺ゆ。一とかゝへ或は二たかゝへにも餘るべき赤松の、彼方に七本此方に三本と霧野の中に聳ゆるを見て、そゞろに畫筆とりたくなりぬ。萩の花、葛の花など、荊棘がなかに露を帶びて咲きたるを見ては馬を止めて歌うたはまく欲すれど、馬方は煩わせるまゝ、手をしりへに廻して手綱をとり道をいそげばこれも詮なし。背後に續く人たちをかへり見れば、編笠を目深にかぶり、著ゴザといふを猪首に著なして馬にまたがりつゝ、各々手槍とも見ゆる金剛杖を、鞍に結び横たへたり。誰なりけんうしろの方より、軍に出て行く樣とも見ゆなど打笑ふ聲す。やがて中の茶屋といふにいこふ。行李をい

そげばとて一椀の茶をすゝりもあへずそこをいづ。馬ののり方も知りたればこたびは云ひのゝしる人もなし。漸くして一歩は一歩よりも高く馬のあゆみもはかどらず、此のあたり晴れたる日ならむには、裾野の大傾斜、いかばかり雄々しからんなど思へど、晴れなんとして更に雲霧に日影はとざゝれて二三町先は凡て見分かず、すぎこしかた霧いと〳〵深く、さながら一と歩みづゝ霧に押され行く心地す。草花の咲き亂れたる美しさは、をとつ日に異らねど今日はわきて登山の道なれば、大神の御心をかしこみて、御心のまに〳〵咲けるうるはしの花よ尊き花よと、見てすぐるのみ。馬のつく息やゝあらく、足早になりたると思ひつゝ仰ぎ見れば家らしき物見ゆ、やがてしりへの方より馬返馬返といふ聲す、時計七時。茶屋の主人等出で迎へて、お早うございましたといふ、心うれしく覺えき。

投錢

我は今山開きをすれば一と足先へまからんとて松浦の翁先に出づ。やがて吾等も從うて鳥居の前に至る。翁、笠もゴザも傍に置きて山ひらきの祝詞聲高にとなへ居玉ふ、身には黑印朱印いくつか押したる衣の上には、頭の雪と色を爭ふ眞白き衣をまとひ同じ色の帶結ひて、白き脚絆にわ

らうがち巓の方にい向ひ合掌したまふ様、いと尊くて、此の山に居らん限り、此の聖を先達とたよる極み、吾等六人の者は禍事あらめやと心安らかに覺ゆ。祝詞終るや否や、そこの四軒の茶屋の者ども或は我等が乘り捨てたる馬子ども集ひ來て、山開きの祝に錢蒔き玉へといふ。吉田を立つ折も、そこゝにて投錢する例なれば、吾等各〻黄金白金の雨ならで、こゝにも赤金青金の雨をぞ降らせける。白きも交りけるにや今は忘れたり。

女人禁制

馬返を後に登る道の左右、矢車とかや云ふ草生ひ茂り、古木立重なれるが、なかば折れて朽ちたるさへ横はる中を過ぎ、根もあらはなる木立を蹈みつゝ一合目を經て二合目に至る。小室神社に詣づ。維新の頃までは、女のこれより上る事を得ぬ定めとかや、御山をうしはき座すも姫神にしませば、女の登山を禁ぜずともの事に思ほゆれど、こゝのみにはあらで、二荒、高野、名だゝる山々皆此の定めありしと聞く。戀ひ思ふ妹につれなくて、御山へ登るといひ捨てゝ、駿河の方に走りたる男もありけらしなどくさ〴〵の事らひそかに思ひつゞく。そこの少し西にある濶さ數十丈の滑かなる石はそれ等嘆きの涙の凝れる物なるべし。うべ今猶涙なす玉水のしたゝりよ。そ

の石を御釜とぞいふ。

妹にわかれみかま平岩越えていなば吾を戀ふらむ後は歸るとも

天地にあらんかぎりは二並になみ居行かむを妹支へのいは

大神のみいづかしこみ戀し妹とこゝゆ別れて山行きけらしも

泣く涙こりけむ岩か追ひ來る妹をささへて垂水すらしも

（明治三十五年十一月、心の花）

ふいご祭

吾が鑄金科出身の同窓者が鞴祭と稱し、年一度づゝ親睦を兼ねて宴會をして來たのは、蓋し古い事である。初めは不忍の池の中だの、湯島などの料理屋でやつて來たが、去年からは最もチープでやる規定とした爲、そんな洒落た所へは行かない。

今年も鞴祭の當日、卽ち霜月の八日になつた、在校生徒をまで誘ひ出す事はどうであらうと云ふので、卒業生の鑄金同窓會々員のみで近郊散策といふ事にきめた。

機械學の講義がすんで後、最早正午を過ぎた頃であつた、學校の裏門からぞろ〳〵出掛けて天王寺の墓地へ這入り込む者八人。五重の塔の下を眞直に突き當つた墓の小道を行く。暖かな秋の日が半ば落葉しかけた榎の間からさし込んで、椎の大木の根元には落葉を集めてもやしてゐる。煙が木の間からすうと風もない空へ立ち登つてゐる。誰が落葉をたくのやら人も居らぬ。とある

墓に山茶花が咲きこぼれて四十雀がちらと飛んだ。

谷中の延命院の横へ出て、諏訪神社へ行く道を、どこやらの小學校の教員さん見た樣だと、後から來た誰やらがいふ。教員さんに見立てられたくやしまぎれでもないが、互に見立くらをしながら田端へ下る。銀行の重役らしい人、醫者とも見える人、印度人の曲馬師の通辯、其から法科大學生、工手學校卒業生で技手になりましたといふ人、月の收入やつと七十圓位の商人、田舍の金持らしい親爺、兄弟組の競賣商人と、なる程岡目で見ると一種異樣な行列である。何處へ何をしに行くのであらうと、立ちどまつて見送る人もある樣子ぢや。

田端から赤羽迄汽車にのつて、赤羽で下りる。突き當つて左へ曲つて突き當つた處に交番がある。明治二十七年の夏、吾等川口見物の途中、朝鮮人と間違へられて、こゝの交番で調べられた話などしながら歩く內、岩淵の大觀音の前へ來た。岩淵の鬼觀音、岩觀音、上野の大佛と好一對だの、何のとさま〴〵の惡口をいひながら其の境內に入る。近頃出來たと見ゆる奇妙な寶塔が、やはり銅製で建てゝある。化觀音よりは此の方がいくらかいゝ、一種のものだ、などゝ口から出まかせの駄評を、行きがけの駄賃と試みる。やがて渡船場へ來た。殘念ながら渡船は今岸を離れて七八間こぎ出した所であつた。仕方なしに立往生をしてゐると傍につないである舟からは、澤

麁皮の樽や、酒樽などを、運び出して馬車に積んだり荷車に乘せたりして、どこかへ運ぶらしいので頗る混雜してゐる。忽ちの中に此處へ集つてる人が來る。種々雜多な人が來る。やがて船も來て、どや〳〵と吾先に乘る。雜多な人を乘せた船はやがて動き初めた。上流に筏が二つ筏士が一人、その右手の向ひの岸に家が六七軒、川口の善光寺の御堂が木立の間に見える。惡人は暗のなかを通る時鈴にさはる事が出來ない、そして鈴にさはる事の出來ない人は極樂へ行く事が出來ぬのだ、と小學校の先生然たる山本君が、頻りに技手の鈴木君に教へてゐる。左樣此の前來た時は這入れたが……今度は惡い事をいろ〳〵やつてゐるから這入つて鈴へつかまる事が出來なからうよ……面白い事には鈴へつかまる事の出來ない惡人は穴を出る時に牛になつて出るとさ……どうだ諸君お互に牛になる連中ばかりの樣ぢやが、牛になつたら金になるだらうか……八疋の牛が揃つたら大いにまうかるぜと、船中の人大笑ひ、船の覆沒せぬのが拾ひ物位であつた。

川口の鑄物工場で使ふ蒸氣の送風機の音が、川の水にひゞいてゐるのか、漸々近づいて、やがて船は岸へついた。

川口の町へ這入る、技手先生の案內で、とある橫町を這入つて左へ曲つた右側で、今地金を下

してゐる家がある。そこで工場を一通り見せてもらふ。キュポラの傍の神棚に神酒をそなへて燈火をあげてある。二十七年に來た時は蒸氣を用ゐてゐる家などは一軒もなかつたが、文明の風はこゝへも及んだと見えて、此の家などは蒸氣を用ゐてゐるのみか、木ではあるがトラベリング、クレインを備へてゐる。そして今日鑄る物は金庫の扉である、千貫程下すさうだがまだ僅かしか下りぬ樣ぢやて、そこを出る。先の横路でも吹をやつてゐる音がするので、其の横路へ廻らうとすると採瓶へ溶鐵を汲んで持つて出る親爺に逢うた、道を避けようとすると何の型か知らぬが、凡そ六七十程今つぎ込んだらしい、型が道の傍らに積んである、鐵瓶らしい型のなりだ、型の積んである片一方の、一間ばかりの間口のある工場をのぞいて見る、とすぐ入口にキュポラがあつて、こゝも蒸氣でやつてゐる、中は甚だ廣い、こゝが裏口と見える、今溶鐵を持つていつた親爺が、空な採瓶をさげて又やつて來た、ぢき近處から溶鐵を買ひに來ると見える。十五六の小僧がキュポラから溶鐵をぬいて、採瓶へとつて奥の方へ持つて行つた。又違つた小僧が溶鐵をとる、何をふいてゐるか、こゝからは奥の方が一向見えない、やがて奥の方から主人らしいのが出て來た、太つた首へ一寸ハンケチを卷いて羽織を著て長裾で、工場の中央で小僧を指揮して居る、そして片眼はつぶれてゐた、或る大吹の時の記念であらうと思ふと、盛んな吹の時が思ひやられる。

權現樣の御宮へ參詣をした、今日の鞴祭に川口の金山樣へ參詣に來た譯なのだ、そこを出て行く途中、鞴を踏んでゐる家もあつたが、何せい晝めしもすまさぬ連中があるので大通りへ出たが思はしい家がないので、今一二軒見て來るひまに、どこぞチープでやれる家をと、技手先生に任せて吾等は渡船場の方の道へ行かうとする左の土手へ出る、左側に大きな工場があるので見せてもらふ。

曲つた鐵罐の型を今型へ收める所であつた、共の奥の方では凡そ徑三間もあるらしい硫酸鍋の中子を今引ぬいて繕うてゐる所であつた。キユポラ（鎔解爐）へ火が入れてあるので、何を吹くのかと職工に尋ねたら、曲つた鐵罐を吹くとの事であつた、この工場には鐵製のトラベリング、クレインが備へつけて有る、十五噸までは釣れるとの事であつた、そこを辭して外へ出ようとすると、主人らしいのが外まで出て來て、向ふの田圃の中では大きなものばかり吹いて居ますからと親切に教へてくれたので、やがて堤を下へ降り行く、縱覽謝絕の札が門に懸つてゐるので、名刺を出して縱覽を乞うた所が直ちにゆるされた。これはまた盛んな工場である。コイツア盛んなキユポラだなあ、といふ者があればヤアこゝにもトラベリングがあるわいと、やたらに機械學の術語かなんかを振まいて見物してゐる。

徑一尺、長さ一丈二三尺もあるらしい鐵柱の型を四本、クレインで斜に立てかけてある。こちらでは今盛に鐵を溶してゐる。奥の方の鐵柵の型を見たり、仕上室のタライバンを見物したりしてゐる内に、溶鑛爐から、溶鐵を凡そ四五十貫拔きとつて、四五人でかついで行く、何を吹くのかしらと行先を見てゐると、やがて入口の東側の隅へ行つた、二尺角位の枠を七八ツ重ねた型の處へ行つて注ぎかけた、中央に出てゐる息拔のパイプを鐵の棒で一人が押へて注いでゐると思ふ内に、シユウーポンポンとすさまじい音がして溶鐵を噴き出す、枠が燃える、火花がちる、棒を棒を……早く……なんどと、パイプを押へてゐる男がさわぐ、忽ち四五人が棒でパイプを押へる、やつと靜かになつた、何の型か分らない、ゆを注いで餘りをあけて四五人が烟草をくゆらしてゐる。實に馴れた物だと吾等は一同感心した。

今度はこちらの鐵瓶を吹くらしい、約二百貫も入るべき採瓶を、クレインで釣下げてあるのへ四五十貫の小さな採瓶で、キユポラから溶鐵を拔き始めた、そして大きいのへあける、又拔く、火花が星の樣にキユポラの前へ散亂する、またあける、また拔く。都合四遍ばかりで大採瓶を滿たせた。やがてそれを卷きあげて、丁度湯口の處へ持つて行く、採瓶へ二つのハンドルを付けて二人で注ぐ、又一人湯口の前へたつてゆ箸を採つてゐる、型の鐵枠穴から盛に空氣がぬけて、中

子から青い火が燃え出て、注ぎ了る、好結果らしい。次の型へうつる、直ちに注ぐ、溶鐵が足りない、入れぼしだ。

足りねえ〳〵、オーイ〳〵皆來い〳〵……押しゆだ押しゆだアー早く〳〵、頻りにどなつてゐる、ばら〳〵と二三人走り寄つて湯を抜く、一二貫目づゝ二度程小さな採瓶へ採つて、足場の上へ渡して濟んだ、こんな時には、こんな馴れた職工等でもまごつくと見えるわい。ア、面白かつた、愉快だつた、とそろ〳〵こゝを出る。今日は鞴祭の當日だのに働いてゐる、こゝでは十一月の八日に祭をするのださうだ。

日は大川の向岸に傾いて、風がそゞろ寒い。やがて、とある家へ寄つて、鞴祭の神酒をいたゞく事となつた。九日の月を踏んで川口の町を出はづれると、夜霧がうすく川面を覆うて向う岸に灯が一つ、水音が靜かに聞えて岸につないだ舟が二艘。

八人をのせた船がゆら〳〵、岩淵の渡へつくと、送風機の音が、かすかになつて川口の方に見えるのは、溶鑛爐のほのほが空をやくばかり。十一月八日夜。（明治三十五年十二月、校友會月報）

ねずみ（戯擬手鞠歌）

ソコ本所よ綿屋の娘が、鼠に小指をカアまれた、そのねずみが次の夜も來て、若イ衆のみイみをくウはへた。くはへた藥に何がよい、かまれた痛みがたへられぬ、堪へられぬ、いたや〱いたや〱いたや。

ちよいと廻つて横町のお醫者に藥はないかと聞いたらば、其のお醫者が腕をかうして、首をかうして、ハテナ、サテナ、サテ〱サテナ、猫にヤまたゝび泣く子にヤ乳よ、ねずみにかまれた何よかろ、何よかろ、猫の齒鹽にまたゝびまアぜて、粘飯（ソクヒ）で押してつけやんせ〱、まづ〱一貫お貰ひ申すぞ。

（明治三十六年四月、心の花）

柿本朝臣人麻呂大人の御像を造るゆゑよし

それ歌と云ふものはしも、神の御代より傳はりてありけるを、橿原の宮に天が下しろしめし初めたまふ御時より後つぎ〳〵に代々の御門に傳はりて、殊に高市崗本の宮の御頃ほひよりは、さ蕨の萌え出る春を、山川の氷打解けて、せゝらぎしつゝ流れ行く水の如くになもありける。

藤原の宮の御時に至りては、さながら大河に落ち淀める水の、大海の原に注ぎ出でゝ、底ひ知られぬさ綠を湛へ、靜かに和ぎたる時は、眞楫しゞ貫く大船を浮べ、木葉なす眞帆船をたゞよはせ一と度風雨の荒びに遇へば、白木綿花は大空の黒雲と入り亂れ、八千尋の青絹は島根に覆ひかかり、岩穗にあたりては百千々の白玉を降らし、荒磯邊に打ちよせては白金を鑄流す事の如く、其樣種々に、えも云はず奇しく妙なる姿となりにけり。かゝるが中に最も秀でゝ優れたる歌の聖としも稱ふるは、柿本朝臣人麻呂大人になもありける。

いにしへより今に至るまで、歌の聖と稱へ、歌の大神といつきまつりて、其の御名は廣く知られ、はた遠く長く傳はりてありければ、畫にも彫りものにもうつされてありけり、然はあれども多くは上つ世の樣を傳へぬのみか、いかしき歌の聖としもおもほえず。何がしが夢に入りて畫筆に乘りたる御像は、廣く世の人に知れ渡りてはあれど、いと御齡たけて、衣冠の樣さへかの世のものには非ず。頓阿の法師が刻みたる百躰の像、これはたとるにしも足らず。

茲に鑄物のたくみ木村芳雨ぬしは、根岸なる故の竹の里人大人に御教へを受けたる吾等がなかにありけるが、いさゝか思ふよしありとて、遂に柿本の大人の御像をなも青銅に造らむ事を思ひたゝしける。かれこゝに縣居の翁が考へられたるに基つきて、土のかたちを初めに作りにける。かくて根岸なる大人のがり訪ひ、佐々木信綱の大人をたづね、或は根岸の友垣なる、左千夫ぬし麓ぬし義良ぬし、又大橋菊房ぬしなどに計り、更に作り改めては考へをねり、思ひを重ねて、數多の月日を過ぎぬるがうちに、塑造に名を得たる渡邊の長男ぬしが助くるまに〳〵、ひと年近き月日を過て、白玉なす土の御像やう〳〵造り終りぬ。更に量りて百年千年に至る迄、火にも燒けず雨にも朽ち行く事なき、青銅に鑄たて奉りて、石見の國なる大人の御社に一と躰を納めまつり、吾が根岸の友垣にも分たむ事のついでに、廣く世の人にもと思へば、其のよし誌してよとせ

ちに乞はるれば、則ち此の御像鑄てよと、共にあとらへられたる鑄物の大きたくみ香取の秀眞、武藏の國日暮の里にてしか云ふ。時に明治と云ふ御代の名の、三十とせあまりむとせの、三月十まり八日といふ、柿本大人の御祭の日なり。

（明治三十六年四月、心の花）

吹屋

矢田の田越しの岡の某がやしき、梅さく頃は殘る雪かとうたがはれ、桃咲けば緋の衣干すらん樣なるに、蛙ころ〳〵と啼きそめて、やがては、植並べたる櫻の、日毎に赤らみゆくよと見るまに、いつしかところ〴〵笑ひそめたるこそ、こよなくあかず眺められけれ。日ごと吹屋より仕事しつゝ見てあれば、昨日はをとつ日よりも、今日は昨日よりも眞白くなりゆきて、忽ちのうちに、一村の白雪はその岡邊にたゞよふめり。その白雲のなかに栖みたる人よ、いかにをかしからむ、いかに樂しからむと思へば、いとうらやましくてなむ。

動坂より千駄木の岡を過ぎ、日毎うらやみし某の邸の下に出でゝ、吾が吹屋の方を見れば、あは

れいみじう美しきもの哉。諏訪の社の神さびたる常磐木の丘を盾に、名に負ふ花見寺を埋めたる花のあまりは、吾家のあたりに及び、桃花、辛夷花、飛びとびに木立をぬひて咲きたるあたり、松林のかたへに、吾が吹屋いと小さく、菜の花にうづもれて見ゆ、よそ目には蝶の宿とも見ゆめり。人の家居うらやみし吾は、吾が吹屋のさながらに畫のうちにあるらん様を見て、うれしきことかぎりなし。

つぐみなく朝菜の花の花かげに蝶と起き出でゝいものす吾は

時じくに虹かもたつと思ふなむ紗羅紗張りほす矢田の川ぎし

鑄型燒竈(ヤカマド)のけぶりたなびきたそがるゝ矢田の春田に蛙しき啼く

墓

月朧なる夜は更けて、ひとり七面坂を下る。道のほとりの垣根ごしに、長明寺の墓原廣く見ゆ。空をおほひて咲きほこれる櫻は、今を盛りと散りつゝあるに、塔婆といはず墓標と云はず、雪の降りたるさまして、そのあたりたゞ白妙に見ゆ。あはれ苔の下にとこしへに眠れる人の夢や、いかに安けからむ、いかに美しからむ、などくさ〳〵の事思ひて佇み居たるに、谷田のあたり啼き

しきる蛙の聲を吹き誘ふ夜風、さつと吹き來りて、墓原のさくら吹雪と散るとき、月は霞のひまをもれて、吾が影花の梢にまじはりて、地上に淡くうつれり。

（明治三十六年五月、校友會月報）

瓦師

下總の國某の村に瓦師の男ありけり。夫婦の間に、六つなる女の子と、四つなる男の子と、二つになるがありけり。自らは日毎某の家に、雇はれて、瓦つくりに通ひゐたり。その頃同じ瓦師にて若き一人の男が乞ふまゝに、廣くもあらぬ家なれど、下宿をばせさせけり。程經てその若き男と妻なる者と、けしかる事して共に何方へか走りいにけり、瓦師なる男いたく怒りて、吾が目にふれなば、生かして置かじと息卷きける。されど少さき子が乳にうゑて泣けば、中なるが母よとさけび、六つなる子も共に聲たてゝなくに、云ひ聞かすればとて、いはけなき子等の聞き分くべくもなし。はては腸をもむしらるゝ如く覺えて、せめては子の事ども思ひ出して、妻の歸りも來

やと、人も云ひ自らも思ふものから、怒をしのびて一ト日二夕日すぎゆけど、影も見せねば音づれもなし。蓄へとてなき瓦師の身の、一ト日休むさへ明日の糧に追はるゝに、子等を近きあたりの人々にたのみて、自らは瓦造りの家に通ひけり。されど家なる子等の事を思ひ、憎き妻の事ども思ひ出でゝは、仕事も捗々しからず。日くれて家に歸れば、待ち設けたる子等は、前に立ち後に來、手をとり袂をとらへて泣くもありよろこぶもありて、仕事にな行きそ、父上と共にあらまほしなど、かたみに云ふに、胸打ふさがりて、熱き涙のみほろ〳〵とおとすめり。妻のありける程は、かくばかり吾には親まざりけるを、母に捨てらるゝ子等の、思へば〳〵あはれなりなど思ふに、泣く音をさへ出でず、かくて二日三日の程は、近きあたりへ子等を頼みて出でゝも行けど十日二十日とは續くべくもあらず、されば二つなるを長女に負はせて、三人の子をつれて通ひゐけり。二つなる子は、貰ひ乳なればにや、はた乳の異なればにや、日毎衰へ行くに、牛乳などいふもの藥にもなければ、すり粉といふもの飲ませつゝ、やう〳〵に蟲の氣もなくて時すぎつゝ、遂に盆にもなりぬ。衣の新しきを著せむよすがもなくて、たゞ汚れによごれ行くのみ。かくて三月たち四月たてども、妻なる者更に歸り來らず。尾花穗に出で秋風の寒く吹く頃、六つなる女の子の、風の心地と打ふしけるに、三日ともいはず病みて遂にはかなくなれりけるに、父の悲しみ

いふばかりなく、悲嘆にくれて、遂には仕事にもえ行かずなりぬ。妻遂に歸り來らず、或日一人の子を負ひ、一人の子の手を引きて、ここらの人に暇をつげて、一と先づ東京なる知るべを尋ぬるよし云ひて出で去りたり。

その後のこと知るに由なけれど、東京に出づる折、二人の子を抱きて江戸川に入りたるに、四つなる子と自らは人に助けられて、少さきが死にけるよし、語る人ありき。又ある人のいへるは小梅のある家に瓦造りゐける男は、たしかにそれなりといへるも聞きぬ。

瓦やく松の枯葉のもゆるなすほのになりつゝ消えし妻かも
瓦やく烟ともがな風のむたかゆきかくゆき妻もとめむに
しこ妻をなどかさは思ふみたり子のいとしきもへば妻をしかもふ
瓦やく烟のかすむ春の野に妻をこひつゝ雉子ほろゝなく
永き日を埴生の小屋に父まつと遊ぶ三人子母なしにして
泣く子守る子等は歸りて瓦やく埴生の庭に椿花落つ
乳を乞ひて歸る守り女のかざし花ねむの花ちる門川の道
なき魂のくるとふ夜を生きながら去りにし人は音づれもなし

秋風のかなしく吹くに子をやりて男の子なりとも泣かであり得んや
人の世に戀なかりせば瓦師のかはる心を妻もたましを

あか井

近きほとりの某の寺に、檀家より來りて召し使はるゝ少女ありけり。同じ寺に某とか云ふ男ゐたり。如何なる緣やありけん、その女、その男のたねをぞ宿しける。月日ふるまゝに人眼をも憚るべく腹の太り來れば、その女自らの家にぞ歸りける。女の母は繼母にて、生みの子も一人二人ある樣なれば、その繼母この女をあしざまに罵ること、世の常の如くありけり。月日も過ぎて、去年のくれになむ子を生みける。その子日ならず死にけり。女やう〳〵產屋を出づる樣になりて、再び寺なる云ひかはしたる男をたづねて、思ふ事など語り出でければ、空うそぶきてあるに、女悲しきことに思ひければど、猶こりずまに再びたづね、三度たづねぬ。男は金をくれてそれにて緣を切らんとは言へど、其の金も今なければ、など云ふに女心やさしき者にてありければど、かく云ひけり。金もらひたりとて、それにて二人のなか絕ゆると思ひ玉ふか、さるもの欲しくて來りはせぬものを、せめて子などすこやかにあらば、長き浮世をそれのみ樂みに暮さめど、今は如何せ

ん、かゝる事になりては、二度他へ嫁入もならぬ身の便りなさをあはれと思して、せめてはした女になりと、などなく〳〵かきくどけど、男さらにいらへなし。螢澤の萩寺の鐘入相を告げて、悲しさいよ〳〵身にしむに、日暮れぬ先に早く歸り玉へと、追ひやらるゝ樣に男にいはるゝに、さめ〳〵とうち伏して泣きゐたる顏上げて、さらばこの世に添ひ玉はらずば、あの世にてなど云ひ捨てゝ、女そこを出でぬ。

墓詣に來りし人の、閼伽井くまんとしつるに、井の中に人のなきがらあるに驚きて、寺の人など呼び來りて、揚げけるに、こは如何に、先の日歸りけることゝ思ひたる女なりけり。

あはれなる女のねむりたる墓は、少しばかりの土盛りたる上に、小さき石を据ゑて、其の上に茶梡をのせて、竹の花立には樒をさしたるまゝ、墓標もなければ、一ひらの卒塔婆だにもなし。しかもこの墓ある寺、この寺には墓の少女とえにし深き男も、今猶あるものを、あたにくし。

とはに眠る少女やすかれたらちねのみ墓とならぶおくつきどころ

情なき人は來ずとも墓のへの梅おのづから花をふらせり

御佛にくみてさゝげむあかの井の淸き少女が心あはれなり

男の情つめたき現し世に女としふたゝび生れずあれこそ

紺屋

本所に住みけるころ、隣りゐける染物師の男ありけり。夫婦と、三つばかりの女の子と、六十にもやなりなんと見ゆる父と四人ぐらしなりけり。その男晴れたる日などは、朝はとくより夕べは暮れて迄、干場に居て仕事をぞしける、干場とは云へ、北は竹垣結ひ連なり、九尺許りの長屋路をへだて、南は垣根と並びて長屋たち連なるに、その垣にそひたる棕櫚の木のほとりに、東西に長き細き丸太を建てたり。この丸太より丸太の間こそ、その男が一家四人の口を糊する染物の干場なりけれ。十日に一日ばかりの雨ならばこそ、骨休めともなるめれど、空は人の願ふまゝたらず、五月雨の打つゞきて降りたるに、夏より秋にかけて雨の多きぞ、いかばかりつらかりけむ。折々は「天氣仕事はまことに便りなきものにこそ」とて、かこちてありけり。妻なる人、このころ外に出でたる影を見ずと思ひけるに、時すぎて重き病に打ふすよし、其の男かたりき。この年の冬吾は遠く日暮里に家を移して、あくる年の春、そこらに行きける折訪ひけるに男泣く〳〵いへるは、妻にはこれといふ藥も飲ませず死なしたり、幸ひ女の子は四つなれど、とかくすぐれず、父なる人には「三十になりて一人の親もろく〳〵養へず、臍帯(?)娶なきものめ」と常に聲高にのゝ

しられをりと語りいづるに、何と慰めむ詞もいでざりき。次の年龜井戸へ行く事ありて、法恩寺橋の通を石原の方より行きけるに、さる染物屋の店先に、例の隣りすみける男仕事してゐたり。吾より言葉かけたるに、驚き顏に出で來つゝ、久々にて遇ひぬる事など、かたみに言ひかはして、男云ひけるは、「妻の死してより三月とたゝぬに、子にも先き立たれ、彼の家は棚たてにさへ遇ひて、今はかく人の家につかはるゝ身にこそ」といふ。そのきたるを見れば、仕事著とはいへ、肩のあたりたるさへあるに、きたなげに汚れて、股引といふもの、つぎはぎせぬ處なき迄のをはきたり。如何に世の雨風は、この男をやくるしむるらん、人に雇はれても、猶思ふまゝのしろは身につかぬにやと、そゞろにあはれになりて、もらひなきさへせられけり。その父なる人のことは聞きもらしつれど、今猶「腑甲斐なきものめ」とのゝしるにやあらん、あはれ〳〵。

櫻櫚の木の花のこぼるゝろぢのへに一とはりさぼす黒絽ちりめん

雨ながら夏ぞくれゆく藍にしむ妻子の袖はほすよしなしに

亡き妻のわすれ女の子の忘れ雛桃咲きたれど節句する子はなし

雄の兒やも男の子やもめの著たるきぬ肩のほころび誰ぬふらんか

（明治三十六年五月、心の花）

吉高ゆき

田端の停車場へ出て汽車にのつた方が便利ではあれど、上野へ出て買物をせねばならず、午後の成田直行の列車の時間には大丈夫時間もあればと思つて、日暮里の家を出て、ぽつ〳〵と谷中茶屋町へ出ると、大粒の雨がぽつり〳〵降つて來た。タイした事もなからうと思うて一町ほど歩いてゐる間に、雨粒の數が次第にふえて、天王寺の墓の入口へ出た時は、急にどしや降りに降り出した。幸ひの事蝙蝠傘は持つてゐたが、駒下駄ではどうする事も出來ず、雨やどりする軒も見當らない、丁度車宿のあるを幸ひ車にのる事に極めたが、見る〳〵往來が川の樣になつてしまうて、非常な勢で降つてゐるので、暫時立往生をして小降りになるのを待つてゐた。

やがて幌をま深にして乘つて出た、圖書館の横から美術學校の前へ曲つて眞直に動物園の前へ出た、急に幌の内までぽうつと明るくなつたので、脊のびして見ると、花の散つてしまうた櫻の

梢に若々しい草の汁の樣な色をした葉が茂りかけてゐたのであつた。

東照宮の鳥居の前あたりへ來ると、廣小路へ出る大通りが大曲りになつてゐる爲、廣小路の家が見えないで、只兩側の楓のやはらかな葉と櫻の葉が、ざあ〳〵降る雨にあらはれて、霧がうすうすたつてゐる工合は何ともいへなくうつくしい。

廣小路で買物をすまして停車場へ這入つて、やがて松崎迄の切符を買うて汽車に乘つた。汽車の屋根をうつ雨の音が又一しきりつよくなつた。片隅へ一人陣取つてゐた所へ五十恰好の男が一人向ひ合ひに腰をかけた。手をのばしたらば折取れさうに左側に茂りかけた木立の葉が、汽車のはしる風で露をふりちらしながらそよいでゐるのを見てゐるまに田端へついた。やがて田圃中を行く汽車の窓から見ると、靑麥の處々に菜の花が咲いてゐて、其の上の方三四尺の處まで黃色な雨が降つてゐる樣に見えてる。そらまめの花の盛りな畑やら、竹をたてた豌豆の花やらも物珍しく見られた。

遠い方から段々と日が暮れかけて、柏といふ邊へ來た時には全く暮れてしまうて、只汽車のはしる音と、風につれてばら〳〵と窓硝子をうつ雨の音のみがするばかりである。

松崎から舟を雇うて印旛沼を横切るつもりであるが、この雨ではとても船頭が出やすまい、そ

れも晝の間ならまだしもであるが、眞くらやみと來てゐるので、只々先の事が氣になりかけた。我孫子で常磐線行は下りの筈だが、余が前にゐる男は下りない。其外此の箱の中には、男のうしろに一人と、つまり三人きりで頗る淋しい。前の男は向うから初めて物を云ひだして、成田へ行くのですかと云うた。松崎まで行つてそれから舟をたのんで吉高へ行くのだと答へると、それはとても此大雨では沼は渡れまいし、それに夜では船頭をたのむと云つても誰も行きてはあるまい、とに角大ていの事ぢやないなど〻云ふのがとぎれ〳〵て聞える。その男の後ろ側にゐる三十ばかりの男がこちらを向いて相槌をうつた、わしは松崎の手前の安食まで歸るのですが、今夜は吉高へはとても行かれますめえといふのであつた。これは飛んだ事になつたわいと余が心配は一方ならずであつた。眞くらい外を見ると折々稻光もしてゐる、汽車のひゞきでわからないが、雨のふり工合で見ると雷が鳴つてゐるらしい。いよ〳〵困つた。

前の男が余を土地不案内の者と思うてしきりに心配してくれる。それは成田へ行つて一泊して明朝酒々井から吉高へ渡るか、さもなくば松崎にはろくた宿屋がないから、手前の安食で下りて一泊して、朝の舟で行くとも車でゆくともしたらよからうといふのであつた。余もそれがよからうとは思つてゐるが、今夜の宿泊料がちと覺束ない、どうしたものかしら。

汽車は用捨なく木下をすぎて大杜もすぎて此の次は安食である、足のうらがむづかゆい樣で氣が氣でない、懷中を靜かに前側の男にわからぬ樣に調べだした、あまり高いはたごで無かつたならばとやつと調べはすんだが、まさかどの位でとめるだらうと聞く勇氣がない。仕方なしに安食では何といふ家がよからうと聞くと、竹村が一番上等で、あとは御とまりになる樣な家は無からうといふ事であつた。上等はこまつたが………と思うてゐると汽車がとまる、安食といふ瓦斯燈がついたさびしい停車場である。こゝで男に禮をいうて下りた、安食の男も共に下りた。

雨はどえらい勢で停車場のひさしの亞鉛張を打つてゐる。松崎までの切符を驛夫に渡すと同時に女が二人來合せた、此人等はどこへ行くのかしら、土地の者かしらんなどゝ思ひながら、裾を端折つてぐづ〳〵してゐると、共に汽車を下りた男はさつ〳〵と眞暗闇へあるいて行く。瓦斯燈をさげた男が一人出て來た、知り合と見えて、今けえつたのか、………ひでえ降りだなアなどと話しながら、これもグチヤリ〳〵ぬかるみを行くので、その瓦斯燈をたよつて、あとからあるいたが駒下駄では如何にも仕方がないが、ぬがうと思つて立止まると、瓦斯燈が先へ行つてしまふ、據なしでグチヤ〳〵あとから行きながら、竹村といふ宿屋はどこかと聞くと、汽車の來たあとの方の遙か先に、只一つ星の樣に燈の見えるあたりだと云ふ事である。

今度は瓦斯燈をさげた男が先になつてレールの敷いてある處へ這入つて、コッチが道がいゝといふて教へてくれるから無言であとから行く、しばらく行くと二人とも右へさつ〳〵と踏切らして處を出て行く。お前さんはそこを眞直に行くがいゝ、ハアぢきそこに宿屋がありますからといふて別れようとしたから、あまり心細いので一寸呼びとめて、燈を見せてくれ、路が分らんからと云ふと、一寸瓦斯燈をもちあげてすぐ下して、そこ眞直ですよといふてすた〳〵行つてしまうた。

星の樣な燈はまだ〳〵遠いし斜にふりつける雨を蝙蝠傘を横にしてよけながら足袋をぬいで、駒下駄をぬいで更に裾をまくりあげて、爪さきでさぐりながらあるき初める。右は汽車路である、左は急に低くなつてゐる樣な氣持がして、水がざあ〳〵流れる樣子である、川かしら、落ちては大へんだ、などゝ考へながら、そろり〳〵あるいてゐると、五六歩後の方で人のけはひがする。ぢつとして立つてゐると行きすぎたのは女らしい、急に又一人あとから余につき當る。誰だねと云ふ聲、これも女だ。先に停車場で下りた二人連の女である事がすぐ胸に浮ぶ、突當つた人にコッチから謝つて其のあとへつかまらぬばかりにして行く。よく見ると傘も持たずに赤子を背負うてあたまから風呂敷めいたものをかぶつてゐる、そこで余は自らの傘へ入れてやつて傍へぴつたり

よつて歩いた、晝間ならば餘程をかしなざまであつたらうが、道が分らないので時に取つての名案であつた。稻妻がした、ナンダ馬鹿々々しい、路はしかも縣道で堤にはなつてゐるが、大通りである、その眞中をあるいてゐるのであつた。コヽに至つて少し安心した、どこまで行つたかと女に聞くと、大杜まで灸をすゑに行つたとの事であつた。向うから提灯がやつて來る、近寄つて先に立つた女と何か物を云うてゐる、此の女等を迎ひに來たものらしい。五六軒行つて左側の御料理と腰障子にしるした家があつた、どうも有難うと云うて、すた〳〵女づれはそこへ這入る、宿屋はどこかといふと、隣も宿屋であるというて中へ這入つてしまうた。隣といふのを見ると成程、これも似寄つた障子で、御宿泊としるしてある、硝子の間からのぞいて見ると、如何にもきたならしい様で、木賃宿らしく見える、一層の事こゝへとまらうか………何だか這入る氣がしない。

停車場から見えた星の様な燈はもう見えない。竹村といふのはどこかしらん、大分家も續いてゐるらしいからのそ〳〵行く、今は目も暗になれて路もうす〳〵見える様になつた所へ、稻妻が折々光るので行く手があり〳〵分つて來た。一二町歩いたと思ふと、先へ行く提灯があるから大いそぎに追ひ付いて、宿屋の名をいうて聞くと、ハイどうぞこちらへ、御一緒に參りますという

て一寸腰を折つて挨拶した、コレが宿屋の者であつたのである。いよ〳〵安心した、急に羽織の裾や著物が雨にぬれて重いのに氣がついた。

二階へ案内されて風呂へ入つて一酌催して蛙の聲をきゝながら長々とねた、夢は先の心細さがどこへやら。

目が覺めると一層蛙の聲がはげしく聞える、やがて女が戸をあけにくる、朝になつたのだ。空が追々雲ぎれがして青空も見えて來る、表通りは立派な町である、それも其はず、汽車の出來ぬ時分は成田から東京への本通りとの事である。

車に乘つて柳の葉が緑になりかけて、げん〳〵の花が青草の中に咲いてゐる利根のへりをすぎて、菜畑麥畑に雲雀の上るのを見ながら印旛沼のつゝみから、春風に吹き送られて蛙の聲に迎へられて吉高へ這入つたのが午前の十時。（四月二十六日）

（明治三十六年六月、馬醉木）

火箱に寄りかゝつて、ぼんやりしながら、其からそれへと考へれば考へる程、ますく\いやな氣持になつて來るばかり。最早や午後の四時も過ぎた、今に晩飯だ、がしかし今晩は酒もなかつた筈だ。何として此の不愉快を直さう、まだ暮れるには間もある、表へでも出て見樣かしら。此間中の雪で、すつかりこはしてしまふた道を昨日から土方が五六人で直してゐたのが、最早僕の内の前は直つて、佐竹の邸の方へ進んでやつてゐる、そつちの方へ行く氣になつて行くと、やがて一町程先に、例の何とかいふ土をならす石の丸柱を四五人で、ヨイショツく\と引張つて、ころがして行く、少し泥交りの土が石へくつ付いたなりごろぐ\ところがる工合が、餘り氣持のいゝ物ぢやあない、やがて後から一人の男がジョレンとかいふものを當てがつて、其の石の泥を落しながら行く。丁度佐竹邸の門前で止まつた。ヨイショツく\と引張る聲を聞付けて、近處の

五ツ六ツ位の女の子が三人かけ出して來て道のわきへ立つて見てゐる。今度は、柄をガタンと逆返りさせて、又もや二人中へ這入つてカヂ棒をにぎつて、二人は先へ立つて綱を肩へかけて、今來た方へ引き歸す、後から一人ジョレンを當てゝゐる。

「アラ〳〵ごらんよ……をかちな眞似……三人の中な女の子が、懐手しながらさわいだ。

「キャツキャヤツ〳〵

四つか五つになる一番小さいのが笑ふ。

「ドロ落すんよ……

と一番がらの大きいのが、かう云ひながら三人とも面白さうな顔つきをして、石をころがす後について行く。

チユク〳〵〳〵〳〵といふ聲がするので、後を振りかへると、前田家の墓所のうしろの切通の方から一人の男が、口に何やらくはへて「チユク〳〵」やつて來るのであつた、四角な物を風呂敷へ包んで、接竿らしい竹の棒を四本添へてさげて居る。アチコチと見廻しながら、大龍寺道を行くから後になつてついて行く、何する人だらうと思つたが、直ぐ考へついた。接竿らしい竹はヒルテンの棒であつた、綱がすこし見えて居る、そして四角な風呂敷のなかは、鳥籠らしいあん

ばいだ、此男鳥捕りだわい、と考へた。一寸八字髯があるが、見すぼらしい二子か何かの、よごれ切つた著物で、無論羽織は著ない。そして鼠色になつちまつた兵子帯の細ツこいのをぐる〳〵と二重程卷いて、朴齒の後の方のすりへつた下駄を引かけて、うろ〳〵と行く風采が、鳥ばかり捕つて、碌に自分の本職などはしないで、家では細君が二人位の子供を相手に、人の針仕事をしてやつと其の日を送つてゐる、いつもこの鳥捕のすきな亭主は家にゐれば、鳥捕りの道具をこさへる事にのみ、浮身をやつしてゐると云つた樣な仁體らしい、どこへヒルテンをかけるか知らん見たい物ぢやなどゝ考へながら、そこへ立ちどまつては例のチュク〳〵をやり、あすこへたちどまつてはチュク〳〵やつてゐる後の方から僕も立ち止つたり歩き出したりして見てゐる。ソンナ事をやつて又廻り角の處へ來た時に、僕が彼奴の後から、のそりのそりと行くのを初めて覺つた風で、一寸癪にさはつたらしかつたが、今度はチュク〳〵も何もやらずに、すた〳〵〳〵〳〵歩き出して丁度腦病院の前まで來ると、そこは一寸賑やかであつた。病院の門の內から外まで人力車が五六梃置いてある、子供が十人餘り車のまはりに遊んでゐる。向の角の茶見世は、車夫らが四五人、腰かけてゐるのもあれば、腕組して立つてゐるのもある、茶でも飮まうかと考へたが、今ついて來た鳥捕の男を見失つたのに氣がついて、動坂道の方を見たがゐない、田端の停車場

の方へ行く、與樂寺の方を見たが影もない、飛んだ事をしたわいと失望した。

與樂寺の門前に二株の梅の老木がある、左手の方のは六分程花が咲いた、右の方のは道へさし出た一枝が咲いたばかり、お堂には誰もお詣りしてゐる人がゐない、寺の門と向ひ合つた處に庭木の松の畠があつた、その松を植木屋が三四人で手入れをしてゐる、地面には一杯青葉が落ち重なつてゐる上を、親方らしい老人が、木鋏を腰へはさんで、木の間をくゞりながら、他の職人のやつてゐるのを見廻つてゐる、こちらの道の方へ出て來て、今梯子を立てゝ、梢の葉をすかしてゐる若い職人を見上げて、何か云はうとしてゐる途端に、腦病院の方から來た和尙さんが、

「今日は……お寒うございます……

と御辭儀をしたので、親方はちよいとこちらを向いて、肩へかついでゐた手拭を取つて丁寧にあいさつをする、何か二言三言云ひかはして別れる。忽ち僕は植木屋の仕事を見るのをよしにして和尙さんが行つた方へ行く。(二月十八日)

(明治三十六年七月、心の花

日暮里の歌（擬催馬樂）

春

我家はくはし名所ひぐらしの里
　春たけなはに櫻さく
くれなゐの雲か下り居る花見寺
白がねのすゞしろ鈴菜黃金いろ
　花さくや蝶舞ふや田螺とる矢田の子ら
さとの子よたにしうれ
　木の芽あへせん酒のなに

ゐひてや暮さん春の日に。

夏

我家はくはし名どころ日暮のさと
　　　　青葉しげりて風薫る
をちこちと啼くや行々子(よしきり)田の朝け
しばの戸を叩くや水鶏月ゆふべ
月の夜をほとゝぎすやみの夜を飛ぶ螢
　　つげやりし人や來ん
　　青田のあぜみちいでゝ見ん
　　蚯蚓の啼く音ぞいやしげき。

秋

我家はくはし名どころ日ぐらしの里

家並庭なみ菊さけり
やしをりの黃葉の入日鵙がなき
打なびく稻穗のかぜに蜻蛉とぶ
千々に咲く草の花ひるも啼く蟲の聲
蟲の名は何々ぞ
まつむし鈴蟲くつわむし
馬追かんたんきり〳〵す。

冬

我家はくはし名所ひぐらしのさと
雪見に來ませあるじせん
雪ふるや諏訪のやしろの杉がうへ
雁なくや矢田のやつ田の榛のかげ
雪ふるや雁なくや君來ませ酒くまん

みさかなに何よけん
　大根さといもねぎよけん
　風呂吹でんがくぬたよけん。

（明治三十六年八月、心の花）

野菊

うら〳〵と長閑けき春日に、摘草のかへりの道すがらなりとて、さる家刀自の少女子二人つれて、吾家にたちよりたるに、何の草を摘み給ふにやといへば、嫁菜、つく〳〵しなどにこそと、姉なるがいふ、嫁菜とはいかなるにか見せ給へといへば、妹なる八ツばかりなるが、手にさげたる小さき籠の中より、ひとにぎりばかりつかみて、板縁に置きたるに、土つきたるいまだ根あるが二本みもと交りたるに、これ給はずや、庭に植ゑ置かばやと思ふにこそと吾がいへば、姉なるがわが植ゑんにいづこかよけんとて、遂に山茶花の垣根のもとに、三もとならべてうゑたりしか。春すぎ夏來り、百日紅の梢に、油蟬の聲さびて、つく〳〵法師秋をよびなく頃、去年までなかりし野菊の花、山茶花の垣根のもとの、草むらがなかにさき出でたり

あはれ野菊の花、姉なる少女のうゑつる嫁菜なりしを、うゑつる人は遠き國に、人妻になりに

しか。

（明治三十六年九月、馬酔木）

みちのくの國、何とかや云ふ處に髪うつくしき少女ありけり。顔かたちなどよしと云ふきはにはあらで二の町なりけるが、髪いとこく、つやゝかにたけ長うして美はしくありければ、知る者はたゝへ、見知らぬ者は聞きつたへてぞ尊しあへりけるがなかに、この少女常に遊びに行きける髢屋の家のあるじなる男、わごぜが髪根元より切りて吾に賣らずや、よき髢つくりて多き利を得んには、髪切りたる代の外に何なりとも與へんなど、常にたはふれて云へりけり。

何の日如何なることのありける折にや、髪長の少女が家にて餅つくりたる事ありけるが、その少女餅食ひてのみどにつかへて息たえて死にけり、その親どもこれ迄の命なりけるかな、あはれなることとしてけりとて、すみやかに墓に葬りけり。

髢つくりの男こを聞きて、如何にもあれ彼が髪ぬすみとらばやと惡心起して、その夜ひそかに

鋤など持ちて村境なる墓原に行きて、今日埋めたる少女の墓をほるなりけり。掘り了へて棺の蓋を鍬の刄先にてこじあけて見れば、青白き顏に房々とつかねたる髮うな垂れていと物すごきに、程近き田の面にから〻ころ〻と啼くなるは蛙なるべし。人氣絕えたる墓原なるさへあるに掘りかへしたるなきがらに對へるいかにさびしかりけん、やがて少女の髮の兩の掌にてあまりぬべきを腕に卷きて引けども得ぬけず。こたびは穴のふちに腰うちかけ、兩の足を少女のかたにふみ掛けて、力のかぎりうしろざまに引きけるに、死にける少女う〻とうめきたるに驚きて、屆にふみかけたる足諸共いそぎ腰たて〻穴の外に立ちて、猶何事なりけむと、ためいきしつ〻片手に卷きたる髮をひくに、引かる〻ま〻にすく〳〵と立ちたるなきがら、きと此方をにらむ樣なるに、聲さへ立たず驚きあわてふためきて、元來し道をひた走りに走るとすれど腰へな〳〵に力なくなりて足は空さまに手は地さまに、常と事違ひしてこけつまろびつやう〳〵に墓原をいでなんとしてあとふりかへれば、白きなきがらよろめきつ〻追ひ來る樣なり、こはかなはじと腰うちた〻きつ〻幽靈といふものにこそあるらめと——阿彌陀佛々々々々といふ〳〵這ふ樣にして逃げ行くめり。一二町にげのびて、並木の松原にか〻りけり。おそる〳〵ふりかへれば、ゐて行き玉へといひつつ走り來るけはひなり、いづこ迄行きたりともこはのがさじとや、取り殺さる〻ものならば、此

處に殺されん、されど猶命は惜し、いかにせばやと阿彌陀佛を念じつゝふと木にのぼらばよけんと思ひ起して、傍なる木にからくして上りて、葉の茂みに身をかくして、しかと枝にとりすがり居るに、もし〳〵といふ〳〵吾を呼びとゞむらん聲して、ひたひたと走り來、いよゝ近より來て少し走りをのどめたる氣はひなるが、又もやもし〳〵といふなりけり。こはかなはじ今を、かぎりに吾は取殺さるゝなり、ナモアミダ〳〵と齒の根もあはず念佛申して、しかと枝にすがりてありけるにいよゝ吾がのぼれる木の下あたりに來て、もし〳〵と呼ぶ、たゞ靜まりて口の中にて念佛をぞ申す。やゝ過ぎて村の方をさしてけはひ去り行くを木の上ながら透し見れば丈にあまる黑髮ふりみだし、白衣の裾はし折りてひた〳〵と足音させつゝ行くめり、幽靈といふもの腰より下はなしと云ふに、こは足もありけり、おそろしき幽靈なりけるよ。あなこはやアミダボ〳〵……ナモアミダ〳〵。

管掛鳥しば〳〵なきて、春の夜ほの〴〵とあけ行く板戶こと〳〵と音づれて、あけ玉へあけ玉へといふは夢にはあらず、現に昨日迄耳にせる娘の聲なり。今は十萬億土の半らをや行きけんと思ふ物を、あやしくも似たる聲かな、きつねにもあれ明けてもやらんかとは思ひつれど如何にし

鋤など持ちて村境なる墓原に行きて、今日埋めたる少女の墓をほるなりけり。掘り了へて棺の蓋を鍬の刄先にてこじあけて見れば、靑白き顏に房々とつかねたる髮うな垂れていと物すごきに、程近き田の面にから〻ころ〻と啼くなるは蛙なるべし。人氣絕えたる墓原なるさへあるに掘りかへしたるなきがらに對へるいかにさびしかりけん、やがて少女の髮の兩の掌にてあまりぬべきを腕に卷きて引けども得ぬけず。こたびは穴のふちに腰うちかけ、兩の足を少女のかたにふみ掛けて、力のかぎりうしろざまに引きけるに、死にける少女う〻とうめきたるに驚きて、肩にふみかけたる足諸共いそぎ腰たて〻穴の外に立ちて、猶何事なりけむと、ためいきしつ〻片手に卷きたる髮をひくに、引かる〻ま〻にすく〳〵と立ちたるなきがら、きと此方をにらむ樣なるに、聲さへえ立たず驚きあわてふためきて、元來し道をひた走りに走るとすれど腰へな〳〵に力なくなりて足は空さまに手は地さまに、常と事違ひしてこけつまろびつやう〳〵に墓原をいでなんとしてあとふりかへれば、白きなきがらよろめきつ〻追ひ來る樣なり、こはかなはじと腰うちた〻きつ〻幽靈といふものにこそあるらめと——阿彌陀佛々々々々といふ〳〵這ふ樣にして逃げ行くめり。一二町にげのびて、並木の松原にか〻りけり。おそる〳〵ふりかへれば、ゐて行き玉へといひつつ走り來るけはひなり、いづこ迄行きたりともこはのがさじとや、取り殺さる〻ものならば、此

處に殺されん、されど猶命は惜し、いかにせばやと阿彌陀佛を念じつゝふと木にのぼらばよけんと思ひ起して、傍なる木にからくして上りて、葉の茂みに身をかくして、しかと枝にとりすがり居るに、もし〳〵といふ〳〵吾を呼びとゞむらん聲して、ひたひたと走り來、いよゝ近より來て少し走りをのどめたる氣はひなるが、又もやもし〳〵といふなりけり。こはかなはじ今を、かぎりに吾は取殺さるゝなり、ナモアミダ〳〵と齒の根もあはず念佛申して、しかと枝にすがりてありけるにいよゝ吾がのぼれる木の下あたりに來て、もし〳〵と呼ぶ、たゞ靜まりて口の中にて念佛をぞ申す。やゝ過ぎて村の方をさしてけはひ去り行くを木の上ながら透し見れば丈にあまる黑髮ふりみだし、白衣の裾はし折りてひた〳〵と足音させつゝ行くめり、幽靈といふもの腰より下はなしと云ふに、こは足もありけり、おそろしき幽靈なりけるよ。あなこはやアミダボ〳〵……ナモアミダ〳〵。

管掛鳥しば〳〵なきて、春の夜ほの〴〵とあけ行く板戸こと〳〵と音づれて、あけ玉へあけ玉へといふは夢にはあらず、現に昨日迄耳にせる娘の聲なり。今は十萬億土の半らをや行きけんと思ふ物を、あやしくも似たる聲かな、きつねにもあれ明けてもやらんかとは思ひつれど如何にし

て歸り來つるや問ひ試みんとて、戸の傍にたちて、死にけるもの歸り來るためしなし、如何で土の中より出で來つるぞといへば、妾はいさゝかも死にたる覺えはなし、たゞ眠れると思ふのみ、今より前、妾が髮を引こづりて起す者あれば目覺めたるに、穴の中にゐたり、又引こづられて穴より出でゝ見れば墓原なりけり、生埋めにこそせられけれと驚きて、妾を引づり出せる人を見れば、手は足のごと足は手のごとなりてまろび行く樣なるに、共に率て行き玉へ行き玉へと呼べどひた走りに走りて、並木の松原に來て遂に行くへを見失ひぬ、さてやう〳〵歸り來ぬるなり。露あやしき者ならねば明け玉へといふは、まさしき娘の聲なれば、家人の凡てを起して共に戶あけて內に入るゝに白衣にふりかゝる黑髮おどろ〳〵しく、此の世の人とも見えねど、吾がまな娘にまがひなければ、村の誰かれに知らせて昨日に引かへてよろこびあひけり。

墓を掘りて娘を生かせたるは誰人なるらん、とまれかくまれ墓に行きて見んとて、人々連だちて行きて見れば、男の足跡らしきが、掘りかへしたる土のあたりに踏みちらされたり。捨てたる鍬を見れば柄の處に烙印を押したり、こは乞屋がしるしの烙印なるよといふ者ありければ、さては乞屋があるじ、吾が娘を生かせけるよな、まな娘の命の親に何をかまひせん、とまれ乞屋の主人がり音づれんとて、鍬持ちて行き見れば、主人らしきが衾うちかづきて、汗もしとゞにナモアミ

ダをくりかへしつゝ、えやみに取つかれたらん樣して寢ねたるに吾が娘の墓掘り給ひたるは、この主人なめり、いな〳〵鍬の柄のしるしは、こなたのと同じものなればまがふべくもあらじ、娘が命の親なれば何をかまひせんと思ひてとぶらひ來つるなり、何よけんぞ辭宜はせぬものぞ、それよ、かねて娘が髮ほしとたはぶれ玉ひたれば、かれが根元よりたちきりて贈りまゐらせんといへば、髭の主人一きは聲たかくテモアミグといふ、髮は月日ふれば又も生ふるものなればそれよけんといひ捨てゝ歸り行きけり。そのゝちのこといかゞなり行きけん。

（明治三十六年九月、心の花）

刀劍鍛冶安食虎裂

ひとたび廢刀の御達があつて後、三十年も經た此頃では刀劍商といふ族すら、刀劍の賣買をしては立つて行けぬといふ時節柄、物ずきにも刀劍鍛冶になつた男がある。姓は安食、名は虎裂と云うた。

天之香久山命の末孫と稱して、尾張連が後ださうな。父といふ人は、越後の國彌彥神社の宮司をした事もあるさうで、一寸國學者間には名を知られた人である。余が彼と知りあひになつて後櫻井正次といふ刀劍工に紹介して弟子にして貰うたのである。

一二年修業するうちに、師匠の正次氏も驚く程の腕前になつて、其時始めて短刀を鍛へたから記念の爲だというて余にくれた。余は刀劍を見る事の知識は皆無であつたが、一見凡刀でないと思うた。一寸眼のきく人に見せたらば、其人が『これは月山では無いかしら……ドウも見事なも

のだ』と云ひながら『一寸中心を拝見します』といひながら、目釘を抜いて、驚いた『コリヤア新刀ですな……新刀も新刀も明治廿九年八月と刻んでありますな……虎裂と……コンナ名人が今居るのですか』といふ事であつた。

二度目に作つたのは、『正宗よりも三所程餘計に妙所がある』といふて師匠の正次氏から、刀劍鑑定の秘法を此時始めて傳授されたといふて喜んでゐた。此の二度目のも短刀で、これは皇太子殿下へ傳獻したといふ事であつた。

廿九年の十月から十二月頃へかけて師匠の正次氏が、寶物取調を仰せ付かつて京都奈良地方へ出張された事があつた。其の御供になつて彼は一緒に行つた。此時の旅行ほど、彼に取つて有益であつた事はなかつたらう。なぜかと云へば、旅行をすませて後、暫時は旅行中の刀劍談で持ち切つてゐたのでも分る。

一番澤山に刀劍のあるのは談山神社で、長持にいくつとなく押し込めてあつて、たゞ鞘をぬいて見たばかりで、丁度三日かゝつたと云うて居た、尤も名刀ばかりでは無い、無論ツマラヌものも有るが、しかし名工の作が見あきる程あつたのには閉口したといふてゐた。其の内には、打ち下したばかりの、未だ磨ぎにかけぬ名工の作が、サビ切つてゐるのやら、研ぎかけて、疵のある

爲、其のまゝにしてあるのやらが有つた、槪して旅行中の事を考へると、昔から社寺の寶物として大切にして居るものゝ內には、ツマラヌものが錦の袋に入れられてあつて、名刀が銹び切つて長持の隅に拋り込まれてゐるのが多い、テンデ何が何やら刀劍の事は盲目であるのは、なげかはしい次第だ、と云ふ樣な事を、くりかへして聞かせられた。

九段の遊就館で、每月の樣に刀劍の會があつた。正次氏の供をして、これへも每會出て居た樣子であつた。其の時なども氣焰當るべからずであつた。

鑑定家だなどゝいうても、誠にクダラナイ者ばかりゐる、ヤレ形がどうの、地鐵がどうの、錵がかうの、匂がかうのと云うて、物識りぶつて居るが、そんな事などは、今の時世ではどうにでもなるものだ、形や中心を寫すのは何でもなく、匂でも錵でも現す事は自由に出來る、そして古びを付ける事も意のまゝである。自身が鍛錬して、古來からの澤山の名刀を見て見れば、たゞ見る事のみを知つてゐる鑑定家のいふ事は、凡で子供の云ふ事を聞く樣で、捧腹の至りである。全體眞の品定法と云ふのは相州正宗に始まつたもので、製作家であればこそ其の巧拙や、眞僞やを辨ずる事が出來るのであつて、其の祕法を子孫に傳へたものである、といふ樣に、平生は無口の大男であるが、酒の醉に乘じては、大氣焰を吐いてゐた。

噫、人間の身體ほど、當にならぬものはない、丈の大きいガンジョウな、しかも大酒であつた彼も、病といふ物には打ち勝てなかつた。その病氣はしかも遺傳性の肺結核といふのであつた。

彼は余等と同じく歌よみであつた。岡麓君や、桃澤茂春君だの、余などゝ共に、雜誌「うた」といふのを發行した時は、彼が發行人であつたのだ。肺が遺傳病であつたのならば、なぜ刀劍鍛冶見た樣なはげしい働きをする業を選んだのであらうか、なぜ歌よみで終る氣でなかつたらう。尤もそれにはいろ〳〵と深い譯があつた樣子である。岡君などにたのんで、小さな東京近在の神社の、神官の口を探した事もあつた、小學校の敎師にならうかというて、其の方の口を探した事もあつた。しかし思はしい所が無い。家にはリウマチでなやんでゐる母が一人。せう事なしに早く自營の出來る樣にとの事で、通信技師の練習生をやらせてゐる十六歲になる弟が一人。自分と都合三人が食うて行かねばならない始末で、ソンナ事にもかゝはらず、刀鍛冶になりたいといふ事でなつちまうたのだ。刀劍の鍛錬法が後世に傳はらぬのが殘念だと、どこまでも暢氣な事をいうてゐなかつた。しかし物はあきらめ樣で、彼自身は肺病になつて、血を吐いても後悔しなかつた。

しかしいつ迄もそんな氣でゐられない。家財はボチ〳〵賣つてしまふ、衣類は質に入れてしまふ、昨日は五錢の錢で家内三人パンでしのぎをつけた、今日は最早どうにもならぬなどゝ云うて

は、度々岡君などはいぢめられた。何とか方法をつけると云つて、卅一年七月、彼は重い病體を引きずつて故郷尾張へ去つた。

（明治三十六年十月、馬醉木）

一　冬の夜道

家居たち並びたる町ぬけいでゝ村に歸る。道は冬枯の榎すくすく立ち並べる根方の。杉垣檜垣、扇骨木（カナメ）垣そひ、まばらなる家はこと〴〵く寢ねたり。霜にさえたる中空の月は物すごきまで照りたるに、吾影小さく短かきを蹈みつゝ襟卷しかとまきつけ、帽子目深にかぶりて行く。急に物かげより大きなる犬の聲して吠えいでたるに、しゝと云ひて追ひやりつゝかけ拔けて道の三叉に出でたるに、時しも一人のあやしげなる男子、つか〳〵と出で來ざまに、むづと吾が袂をとらへつ。又もや毛布打かぶりたる男子出で來て、吾前に立ちはだかり、何奴ぞといひ〳〵、吾が顏しげ〳〵と見る樣、髯ある男子なり。さては追剝にてもあらざりけり、こは非常線とやらんを張り

ゐたる警官なりけるよと心落ちゐぬ。今は午前一時にもなりぬるに、なに用ありて何れより何れに行くかと嚴に問ふ。さる處の歌の會にものして花見寺の畔まで歸るものなりといふ。何を業とするかと問ふ、鑄物師なりといふ。歌と鑄物師あまりに緣遠しなど一人が一人にさゝやきぬ。懷中のふくれたるは何なるかと問ふ。出齒庖刀一つ、歌の手控一冊といふ。出齒は何の用あるかとぎよツとして問ふ。昨日人より贈られたる鯉を祖母に奉らん爲の料と對へてゆるされぬ。

二　村　居

菜の花に戲れたる蝶の、折々庭の桔槹(ネツルベ)のあたりに飛び來て、家には腰かがまりたる老媼の、人皆の畑に出でたるあとを雞に餌などやりつゝ守るに——たま〳〵玉子買とて、籠を荷へる男の子の、卵はたまらずやなどいひて門より入り來。その外は飴うりの翁のねぶたげなる笛と、雞犬の聲とのみにて終日人の訪ふ事なき片田舍こそのどかなりけれは、夜半翁の

商　人　を　吠　る　犬　あ　り　も　ゝ　の　花

といへる是はたこゝらの有さまにはあらざるか。又某の詩に

雞飛過籬犬吠竇知有行商賣茶

といへる、しらぬ商人を吠える犬をいへる蕪村のと同じ田舍の趣になん。

三　芹

春やゝ深くなり行く山の清水のさゝ流れ、やゝひろごりて、しめりがちなる處、若葉の木陰に丈一尺にもなりぬべき根芹の生ひ揃ひたる、又なくきよげにうれし。

四　苗　代

曉露に下駄の緒しとにぬれて畔道ゆけば、田川の水をせき入るゝ苗代小田こそをかしけれ。小田の片隅より朝川の水流れ入れば、そよろ〳〵と波のまに〳〵早苗にも波よりて、針なす葉末の小さき白露の玉、ほろり〳〵落ち散りて、綠の毛氈に、少女のもて遊ぶ南京玉といふものゝ、散りてかくるゝなして、露の散り行くに、水かさいよ〳〵まさる頃、鮒のあらはに苗代に入りたるを見たるうれしさよ。

五　かめの子

矢田川に遊べる子の、龜捕へたりとてもて來、雨二三日降りつゞきたるに、庭の田な井の水まさりて、放ちたる龜、いづこにゆきけむ、影も見えず。

六　卯の花

矢田川添を朝ゆくに、白きもの川べりに立てる見ゆ。近よりて見れば、卯の花流れに影をひたして咲きをゝるなりけり。其の蔭の淀める水に、豉蟲（ミヅスマシ）三つ四つ、つゝと上りては、すうと下る。吾も此蟲になりて卯の花の蔭に遊びたく思ひなりぬ。

七　白き花

尾久の渡より舟をやとひて、投網といふものもて、西川岸の木立の蔭を下る。中ほどは流早き樣なれど、こゝはいとゆるらかなり。何といふ木の花か知らねど、今を盛と咲き滿ちて、虻などの聲かしましく花に來てなく樣なり。風ふかねど、ほろり〳〵ちる花の、水に落ちては必ず空さまに向き直りて、緩らに流るめり。三つ四つ共々に落つる頃は、いづれか下ざまになるもあるべしと見てあれど、必ず空さまに向て水にうく、早く落ちたるは遠く川下に行き、後よりなるはあ

とよりして水の流れのまに〳〵列をなして流るゝさま、えも云はずをかし。里人に其名をとへばうごといふ、五加木（ウコギ）のよこなまれるにもあらぬ木ぶりなり。

八　ほとゝぎす

淺草觀世音の御堂のうしろ、近きころ噴水といふもの設けられたるあたりに、しばし醉心地さまさむとて腰うちかけていこふ。四天王の如き像の、御肩のあたり金色の龍の卷きつきたるは、そも何といふ御佛の御像ぞも、佛法も末世になりてはかゝるあやしげなるものも出で來にけるかな。

形見るからに面白からぬ八角の臺、さらにこの像と調べ合はず、何者の作れるものぞや。など醉がたりしつゝ友と二人空うそぶきてあれば、日は御厩の御堂に傾ぶきて、夕風やゝ冷しきに、老いたる若きさま〳〵の人の中に立ちまじりて、二人三人つれだちたる舞姫の湯あみ歸りにやあるらんが行く。にくき容だいや、など、されごと云ひつゝ煙草くゆらしてあれば、山の宿のかなたより、ほとゝぎす一羽、空をかけりて御堂の上を横ぎりて二王門の方に飛びさる。しかも一聲だに啼かず、しばしありて又一羽同じ方に、同じく啼かでとび去りぬ。駒形あたりになくならん

かしと、そゞろ昔の事思ひ出されぬ。

九　天狗の嫁とり

男ありけり。目鼻一トところに取り寄せけるやうにてあまつさへ黒あばたにて、世にも似ぬがありけり。此の男の隣に、美しき娘もちたる者住みけり。男其の娘を戀ひて、如何にもして嫁に貰はんものと思ひけり。或時天狗の面、羽團扇など買ひ求めて、天狗の著るらんやうの衣をもつくりて、月いと明き夜、しのびて隣の家の背戸の木にのぼりぬ。さて梢をがさ〳〵とゆり動かして、厳めしく恐しげなる聲して、吾は古峰ケ原よりまゐ來つる天狗なり、家刀自早々外にまかれとぞいふ。母なる人しかいはるゝまゝにおそる〳〵、背戸のやり戸より首さし出して空打見るに杉の梢に、白き衣著たるもの、うづくまりて、月の光に、顔きら〳〵と、かゞやくを、よく〳〵打ち守れば、常に畫などに見る天狗の、これは其の生きたるにぞありける。母なる人、おぢかしこみて、腰さへたゝずなりぬ。男の天狗、羽團扇はた〳〵とつかひつゝ言へらくは、汝が娘は我が領じて三年になりぬるを、今は汝が家の隣に住むなる男に、めあはせんとす、速に用意して、彼につかはすべし、もし吾が言をうたがはゞ、母子の命は世になきものぞ、ゆめおろそかにすな、

といひやみて飛びも去らで靜まりゐたり。男の天狗木より下りんとすれど、母なる人おそる〳〵見てあるに困じて、再び物言ひけるは、吾が言のよしを、はや〳〵娘にもいへと云へば、母なる人の内に入りたる間に、する〳〵と下りて、家に歸りて、衾うちかづきていねにけり。

明くる曉、男の家をほと〳〵と音なひて、吾がかしづく娘を、いましにつかはせとの天狗の仰せなれば、今日より直ちに召させ玉へといひて、泣く〳〵娘を殘して母の歸り行きけるに、男しすましたりと、心に思ひて、さりげなく共に住みてありけり。

油蟬、梢に聲老いて、つく〳〵法師、時得がほになく頃、男の家にて蟲干をぞしける。數もなき調度、衣など取り出でゝ干しつゝあるに、長持の底より、天狗の面と、羽團扇と、常人の著るべきにも有らぬあやしき衣とありけり。妻なる人、見ぬふりして、母の家にいたりて、しか〳〵と云ふ。母なる人首かしげつゝ案じゐたりしが、はたと膝うちて、かの夜、天狗と思ひつるは、かの男にまぎれもなし、わが見る前に飛び去らぬはあやしき一つなり。聲音のよくも似かよひたるはあやしき二つなり。顏のきら〳〵光れるは、面なればこそありけめ、これあやしき三つなり。たばかられたりとも知らで過ぎけるうたてさよとて、共に泣きたりとなん。

十　筌のかけ合ひ

佐吾兵衞といふ男あり、沼のほとりに住みて、川魚などとりて暮しけり。或時魚とるとて沼にかけ置きたる筌、半らを盜まれたりけり。誰ぞ吾が筌はぬすみしぞ何奴の仕業ぞと、高聲によばりつゝ其の村中よびありきけり。或人佐吾兵衞の少し甘き本性なるを知れるからに、かくと敎へけり。『佐吾のせなよ、さな高聲におらびそ、盜人は吾こそ知れ、あまりに高く物いひなば、聞き傳へてにげもせん、そは近きわたりにすめばなり、其盜人といふはそこの長右衞門なるぞ、今より直に掛合ひにゆきね、何が故に吾が筌はとりたるぞ、筌にかゝりし魚共々元の如くして返せ』と少し嚴に改まりていへと敎へてやりけり。佐吾兵衞甘きが上にふと物忘るゝ質なりけり。たゞこれのみの事云ひ得るやいかにとあやしかりけり。佐吾兵衞『されば掛け合ひこん、よし〳〵物の云ひ樣こそあれ』と『近きわたりに盜人ぞすみたる、このあたりの者ども物とらるゝな』と、くりかへし、くりかへし、長右衞門が門を入る。やがてづか〳〵と家にのし上りて、かしこまりて『さて長右衞門殿……さて長右衞門殿…』とのみにてあとの詞更に何と敎へられけんいでず、果は困じて、『長右衞門殿何事なりしかや』、といひ放ちたるに、『何事なりしか吾が知る所に非ず、

人の家に何を云ふとてきたりしぞ、うつけ者め、とく去ねかし』と追はれてはふ〳〵になりて歸りけるとなん。

（明治三十七年八月、心の花）

小萩が餅にそへて

啓

この地、もと父祖が墳墓のあるにはあらず、されど、秋も彼岸となりぬれば、あの世にますなる祖先のみ佛たち、かつは正岡の大人がみたま、ともどち、其他知らぬ佛たちに、白露おもる小萩が餅そなへまくと、妻なにがしのいひてつくりたるを、すこしあまりのあれば、そこへもいささか頒ち與ふるになん。

あかにのほに
きこしをせ

辰の年
秋ひ岸二十五日
秀眞

（明治三十八年十月、日本美術）

駒込の岡。千駄木の森の東に。高天原に千木高知り。底津岩根に殿柱太しく立て鎭り座す。建依別之土佐の國人。森田の醫師正馬の大人の御前に。歌よみの秀眞。鑄師の香取。謹み恐みも申さく。埼玉の縣北足立の郡浮間の。うき島が原の。葦芽の萌ゆる春野に立ち出でゝ。大人を初め。川崎の萬曹長の露木。園田の春耕。木村の畫師。原の郎女。並に鑄工の香取を合せて七柱。浦々と長閑けき。さ緑の葦芽に交る。淺茅がなかの。木にさく花によく似たる花さく櫻草を。持て行きし籠にあまる花束つくりつゝ遊ぶが中に。いもじ香取と。武夫の露木とが執る鞭に。紅の赤蛙子の飛ぶを。打たゝき打ころし。足の手房の皮はぎて。股引といふものを頭までぬがしめらん様に。逆はきにはぎしかば。蛙のたゝり恐しきかもよ。いもじの肛門しくら／＼に痛みいでゝ。灌處に行きて糞まりしつれども。糞まり得ず。故こゝを持ちて。醫師の大人に此有様を奏すに。大

人の命の申さくは。赤蛙の太股の醤油の付燒奉らば。この病直ちに治さむと。しか申しき。爰に蛙の太股の醤油のつけやき。一つ捧げて祈り申しければ。手をとり給ひ。舌を見給ひ。腹さすり見たまひて。さら〳〵と藥の品々を書きしるし給はく。こは直に飲む粉藥なり。こは次にのむ油藥なり。こは其次にのむ藥なりと申して。記し與へ下し給へば。糞まりえぬ尻重らに打ふりて。家に歸り來て。其藥のみし夜更け。高山の末より。さくなだり落瀧津瀬の如く、八坂瓊の五百津の御統の曲玉を。天の眞名井にふりすゝぎ。さ噛みにかみて。吐き捨る。伊吹のさ霧なす。伊吹戸主の尻ゆも。伊吹き放ちて。ひる屁の音の。鳴神のとゞろと。へ放てば。菅の根の。ねもころころに。春の曉かけて糞まりにまり明かし。其の次に飲みたる藥に。糞まりにまりとゞまりて。こゝに鑄もじは歌よむべき氣色に治りぬれば。森田の大人の大御威稜を仰ぎかしこみ。うやまひ尊みて申さく。野山に生ふる物は。廿茶から茶に米とりそへ。海に生ふるものは。昆布ひじきにのりわかめ。川の鯉鮒。海の鯛。毛の荒物の猪鹿。和物の兎。はた水に住みて歌申あぐる蛙のつけやきに至るまで。八脚の百八十机に。横山のごと置高なして。報謝申さくは思ほへど。さる陳腐たる物は。うけ給ふまじと。こゝに青銅製の。いと美しき小皿を奉る。此皿はしも。帝國萬歳となも。文字はしるしたりける。かく奉る皿は。猪自物家の肉をもるにも非ず。い文

字の角。牛の肉もる皿にもあらず。時自久の。香具の木の實を盛り高なすにもあらじ。煙ぐさ莨(たばこ)となもいふもの丶。灰といふものを落し受くる皿にぞありける。かくのり言を奏して。供物仕うまつる事の由を。聽神機(こゝろのそこのうつは)とりはづして。天の斑馬(ふちこま)の耳いや高にふり立て、聞しめせと申す。

明治三十八年春四月二十五日

（明治三十八年七月、日本美術）

籾山商報五十號祝詞

皇美麻命天降坐むとする時に御前に立ちて仕奉りし猿田彦の大神を神風の伊勢の國狹長田の伊須受之川上に送りて還到りて於是天之宇受賣之命橘之小戸に鰭背建てゝ在る八尋鰐に命せて青海原の潮の八百會に泳ぐ大き小き魚等を悉く追聚め召集へける時に水無月の夏の最中なりければ水にあまりて陸に押上りたる魚等のうちに已に松魚は背と腹と別に乾堅り鮭鱒鰆の族は濱の眞砂子を浴み鹽びきぬるもあり海老は紅に乾び蛤は殼よりまかり出でゝ乾びけるに天之宇受賣之命申さくは汝等は葦原醜男等に叛れて天ツ神の御子に仕へ奉らむやと問給ふ時に諸の魚等皆仕へ奉らむと申し諸の乾魚このまゝに皆仕へ奉らむと申す中に海鼠ひとり白さず玆に紐小刀もて此口や答せぬ口と云ひて其口を拆かれき烏賊のうちには仕へ奉らんと申して八脚もて立ちて歩みて傍なる眞黑にふれて墨汁を吐きちらしければ此腹や黑き腹と云ひて同じ紐かたなに腹立ちさかれて忽

ちに鰑となりて祝ひの魚となりき故今に鰭廣物鰭狹物と申して生きながら乾びながら世々の御門につかへまつるなり。

こゝに現津御神と大八洲國知し召す天皇の御代の明治三十有八年の神無月露西亞をきため給ひ終へぬる事の由を皇祖伊勢の皇大神に申給はくと天皇の大御社に行幸して歸り給ふ日の次の二十日と云ふ日此商報は片手の指の五十卷に成りぬれば諸魚族の帝國萬歳と諸聲に鰭たてゝ歌ひて乾魚等の定價する商報の魚鱗の數の五百萬に榮えまさん事を綿津美の味大濱に打集ひて尾ふり鰭たてゝ綿津諄辭の魚祝詞を申す事を中臣秀眞魚辭を聞き知りて申す。

（明治三十八年十一月、糀山商報）

對ニ鳥居朝臣ニ祝詞

集れる諸々聞召とのる。香取ノ秀眞が大神のみあらかの御前に太敷建てる鳥居朝臣に物申す事を。畫工の伴男。醫師の伴男。茄子胡瓜の肖像造る伴男。尺八の笛吹く伴男。手襁掛けてうどんと豚の肉のあつものつくり臺灣の紅茶を煎じ韓臼のころ〳〵に抹茶を泡立たしめて神等に仕へ奉る大刀自。花火の物眞似たくみなる伴男。催眠術を施さるゝ伴男。施す伴男。伴男の八十伴男を初めて。梁の上ゆく嫁が君。ゆかの下這ふ鼠婦に至る迄。靜みかへりて聞召とのる。

高天ノ原に神留座て。八百萬神等神集に集ひ。神議に議り給ひて。皇孫之命の安國と平らけく。知し召さむ豐葦原の水穗の國の。これの國中に。荒振神供を神問はし給ひ。神拂ひ玉ひて。下津總の國大船の香取の郷に。底津磐根に。宮柱太敷建て。高天原に千木高知りて鎭り居座。經津主神。又の御名は齋主神の御子。天之苗加命の神裔。鑄もじの大工香取保津麻に。みけ向ふ阿波

の國津神。天之益人等のよりて來る事を研究神。潮沫のこりて成りたる外國の雜誌にまで其の御名を稱へらるゝ神。自は書生としも申して。又の現世の御名は龍藏ぬし鳥居の朝臣が。天飛ぶや雁のはがきの畫はがきをもて吾に申さくは。君の御顏の容は。み鼻をはじめみ眉に至る迄。上つ代の諸上等の様もかくやと思ほゆと申して。みかしらにみづらを結へ。御首に曲玉の五百箇の御統の玉をうながせ。御腕にはたまきを懸けよ。御足のへに足結の小鈴から〳〵に。からころもの成れの果なる。今の現世の衣をぬがしめて。御服は明妙。照妙。和妙。荒妙の。御服を著さしめ。腰に白銀の目貫の。玉裝ふ御劍をとりはきて。若草もゆる日暮里の。豐島が岡べねりゆかば。梓弓谷中少女は。鶯の音にたてゝ戀ふらむ。としか申しき。しかのみならず。葛飾の眞名の手古奈は。地の底より君をしぬぶらむとさへ申しき。故こゝに。吾に寄すとふ眞間の手古奈を。とうたへる古人のよろこびも。今は吾身になりぬと。起き上りふしまろび。うれし泣きに泣き。よろこびの大聲を。谷田のやつ田の。鳴子の板のからンから〳〵とぞ笑ひどよめきける。かくどよめきてうれし泣きに泣き。かくよろこびて笑ひどよめきければ。今年む月七日に生れたる秀眞が長女。美年子と御名を申すが。おふげ〳〵とぞ寢覺めて泣きける。かく美年子が泣けば。さし並の隣の家の庭津鳥。かけが友等。かけろ〳〵とぞ鳴き叫び。走りめぐり。飛びあがり。蹴合ひ

を初めける。故こゝに。隣の主を初めとして。龜と呼び鶴と呼ぶ荒ぶれ男の子。六部と其名を呼ばるゝ男の子。首に犬の毛の和毛の毛皮の襟卷を卷きつけたる。上野の山の山の旦兵衛と申す男の族。十まり。廿まり。鷄集ひに集ひ。鷄議りに議りて、國の禁制。大糶小糶をすれば。秀眞が門に。鑄もの習ふ子の。梅と申し德と申すが。糶詞を聞き知るに。吾は上つ代さびて。奈良の宮振。東振。聖代の。みうたしぬびて。吟唱す。こゝにかく吟唱すれど。風雅心なき谷中少女かもよ。吾がうたふ歌を。きゝ知るものはさらになくて。梅の花のみ笑み榮えたり。又勝鹿の眞間にありきとなも申す。手古奈はしも。一夜だに夢にも見え來ず。故こゝをもちて。鳥居朝臣に申さくは朝臣の申し玉へる稱詞は。吾秀眞には不相應稱詞になもあれば。打蚫。打返しつゝ。朝臣の御前に返し奉ると申すことの由を。兎の長耳振立てゝ。聞召せと申す。

辭別て。春の夜を根津のほとり。新しき長屋の門の外に。圓石つぶらに苔むしたる家に鎮り座す。川崎の宿禰。萬と御名を稱へ奉らくは。胡瓜茄子の肖像つくり。或は人眞似に油繪をかき。筆とりてはかにかくと世をわらひ。これと申して定まりたる業なければ。萬と御名を稱へ奉る。川崎の宿禰に申さくは。宿禰の見はるかします四方の町は。上野山かき立つ所。烟突村立つ極み。紅塵靄下に。白雲の墜居むか伏す限り。畫工。彫塑する風流士は滿ち足らひ。畫も彫塑も。宿禰

の大前に持ちいでなば。横山のごと打ち積まれむも。圓石の長家に寄集ふ。伴男等のなし出る様は。さる容易けきものにはあらじと。こゝに同じ心の伴男等の。伴集ります。倶樂部と御名をまをす伴集を設けませる。川崎の宿禰の御前。うじ物うなねつきぬきて。稱辭竟まつり。これの雨津祝詞を鳥居の朝臣の御前に。秀眞が祝詞らまとのれと申すことをのる。明治三十八年二月の廿まり四日。

（明治三十八年八月、心の花）

鳥居龍藏の君が蒙古に行くを送る詞

伊邪那岐伊邪那美の神の生ませ給へる。伊豫の二名の島は。身は一つに面四つありけり。面毎に名あり。故その面の一つなる。大宜津姫の治せる。粟の國徳島の鄕ゆ。天地のうづの眞名兒を生めり。うづの眞名兒としも稱ふるは鳥居の大人。龍藏の君になもありける。先に高砂の島にい渡らしては。飛ぶ鳥も飛びものぼらぬ。新高山の頂に。白雲を向股にふみさくみ。現身の人にしては。初めてこの山に國見し給ひ。北の方千島に打渡りては。アイヌが族の。いその上古事らをきはめ給ひ。遠く支那の西みなみに分けいりては。未だ世に知らえぬ事ども。あまた見究め給ひ。去年のいくさの折は。韓の國を足越にこえて。ふかく滿洲にいたり給ひ。あやふきを冒して珍らかなる事ども。探り求めつる事已に八度になり給ひ。遠く思ひ近くきはめ。廣らに厚らにさとり給ひけらし。

山田の蘇保止。またの名を久延毘古の神は。足あるかねども。天が下の事を知るといふに。そは神にしませり。うつそ身の人なる君は天の鳥船天かけりて。とはに知らえざりつる奇しき事どもを知り。無目堅間の海を越えては。まなく時なく學びの海原うなかけりて。棹楫ほさずいそしみ給ひてなもありける。故こゝをもちて物學びの徒は更にも云はず。遠く廣く君が御名は傳へられて。日の入る國のくに人にまで聞えけらし。故こゝに。天地の神相はかり。白雲の下り居むか伏す限り。青雲のそきたつ極み。駒の爪至りとゞまるかぎり。船のへさきの泊る處。行くとして行き得ぬ處なく。あやふき事なく。君に恙あらせずと守り玉ひ。幸ひ給へれば。故天地のうづの眞名兒としも稱へ言申すになもありける。

今年やよひの初めつ頃。君が妹背二柱相ともなひ。支那の國東蒙古なる。カラチンの王(きみ)の招ぎまつりませまつるまに〳〵。まづ妹の君を先立てゝやり給ふに。其國の牡丹(ぼうたん)の花あまた植ゑたる御園生の。中なる家の牡丹亭といへるに行きつき給ひつと。いしたふや。天はせ使のしか云へば。吾が背の君は今日か來らむ。明日もや來まさむと。待ちたまふらむ。あすはの神にいなを手向けて。はやも行き給へ。

家なるおも父らは。枉神の禍事なく。白玉の白髮づき。赤玉の阿加良眦まして。すこやかにま

鳥居龍藏の君が蒙古に行くを送る詞

伊邪那岐伊邪那美の神の生ませ給へる。伊豫の二名の島は。身は一つに面四つありけり。面每に名あり。故その面の一つなる。大宜津姫の治せる。粟の國德島の鄕ゆ。天地のうづの眞名兒を生めり。うづの眞名兒としも稱ふるは鳥居の大人。龍藏の君になもありける。先に高砂の島に渡らしては。飛ぶ鳥も飛びものぼらぬ。新高山の頂に。白雲を向股にふみさくみ。現身の人にしては。初めてこの山に國見し給ひ。北の方千島に打渡りては。アイヌが族の。いその上古事らをきはめ給ひ。遠く支那の西みなみに分けいりては。未だ世に知らえぬ事ども。あまた見究め給ひ。去年のいくさの折は。韓の國を足越にこえて。ふかく滿洲にいたり給ひ。あやふきを冒して珍らかなる事ども。探り求めつる事已に八度になり給ひ。遠く思ひ近くきはめ。廣らに厚らにさとり給ひけらし。

山田の蘇保止。またの名を久延毘古の神は。足あるかねども。天が下の事を知るといふに。そは神にしませり。うつそ身の人なる君は天の鳥船天かけりて。とはに知らえざりつる奇しき事どもを知り。無目堅間の海を越えては。まなく時なく學びの海原うなかけりて。棹楫ほさずいそしみ給ひてなもありける。故こゝをもちて物學びの徒は更にも云はず。遠く廣く君が御名は傳へられて。日の入る國のくに人にまで聞えけらし。故こゝに。天地の神相はかり。白雲の下り居むか伏す限り。青雲のそきたつ極み。駒の爪至りとゞまるかぎり。船のへさきの泊る處。行くとして行き得ぬ處なく。あやふき事なく。君に恙あらせずと守り玉ひ。幸ひ給へれば。故天地のうづの眞名兒としも稱へ言申すになもありける。

今年やよひの初めつ頃。君が妹背二柱相ともなひ。支那の國東蒙古なる。カラチンの王の招ぎまつりませまつるまに〳〵。まづ妹の君を先立てゝやり給ふに。其國の牡丹の花あまた植ゑたる御園生の。中なる家の牡丹亭といへるに行きつき給ひつと。いしたふや。天はせ使のしか云へば。吾が背の君は今日か來らむ。明日もや來まさむと。待ちたまふらむ。あすはの神にいなを手向けて。はやも行き給へ。

家なるおも父らは。枉神の禍事なく。白玉の白髪づき。赤玉の阿加良毗まして。すこやかにま

しまさむ。な心置き給ひそ。岩楠船ゆ。海原をかけり給はむに。津の國の住の江の神等。ふねの舳艫にたちそひて守りまさむ。野を行かば萱野姫。山行かば大山祇。時の花眞細しに咲かせて。旅のなぐさに。うづの眞名子と守り幸はひたまふらむ。さきくゆきませ。

（明治三十九年六月、日本美術）

夢でもなくさめたでもなく、うと〳〵とする、枕許の行燈は油がつきたか螢の樣に唯一點の紅を殘してゐる。西側の海に面した雨戶の透間から這入る海明りが、障子を透して、薄ぼんやりと室内が見える。左手に一人その先に一人、二人の友人がすや〳〵眠つてゐる。一間置いて三四人づれの、宵に藝者をあげて浮かれてゐた客の方も鼾聲が聞える。僕は眠りから全然さめてくる。昨日は晝めしも喰はずに鎌倉中駈廻つた上に、この江の島の肴がうまいと云つて、ちと晩酌が過ぎたせゐか、いやに咽喉が渴く。寢返りをした、水を飲まうと枕許へ手をやる、何かさら〳〵衣類のすれ合ふ音がする、とたんに左手の入口を見ると、襖が明いてゐる樣ぢや、そこに半被を著た奴が立つてゐる、白い襖に黑い影でぼんやりと見える、慥にあやしい奴に違ひない、扨はさらさらと音がしたのは、誰かの甲斐絹裏の外套を引摺つた音に違ひないぞ、此奴宿屋によくある枕

さがしに相違ない。何時の間に這入つたかしら、暫時うと〳〵しては居たもの丶、襖を明ける音くらゐは聞えさうなものだなど丶、咄嗟に考へた。しかし盗賊が半被を著てゐる、コイツは妙だ、或は宿屋の下男かも知れない。

誰だツ。

一喝した、返事がない、少し首をあげて見ると動き初めた様だ、さら〳〵といふ音が、しきりにする。此奴いよ〳〵枕さがしと極つた、手さぐりにマツチを探しながら、また、

そこに居るのは誰だツ。

返事がない、パツとマツチを摺る、すぐ消えた、また摺る、また消える。實は返事がないので氣味わるくもある。うつかり手だしをしてどんな目に遇ふかも知れない。僕は床の上へ起きた、する〳〵と音がして彼奴廊下へ出た様子だ。

どろばうツ——どろばうツ。

と實は聲が震へて居たやうだつたが、叫喚きながら、友達の上を飛び越えて、今一人入口に寢て居るのを越えようとすると、いきなり床へ半身起して僕をつらまへた。

どうした〳〵、どろばうナンカ居やしない。襖はコンナにちやんと閉めてある。

と云つて、明いて居たと思つた處を叩いて見せる。
マア床へ這入りたまへ、寢惚けちやいけない。
すると直ぐ左に寢てゐた友達が、
君が先刻から度々寢がへりをする、そして誰だツと云つて見たり、マツチを探したりしてゐるので、又例の十八番かと思つてゐたが、飛んだ活劇をやるぢやないか。
さら〳〵と云ふ音は寢がへりする時の夜具の音だよ。
などと云はれるので頗るきまりがわるい、一間置いて浮かれてゐた連中も、何かこそ〳〵話聲がする。僕の誰だツ——どろばう——なンど云つた聲で目をさまさせたかと思ふといよ〳〵面白ない。
床にはひつて水を飮んで、煙草をふかしながら入口の襖の方を見ると、慥かに、襖が少し開いて、そこには半被めいたものを著た人が立つて居る。僕にはどうも人間が立つて居る樣に見える、と云ふとすぐ左手の友達がつく〴〵見て居たが、成程人が居る樣に見える、と云ふ。
コレだらう、コレは僕の洋服の上著を長押へ引掛けたのさ。
と云つて寢ながら引張つて振つて見せた、ヤツト枕さがしの正體が分つた。午の歳十一月稿。
（明治四十年十二月、日本美術）

法隆寺ニ納ムル銅印ノ箱ニシルス詞

東京美術學校長從五位正木直彦公事ニ依テ今年二月關保之助香取秀眞二人ヲ率テ京都奈良大阪ナトニ至リヌル時可然ノ由有リテ此ノ御寺ニ詣テ事ノ次ニ御寺ノ印章ヲナン尋ネケル而ルニ古ヨリ傳來ノ銅印ハ先ニ御門ニ獻ツル此クテ其ノ影ヲ移シタル木印ヲハ用キツヽ有リ糸便無シ如何テ銅印ヲ獻ラハヤノ願ヲ發シテ東京ニ返リヌルスナハチ御物ノ寸法ト印面ノ文字ノ根トヲハ關保之助ヌシ檢ヘ奉ラセ香取秀眞ニ仰セテ潔齋シテ令奉鑄此クテ糸恐ミテ銅ヲ以テソヲ鑄顯シ奉リヌ尙新ニ筒形ノ鐨一ツヲ銅モテ鑄造リ添ヘテ法隆寺金堂ノ御佛ノ大前ニ恭敬供養シ奉ル我等拙キ身ヲ以テ今此ク仕奉リヌル事朧氣ノ緣ニハ非シトナン恐ミ奉ル仰キ願クハ此功德ニ依テ大御佛ノ慈眼ヲ開キ給ヒテ摩訶不思議ノ大威神力ヲ以テ施主ヲ始メ此ノ事仕奉レル者共ヲ弘誓ノ船ニ打乘セテ無量福壽ノ御岸ニ到ラシメ一蓮托生ノ芳緣ヲ結ハシメ給ヘ南無歸命頂禮謹請再拜敬テ白ス

（明治四十年四月、日本美術）

古美術行脚

梅の花咲くきさらぎの旅日記、されどもこれは梅の花見の旅にはあらじかし。近ごろ世にやかましき、奈良法隆寺金堂の釣天蓋下されて、その一よりは天福元年の墨書出でたりと聞く、それ行きて見ばや。序に大阪の春日出新田とか云へるに、豊公時代の建物有りといへば、それも見たし。京都も、例の釜師の物語など聞くも興あらめ、いざ共にと香蝶ぬしの勧むるままに、埴輪ぬしと、余と三人、二月九日夕六時、新橋停車場に落ち合はんとの約成る。

二月九日

今日夕方まづ京都に向ひて旅せんといふに、雪ちらちらと降るものか、午後には一入降りまさりて、四時頃には已に積りて四五寸、人々や待ち給ふらん。車にて上野迄、それより電車にて、

と思ひて車やとふに、網引なくては一人にてはえ引かじと云ふ、止むなく車夫二人やとひて家立出づ。上野に出でゝ見れば電車は停電したりと見えて更に動かず、雪ますます降りしきる。今朝より下痢の氣味にて腹しくしく痛むに、三橋の大時計は、見るみる五分とたち、十分と進む、こは叶はじ酒のしろなどあまたとらせんに、新橋迄行けと、無理に車夫うながして走らす。到れば六時迄は四十分餘りあり、心先づ落ちゐぬ。しばしありて埴輪ぬし先づ來給ふに、香蝶ぬし未だ見え給はず、發車に餘す所たゞ十分。とかう待つ間にやがて見え給ふ。いそぎ汽車に乘る。雪は小やみにやみたる氣はひして、窓のガラス戸に雨の音す。乘合の人立こみたればまどろまん便もなし。大磯國府津のあたりは流石ぬくければにや、雪もなき樣に見えつれど、やゝすゝみて御殿場あたり一尺程も積りて見ゆ、懐爐といふもの腹に當つれど、夜の更け行くまゝに例のもの催せば、厠に通ふこと二度三度。名古屋より以西は雪もなし。米原彦根あたりほのぼのと夜明けて、打仰ぐ比叡の山のいたゞき少し白きは、いつ降りたる雪にかと見やる。やがて京都につけば朝日ほがらに昇れど風いとつめたし。

淡雪の鹿の子しぼりのにこ衾いまだ
　かづける東山かも

二月十日

朝八時ばかりに宿につく。黒塗の大火鉢、大きやかにて膝掛つきたる坐布團、さながら俄大名にせられたらん心地なるも居にくし。人々湯豆腐のぬくげなるにて朝餉し給ふに、余は牛の乳と玉子とをすゝりて止む。共に出でゝ三條釜座に大西清右衛門氏を訪ふ。大西氏は德川の初世より釜師の名家として世に知られ、當主にいたる迄十三代、千家出入の十家の一にて、今猶釜の鑄造を專らとせらる。嘗て釜師の系譜を作らんとして、岡崎雪聲師を介し、釜師の傳統をたづねし事ありき。一昨年十一月初めて清右衛門氏を訪ひ、共の家系を審にきゝ、また十代目淨雪がものせる、釜の圖八卷を見て、名物釜の由來、及び釜の形を知らむには、此を措きて他にあらじと思ひければ、人々と共に再び氏を訪へるなりき。今宵その卷物及び書類ども旅館へ持ち參らんと云へば、一二の物語どもして、一碗の抹茶をすゝめられてそこを出づ。

寺町通錦小路に銅器商長松左次郎氏をたづね、二三十年以前の佛具など三つ四つ見て辭し去る。折から正午なればとて、三條河原町の東京亭といへるに行く。余は例の腹工合あしければとて、ウヰスキーを一杯すゝるに、腹の中引きしまる樣覺えて、この後は更に灌處に用もなくなりぬ。

寺町姉小路に英靑堂平野吉兵衛氏を訪ふ。氏は嘗て支那に遊び、親しく鑄銅を視察せりしと云へば、支那の鑄銅法に聽くべき事どもあらんとて行く。山東省に工藝學堂を訪へど鑄法の見るべきなく失望しぬるよし、されど端方氏の許にて几上に置かれたる儘掘出されたる古銅器を見たる物語などきく。

余は一人別れて富小路錦下ル處に、鐵瓶もて世に名高き龍文堂を訪ふ、其初代は丹波龜山の藩士、銅器の製作を好み、明和の初年京都に出で鐵瓶を發明すと云ふ。姓は四方（シカタ）、名は龍文金壽泰と號す。その二代より龍文堂と號し、通稱は安之助、この人性來器用と見えて鑄物の墨斗を發明し、又當時世に珍しき葉鐵を以て、ブリキ細工を行ひ、蠟型鑄物をするなど多藝の人なりとぞ。晩年家督を三代安之助に讓り安平と改名して加州へ行く。又陶器を造り、書畫を能くし、貫名海屋、頼山陽、靑木木米の徒と交るといふ。三代目は同じく鐵瓶製造の業をつぎ靑銅の傳色を始む。四代よりは專ら鐵瓶製造に力をつくし、當主に至る迄七代。その初代龍文の作品としては、底に金壽泰と篆文もて刻める手爐、及び色繪銅の孔明置物、及び底に大淸嘉慶年製の鑄銘ある錫製牡丹唐草の瓶掛を示さる。二代の作としては龍香爐、及び高臺の側に、小さく安平の印ある陶器の猪口、及び自畫讃ある山水の畫幅等を示さる。その龍の香爐といふものを見るに、一の蟠龍火焰

を吐きたる焰の頂に、龍宮の現れたる意匠にて、其龍宮やがて香爐となり、龍の乘りたる四足の臺は同じ唐銅製にて、裏に行書もて龍文堂と彫銘あり。此等の珍しき作品は其の祖先どもの技法を後人に知らしむべき唯一の珍寶にこそ、永く祕藏せられよとて、厚く禮を述べて宿に歸る。此時此家の略系譜を與へらる。

風呂に入りて昨夜よりのつかれを癒すべく、風呂に入る、揚り湯のなきぞ物足らぬ心地せらる。夜に入りて大西氏來る。其時の物語どものあらましは。

△與次郎作の豐國神社に在る雲龍燈籠の話。
△智恩院の雲龍釜も與次郎作の話。
△京釜は厚作、江戸釜は薄作の話。
△京釜は羽打ちをすれど、江戸釜は薄ければ羽うち出來ぬ事。
△江戸の名越家などにては、羽打せる樣に鑄出す事。
△釜の燒きぬきの事。蘆屋は燒かぬ事。與次郎など專らやきぬきを始めたる事。
△伊勢名古屋越後羽前羽後邊へ京作の釜の輸入する事。
△江戸及び加賀邊へは京釜の行かぬ事。

△嘗て六十錢にて買ひたる釜に極めをつけてやりたるに、ある道具屋、蘆屋とか天命とか云ふ銘に替へて、黒塗の箱入として、江戸の物もちに、百圓にて賣りたる無法の話。

などして共に夕餉したゝめ終りて、釜の圖八卷の卷物及び淨雪が書き置きたる書類ども、香蝶埴輪ぬしなどと共に見る。書類といへるは

一、名物釜由緒聞傳控一卷

これは名物釜の本家の所有者の事より、寸法及び鑄肌、或は目じるしとなるべき處などを、委しく記せるもの。

一、大西家代々靈譯書記一卷

こは代々の作家の法號、及び歿年月、其靈の、大西家に幾許の功勞ありしか、などを記し、「親同樣年回法事可勞者也」など記し、末に代々の妻子の法號、及び緣付きたる先迄をも事細やかに書きたるものにて、大西家の姓系を知る唯一の書なり。以上共に淨雪の手寫本。

一、名越系圖

こは京都の名越彌右衛門の家系を記せるものにて、淨味昌興の手書せるもの、丑八月とあり。

一、大西歷代書

こは元祖淨林より初めて、十代すなはち淨雪に至るまでの歿年月、及び何々釜を作る等の事を記せり。されど少しく考ふべきは、其歷代の順序顚倒せる事なり。今「靈譯書記」と比べ見るに、歷代書には

淨林―淨玄―淨淸―淨入―淨頓―淨元―淨玄―淨本―淨元―淨雪

靈譯書記及び當主の余に教へたるは、

淨林―淨淸―淨玄―淨頓―淨入―淨元―淨玄―淨本―淨元

右の如く相違せり、卽ち二代と三代入れ換り、四代五代入れ換れり。「歷代書」の裏書に

嘉永五壬子年十一月　　當時　淸右衞門

とあるは卽ち淨雪逝去の年月なり、淨雪の手書とも見えざれば十一代淨壽が手書せるか。とに角此「歷代書」といへるは「扣書」と小字もて書したるを見れば、匆々の際誌せるものにて、如斯あやまりを生じたるものなるべし、「靈譯書記」正しとすべけんか。

一、釜師之由緒

次の『名物釜所持之名寄』と共に一卷に綴ぢたる共の開卷に記せるものなり。此奥書に

此一卷先祖より書傳有之反古を取集なを又若年より相傳の趣書記之

元祿五庚辰年十一月三日

孝知家

道冶（花押）

道冶、通稱彌一郎、後彌三右衞門といふ。名は孝知、初め道也といひ、後道冶と號す。豐公時代の鑄物師西村道仁の二男に道彌なるものあり、道冶は乃ち道彌の子なり。『茶家醉古集』に『原叟時代の人にて上手』と記す外、年代不分明なりしが、今此の『釜師の由緒』と題せる手書によりて、明かに元祿時代の人なる事を知りぬ。

さて『釜師之由緒』には如何なる事を記せるかといふに、蘆屋の由來、天明の由來、越前釜の由來、及び關東作又京作の由來、又利休時代の與次郎彌次郎藤左衞門の事、その最末に慶長年代織部釜師九名を連ねたり。他に見る可からざる事どもを書せる珍書にして、殊に與次郎彌次郎藤左衞門の事を記せる條に、

右三人にして種々の釜を鑄一旦與次郎は太閤秀吉公之釜師三人隨一之上手也利久時分の釜の

出來能を與次郎と極藤左衛門彌四郎作共に今は與次郎と極其外の事は利久時代と極等の釜の鑑定法を記し、其最末慶長年代釜師九名の内には

安見與兵衛　法名道有

飯田助左衛門　遠州の釜師

西村彌右衛門　元祖道三事

湯淺喜右衛門　宗和釜師元祖宗逹事

の如きただ他書に散見せざる釜師の名等を擧げたり、此の末に綴ぢ込みたる

一、名物釜所持人名寄

といふは、名物釜所藏者の名を列記せるものにて、其の二三を記せば、

八角釜　鐶付　撮　　本願寺

本能寺　稲子釜　くわん付いなご　　茶屋新四郎

信長公紹鷗所持本能寺道場也

姥口釜　くわん付鬼面　　平野屋宗堅

信長所持極上作

なれ〳〵しあかぬなしみの姥口を人に吸はせん口をしそ思ふ

等の類なり。其數百四十餘を擧げたり。其奥書に、

此本大坂いな垣休叟樣に有之此度借用寫置候者也

文化九年中九月　　　　　　　　　大西淸右衛門

長　喬（花押）

こも亦十代目淨雪の手寫せる所、淨雪三十六歲の時にして余が見たる手寫本の内最も年代の古きものなり。

かくの如き尊き書類たるにもかゝはらず、余等の京都に在らん日迄は貸し與へ置かんといひて旅宿に置きて去る。枕につく時十二時。各〻湯婆に足さしのべてねぬ。

二月十一日

香蝶ぬし御所へ行かせ給へば、余等も車を連ねて供す、拜觀はえかなはで、余等は空しく控所にまつ。桂の御所へも行く筈なりけれど止む。日枝山颪、身を切るよりも痛くてつめたし。富小

路押小路上處に、周彝漢鼎の摸作に妙を得たる秦藏六氏を訪ふ。當主は卽ち二代目なり。その先代の事共をきく、先代は九歳にして父を亡ひ、家兄龜文堂なる者、二代龍文堂の門にありし者に從ひて鑄造を習ふといふ。黑田天外氏の名家歷訪錄に收めたる初代藏六傳中、發蠟法を研鑽すること八年こゝに初めて其精妙を究めたり、などあるは蓋し龍文堂安平の蠟型などにのつとりたる者ならむか。蠟型佛具師鍋長は文政八年藏六四歳の時歿せるもの、又江戸の蠟型鑄物師村田整珉は、天保八年七十八歳を以て藏六十六歳の時歿せり。蠟型の妙は當時普く世に知られたる時代なりしなり。先代藏六翁は明治六年朝廷の命を奉じ、氏をつれて東京に行き、天皇陛下の御璽を造り奉る。當時鈕を如何に造らんかとて玉の印鈕に倣ひ、或は鳳を造り、或は獅子を作りしかど遂に我國古代の印なる鷄頭鈕と定まりぬといふ。そは黃金を以て鑄まつりたる三寸角の御璽にして、鈕には穴あり、周圍に鳳凰紋を刻む、篆文は安部井櫟堂といへる人なり。さて作り上げたる御璽の重さは、一貫六百匁なりしとぞ、黃金一寸立方の重量は、百六十匁なればしかありけむと尊し。

翁この時まさに五十一歳なりけらし。鑄物師として至尊の御印を造りまつりし譽は、百代までの語り草とうれしかりけむかし。

翁の作品を藏せずや、有らば見せてほしと請ひたるにそこに、常に用ゐ馴されたる古銅盃式鐵瓶こそは翁の遺品なりけれ。其他二つ三つ、小さきものども示さる。余は翁の五十四歳の時寫したりと云ふ寫眞一葉讓り受けて、羽山尙德氏の撰ばれたる金工藏六傳をもらひて共に辭し去りぬ。

宿に一度歸りて午餉すませ、熊谷鳩居堂主人を訪ふ。もはら香蝶ぬし此春東京博物館にて開催の特別展覽會へむけての歷史部出品の話なり。次に埴輪ぬしのもはら物されたる博物館の時代人形を見たりとて、主人、人形の顏など物云ありと評せるに、埴輪ぬし例のごと、否とよ、今の世の人は人形師とのみ賤めて、常々教育し置かねばいざと云ふ場合に彼の如く出來上りてまごつくめり。常に教へも置かぬ輩のものを捕へて、顏つき賤しなんど評することこそ心得ね、など憚らず對ふるめり。人々の物語するを聞きながらこゝの天井を見るに、格天井の貼交ぜの畫の中に、藏六と落款ある鼎の畫あり、藏六傳中の挿畫にほしと思へど、人のものなれば、詮方なし。

昨日大西氏の申されけるは、今年の干支にちなめる馬の畫模樣の蘆屋釜を持合せれば、是非お目にかけたく、其外代々の釜どもを出し置くべければ、など云ひて約束したれば、こゝより直ちに釜の座に行く。

茶室に入れば、爐の釜は遠波松風は最早過ぎて、雷聲しきりに起りゐぬ。床には一蝶の木兎の

畫を掛け、柱のなげいれに白玉椿を活けたるが、薄暗がりの茶室の内にひとり光彩を放てり、客は三人、香蝶ぬしを首めに、次に余、埴輪ぬしと居並びぬ。主人炭持ちいでて、釜を下して爐に炭などつぐ。此の釜こそは馬の畫模様の古蘆屋釜なりけれ、埴輪ぬしいへらくは、この畫模様なればこそ雪舟が下畫とも土佐が筆ともいはゞいはめ、例の博物館の藏せる蘆屋釜十二の下圖と云ふものや、恐らくは下圖にはあらで、古き人のものせる蘆屋釜の見取圖にやあらむなどいふ。やがて主人なる人の子の十八九ばかりなる男子出で來て、茶を立てゝ余等にすゝむ。主人は或は與次郎、或は淨清、或は古蘆屋、越前蘆屋、又は淨雪が寫したる殘雪釜などくさ〴〵持ち出でゝ、懇ろに物語る中に、淨清にやありけむ八角風呂の一面ごとに近江八景の模様を鑄出したるが、常のと様かはりて見られき。香蝶ぬし及び埴輪ぬしは、たゞ鑄肌を賞玩する茶人向の無地よりは、蘆屋手の畫模様あるがよしとの給はれき。かくてあるうちにやがて膳など運ばれぬ。一と通り茶湯の心得あらましかば、吸物はなに、皿はなに、つぼには何とやうに、懷紙ならぬ手帳に書きしるして、永く釜師の主人がもてなし振を記憶すべかんなれど、此の時かゝる折、如何に問はんか如何に物せんかの辨へさへ知らざりしぞ、興さめてうたて心なきわざなりける。

釜の箱蓋の極書を見るに、六代淨元及び七代淨玄は、共に細野の印を押し、九代佐兵衛淨元は

與平の印なりしかば、この主人に問ひけるに、六、七代は一時細野氏を稱し、佐兵衛淨元與平氏を稱せしかど、やがて元の大西氏と改めぬるよし申されき。後の人の釜の事を知らむには、いささか心得置べき事どもなり。やがて九時頃にやありけむいとま申して歸るに、人力車をば用意せられたるぞ忝き。宿に歸り湯婆にぬくもりつゝ思ひつゞけける。

釜の座の釜師とふ日の春を淺みゆふかたまけて霙ふるなり

やまと繪の土佐が畫模様の蘆屋釜模様明かに見るにさやけし

古蘆屋の釜造り等はいづこゆもわざ傳へけむ神業なるかも

淨林は蘆屋手なれど村長は更にたちまさる釜師とを知る

（右一首大西家二代淨清を）

清右衛門淨雪翁は百千釜かたたやさじと傳へけむをぢ

（右一首詠釜之圖卷物）

釜の座の釜師多けど清右衛門淨雪にしく釜學者なし

（右一首詠淨雪手寫本）

古への釜かきまへて釜の座に一人のこれる釜たくみかも

（右一首當主清右衞門氏を）

二月十二日

起き出でゝ見れば、雪ちら〳〵と降りて、見渡す庭も屋根も眞白なり。香蝶ぬしの發議にて、今日は内に籠りて調べものせんと云ふ事になりぬ。そこへ秦藏六氏より、使者來りて、今よりたづねてもよきかといふ、よしと云ひやりしに間もなく、藏六氏來る。しばしありて大西氏來る。次に一昨夜尋ねたる寺町通の長松左次郎氏（みぞぐち屋）來り、同商なる柳馬場綾小路下ル佐々木辰之助氏をともなひて、此人は、やつがれよりも古き佛具師の事など能く心得たれば、同道しぬといふ。こゝには兩氏の物語ども集めて二三鑄物師の小傳をものすべくなん。

鍋長、鍋龍とも銘す。寛政享和頃の佛具師なり、多く蠟型鑄物をすれども模様の如きは鑽にて彫り出したるもあり。嘗て砂鉢を見る。其砂鉢の模様は鑽ぼりの如くなりき。此の鉢に梅壽庵と銘せり。されば梅壽庵とも號すると見ゆ。作品の名高きは、當時大阪安堂寺町福島藤吉氏の藏する十二支の三具足なるべし（猶八幡筋心齋橋東なる一入左七氏は銅器商なれば鍋長の作品を藏するなるべし）鍋長の死後赤取武兵衞なる者ありて、專ら鍋長の僞作をぞせりき。

中尾宗貞　大阪長谷川新町に住して佛具を作る。其作品には唐草に小鳥などの模様多し。鍋長は即ち中尾宗貞の敎へを受けたる者なり。
鳴鳳庵　鍋長時代の佛具師にて通稱を文治と云ふ。銘は彫銘にして四神模様を得意とす。
易貞　鍋長時代の佛具師にして喜八と稱す。三代つゞきたるが如し。ヤスサダと訓む。
江州八木濱に名高き佛具師ありき、二三代つゞけるが如し、光琳風の模様なり。
堺に九兵衛なる佛具師ありき
秀眞按ずるに萬寶全書の日本金物の作者中に
堺　九右衞門　善右衞門
と見えたる者とは別人にや、或は唐物久兵衛と云へる鑄物の根付を造れる人にや。
鍋長といへば、紹益、五郎三及び龍文堂と共に、京都にその人ありと知られたる人なり。今其の師なる中尾宗貞なるものを知り、又鳴鳳庵、易貞の如き、同時代の人を知りたるは、獨り余がよろこびのみにはあらざるなり。されどたゞ此人々の作品を見ざるを憾みとす。三具足の形、他と異りて古きものには、南禪寺金地院、及び妙心寺大德寺等にありとて、佐々木氏物語られたれど、其等を見ん事は又の日とすべかんなり。かくて人々は歸り、間もなく正午となる。日のかげさと

障子にさして、天氣晴れぬ。

午後車を連ねて博物館に行く。吹く風いと寒し、事務所にて某館員と香蝶ぬしとかれこれ東京博物館にての特別展覽會開催の事など物語せらる。後ち館内つばらかに見歩りく。余の眼に映ずるは只金物のみ、形よき蘆屋釜、古墳發掘の鏡、或は經筒、又は雞頭鈕の銅印、西本願寺出品中の天山南北路より將來品中の銅印及び絲印に似たるもの、其他佛具の金屬製のもの、藏六作の銅器數點、整珉作の唐獅子などなり。この內整珉の唐獅子の箋標に北玉波整珉の銘あり云々と誌せり、北玉叟整珉とこそはいへ、北玉波とは如何にと思ひて、獅子の腹部を見れば、草體にて刻銘あり、整珉を知らぬ者の叟を波とよむもうべなり。こは讀む人の惡しきに非ず、刻銘せるものゝ書き樣あしきに因るべけれど、廣く鑄物師の傳記など世に知れてなければ、穴勝無理ならぬ事どもならんか。武藏國新宿の花園稻荷に整珉の狛犬ありと聞けど、まだ見たる事あらざれば、其と此と比較しての評は今なし難し。火の氣なき館內に三時間餘も居たる事とて、寒さ堪へがたし。歸途豐岡神社の玉垣內の太前なる、與次郎の鐵燈臺を見る。社前の左右に一對の燈臺据ゑられたれど、其北方なるが與次郎の作銘あり。

地輪周り一丈五寸、側面に獅子を鑄出したり。地輪の上更に二段の輪ありて、其上に長二尺八

寸七分、胴周圍三尺二寸五分の雲龍つき出し模樣の棹を建つ。其棹の上部、帶の中に横ざまに一行三字乃至五字づめの文字を鑄出したり。其の文字

奉寄進、鐵燈籠、慶長五、庚子年、八月十八日。天下一。釜大工、與次郎、實久鑄之。

案ずるに、豐公薨去は慶長三年八月なれば、其三回忌に當りて、嘗て公の恩寵をうけたる天下一釜大工與次郎が、去年四月新築せられたる豐國廟前に寄進したるものなるべし。余はこの天下一釜大工と自稱して、其名を金鐵に鑄鎔せる與次郎をしも好もしき鑄もじょと思ひき、さて其上には三段の切こみより成りて、上部は扁平なる八稜盤の上に、周圍六尺六寸五分の火袋を安ず、火袋の透しは松皮菱にて六本の柱を以て縱に區分せらる。火袋上部の欄間の透しは、日月及び鳩の模樣なり、此の火袋の扉の淨に、

天保二辛卯年三月。御釜師、淨汲。

と鑄出銘あり。此火袋より屋根等は淨汲の修補なるべし、案ずるに淨汲は京の名越家三典淨味の門人なる下間莊兵衛の孫味宜のことなるべし。屋根は常に見る簡單なる蕨手六本頂上に擬寶珠常の如し。蓋し世に與次郎作と傳ふる雲龍釜の如きは此等を以て試金石と爲すべきものならん。此與次郎の燈籠と、南北相對して建てるは、其作者審ならねど、蓋し同時代の作なるべし。屋根の

頂上、寶珠の臺の覆盤に、

天明七、丁未歳、夏五、鑄匠、□□藤兵衞、藤原勝業、補之、

の鑄出銘あり、藤兵衞とは、大西家六代の釜師古淨元の門人なり。今此燈籠によりて藤原勝業なる姓名を知りたれども、其苗氏腐爛讀む能はざるは遺憾の極みなり。此時余がために埴輪ぬしは見取圖及び墨搨を、香蝶ぬしは寸法をとり給ふ。博物館にて冷えたる身は更に冴え渡る寒風にさらされて手の運びも捗々しからず。殊に南北の擬寶珠の下の銘を搨る時の如きは、例の丈高き埴輪ぬしも、流石に手のとゞき兼ねたれば、幸ひ幣殿にありける椅子をば、走り行きて持ち來て倒さじと押へ、さてそれに乘りて埴輪ぬし搨り給ふに、今朝より催しつゝありげなるぬしの腹痛は更に冷えてます〳〵堪へがたく、かゝる目には初めて遇ひけるよし、後にて聞きつ。去る頃奉天宮殿内なる數百點の古銅器見に罷らんと、香蝶ぬしの某將軍に計られけるに、冬の奉天などに行きて、冷えにひえたる銅器などに手をふれなば、掌や銅器に氷り付くならんと云はれて、冬の奉天行は思ひとゞまりぬ、と物語らせ給ふと思ひ合されて、何れ風流は寒き物よと某の云ひける樣に、さては余等が仕事も亦風流の一つなりけるよと思ひなりぬ。

天が下ひとり男の子の釜大工與次郎が作の鐵燈ろはも

大前のくろかね燈ろくだつともふみにくちさらむ與次郎が名は

豐臣のおほきおとゞの韓をうつ世にしもあれや釜鑄る與次郎

宿に歸りて夜に入り、同窓七人來る。近きあたりの某亭に小集催されて、余等招れ行く。晝間の寒き仕事に引きかへて、暖きは同窓の友のなさけなりけり。

二月十三日

布團著て寢たる姿の東山は、猶冬のまゝにて、白河夜舟なり、起き出でゝ春らしき景色に成らんとの樣子も見えず、霞の戶張かゝぐらんはそも何れの日にかあるべき、今七日ばかりの後再び歸り來ん頃や如何ならん。など心に思ひつゝ、京を立ちて奈良に向ふ事となりぬ。

余は大西氏へ例の卷物及び書類など取りまとめて返すべき爲、釜座へまはり其より停車場へ急ぐ。午前十時卅八分七條停車場を發す。澤文の主人に伏見まで送られて十一時過ぎ宇治に下車。宇治橋を渡り、橋寺に詣づ。寺は小高き處にあり、玄關の左手塀の內に庭あり、人々の案內申すひまに、一人庭に入りて見れば宇治の流眼下に見ゆ、寺の書院に斜に向ひて例の斷碑は建てり。人傳に聞きける如く、中途より繼ぎて下は無論後世のものなれど、石の性質と云ひ、古色と云ひ

寧ろ同一のものと見ゆ。文字の鐫方は如何あらんと見るに、上部の古しと傳ふる物だ、深き處淺き處などあり、且つ荒びたれば字の底の三角形ならねど、下部の新しと傳ふるものは、底三角に刻まれて整然たり。上部も新しき物との說もありとか、巧みをこらして造りなば、古めかしくも造り得ざるにはあらじと思はしむる節なきにあらず。兎に角造り足したりと云ふ下部、あまりに自然によく出來てあれば、此斷碑果して眞か僞か、余の如き者の窺ひ知るべからぬものなり。

香蝶ぬしは、曾て興正菩薩が宇治川の中島に建立せる十三重の石塔婆の中より發見せりといふ見事なる經筒など、此寺にて見給ひし事ありとて、今日も其の品どもを拜觀せんことをたのむ。この橋寺卽ち放生院の住職と云ふは、いつも京都の方にのみありて、かゝる所得もなき寺には誰も住職になる人の無ければ、姿はたのまれて久しき以前より留守番すれども、たまさかにすら人の詣で來る處にも侍らず、まことにやくたいもなき寺にこそとて、六十餘りにもやなるらん老媼一人、なにくれと、火箱を持て來、茶をすゝめなどして寶物ども入りたるらしき箱ども持て來。

箱の中には例の經筒舍利塔、又水晶の小さき舍利塔、金銅臺に乘りたる小さき十三佛などくさぐさ入りたり、種類十體程もやありたらむか。經筒と云へるは、地に薄く靑銅の乘りたるを、數年來人の手をふるればにや、少し黑味がゝりて潤澤あり、得もいへぬ趣なり。つまみの擬寶珠な

どつぶらに丈短くて、鎌倉の樣式なる事は爭ふべくもあらず。外面轆轤の引き目殘り、內面は蠟を地張りせる鑄放しの肌なり。筒の內面を熟視するに、此の側と向ひの側と相對して、縱に筋あり、何の爲の用なるか判然せねど、蓋し蓋など作る時、先づ太さをはからん爲の料なるべくや。底は共に鑄たるにあらで入れ底なり。蓋は筒にかぶさる樣なりたり。筒の徑四寸一分、蓋の徑四寸二分、高さは量り忘れぬ、埴輪ぬしや記憶しつらむ。經筒の中には、紺紙に金泥もて法華經を寫したるが、ち切れて底にたまりたるあたら惜し。

本堂の地藏菩薩見るべかり、御前の机には三具足をならべ、其の前には朝夕の讀經もこの老媼のするものと見えて、經卷數珠柄香爐など例の如し。香料少し寄進し奉りてこゝを出づ。

はし寺や法師はあらずしかれども

茶の木の畑に梅一木咲く

川添ひを川上に少し行きて、左、宇治の上社に詣づ。社人に導かれて本社に入り、宇治稚郎子の御像七八寸ばかりなるを拜し、仁德天皇御像尺八寸許なるを拜し奉る。拜殿は元、院の御所を拜領せしものにて、あげ卷の御所といひしとか、慥かに檜皮葺なりけむを、今は瓦を葺きたり。建物全體の形のよさ云ふべくもなし、淸瀧權現の建築に似たりと埴輪ぬし稱讃す。

元の道を引返し、川岸なる萬年樓と云ふに入りて、午餉たぶ。余が下痢は、今日は埴輪ぬし引き受け給ひたれば、粥など命じてやう〳〵一碗ばかりも吸ひ給ひけん、氣の毒なりし次第なりしか。香蝶ぬしと余とはくさ〴〵旨きもの腹ふくるゝまで。

鳳凰堂には立ちよらで、遠く修繕の小屋掛を見て過ぎ行く、日の高きに奈良につく。京都より來れば、奈良は千年の匂ひして、眼に見ゆる限り物さびたり、別けて今小路なる余等の宿りは。

　梓弓春としいへど若草の芝の燒山
　あは雪の降る

庭の梅、はな四ツ五ツ開く。

　佛さびし奈良のみやこの古やかた
　うす紅の梅の花咲く

二月十四日

法隆寺停車場より、田圃道を一行三人ぶらぶらと行く。折から行く手より車を走らせて來る人を見れば、國寶修繕員の新納古拙ぬしなり、これより大いそぎにて、今京都に在る黑板博士に用

事務所にて當時の貫主佐伯定胤和上にあひ雜談せる折しも修繕工場なる實相院に至る。一兩日前こゝへ遷し參らせたりとて、例の千有餘年祕佛におはする夢殿の觀世音菩薩、玄關に立たせおはします。蓮花臺より御ぐしまで、楠の二木をもて刻みたるに、金箔を押し奉りたるにて、修理しまつる處は御背にあたりて、御足より蓮臺にいたるまで、朽ちてほら穴になりたるを補ひ奉るなりといふ。寶冠及び兩肩に垂れたる銹り金物は、金堂内なる藥師德保等作の四天王金物に頗るよく似たり。去年の秋、四天王と共に修繕し奉りたる、金堂内の例の丈高き百濟佛と稱ふるみ佛も、その傍にたゝせましましき。

座敷には今や天蓋の附屬なる、鳳凰、天人など處せく並べて、天人の雄麗雅朴なる光背のとれたるを作り補ひ、或はすり漆をするなど、二人三人の人どもいそがしげなり。夢殿なる行信和尚の乾漆等身像もこゝにありて、已に修理し終りたるものとか。中島ぬしこの像を倒にして、內面を見せて、此の造像の手法が常の乾漆像と異なる所以を說明す、則ち原型を作り、次に其の雌型を造り、雌型に乾材を塗布し、布を張り、木材を以てさながら鑄型のスヂガネを入るゝが如く格子を造りて丈夫ならしめたるものにて、所謂脫乾漆なるものとか。

午飯をすませて金堂内陣拜觀す。見るごとに一二の新しき發見あり。東方藥師の金銅佛光背銘を熟視すれば、文字の一畫を一刀もて刻み、普通文字をかく筆法の順序に從はで、或は右より左に鏨を運び、或は下より上に運びたり。如何にして之を知りしかと云ふに、鏨を打ち込みて運び行き、其の留る處まくれ出でたるによりて、運刀の方法を知りたるなり。中央の尺迦佛後背銘は草稿の文字に模せんが爲か、鏨のあと幾度にも刻みたるらしく見ゆ。此の鏨法と、長谷寺なる千體佛銅版の鐫銘とは同一の如し。更に西の間なる康勝が作なる阿彌陀如來の光背銘を見れば、こは、今の工人等がする如きものと大差なくて、鏨の首尾の如き、やゝ東方藥師に類せり。

橘夫人念持佛の波濤紋の平盤の裏には、表に鑄現はせる波間と同一なる毛彫を、一二箇所にせる處あり、此時の工人等、手習の爲、裏面に試みたるものなるべしとて、中島ぬし等物語りせらる。

玉蟲厨子の鎚起千體佛を、余は嘗て長谷寺の千體佛銅版のものと、其手法よく似たりと云へる事あり、されどそは誤りなりき。更めて云はゞ、長谷寺のは、千體佛の顏、及び衣紋の細部までは鎚起しにあらで、黑豆を並べたらん樣なれど、この厨子のは針の先もて突き出したる如く、鼻口までも細微に鎚起したり、さながら、後世のモール細工を見るが如き趣あり。

かゝる類の誤りは猶數多あるべし、一昨年の冬日暮に見たる時、西の京藥師寺の金堂藥師佛の臺座は、全鑄と見たるに、去年の秋晴れて明るきによく見れば、二段にも三段にも分離して鑄たる事を知りぬる類ひなり。

此の金堂は、午後二時より三時頃、さながら太陽の西になり行く時ぞいと明らかに、隅々の壁畫までも見るを得べし、今日は折々雲立ち重なれど、恰も時は其の頃なり、四面の壁畫を見るによき折にぞありける。千有餘年以前の名畫も、年々うすくなり行く樣見えて、程なく消え去りなば如何にかせん。ガラス板を張らば如何、壁のみを有の儘持ちいでゝ他に移さば如何、などさまざまの名案はありと聞けど、何れもあやふき名案とて、今以て行はれずとか。余はこの壁畫に對ふ每に、いさゝか思ふ所なきにはあらじ。

そも彫塑の諸佛諸菩薩の像を一堂に備へたるは、奈良の寺々に多くあれども、寶生、彌陀、釋迦、藥師、四佛の淨土、及び諸菩薩、阿羅漢天人等あらゆる莊嚴と美麗とを極めたる畫を一と目見ん事は、今の世に此の金堂を措きては他に有るまじ。この壁畫に對ひて、世人或は描線に肥瘦の妙味なしといふ者あり、設色はた豐富精巧ならじと說くものあり、されどこの壁畫に對して、さる末說は耳に入らじ。余が感じは、ただ殘卷の經文を讀了し去りて、念頭に殘る佛陀の福音を

懷ふが如きのみ。天女綾羅を飜して舞ふ空よりは、蓮花の紅白雨と降り、無憂樹に風薫りては自然の音樂長へに聽ゆ。七寶を連ねたる天蓋を仰ぎ、伏して萬寶を鏤めたる須彌座を見る。この身は一時に四佛の淨刹に生れて、もろもろ如來の說法を聞き、諸天諸菩薩の加護に浴するが如し。其の構想洪大無邊に、其趣致崇高にして壯麗、到底偉人の技にして凡人の作し得ぬもの。形象は硬澁、彩色は豐富にして精巧ならず、描線は肥瘦の妙味なしとの評あるも、かばかりの感興を與ふる作品たらば、繪畫の能事は既に終りぬといひつべからずや。今の世日本畫の將來を如何にせむと憂ふるもの多し、されど一度來りてこの金堂に入り、壁畫を見る事十日たれ、安樂寺の天井に畫く張僧繇の龍は、吳道子、初めに凡となし、次の日善と稱し、第三日に大に感じ、終に留り見る事十日たりしと傳へずや。宗教畫なりと、よそに見る事勿れ、よく視てよく味はば千百の非凡畫工を產み出さんは、必ずやこの中に潛みなむ。など專門以外の籌もじがたは言、世に聞く人もあらざらん。

講堂に天人鳳凰など取り除けたる天蓋三つとも下されてありとて、中島ぬしなどに案內せらる。東方には東方のを麻綱もて釣り、中央のを中央に、西方のを西方に釣られたり。東方のは三つの內最も小さくて、例の天福の墨書はこゝにありとて、南の軒蛇腹の裏を指されたれば見る。埴輪

ぬし臨書し給ふ。

組入天井及び折上の板。すき間出來て、其上に後世の仕わざなるべし、檜皮置きならべたり。網の如く下りたる瓔珞は、鐵釘もて打留めたる跡あり、他のは銅を折曲げたるを丁寧に打ちたるに、こは極めて粗末なりなど中島ぬし物語る。天蓋内を裝飾せる畫模樣も他の古きを模擬したるにて甚だ好もしからぬものなりき。

中央天蓋。瓔珞などさがり居て略完全したれど網の如く組みたる組目の玉（無患子又は蓮の實或は水晶又はやきもの）のみを補ふに三箇の天蓋に數千箇を要するとか、さても數多き事かな。

西方天蓋。中央と同じく古き製作なれど、年代は再建非再建の論の定まらぬ間は定まらぬものなれば、好奇心にかられて何事をか見出さんなど心ときめく。斜に空さまに出でたる蛇腹板の裏にいたづら書にやあらむ「覺哉義」といふ文字ありとて、其の北側なる東方を示す。數日前黑板博士來りて天福の銘文も、これも共に模寫して歸られぬ。この三文字は正倉院古文書などの風なりと同博士の云はれつと聞く。天蓋の裏面、一面に赤色に塗られたり、其赤色の塗料もて三文字は書きたるなり。此外文字といへば合じるしらしき「東」「南」などの墨書あるのみ。埴輪ぬしが中央天蓋の見取圖などものせらるゝ暇に、余は西方天蓋の折上の上など、そこにありたる櫻欄

帚もて拭ひ清めて見めぐり、西側に廻りたるに、赤色に塗りたるものゝ下に、何やら素書の畫らしきもの見ゆ。中島ぬしと共に講堂の西側回廊に通ずる扉を開きてつら／＼見るに、こちら向の天人飛行の畫にぞありける。かゝるものありとは吾等も知らでありけりなど、中島ぬし云ふ。雲折々打重なれる空よりは、みぞれ交りの雪はら／＼と降り來て日も暮るゝに近し、埴輪ぬしなど天人の畫ありと聞きて集り來られける折は、已に西側の扉も閉ぢたる後なれば、次の日にせむとて、香蝶ぬしをうながして歸途につく。未だ汽車の來るに間あればとて法隆寺境内なる今村骨董店に入りて、くさ／＼の古物ども見る、奈良の宿に歸りて、今夜は新納ぬしも來給はんと待つ甲斐もなくて來ず、京都より歸らぬなるべし。

二月十五日

奈良の町三條通りを西に向ひて田圃にいで、招提寺に行かんとするに、日影はさしながら今日も雪はら／＼と降りく。車やとひて乘る。今朝の出立遅ければ、寺にゆきしは十一時ばかりなり。こゝの和尚は兼て香蝶ぬしと舊知にませば、さまざま種々の物語せさせ給ふ。

そのひまに、埴輪ぬしと余とは次の間にありたる火舍火鉢の形を寫し、寸法とりなどす、恰も

時なればとて、高野豆腐、ゆばなどにて午餉もてなさる。

案内されて寶藏に入る。こゝは塔頭の者の外決して人を入れぬ處なるを、香蝶ぬしの御供仕うまつりつるこそ幸なりけれ。

堺交易圖屛風を見る、畫工の落款などはなくて其の右端に、

奉寄進唐招提寺　御舍利寶前

施主　不動院賢盛

紅毛人の事などを噂にきゝて、想像もて町畫師などのかきたるものなるべし。

佛像などさま〳〵あれど、これはと驚く程のものなし、有名なる赤童子の一つは博物館に寄托しありとか、雲中菅公像は寫眞にて見つゝありし間はさして良きものとも思はざりしに、打見たる處木理あらはにして、骨董家などによろこばる可きたちの物か、樣式などは鎌倉明月院の上杉重房像、又は建長寺の北條時賴像などの如きものと見る。此他行基の墓より發掘せりといふ金銅舍利塔は一種異樣のものなりき。猿梯子昇りて二階めきたる處に經机、禮盤、及び金堂格天井支輪板三四枚、牡丹彩色模樣の美しきなどあり。梯子の下り口に又一室あり、何か三具足などはなきにや、など香蝶ぬし先に入り玉ふ。やがてありけり〳〵との給へば、後より急ぎ入りて見る。

三具足、五具足、二三種ありたる内に、一昨年江州來迎寺にて見たる天正年間の三具足によく似たるものを見出でつ、やがて其の箱を出し見れば、蓋表墨書に云、

金磁銅三具足

蓋裏に

永正拾三丙子正月日
唐招提寺年預尋海

とぞ記されける。來迎寺のは年號不分明なりけれど、干支より推して天正十五年なる事を知りけるに、これは明らかに年號も干支も讀まれて正に來迎寺の七十餘年前なることを知りぬ、嬉しなんど云ふも愚なり。埴輪ぬしやがて圖を取り給ふ。花瓶は地紋ある中蕪の尊の式にて、嘴長き古風の龍を卷きつけたり。香爐は鼎式三足にして袋足、蓋は雲透し、つまみは大きなる獅子。燭臺來迎寺のと同一と覺ゆ。靑黑色の傳世色にて處々塗金あり、塗金あるの故に金磁銅といひけん。

萬寶全書、唐金物の次第の條に云ふ、

金紫銅　唐金　所々に金箔入　かねの色なる程紫にして少しく黑く赤くつや光りあり

などある卽ちこれならんか。何はともあれ、上代に一度見えたる蠟型鑄物、其後絕えてあらざり

しが、のち德川時代に現れたるを知るのみ、廣く多く見るがうちに、天正年間にも、其以前永正年間にも出で來し事、たとへん樣もなくうれし。

此外佛具のうちに鍍金の火舍香爐ありき、精巧なる毛彫ある獅子のつまみ、鬼面の足、得もいはず美しきものなり。此の箱書などあらずやと探せどなし、さして古き時代のものならねど、足利時代は下らぬものなめり。香蝶ぬし頻りに此の火舍香爐を賞讃し給ふ。

猿梯子を下りて長持のなか探索す、圓徑六寸ばかりなる鏡一面、箱にも入らであり、龜鈕にして山水雙鶴紋なり。

此の外

御請來形鬼面五鈷

元祿十二年己卯四月五日求丁新調

知事教學院

御佛具師　吉田近江

などの箱書ある五鈷などを見る。

家光公御寄附の畫帖中、油繪にはあらぬかなど、香蝶ぬしのの給ひしものなどもありき。寶藏

見終りて、鼓樓の形のよろしきなど稱へつゝ、鐘樓の古鐘を見る。梵鐘を研究せんには、圓經をはかる大きなる曲尺及びコンパスなどをもちて、繩梯子をも携へて後の事にすべかんなりとて門を出づ、道々講堂修繕の爲取除きたる古材は、げに欲しきものよなど物語りつつ、藥師寺の境内をぬけて休息岡鎭守八幡宮に至る。

この社の舊藏なる、狛犬及び神功皇后、仲津姫の木像など今は藥師寺の有に歸したり、其他にいと古き蒔畫の脇息などありしが、今は如何にしけん。氏子總代を尋ねて見んなど香蝶ぬしの給ふ。社の建築は中央に唐門めきたるがありて丹碧を彩り、斗組肘木など繧繝彩色なり、日光などこの風に似たり、七條村に大澤管二氏を訪ひ、例の脇息などの行くへを問ふ。

直なる路を南へ九條に出で郡山に入る。こゝ古の奈良の都の京極なり、かしこは舊郡山城の外廓なり、こなたに十三の松の樹たてる處は、柳澤家の初めて郡山に領を受けて來りし處と傳ふ、今より十年以前吾が栖みたるも彼の十三松なり、など香蝶ぬしつばらかに物語しつゝ、築地の崩れたる町を過ぎ、少し賑はしき處に出で左に右に曲り〳〵て、老婆に道を教へられて平川松喜ぬしを臺所町に訪ふ。採集せられたる古瓦など示さる。共に出でたるに水木要太郎ぬし、新納ぬしに遇ひ六人になりて四海亭に入る。島村清吉ぬし亦來り會す、酒杯めぐり物語はこれより彼へと

續きて輿の盡くるを知らず。果ははがきに畫を書き、文字をかき、句をものし歌を記し、名を記し年を記し、手の筋をかきなどして夜三時に至る。下婢にうながされて人は歸り、余等三人こゝに宿る。郡山の名物といふアンカと云ふものをしてねぬ。

二月十六日

香蝶ぬしは郡山中學校にまゐれば、先に法隆寺に行くべしとの事にて、埴輪ぬしと余とは汽車にて法隆寺へ。

修繕工場の實相院にて、新納ぬしの說明をきく。天蓋の錺金物、天人及び鳳凰など再び見る。錺金物數種あれども、細き切透しと太き切透しとの二種の技法に過ぎざること。

細き切透しには細き針金もて、圓形に打拔きたる銅片を處々に結び付けたる樣、古墳などより出づる兜、或は履に似たる手法なる事。

兩樣の錺金物共に鑢もてすりかきたるものか、鑽もて切り拔きたるものか、判明せざれど、或は鑢もてすりかきたるにはあらざるかと云ふ事。

天人の面相四角ばりて長く、右左の口角の上に向ひたるは止利作のもゝらしく、金堂四天王、

或は中宮寺の如意輪などに似通ひたること。

天福年間作の天人はそれのみ見れば古雅なれども、古しと考へらるゝ推古時代のものに比ぶればいたく見劣りせらるゝこと。

天福の鳳凰も亦遙に古作の雄健にして、高古なる趣とは異なりて規模小さき事。

瓔珞の泛子に似たる木に、しら木あり、彩色せるあり、漆を塗りたるありて、何れを新、何れを舊と定め難き事。

古今目錄抄には、聖德太子御創立の天蓋瓔珞落ち盡して一も餘すものなしとあり、さらば今の新舊見分け難き瓔珞は、或は鎌倉以後にて、或は秀賴頃のものもあるべく、元祿頃のものもあるべき事。

瓔珞の最下に、金銅造りにて扁平なる魚形の、倒になりたる如き鈴あり、初め其手法を見たる時、新舊二種の區別あらんと思ひたるに、そは新と舊とにはあらで工人の異なりたる事など。

說明を聞きつゝかゝる事ども思ひつゞけぬ。

今日も金堂に入り、また講堂に至る。

埴輪ぬし墨斗の筆ぬきとり、余は鳳皮紙を擴げもちて、例の西方天蓋の飛行天人の上に載せて

埴輪ぬし模寫し給ふ、今日も晴れやらぬ空模樣、餘寒きびしくて、筆とる手、紙押ふる手に、擬氷とたるゝ淸洟こすりつゝ、からくして寫し終る。

今此天人の畫を見るに、壁畫に見る天人の如く、大らかに手づよき處なくてひき締りたるは、猶壁畫程大きからねばか、橘夫人念持佛の厨子の畫と、やゝ相似たり、天蓋蚌蛇腹の葡萄模樣の如き、又內側山水畫の如き、或は格天井內蓮花紋等を見て、此天蓋の製作は何れの時代に置くべきかは未だ世の學者の說はきかねど、或は四天王、又は壁畫、乃至橘夫人念持佛の厨子等と同時代のものにはあらざるか、識者の敎を乞はまほしきものにこそ。

修繕工場に歸れば、香蝶ぬし余等が後追ひ郡山より來給ひて、新納ぬしと物語せさせ居たまふ。郡山にて求めつとて、漆器、陶器などゝ共に、鎌倉時代とおぼしき古鏡一面示し給ふ、さる珍しきものあるならば、今より再びかしこに行きて、宿らんとて、再び郡山に行く。新納ぬしに停車場まで送らる。郡山なる水木ぬし、法隆寺に行きて余等をさがせど見えざりければなど云ひて來り給ふ、共に郡山に下車す。夕暮に二三骨董店など見めぐる。この夜再び四海亭に泊る。水木ぬし來給ひて、明日は奈良なる橋井善次郎氏所藏の古文書展覽會あり、終りて對山樓にて所藏品の交換會あり、との事などきく。水木氏の所藏品を見せて貰はんとて打ち連立ちて行く。

二月十七日

郡山を出でゝ奈良に向ふ。

南圓堂にいたる。新納ぬしが今朝法隆寺より來りて余等を待ち給ふに會ふ。

藥師寺東金堂十一面観音木像胎內より出でたりと云ふ、八稜寶相華文古鏡一面、延喜通寶十箇及び麻の束ねたる、竝に籾及び舎利等を見る。延喜通寶錢は漸く世に行はれたるものらしく、黑色或は靑綠斑あるもあり。古鏡は八稜の一角より一角まで、わたり二寸五分許、內に圓を劃して單純なる寶華文あり。鈕は小さくて鎔銅行きとゞかず、中途にて切れたり。八稜なる外緣、鑄淩精巧ならず、ゆがみて正しからず。色は新作せるものに、直ちにスリ漆せるものにして、銅の地色赭褐に透きて見ゆ。表は物など寫らねど、一度は磨き揚げたるものなるべし。此鏡のみにては時代を何時と定め兼ぬれど、其佛像の樣式は如何と問へば、弘仁風を加味せる藤原式なりと新納ぬし答へらる。未だ純然たる藤原式になり終らで、其前期の樣式の殘れる時代たる可ければ、此の古鏡は醍醐天皇の延喜七年に鑄たる延喜通寶錢が漸次世に行はれたる頃の作品と見ば、佛像の樣式と考へ合せて、ほゞ年代を知るべく、珍らかに有益の發見なり。

新製の鏡裏に漆をスリ塗る事、此頃の風なるや否や、此の胎内發見のもの一面にては、確たる證據とはなし難きも、注意すべきものなりかし。午餉ののち南圓堂内に、本尊後方なる修繕工事を見る。

今見たる胎内品を藏せりといふ十一面觀世音菩薩横たはる、次に名高き秋篠寺の伎藝天、蓮座より下して柱に寄せて立たせたり。同寺の梵天像の首をぬきたるあり。其心木に正應二年の墨書あり、埴輪ぬし臨書し給ふ。

其墨書に奉行の官人が、自らの無病にして官位心のまゝに得られ、子孫無窮に、又序に、母の壽命までをも祈願するなど記したり。欲ふかき役人かなとて、香蝶ぬし笑はせ給ふ。此墨書によれば、正應年代の造立なるか、將た補修なるや明かならねど、此梵天も伎藝天も、首のみは天平作の乾漆にて。胴は共に正應のものなる可き事は、斯道に明るき新納ぬしも云はるゝところ、余等にも然見えき。胴部の裝飾模樣、正應年代のものとして確證あるものなれば、よく〳〵模寫して置かんと思ふなりなど新納ぬし物語る。年代記をくり披けて見れば、正應二年は、弘安四年元寇の役を去る九年の後なり、「異國止賊」の銘文中の一句大に味ふべきかな。

國寶修繕の事業も亦大に面白き事かな。あるは佛の首をぬきて墨書を見出し、腕を去り、胎内

の藏品を見いで、叉造立年代を知るのみならず、親しく古代の名作に鑿を加へ色を施して古人技巧の存する所を究むるなど、實にうらやむ可き事どもなり。千載の一遇とも云ふべき國寶修繕、輕々しく見過してよかるべき事かは。

折しも堂外に詣で來れる者二人三人、鉦を打ち聲を揃へてうたふを聞けば、

はるのひはなんゑんだうにかゞやきて、かすがのやまにかゝるふぢなみ…………………

……

徳川の世の泰平の調べ、今猶のこるがめでたし。日永く暖き春の日に、春日山に咲きさかる藤の花見つゝ、この聲を聞かば、眠りは自ら催すなるべし。

新納氏も共に、北風呂なる橋井善次郎氏の古文書見にものす。京の富岡謙三氏、大阪の幸田成友氏なども立ちまじりゐたり。最後に茶室に入れば、香蝶ぬし爐の釜を見よと注意し給ふ。やがて主の翁に、例の釜見せ給へと水木ぬし請ふまゝに、如何なる釜ならめと待つ程に、持ち出されたるは、肩つき丸釜にて、胴の前後圓相の內に、「興福寺」一方に「常住」とあり。極書二通あり、一通には

繰口丸肩衝釜

圓相ニ興福寺ト

文字有之

一 胴徑　九寸二分半

一 口廣　四寸三分

一 環付　鬼面

右利久時代南都久怡作

無紛者也

丑十二月廿三日　淨　味

三　典（花押）

利休時代に當り、久怡なる釜師のありけりとは、今初めて知りぬ。名工一人知り得たる心地す。

金工史の材料思はぬ所にてまた一つ殖えたらずや、と香蝶ぬしほゝゑみ給ふ。

今一通には

證

繰口丸肩衝釜

寶永歳中先代淨味三典折紙有之
右三典淨味極之通南都久怡作也
則寶永六己丑歳季冬先代極置
處無紛者也

御釜師　名越彌右衞門　(印)
丙午霜月十三日　昌治　(花押)

彌右衞門の下にある黑肉印は紙の裏に押したり、昌治の傳あきらかならねど、京都の名越家跡絕えて今なし。余等の旅宿たる對山樓への道すがら、白石村治氏の珍藏品見に立寄る。先に橋本氏にありし人々も來あはせたり。眼にふるゝ限り、皆珍しく思はれき。二た夜あけたる對山樓に歸る。大阪より新納ぬしに用事ありて來られたる天岡ぬしに遇ふ。奥の樓上にて今日の人々の、所藏品の交換ありといへば行きて見るに、最早終りに近き頃なり。

寢ねたる後下婢一通の折り文持て來、奥の樓上なる人よりとて出す、嘗て日本派の俳句に名を知られたる、水落露石氏の手紙なりけり。今宵はいねたれば明くる朝御目にかゝらんと返事かきてもたせやる。

二月十八日

今朝終に露石氏に會ふべき機會を失ひぬ。骨董家某氏を訪うてあらず、博物館に行く。こゝは奈良の古き社寺どもの寄托品もて、其八分は埋められたり。墨書きある佛像、或は傳說あるもの等は皆書き出されたれば、頗る便りよし、來る每に眼新しき物二三を發見するは嬉し、其內海龍王寺寄托鍍金舍利塔といふもの、足利頃の製作と見るべきものなるに、臺裏に

正應三年七月日彫工七條昇蓮大工白河行圓

の鐫名ありといふ、秋篠寺梵天の首の心木墨書より後るゝ一年なり。

橘寺出土の磚の小さき又は大なる破片數箇あり。或は足の蓮華を蹈む處、或は腕らしきもの、或は太股のあたりなど、つら〳〵見れば大きさ五六尺もあるべき半肉佛像の破片らしきものなり、香埴輪ぬしも此種の首を持てりとの給ふ。如何なる用途のものなるか今明かに窺ひ知る事難し、香蝶ぬし曰く、こは長谷寺千體佛銅版を見て此磚佛と比較するに、中央には大きなる佛を彫刻し、小さき方形なる、或は長方なるは、周圍に置く事は宛も長谷寺の千體釋迦佛版を見るが如き有様として、壁などを裝飾せるにはあらざるかと、再び行きて長谷寺の銅版を見る、さならむ、しか

ありけむと埴輪ぬしも余もうなづきぬ、釘穴ありて鐵釘の腐れたるが殘れるは往々世に見る所、又方形或は長方形なるは、必ず一々離ればなれに置かで、一處に集め揃へたらんと想像せられぬ。

午後四時ばかり宿に歸る。買求めたる物ども香蝶ぬしと埴輪ぬしと、韓櫃に收め給ふ、今宵こゝを立ちて、大阪に向ふ用意をさ〳〵怠なし。韓櫃はこゝに求めたるものゝ一にて、米櫃にしても宜しからずやなどの給ひて買はれしものなりけり。

夜十時大阪なる土佐堀端の佐々木といふに著く。郡山あるは奈良の物さびたる宿にくらべて淸らかなるに、弘仁式したる女の出で來て立振まふに、さながら冬かれの岩間より出で來て見れば、さゝれ石眞白なる溪川岸の梅、しら〳〵と咲きほこる處に、鶺一つ逍遙せる趣あり。風呂に入り奈良のちり洗ひ去り、十一時ばかりに夕餉には遲けれど、すませて寢ぬ。京都の湯婆はなくも、心地よく夢路をたどる。

二月十九日

この朝、東平野町なる天岡均一ぬしより、電話にて今日午後、春日出新田なる古建築見物に案內申せば來給へといひ來る。さらば午後に天岡ぬしを訪はん、それ迄はそのあたり步きみむとて

御靈を經て鹿田書店に入る。十七日の夜、對山樓にて會ひける主人不在、折から幸田成友氏來られぬ。樓上に數多の古書ども見る。主人歸る。こゝに午餉すませて、東平野町に天岡氏を訪ふ。春日出の事よく知りたる某氏一人と共に一行五人春日出に車走らす、いたづらに物騷がしき川口を左にして右に折れ、やがて新田の中にもの古りたる森を見る。これ今日の目ざす處にて、卽ち今は清海氏の別業なりとぞ。(この建造物は後年横濱三溪園に移して現存)

扉閉ぢたる門のくゞり戸より入るに、正面玄關の右に樓の餘り高からぬを見る。內に入りて案內書一冊づゝ貰ひて見めぐる。

降りくらす雨のつれ〲に笙卸し笛ひちりきを合するや誰

欄干に丹塗にふれてきざはしを上りおりけむ美しき人　(憶淀君)

よき人の居なれの母屋の高殿におばしまに寄れば春の風吹く

伏見のや桃山人の花とちりて幾代か經

ぬるこれのやかたは

香蝶ぬしは大阪府の某氏へ、埴輪ぬしは親戚の方へ、余は天岡ぬしと共に其平野町なる家に行き、夜九時半宿に歸る、埴輪ぬし今日の建築圖ものせられゐたまふ。

二月廿日

明けぬ内より雨しとゞ降る、九時半鰻谷なる住友家にものす。

京都の藏六氏に、住友家へ共にものせんとかねて約したる事のあれば、電報うちたるに、早已に來てゐ給ふ、天岡ぬしも見ゆ、幸田成友氏も專門家と共に見ば益する所も有らむと、昨日春日出にて別れたる人來會はせて、六人の一行と共に同家の古銅器拜觀す。世に古銅器模造師なるものあり、よく素人の眼をくらますに妙を得たり。よく〳〵見れば其の銅質といひ、技巧といひ傳色と云ひ、一目にして僞造なることを看破し得れども、多くの人は欺かれ易し、今住友家の銅器を見るに、一は其傳色に於て、次は其技巧に於て到底今人の企及すべからず、模すべからざるものあり、例へば一見模倣し易き黑綠色と見て、つら〳〵看來れば、紋様の細微にして深き處判然としたるに、そは錆のはげたる下、更に純靑色なるあり、或は往々漢鏡に見る所の、銅の內部よ

り噴出せる腐蝕の、異狀なき外面の、水銀色をさゝけ出して、所々凸出せるが如きなど、決して今の工人の思ひも及ばぬ傳色を見る可し。徒らに漆等を用ゐて、或は繪の具を盛り上げ、又は鏽鐼の類を以て腐蝕し去りしが如く裝ふとも、到底作し得可からぬものあり、世人の多くが、或は銹の盛上り、或は腐りたるが如くなるを以て、眞に古しとして賞玩するものに、却つて模造品の多きを見る、心つくべき事なりかし。

されど支那に於てはすでに、唐代に於て三代の古器の模造を見、また下りて宋に於て盛に僞造あるが如し。もしそれ斯くの如くならば、今より七八百年、乃至千年以前の模僞品は、とても眞僞を分別すべからぬものあるべし、此の如きは宜しく所傳に從ひ、しばらく或は周、或は漢と定め置くべきものか。

住友家藏品中、古鏡亦頗る多し、中に唐代以後我國に行はれたる古鏡と見るものゝ面に、佛像を毛彫にせるを認めたり。此等其佛像の樣式より考へて、ほゞ鏡の年代をも定むべき一證據品なりと思ひき。蓋し住友家の古銅器を收めたる庫は、世界に誇るべきものゝ一なるべし。

今宵大阪なる同窓の人ども、香蝶ぬしの爲に宴を設けむとの約あれば、先づそれ迄に住吉、堺のあたり見物せむも興あらめと出で立つ、春雨の降るに、難波まで車をつらねて、それより汽車

ゐるこれのやかたは

香蝶ぬしは大阪府の某氏へ、埴輪ぬしは親戚の方へ、余は天岡ぬしと共に其平野町なる家に行き、夜九時半宿に歸る、埴輪ぬし今日の建築圖ものせられゐたまふ。

二月廿日

明けぬ内より雨しとゞ降る、九時半鰻谷なる住友家にものす。

京都の藏六氏に、住友家へ共にものせんとかねて約したる事のあれば、電報うちたるに、早已に來てゐ給ふ、天岡ぬしも見ゆ、幸田成友氏も專門家と共に見ば益する所も有らむと、昨日春日出にて別れたる人來會はせて、六人の一行と共に同家の古銅器拜觀す。世に古銅器模造師なるものあり、よく素人の眼をくらますに妙を得たり。よく〳〵見れば其の銅質といひ、技巧といひ傳色と云ひ、一日にして僞造なることを看破し得れども、多くの人は欺かれ易し、今住友家の銅器を見るに、一は其傳色に於て、次は其技巧に於て到底今人の企及すべからず、模すべからざるものあり、例へば一見模僞し易き黑綠色と見て、つら〳〵看來れば、紋樣の細微にして深き處判然としたるに、そは錆のはげたる下、更に純靑色なるあり、或は往々漢鏡に見る所の、銅の內部よ

り噴出せる腐蝕の、異狀なき外面の、水銀色をさゝけ出して、所々凸出せるが如きなど、決して今の工人の思ひも及ばぬ傳色を見る可し。徒らに漆等を用ゐて、或は繪の具を盛り上げ、又は鑛錆の類を以て腐蝕し去りしが如く裝ふとも、到底作し得可からぬものあり、世人の多くが、或は銹の盛上り、或は腐りたるが如くなるを以て、眞に古しとして賞玩するものに、却つて模造品の多きを見る、心つくべき事なりかし。

されど支那に於てはすでに、唐代に於て三代の古器の模造を見、また下りて宋に於て盛に僞造あるが如し。もしそれ斯くの如くならば、今より七八百年、乃至千年以前の模僞品は、とても眞僞を分別すべからぬものあるべし、此の如きは宜しく所傳に從ひ、しばらく或は周、或は漢と定め置くべきものか。

住友家藏品中、古鏡亦頗る多し、中に唐代以後我國に行はれたる古鏡と見るものゝ面に、佛像を毛彫にせるを認めたり。此等共佛像の樣式より考へて、ほゞ鏡の年代をも定むべき一證據品なりと思ひき。蓋し住友家の古銅器を收めたる庫は、世界に誇るべきものゝ一なるべし。

今宵大阪なる同窓の人ども、香蝶ぬしの爲に宴を設けむとの約あれば、先づそれ迄に住吉、堺のあたり見物せむも興あらめと出で立つ、春雨の降るに、難波まで車をつらねて、それより汽車

にて住吉へ、住吉神社に詣づ、此の御社の大神は、神功皇后の御時顯れ給へる神にて、表筒之男、中筒之男、底筒之男、の三神を祀り海上を護り給ふ神とて、奈良朝の頃は遣唐使或は、九州へ下る防人等の船に、此神を齋きまつる由、くさ〴〵見えたり、萬葉集卷之十九に、

天平五年贈入唐使

空見つ大和の國、靑丹よし奈良の京師ゆ、忍照る難波にくだり、住吉のみ津に船乘り、たゞ渡り日の入る國に、つかはさる吾背の君を、掛卷の由々しかしこき、住のえの我大御神、舟のへにうしはきいまし、舟ともにみ立たしまして、云々　（下略）

など見えたり。住吉の松とて名高きものなれど、み社の前、そり橋の邊に、一と抱へばかりの松あるのみにて、更により古く、太きもの見當らず、古今集に

住吉の岸のひめ松人ならば幾代か經しととはましものを

よし、住吉の松、人なりとも、さばかり古き代の事はえ知るまじくなん、萬葉卷七に、

住のえの岸の松か根打曝しより來る浪の音の清しも

とあるを見れば、其のかみ浪打際に、松が根を浪に洗はするもありけんかし、されど今はなし、萬葉には住のえの岸の埴生とよみ、又は岸に寄する戀わすれ貝と云ひ、濱に寄るうつせ貝などの

歌かず〲見ゆれど、如何なるものかを知らず。

やがてみ社の鳥居前を一筋に、海の方に出づ、砂白く、松原緑也。晴れたる春の日ならましかば、如何に樂しからましなど思ひつゝ、燈臺のある處の堤に出でゝ、海は足もとにありと思へるが、なか〲遠きにあきれ果てつ。

住のえの岸を田に墾り蒔きし稻ひでゝかるまであはぬ君かも

とあれば、奈良朝の頃より已に岸を開墾して田とせりけんかし。

住之江の得名津に立ちて見渡せば六甲のとまりゆ出づる舟人

晴れたる日ならましかば、六甲も目の先に見ゆべかめれど、今日春雨に打かすみて、只眞白き海のみ見渡さる。

丹後風土記には、彼の浦島の事を彼國の事とすれど、萬葉にはこの墨の江の事としたるは蓋し奈良の都人は間近き住吉の方適切に思ひけらし、されば住吉の浦の漁師が子として、浦島をうたへるならむか。

汽車に乘りて堺へ。大寺といふに詣づ。

今は開口神社とあがめられたれど、昔の名殘ある三重塔婆あり、樓門は繪馬堂となりて殘る。

社前に一對の銅燈籠あり、鐫銘に曰く、

天和二壬戌蔵六月十二日

鑄工菊波出雲少掾藤原宗治

明暦貳年丙申三月吉辰

奉寄進三村念佛寺本堂前

金燈籠一基

こゝに菅公畫像ありと聞けど見ずてやむ。

日暮近き頃、天王寺まで汽車、新清水の八百松楼といふ今宵の會場にものす。

二月廿二日

埴輪ぬしと余とは、こゝより歸京の筈なりしかど、共に香蝶ぬしのおん供して讃岐の國高松に行かんとす。

川口を十二時近く船出す。

余は一人うたたねしゐたるに、須磨も舞子も見ゆるぞ、明石も見ゆなど人々云ひのゝしるに、甲

板に出づれば香蝶ぬし、埴輪ぬし居たまひて、この景色はいかになどいふ。折から西行の汽車その見ゆる海岸の松原の中を煙の帯を殘し置きて走り行くも面白し、余は船に弱ければそこ／＼にして又籠りて寢る。高松に上陸せるはその夜九時。

人麿の『國柄か見れども飽かず、神柄かこゝだ貴き』讃岐の國に渡りつと思へば、そゞろに車の内にて浮びいでたる歌一首

玉藻よし讃岐の國の見ともあかぬ地は蹈めども暗夜しうらめし

船中にて乘合の人より教へられたる宿にいたるに、頗るあやしげなる家なれば、車夫に命じて他に行かしむ、乃ち可笑と云ふ旅亭にいたる。

二月廿二日

春雨といはむは如何はしき大雨を冒して、工藝學校へ。こゝなる教諭の多くは同窓のものなれば、我美術學校の分校らしき心地す。教場殘るくまなく觀終り、晝餉も了りて、黑木校長及び田雜教諭に案內されて、栗林公園に。博物場見終りて後、公園見めぐる。雨漸くあがりて松の木立露けきに梅の花は已に盛をすぎぬ、こゝなる庭は右に紫雲山といへる松山を負ひたる下に、池を

たゝへ、島を築き、亭をしつらへたる、いつまで見るとも飽かぬ眺めなり。聞くならく岡山の後樂園と、金澤の兼六園とこゝのとを日本三公園と稱するとか、うべ日本三公園の名に恥ぢざるものにこそはあらめ。庭の木立多くは松の木にて、錦木、楓など、たゞ僅かに植ゑ交へたるのみ。冬は松につむ雪面白かるべし、夏は緑いやまさりたるに、颯々の松風涼しかるべく、秋の月見、春のこちたき花もなき眺、亦一入なるべくおもほえて、そのかみの庭造りの技倆の常ならざるを忍びぬ。

夕方、鐵道旅館といふに晩餐會を催せばとて、招かれて行く。

二月廿四日

車を連ねて志度寺へ行く。朝霞深くたちこめたる中に、左に屋島の頂きを見、右に名も知らぬ山々打見やりつゝ行く。

志度の某氏を訪ふ。兼て黑木工藝學校長の紹介あれば某氏と連立ちて直ちに志度寺に詣でたれど今日明日は善通寺に招魂祭ありて、こゝなる住職などそこへ行きてあらねば、寶物など見る事叶はず、引返して多和神社なる多和文庫にものす。

この文庫と云ふは、故の祠官松岡調氏の集められたる古書畫、古器物等、數百點を收めたる文庫にて、考古家の垂涎まさに三尺なるべき所、かゝる田舍に、かゝる人ありて、此の如き文庫をさへ造り設けたりと、ひたすら感嘆の外なし。

銅印拾數箇、多くは、雛頭鈕なるがうれし、埴輪ぬしと共に其の形などを寫す。

和鏡三四面、皆面白し。拓本つくる。

銅鐸一口、これも寫しとる。

多和より、もとの道を返す。左手にあたりて、佐藤嗣信最後の處と記したる木標たてり。車にゆられながら、平家物語の記事など思ひ浮ぶ。

判官は嗣信を陣の後へ舁入れさせ、馬より下り手をとらへて、三郎兵衞如何覺ゆると宣へば、今はかうと存候。思ひ置く事は無きかと宣へば。何事をか思ひ置き候べき。君の御世に渡らせ給はんを見參らせで死に候はん事こそ口惜う覺候へ。さ候はでは、弓矢取ものゝ敵の矢に當り死なんこと、本より期する所に候也。就中に源平の御合戰に奥州の佐藤三郎兵衞嗣信と云ひける者、讃岐の國屋島の磯にて、主の御命に代り奉て討たれけりと、末代までの物語に申されん事こそ、弓矢取る身は今生の面目冥途の思出にて候へ。と申もあへず唯弱りに弱りければ、…

昔の武士が主人の射られなんとする矢面に立ちて、命を捨つるさへあるに、只今生の思出には、自らの名の末代に傳はらんのみが願ひなりと云ふ。かくてこそ其の血統を受け繼きたる今の世に露國と戰ひて、上御一人の御爲に、身を鴻毛よりも輕んじ、世界の人どもに、あはれ大和魂よ、あはれ日本男子よと云傳へ、はやし立てらるゝなれなど、それより彼へと思ひつゞけぬ。

同じ日那須の與一が日の丸の扇のかなめ射抜きたる事どもを想ふに、此邊其昔は波寄する磯にして、屋島は程へだゝりたる實の島なりけん。何れの處に判官義經はひかへたりけむ、平家の者共はかしこにや陣どりけむ。

あれは如何にと見る程に船の中より年の齡十八九許なる女房の誠に優に美しきが、柳の五衣に紅の袴著て、皆紅の扇の日出したるをせがいに挾みたて陸へ向ひてぞ招いたる、…

戰爭の最中にかゝる事まことにありし事どもにや、さても優長なる事なりかしなど考へらる。

判官射つべき仁は御方に誰かある。と宣給へば、手垂ども幾等も候中に下野國の住人那須の太郎資高が子に、與一宗高こそ小兵で候へ共、手はきゝて候へ、…

與一、年二十、今や後代に迄名を留めたる功名を顯さんの推薦に預る、與一初めは辭したれど、義經の下知背くべくもあらじ。

御前を罷り立ち、黒き馬の太う逞ましきに、まろほやすりたる金覆輪の鞍置いてぞ乗つたりけるが、弓取直し、手綱かいくり、汀へ向て歩ませければ、味方の兵ども、後を遙に見送りて、此若者一定仕り候ぬと覺候と申しければ、判官も頼もしげにぞ見給ひける。矢比少し遠かりければ、海へ一段ばかり打ち入れたれども、猶扇のあはひ七段ばかりは有らんとこそ見えたりけれ、…

與一が心の中如何ありけむ、敵も味方も固唾を飲んで見守りたらむ。

比は二月十八日の酉の刻ばかりの事なるに、折節北風烈しくて、磯うつ浪も高かりけり。船はゆり上げゆりすゑ漂へば、扇も串に定まらずひらめいたり、…

如何に上手の射手なりとも、的の定まらぬこそ口惜しく悲しかりけめ。ましてや海には平家、陸には源氏、眼を見はり靜まり返りて見物す、晴がましき光景かな。

與一目を塞いで、南無八幡大菩薩、別しては我國の神明、日光の權現、宇都宮、那須のゆせん大明神、願はくは、あの扇の眞中射させて給はせたまへ、是を射損ずるものならば、弓切り折り自害して、人に二度面を向ふ可からず、…

一世一代晴の場所、只神明の加護を仰ぐの外はあらざりけむ。

心の中に祈念して、目を開いたれば、風も少し吹き弱り、扇も射よげになつたりける、…

幸なるかな。幸なるかな。神佛も祈願をきゝすましたりと見ゆ。

與一鏑を取て番ひ、よつ引いてひやうと放つ、…

鏑矢の行くへや如何に。

十二束三つぶせ、弓は強し、浦響くほどに長鳴して、過たず扇の要ぎは一寸ばかり置いて、ひふつとぞ射切つたる、…

與一が望みは空しからず。

鏑は海へ入りければ、扇は空へぞあがりける。春風に一もみ二もみ揉まれて、海へさつとぞ散たりける。夕日の輝いたるに皆紅の扇の日出したるが白浪の上に漂ひ、浮きぬ沈みぬゆられければ、沖には平家舷を敲いて感じたり。陸には源氏箙をたゝいてどよめきけり、…

七百年の昔がたり、眼を塞げば、今猶源氏平家のどよめきを聞くかと疑はれ、眼を見開けば乃ち吾等は高松の町の入口にぞつきにける。

二月廿五日

めさむれば鶯しきり鳴く、東京にては鳴かぬを、珍しき事かないとへば、日暮里村などはさも

あらめ、吾が居る原町あたりは、正月頃よりうるさき程鳴くめり、など埴輪をしの給ふ。

今日は西方に向はんとて、汽車にて西す。沿道の山々の頂、すべて古墳のあるらしく見ゆるはひが目にはあらじ、國がらか見れどもあかぬ國なれば、奈良朝以前は尊き人ども數多住みけんなど物語りつゝ、國分寺にも下りたくはあれど思ひとゞまりてやがて善通寺に下車す。昨日今日招魂祭なりとて賑はしき事限りなし。塔を目あてに善通寺を訪へば、何くれの見世物鉦太鼓など打たゝきてさわがしとも騷がし。

今日はいそがしきに、明日ならば寶物など見せんといへば、明日を約して寺を出で埴輪をしの友なる軍醫の君をとふ。

高松の宿屋より案内されたる、備前屋といふにいたり、午餉の用意とゝのへ置かしめて、少しそこら見てあるかんとて、元さや橋の跡にかけたる、石橋を打渡りて、川上なる鞘橋にいたり見る。常の橋に屋形を造りたるものにて、古風なる橋なり。昔は參詣の男女皆此橋を打渡り、金刀比羅に詣でたるにて、琴平の一の名物なりけるとかや。何者のしれ業ぞや、總てかくして名所古蹟などは湮滅しぬめりなどさゝやく。欄干の擬寶珠唐銅製にて其銘に、

藤原正茂

とありき。工藝學校にて見たる香爐の銘に

勅許御鑄物師　杉田光廣作

文政七年三月　日

とありき。勅許とかく事關東にても見受くる事なり。午後金刀比羅神社の寶物館へものす。淺草の仲見世を見る如きがならびたる前を、幾階かあるらん石段のぼり行く。寶物館の建ちたる庭に立てば、琴平の町は眼下に廣がり、遠く海に臨む處多度津丸龜のあたりにやあらん、眉のごと雲井に遠きは吉備にやあるらん、飯野山は高しと思ひき。石造二階建の西洋建築中に陳列されたるもののうち、殊によろしと思へる物どもを記せば、

清信筆當社大祭行列古圖屛風一雙

印に岩佐清信とあり、例の鞘橋あらはに描かれたり。

和　琴

傳云延喜年間作と、木理あらはにして甚しくそりあり、古雅愛すべきもの。

菊花にすゝきの蒔畫の箱の方却つて珍重すべし。

唐鞍二具

辨財天十五童子

傳云金岡と、今は國寳に指定せられぬ。

觀世音木像

傳に空海作と稱すとかや、等身にして彩色あり。裳のあたりの模樣あからさまに見ゆ、其作風は所謂弘仁式なるものなり、珍とすべし。

不動明王木像

傳云智澄大師圓珍作にして世に淚不動と稱すとかや、奈良新藥師寺の不動明王の木造立像とやゝ似て、少しく刀跟にぶき感あれど、前の觀音木像と共に珍なるもの。

國寳なよ竹物語繪卷物

一に鳴戶中將物語とも、又吳竹物語とも云ふ。後深草天皇の白峯御廟へ勅納し給ひしものとぞ、畫は藤原隆能とも高階隆兼ともいひ、書は大納言爲家とも世尊寺家經とも傳ふといふ、頗る珍玩に値するもの。

永徳筆屏風一
大杉の森々と立ちたる間に、富士山の聳ゆる圖なり、一見桃山百雙の内かと思ひしに然らず
されど其の剛膽なる畫風は流石に桃山時代をあらはせり。

青磁花瓶一對
他に同じ青磁の香爐と共に白峯御廟の重寶といふ、其美麗まれに見る青磁なり。

こゝにて當社の某氏にあひ、先づ書院の張付を案内申さん先に、御參拜せられ給へかしと云ふ
まゝに、又幾級かの石段を上る。途中水屋の天井に唐銅燈籠の珠算盤玉の形したるが釣されたり。
唐草の透しにて蠟型鑄物なり。其銘に、

天保十三壬寅十月吉日
御鑄物師當所住　牧田光重作

とありき。

琴平神社參拜し終りて下山。社務所に入り書院の張付應擧の筆を見る。鶴の間の鶴、虎の間の
虎、次に七賢人の間、此の七賢の顏ことごとく墨もて塗りつぶされたるを、洗ひ落したるなりと
ぞ、上段の間は卽ち瀑布なり、去年修學旅行の際見たる、西本願寺などの金張付と比べて遜色な

し、應擧の大家たる所以こゝにありきと賞讃す。

次に村田丹陵の筆なる富士山の畫を見る。床の間の中央に先づ富士の頂上を畫き、左右の壁を通して襖に至るまで富士の大傾斜を畫けるもの今人の意匠としては奇拔と云はざるを得ず。次に同人筆の牧狩の間を見る、狩裝束したる武士の、馬に跨りて立てるあり。走るあり、弓に矢つがへて鹿を射とむるあり、其衣服、及び弓やなぐひに至るまで、いさゝかも非難はなけれど、馬は西洋駄馬の誹りは免れまじくなん、殊に富士の間との間の襖にこなたへ向けたる馬の尻を大きく描きたるは、あまりと云へば心なき業なりけり。

雪舟筆八景屛風

永德筆蘆分船屛風一雙

松本山月筆馬の屛風一雙

など室の一隅にありき。

別間に行きて寶藏より持ち出されたる寶物どもを見る。

天明二年當山西山ゑの木谷より獲つと云ふ銅劍一振あり。黑木欣堂ぬし珍藏の、大麻山出土のものと同形なり。この讃岐より出す銅劍は、他劍の銅と其形異なる樣覺ゆ、日暮れて蠟燭などと

もす頃となりければ、明日再び來んと約して備前屋に歸る。

二月廿六日

再び琴平神社社務所に上る。今日は裏道の登り易きより行かむとて黑木ぬし案內す。寶物館に入りて、昨夕たのみ置きたる物ども拜觀す、銅打出し涅槃像といふもの、題目の珍しければ見るにこは近世の彫金工が手に成りしと覺しくて、金銀烏銅等のいろゑものなりき。其他鈴、三鈷鈴、五鈷鈴、五鈷杵、等あり。

經筒　鐫銘に曰、

寬治七年十一月七甲午日

雀部重吉

とあり、筒の高さ六寸九分、口徑三寸八分强、底の徑三寸七分、底よりも口の方開きたるを、蓋の覆ふ邊を削り去りたれば、外邊より見たる形狀は、口部と底部と狹くて胴張りて見ゆ。其の底の外部一面にロクロ目の絲目の如きものあり、されどこは鑄浚ひの時のロクロの絲目にはあらず、砂型の規型の絲目なりき、其中央に鎔銅を注入せる闕の跟跡あり、蓋し宇治橋

寺の經筒の如くイレ底には非ず。蓋の筒を覆ふ處の徑四寸弱。方形にして頂上尖りたる鈕の上までの總高さ四寸一分、蓋の肩に二本の筋あり。

其鈕甚だ珍しきものにて、云はゞ擬寶珠を四方より切り取りて、方形としたる如きものなり。

此他、古鏡數面あり。古銅戈あり。

こゝを辭して下り道に、兩側の見世を見あるきつゝ土焼の丸金印ある小鈴を求め、土の鳩笛買ひ、コンピラデクとて、烏帽子冠れる人の首の背後の櫻の皮の紐を引けば、眼をむくものあり、黑木氏の説明をきゝて頗る面白ければ、各〻一つづゝ買ひ求む。

昔琴平の祠官に、松田の權太夫といふものあり、其頃勢ひ猛なりける金光院なる僧と爭ひて、神佛の混淆すべからざる事を云ひ張る。されど終に故ありて死す、こゝに金光院此の如き首を土もて作り、金比羅の冥罰によりて權太夫に梟首の刑にあひぬ。こは其の冥罰の恐しき事どもを後人に知らしめんが爲に作るなりとて、作りて賣らせ始めけるとぞ、才六デク又はこんぴらデクとも稱す。讃岐の兒女等こを見て云へらく、

コンピラ樣の御太夫サンガ死にシナにコナイにシタ

又謠うていふ、

午前十一時四十分發の汽車に乘らんとてこゝを去る。善通寺にいたれば、郡の書記某氏なる人香蝶ぬしを奥に案内す。やがて住職なにがし出で來る。まづ別室に導かれて弘法大師七種の寶物といふを拜す、其中殊に勝れてめでたきは、

弘法大師將來鍍金製錫杖

傳に云く天竺より慧果阿闍梨に傳へ、慧果より大師に傳ふと。今迄余の見たる錫杖の中、奈良新藥師寺のもの最もまされる物と思へるは、蓋し、善通寺を見ぬ先の事なりけり。そは正面に上品上生の彌陀三尊を丸造りに鑄出し、裏面に下品下生の彌陀三尊を現し三尊の左右には二天、兩面にて四天王を現はしたる意匠にて、其一面と他の面との佛の背には、互に接續せしむる樣造り成し、蠟型鑄物にあらでは能はざる技法を示せり。三環づゝ貫きたる輪の趣向亦凡ならず、其の仕上に至りては、削り去りたるキサゲのあとあらはに殘りて粗製らしくは見ゆれど、こは粗製といはんよりは、小節に關せざる技巧なりと見るべきか。この錫杖恐らくは大師所持の傳へ眞なるに近し、されど天竺製といはむは如何あらんか、佛像の樣式丈低く衣紋及び全體の趣等、むしろ唐風を帶びたれども、或は大師當時の日本製にはあらざる

か、否か、さもあらばあれ、天下の逸品として誇るに足らん。

弘法大師所持食鉢

鐵製なるか、銅製なるか不分明の爲、たゞ食鉢と稱し居ると云ふ。よくよく見るに頗る薄作の爲め、底の邊、ひゞ入りて内より漆を塗布してもりを止めたるが如し、又色を見るにまがふ方なき唐銅製なり。地に荒ひありて、頗る古く傳世せる宣德色の如きものにて、云はん方なき傳色の妙味あり、高さ二寸三分胴の最も張りたる處直徑六寸八分、口徑五寸八分強あり。常の鐵鉢を三つ重ね合せたるが如き樣して、肩の邊三段になりたり。

それより佛殿を見めぐりて寶殿に案内せらる。護摩爐三つばかりありたるを、妙なる模樣ありなどゝ墨もて摺る。鳳の向ひ立ちて中央に蓮花紋ある磬、あたら惜しければとて磬臺共に青陸などに飾り置き給へとさとす。

一尺二三寸の彌陀の銅像ありき、未だ類品を見たる事なきものにて、年代及び樣式など定めがたかりき。

鐵製五重塔、二尺許の高さ、下一段青銅もて補ひたり。青銅製多寶塔も二尺許りの高さにて香爐に造りなしたるが如し。底に不明なる文字三あり。見終りて後晝餉もてなさる。寺後の山上に

建設せんと企てたる、大師十丈銅像の話などありき。雨中を夜に入りて高松に歸る。

二月廿七日

余等の爲めに骨董家二三の藏品を、長椿堂といへるに集むるよし、招かれて黑木氏共に行く。高松は文人趣味の土地、されどあまりに驚かさるゝものもなし、まして埴輪ぬしの好まるゝ日本趣味のものに至りては皆無。此夜八時か九時頃なりけん、黑木氏を初め、田雜、十一町、藤川氏等に送られて、棧橋より直ちに何とか丸といふ船に乘る。暗夜に高松を立つ、玉藻城はいづこにあるか更に知らざるは殘り惜し。

音にきゝ日にはまだ見ぬ高松のたま藻の城は見まくやみなり

高松に著きたるたゞち、德島なる友のがりはがきやりたるに、次の日すぐ來よ、旅費は用意せずともよしなど電報もて云ひこせど、あまりに長く旅にあれば家の事なども忍ばれて、終に行けずと返しやりたるを更に宿を立ちいづる間ぎはに、はがきのはしにいひ送りたる歌。

みけむかふ阿波の遠山日每見て遂に相見ぬ君をし忍ばゆ

船はいづこを走るらん、曉までいねたれば更に知らず。朝大阪につきて、直ちに梅田に至り、

汽車の來るをまちて、京都へ著きしは廿八日午前十一時なり。

香蝶ぬしは二三の人を訪ね給ひ、埴輪ぬしを一人京都へのこして、香蝶ぬしと共に歸京。

三月一日

午後六時歸宅。

はつかあまり旅にあるまに縁兒のわが子僅かに手ばなしに立つ

背戸畑の木かげの梅は旅ゆわが歸る待ちしか今なかば咲く

（明治四十年二月、校友會月報）

○

ケフノゴヽ、三ジヲスギテ、イセノクニ、ウヂノヤマダニ、ワレハツキニキ。
アスノヨハ、ヲシカナクラン、カスガノニ、ヤドヤカラナン、ワガヒトリネン。
九月十一日、午後八時。

○

數年目にて神風の伊勢の大廟を拜み候。五十鈴川邊に手あらひ口すゝぐ處云ふべからざる尊さを覺え申し候。丁度たそがれ時一人の青年が宮にも參らず御手洗のほとりにて遠く宮居を拜し、拍手あまた度うち拜みてゐたるには何となうゆかしさを覺え申候。
天そゝりたつ杉の下路のくらくなりたるを、吾一人とぼ〳〵と吾足音のみ聞き行く神々しさ、

吾身はこの世のものとも覺えず候。大宮の御式年御造營にて新たになり候はいよ〳〵尊く覺え候。大御國と大君との御榮を念じて後、小さき我家の事らを祈りて拍手そとうちたる音にも猶木の間にひゞく物靜けさ。

仕丁めくもの〻辻々の燈臺に灯入れてありくさま、到底洋服といふもの著たる吾身の行き過ぐべき處とも覺えざる神々しさ。歸る途に歌など考へつれどとても初の句も浮ばず、何事のおはしますかはといへる西行が歌をばいやなる歌とは思ひ候へども、それ以上にいひ出づべくもあらず候ひき。

九月十二日、伊勢の國宇治の山田にて。

〇

奈良は暑き處とのみ思ひ候に著き候夕より夜にかけて、シャツの重ね著單物の二枚重ねなどのあわたゞしさ、枕につくたゞち鹿の下手なるが武藏野の邊に聞え候。

雨の中を寺々の古佛たちを拜みまはる淋しさ、嘗ては三尊佛を拜みたるとき脇士のみよろしき物と見えたるが、此度は脇士は眼に入らで本尊のありがたさのみひし〳〵と胸にこたへ申候。やはり本尊は作家の頭と技倆とを勞したる事多きものとさとり申候。

さ程の事もなく覺えし春日四神の御宮居、丹塗のいろの奥ゆかしく尊きを初めて知り申候。大佛の乞食めく寄附呼りは片腹痛く候。もし行基の如き、或は重源の如き大德の今の世にあらば、至る處の辻に立ちて大佛の功德をとき大說法をしたらむ方いかに有力なる勸進法なるか知る可からず。南極探險にさへ五萬圓とやらの金は一と月ならで集まりしといふ、僅々三十萬圓に足らぬ金を集むるにはあまりにきたなき大佛殿の寺侍どもかなと心細く存候。

今度の再建には金銅の鴟尾を屋上に擧ぐるとか、吾貧しといへども吾も鑄物大工にて候へばタカが一丈有餘の鴟尾位タダこしらへてやらざらむやだ。せめて內藏の渡邊千秋朝臣の五十錢の瓦二十枚を奉納せる位にとゞまらで、此たびでも旅費のうちより三十枚位の瓦は寄附せむものと思ひ候なれど、あのざま見てはいやになり申候。あなかしこ。人にな云ひたまひそ。

九月十六日、法隆寺大黑屋ニテ。

○

山田孝雄大人の紹介によりて、この地の名家北畠男爵家を音づれ初めて面接を得候。法隆寺金堂、五重塔などの事ははぶき申すべく候。王寺發十一時四十分の汽車に間に合はすべく、あまり時間有之候爲め神社を參拜致候。下田に下車して中食をすませ雨中當麻寺に向ひ候。人車に乘り

たる人二三有之候へども、徒歩と同時に著致候は少々馬鹿げ候。當麻の東北方に五位堂村と申し鑄物に名高き村有之、今猶德川の初世よりつゞきたる、津田、杉田兩氏盛なるよし、津田氏は煙突も見えて蒸氣エンヂン据付居る體に候。大和地方の鑄物は多く此の五位堂の作の如く候。明日は五條の宇智村なる榮山寺に參詣いたすべく候。草々

十六日、大和五條にて。

〇

五條中學の和田繁太郎先生は前便の山田氏の友人なるよしに候まゝ榮山寺の案内をたのみ候處今朝快諾旅宿まで來られ此の地方の歷史地理などに關して種々敎をうけ候。宇智川の磨崖の碑を見申し候。碧湍ほどばしる川岸に下り立ちてよく見申候。寶龜の年號彫付有之候。

音なし川の岸の上なる榮山寺景色よく、天平式の建築に彩色の殘れる八角堂めづらしく、道風書の鐘の撞座と帶との拓本を作り候。寺には天智式といふ瓦有之候。

九時三十分五條より高野口に向はむとす。停車場に男あり、高野登山には橋本の方が道もよくて登りよきよしをいふ。されど和田氏の注意によりて高野口より登ることゝ致候。後に思へば此の男といふは宿引に有之候。

十時十分高野口に下車、九戸山を經て谷川づたひ椎出に至る。時に十一時過に候ひき。こゝにて晝辨當をすませて剛力を雇ひ荷を負はせて出で立つ。たちまちけはしき坂にと胸をつきて、とても登山はむづかしなどあへぎ〳〵登る。行く事數町。やゝ足もなれて登るに從ひ只汗の流るゝを拭ふのみにいそがはし。神谷に至るには登りつめて下りに下る。不動川の流に架したる橋に至れば、こゝは底のそこなり。更にけはしき不動坂をのぼる。六十を越えたるらしき女の杖に縋りてゆる〳〵登るを見ては、あへぎつゝ行く我身恥しく相成候。旅人取調事務所につき候は二時半。宿坊寶城院に三時著、奥の院に小僧の案内者をつれて行く。古き大きなる石の五輪塔婆を指しつつ說明す。右は何國の城主何某殿、山ねぎは何國の何がし殿と云ふ。說明するは皆諸侯の墓にとどまる。

行き〳〵て御歷代天皇の御爪御髮の御墓と敎へられては自ら首の下るを覺え候。納骨堂は感じよろしからず、せめて忘れ來れるなき妻の白骨を思ひ出してのぞき見る。

大師入定の奥の院に線香さゝげたるに、小僧の云へらく、大師樣は死んだのではない、定に入つてゐるからこの通り參詣人もあるし線香もあがるのであります、と云ふ。

小僧の腰に結びきたれる風呂敷は何かと問ひ候に線香に候ひき。小僧線香を賣盡して云ふ。こ

の書生さんは皆年寄だから線香を上げると。ナル程皆二十四五以上の書生なればしをらしく線香をあげ候と見受け候。頓首。高野山寶城院にて。

○

戸をさゝぬ窓の障子に明らかに月のさしたる臥所、あまつさへ蚊も火取蟲も飛び來ねば蚊帳もつらず寢ねたるひろ〳〵しさ。曉に寢ざめたるに、すぐ庇の先なる杉の木立の間々にもや立ちこめて、あからさまに遠近のわかちしるき邊に、岩燕といふものゝ飛び交ふさま、さすが三千尺の高野山にてありけるなど思ひ候ひき。

吉野より西行一日、更に南とやら北とやらして行く事二日一靈山あり、名を高野と云ふといへる弘法大師の建白書にある如く、これだけの廣々したる平原あるとは思はれず候ひき。

藤原末、鎌倉初期らしき金剛三昧院の多寶塔ゆかしく見申候。弘安と永享の鐘のしかも工名ある梵鐘二つ見出したる外、六時の鐘と稱するものを見候に福島正則奉納の鐘に候。平假名交りの文にて、天正年號は頗る面白く珍しく候。

橋本へ下り候馬鹿々々しさ、五條にて宿引の言葉にだまされて登らざるをよろこび候。長谷に著、夕飯をますせて舞臺にての月見、マヅ〳〵一生涯に今一度とは見得べからざる事と存候。早

々。こもりくの初瀬にて。

○

安倍の文殊にて石窟を見、聖林寺にてもと三輪寺の十一面觀音を見、談山へのぼり、岡へ下り南大和をぐるり〳〵とめぐりて畝傍の橿原神宮に正式の參拜をして奈良へ歸り候。此の日飛鳥の大佛にて古瓦六七を得て、所謂年寄りたる書生連中二十餘人にてクジ引は面白く候ひき。橿原神宮は新しき宮居とのみ思ひ候に、安永の內侍所と神嘉殿とを移したる由を聞きては尊さいやまさり候。不一。

○

奈良へ歸りては我家へ歸り候氣持にて、若草山へ日の高くのぼるまで寢申候。鹿は當地著の夜一聲きゝ候が、咋夜は三聲ばかり鳴き候。按摩をやとひ高野の疲れをもみくづさせ居候。早々。

○

博物館へ參り候。正午過ぎまで見物致候。感ずる事甚多く候。午後法隆寺へひとり參り候。あすは上洛仕り候。頓首。

○

今廿二日宇治へ、雨中の鳳凰堂亦佳景に候。

宇治の茶みせにて。

○

宇治は雨に候。繪はがき差上候、修理して以來立派になり候。しかし整ひ過ぎて何やら物足らぬ氣持致し候。京の三條にて。

○

伊勢と大和と紀州とにて寫したる吉金文を數へ候處八十件有之候。元和年以前にて金石年表にもれ候もの七八件有之候。其の他は無論德川期に屬するものに候へども、此の地方にて吉金文の少なきには意外に御座候。當京地にはせめて百件位はと精々勉强致し度存じ候。早々。

九月二十三日、京にて。

○

高野山の思ひをすれば物かはとて上醍醐をかけのぼる。小生如き年寄は一番おくれて這ひ上る。なか〳〵つらく候ひき。藥師堂の藤原式に、經藏の鎌倉の天竺式に、何れも修繕出來て見事に候。日野の法界寺の阿彌陀堂、こも亦立派になり候。赤き曼珠沙華、畔に咲き居候。早々。

九月廿三日、山城國宇治郡日野にて。

○

今日は南禪寺より始めて永觀堂黒谷眞如堂へ詣で候。何れもお彼岸の事とてにぎはひ候。南禪寺山門開放してあれば登りて見る。眞如堂山門前の茶店にて、家にあればお萩の餅などたうべむを、旅なればこの茶みせにて色の草餅に似たるを食ふ。銀閣、百萬遍、下加茂、上加茂、アアクタビレタ。顏は日にやけてやせたと人に云はるゝ心細さよ。

九月廿四日、京の三條にて。

○

智恩院にて大勢の雛僧が、ナアムアアミダアブを唱ふる一種の音樂を聞き候。彼岸にて何處もにぎはひ候。西本願寺の裝飾畫はいつも美しく候。

東寺にて鑄工長谷川銈右衞門易成の略傳ある多寶塔の銅製なるを見、拓本一つ作り候。大いにうれしく候。

クタビレは足のみならず、頭腦までつかれ申候。早々。

右は昨廿五日の事也。

九月廿六日、京にて。今日は休養。

○

大雨を冒して叡山へ登る、時折雷鳴を聞きて心細く候。一行二十三人中七人は中途道にまよひ今こゝの力餅屋にて待つ程に、漸く土地の人に送られて著申候。

これより坂本來迎寺へ參る處。

九月廿七日前十一時、比叡山延暦寺根本中堂畔にて。

○

今朝三井寺見物、辨慶のひきずり鐘は天平以上の樣式に候。殊に龍頭の龍よろしく候。辨慶の汁鍋は鎌倉頃の寺の大湯屋用のものか、或はめし焚く釜か。

石山へ汽船にて行き見物、發掘の銅鐸かねて鑄かけ有由を聞き候に鑄かけ今見えず。

瀨田橋の擬寶珠見にわざ〱渡る。寛□、□祿、文化などの銘ある如し。明治二十八年の再建に馬鹿者どもがヤスリもて削り取候。噫々。

九月廿八日前十時、瀨田より石場への湖南汽船中にて認。

○

三井寺石山寺などにては皇太子殿下行啓の準備いそがはしく見受申候。石山の御本尊は卅三年目ならでは開扉せぬ由に候。この寺草創の時發掘と稱する銅鐸はかねて鑄かけある由きゝ居候へども鑄かけは無し。

汽車にて再び京へ、花園にて下車、妙心寺の戊戌歳云々の鑄銘ある鐘を見候。收字今迄の拓本にては甚だあやしく思候へども、實際「收」字に候。何の事か意味不通。今宵嵐山にとまる。

九月廿八日嵐山、三軒屋にて。

○

瀨の音を枕近くきゝながら、今朝は日の高くなる迄安眠致候。翠嵐席上に滿つる快さ、船二艘を雇ひ保津川をのぼり候。船頭下手にて度々岩につきあたるあやふさ、二町のぼりて大悲閣を拜し、宿に歸りて再び行脚に出立つ。洛西より洛北にいでゝ夕方三條小橋に歸る。歸次小生は正阿彌翁の舊居に中川美實先生を訪ひ候。早々。

九月廿九日、洛陽三條小橋にて。

○

夜十時五十八分京都を辭して歸東の途にのぼる。豐橋に夜あけて濱松に顏を洗ふ。靜岡に下車

して、いま久能山に登る。

スメラギハ塚ノミサ、ギ臣ノ子ガ墓ノ靈屋ヲ丹塗リイロドル

九月三十日、久能山にて。

（明治四十三年十一月、日本美術）

私は此のごろ京都を一巡して歸つた。行程を急いだ爲、詳しく語る譯には行かないが、二條離宮、仙洞御所並に桂離宮を拜觀したについて一二感想を述べて見よう。尤も二條離宮と仙洞御所とは餘り言ふこともないが、林泉の美を備へた桂離宮は私のかねて憧憬して居るところだけに深く動かされた。まづ拜觀の順序として二條離宮から言つて見よう。

二條城は永祿十二年に織田信長が經營し、更に寛永の初德川家光が大に修築を加へた。そして同三年に後水尾帝が行幸せられたことが舊記に出て居る。その後再度の災火で天主臺、本丸、諸門等悉く燒失し、現存するものはその內に過ぎないが、其の白書院、黑書院、大廣間等は本邦第一の書院の遺物と稱されてゐるだけに、共に德川初期の建築として優良なプロポーションを有し、

その外觀は略三重の曲折を以て相連り、眞に書院造の典型たるの觀がある。內部の裝飾に至つては更に豪壯、且つ優麗にして、柱の如きも方八九寸より一尺に達し、天井の格間には桃山風の彩色畫を作り、殊に面白く感じたのは釘隱し、引手等で、高臺寺に使用せるものと同樣の桃山風の華麗な金具を用ゐ、その釘隱しは金銅の折熨斗型にして雄大な感じを現はし、柱や長押等との關係が非常に裝飾的である。又壁、襖等は金地に彩畫を畫き、是亦華麗にして壯大、恰も桃山百雙屛風を見るの感があつた。

次に京都御所の紫宸殿と淸涼殿とを拜觀した。御所は白川樂翁公の普請で、その建築は嘗て十萬石格式と聞いたが、前者に比して規模が甚だ小さい。要するに當時德川幕府の壓迫に出でたものであらうから、高山彥九郞ならずとも憤慨に堪へない次第である。先づ櫻間、虎間等があつて其所から渡廊を經て淸涼殿に達する。夜更けにお庭に出でゝ萩を喰つたといふ金岡の跳馬の衝立は此の渡廊の一隅に立つてゐたものである。現今もその形は殘つて居る。淸涼殿の周圍には鬼の間などいふいろいろの間があり、次に藤壺、萩戶、弘徽殿などがあつて弘庇に出る。そこは源氏にある手長足長、荒海障子や昆明池の障子があつた所である。入口の鳴板も尙遺つてゐる。淸涼殿の御庭には吳竹架と漢竹架がある(吳竹や架の事は何れ更めて)のみで一體に小砂利敷であるが

古圖に依ると往時は二つの梅、櫻、柳、萩、蓮、橘、菊、撫子、芒、松、木蘭、棕梠等が植ゑてあつた事が明かである。次に紫宸殿と常の御所を拜觀して出た。

仙洞御所の御苑は加茂川の水をせき入れた御池があつて山水の趣自ら備はり、加ふるに池中には釣殿橋殿の跡あり、御殿の前には止々齋の跡、汀には八つ橋の跡もあり、自ら往時の美觀を偲び回顧の情切なるものがある。

翌日は雨の中を桂離宮の拜觀に出かけた。京都の晩春の雨は頗る趣味が深いが雨に潤ふ桂離宮の御苑はまたとり別け美しいものであつた。御苑は一體に桂川に臨み地の景勝はいふまでもなく御苑の周圍を繞らした京都特有の竹藪は、いかにも靜かでそれが恰も此の御苑全體の背景といふ感じがあつて御苑は竹藪の爲に自ら幽邃閑寂な風致を備へてゐる、言ふまでもなく桂離宮は、修學院や飛雲閣と共に我が桃山時代に於ても最も發達した茶室建築として更に之に宮室建築の精神をも加味し、加ふるに我が國固有の林泉の美を配したれば、爰に自ら斯の如き幽雅なる一樣式を大成したのである。さてかゝる結構を備へた桂離宮の御造營については一般に小堀遠州の設計と稱され、彼の手法識見を語るものゝまづ指を桂離宮に屈せざるものはないが、御苑は夫れ以前から在つたものらしい。即ち「濫翰譜備考」並に孤蓬庵の過去帳に依るに、遠州は天正七年の生れとあ

るから秀吉の薨じた慶長三年に漸く廿歳に達する譯である。之を正確とすれば「桂御別業之記」に「天正の末方豐太閤より小堀遠江守政一に命じて造進し給ふ庭造古書院これなり」云々とあるが、政一は天正末年卽ち十九年に漸く十三歳に過ぎないから、政一が如何に鬼才であつたとしても、古書院築造を政一とするのは誤りであらうと思ふ。古書院並に之に配した造庭の趣は全體としても、部分の構造についても、頗る優雅なもので、後に增築になつた新御殿とは自ら別種の味を備へてゐる。されば當時遠州の先輩で、識見高き一流の茶家の作であらうと思はれるのである。而して御二代智忠親王の時更に增營の議が起り卽ち小堀遠州に命じて庭園並に建築を增營した。此の時命を受くるや、政一は豫め催促せざること、助言せざること、費用を惜しまざることの三事を誓ひ、然る後工事にかゝつたと言ふことである。洵に尤もな次第で遠州の面目が躍如としてゐる。全體から言へば建物の東全體が庭園であつて、庭園から見た建物の出入りの配置は變化に富んで而も良く整つてゐる。そして庭園が主であつて凡ての建物は恰も配景になつてゐるのは慥に特徴の一つである。御輿寄の四疊の前には遠州の飛石があるが、其の組合せが非常に旨いと思つた。新御殿は面皮付の建物である。その釘隱しの水仙の意匠の如きは面白いものである。多分當時の新工夫であつたらう。唐紙にも月字の引手を用ゐてある等新しい試みが多い。此所の眞のお

棚は古來遠州の最も意匠を凝したものとして有名である。

此の外茶席では月波樓、松琴亭が最も勝れ、何れも茅葺の瀟洒たるもので林泉の間に在つて自ら風致を添へてゐる、小山の上、池を見下すところに賞花亭といふのがある。此所には龍田屋と記した紺と白の取交ぜの田舍を偲ぶやうな暖簾が掛つてあつたのは、單調を破つて別の興味に誘はれた。

桂川の水をせき入れただけに、流れに沿うた所は蹲を置かず、流の中に三個の石を置いて柄杓手燭等を備へてある。古くは泉水になつてゐたといふことである。此の時は丁度晩櫻が所々に稀に殘つて、赤い楓の芽出しや萌黄いろの柳の芽に、終日降りそゝぐ靜かな雨を聽きながら拜觀したので事の外愉快であつた。

（大正八年四月、美術旬報）

母を失ひて一七日のみ過ぎ候にもかゝはらず、あわたゞしく山陰道の旅にのぼり候、不孝の罪自らを責め候儀に候へども、前々よりの約束にも有之、且つ此機會をはづしてはとの懸念も有之候爲、まゝよ古寺めぐりならば亡き人の冥福をいのるにもたよりよかるべくと存じ候次第にて、當地の廣瀨都巽君宅に名古屋の堀江清足君と落ち合ひ、同行三人いよいよ明朝丹後の宮津を振り出しにして旅立つ事に候、留守中小宅の事宜敷御願申上候、早々。

大正八年七月十八日夜、京都廣瀨氏方にて。

〇

今朝六時五分京都發、丹波國を汽車の窓より眺め、丹後の新舞鶴港より汽船にて宮津に參り候は十二時頃に御座候、宮津見物の爲、廣瀨君は小生の亡母と同年の母堂をつれられ、母堂の緣者

の伊藤氏母子も同行、都合六人に御座候、名古屋の堀江君は船に弱く、疊の上を行く樣なる與謝の海にて船に醉ひ候、後日の隱岐の島の渡航今より思ひやられ候。余等三人は老人連と行動を違へて俗に切戸の文殊堂と稱する智恩寺に夕方迄參り居り候、今夜おみやげにすべく、名物を買ひに出かけ候、小包にて送り候間御受取被下度候、近所へも分け宅の人々もたべ候へかし、早々。

七月十九日夜、宮津荒木旅館にて。

〇

庭よく晴れ候與謝の海邊の朝のけしき殊によろしく候、朝飯を終る直ちに再び智恩寺に參り、多寶塔修繕中の太浦技手の盡力にて寺及び門前の旅館に掛け合ひ、其等の飲料にすべく湛へたる水=山より掛樋にて堂前の大鐵鉢に湛へたる水=をほして、鐵鉢內側の銘の拓本をつくり候。法興寺湯船云々、正應三季云々と有之候、湯船として又鎌倉時代のものとして珍品に候。猶堂前の庭に應永卄四年及び永享四年の石地藏有之候。寺寶として藏せらるゝものには和鏡數面と、支那元代の至治二年の銘ある鰐口有之候、我國のとは大きに趣を異にし居候、本堂卽ち文殊堂內の柱に貞和三年參籠の沙門云々の樂書有之候、小刀の先などにて書きたるものに有之候、特建の塔婆は修繕中にて全體の形式を見る事を得ず殘念に候。正午頃老母連中に別れて余等は自動車にて峯山

に向ひ候、頓首。

七月二十日、切戸の文殊堂にて。

○

久方の天の橋立なり〳〵て成りあはぬところ文殊いませり
ふたゝびは來まじく云ひし宮津ゆも峯山に來れば蜩の鳴く

一首は峰山の金比羅社の社司毛呂氏に、一首は同所警察署長遠藤氏にとて旅の恥をかき捨てたる腰折に御座候。

七月二十日夜、和久傳旅館にて。

○

遠藤峯山署長のいかめしき正服すがたに見送られ、同行三人自動車に乘りて、丹後國竹野郡間人村に至る間人より海そひの道を一里許り徒歩、齋宮神社々掌の家を訪ひ、嘗て發掘せりと云ふ平安朝後期の和鏡二面經筒三口を見る。小生は憚る所あれば社に詣づる事をさけて神社の西なる瓢形大古墳にのぼる。日本海眼下にひらけたり、鏡及び經筒は此古墳の頂上二三尺の下より發見せらるゝものなりと。齋宮の祭神は聞きもらしたれど、西方日本海に面したる古墳の樣といひ、

又古へ其古墳の齋場たりしものが神社となりたるらしき、所謂古墳と神社との關係を究むべき一資料たるを考へて、恐らくは朝鮮系の偉人を祭りしものにはあらざるか。炎天のもとを再び間人に歸る。午飯したゝむべき家なく、空腹をかゝへて但馬の城の崎に渡る汽船を待つ間と、汽船の荷物取扱所の座敷に橫になりつゝ。

七月二十一日午後一時半。

〇

峯山署長の談に、間人は朝鮮語の合の子を意味する音なりと云はれ候。間人をハシウドとよみたるは何の事か古來の學者にて解釋を下せるはなかりし由聞及居候、この間人は女が權力ありて亭主はいつも追ひ使はれ居由に候、と申して家每に機織り致者はいづれも女に候、丹後縮緬を織る筬の音、あちらにもこちらにも聞え居候。昔は男が朝鮮渡來のもの多く、女は地附きの者ども多かりしなるべきか、又考ふるに合の子同志ならば女の權力がさほど强き筈もなかるべく候。昔間人部を置かれしは、要するに合の子部を置きしものにて候やらん。これは其道の學者に聞かまほしき事に候、匆々。

七月二十一日午後二時、丹後の間人にて。

○

土用に入る日の太陽、海のあなたに沒する光景の美しさ、石油發動機船に乘りて、油の樣な海上をすべり行きつゝあかず眺め申候、城の崎に入る川口の西側に、瀨戶といふ處有之、家每の燈火の川にうつる夜景えも云はず美しき事に候。

七月二十一日夜十一時、但馬城崎にて。

○

今日は鳥取縣に入り候、伯耆國東伯郡三德村の三佛寺に詣で候。今より一千二百年前役の小角行者入山して創めたる處と申候。其後嘉祥二年慈覺大師天台の大伽藍を建て、堂舍卅八僧坊三千寺域一萬町步にいたりし隆盛の時代も候ひしが、今僅かに四堂四ケ寺のみと申候。笠置山の頂上に似たる馬の背、駱駝の背の如き峻嶺を踏みて奧の院迄八町。其間大磐石の上に建てたる文殊堂地藏堂に入りて見下せば、靑葉の梢足下より連なりて、果ては遠く出雲の海を望み候。役行者が創めたと申候奧の院は投入堂とも稱し、三千尺の懸崖絕壁の間に投げ入れたるが如き堂に有之候。役行者窟外に於て此を組み立てゝ後、此窟內に投入れたるものと傳へ候。ゑはがき別にお目にかけ候御覽被下度候。此堂の前方は斷崖にて僅かに足がゝり手がゝりを造りあり候、腹這しつゝ向つ

他に高麗狗と有之候。投入堂を出て、岩の表に守宮の如くへばりつきて進退きはまりし堀江君の顔色は、そこらの苔の色よりも青かりし事、いつまでも殘る思出に有之べく候。三佛寺にての國寶は、鸚鵡花綬鏡に候、表面には佛像の毛彫ありて、長德三年の文字も有之、其他の寺寶に金銅小佛二體、白磁香爐、錫杖等有之、何れも土中より發掘せるもの丶由に御座候、早々。

七月廿二日夜、三朝溫泉にて。

〇

伯耆の三佛寺は一度は御出なさるべき處に候、秋の紅葉の頃も雪の頃もよろしかるべく候、小生等は日暮れて西の空あかりにて山門を出で候。谷川ぞひ兩岸の青葉空を覆うて茂るあたり螢の二つ三つ飛び出し候は美しき事にて候。下るに從ひて螢の數いよ〳〵増して、闇夜の道をてらして吳れ候は愉快此上なく候。夜九時半、三朝と云ふラヂューム溫泉にて名高き町に著いたし候、宿屋の二階より見れば、三朝川廣く流れ、河鹿の聲清くひゞきて、頓につかれをも忘れ候、鮎を腹ふくるゝまで食ひ、酒に醉ひて足長々とさしのべて寢るところに御座候、早々。

七月廿二日夜十二時、三朝にて。

○

旅に出でゝよりいま迄三四日程なるに、永き心地いたし申候、毎朝四時頃目覺め候、尤もうつら／＼して居るのみにて、深き眠りに入ヮ事は出來不申候。足はだるく、肩はこる。足の指には靴ずれが出來申候。旅はくるしく御座候。

七月廿三日、三朝をたつ時。

○

俥をつらねて倉吉町に出で、倉吉線にて上井驛に出でゝ、上井より西行、淀江に來り不老園に投宿し、海水にひたり、風呂に入り申候。今日のみはあまりにつかれ不申候へども、氣がゆるめば阿呆の樣になり申候、明日はいよ／＼伯耆の大山へ登るべく候、宿に命じて朝飯の辨當の用意致させ、大きな西瓜を求めさせ候。登山の途中にて食ひ候はゞうまかるべしとの動議にて候。

七月廿三日、淀江不老園にて。

○

未明淀江を立ちて、途中にて朝辨當をしたゝめ申候、三里半の傾斜道を登るには大きに閉口致候、廣瀬君は最も若きだけ元氣に御座候、大西瓜をリツクサツクに入れて背負ひつゝ二里半の處

迄參られ候には驚き候、思つた程西瓜はうまからず候、大山寺の寶物は澤山有之候、金銅佛數體地藏尊厨子及び祈願文など珍品に御座候、大山寺の緣起畫卷は當時帝大に貸出中との事に有之候。風呂をわかして入れて貰ひ、山獨活の味噌漬にて飯を振舞はれ候爲、元氣大に恢復致候。ゆるゆる寶物等拜見致候後、午後五時半下山途中日暮れて夜九時半淀江に歸り申候、匆々。

廿四日夜十一時、淀江不老園にて。

○

伯耆國大山寺に參り候。地藏尊の入りたる鐵厨子といふのは兼て疑問のものに候處いよ〳〵實見致候。數度の火災にて燒け候由なるが、元二重なりし爲、外側の分のみは破損して數片となり居候へども內側は只火中の跟跡あるのみにてチヤンと致し居候。厨子と申せど實は圓筒鑄鐵製にて口徑一尺三寸深さ一尺九寸蓋あるものに候、祈願文の銘文は、打物の鐵薄板に凹字に彫りて都合四面ありしものが、今は三面のみ殘り居候。其薄板を圓筒形の外面に綴ぢつけしもの丶如くにて三面の板は今別に保管致居候、凹字彫の處はもと銀象嵌などにても候ひけん。最初の地藏尊は頭のみ燒け殘り居り銅鑄にて候。國寶目錄に祈願文鑄出の鐵板三枚、鐵造地藏菩薩頭部と相見え候へども鑄出は彫刻の誤、鐵造は銅造の誤りに御座候。今厨子中には新しき鑄銅地藏尊像を安置

し有之候、右銘文は集古十種に載せ居候ものにて嘗てより見まほしく存居候もの、漸く本望を遂して安心致候、匆々。

廿五日朝、淀江にて。

○

いよ〱出雲に入り候。安木驛より一里半、宇賀莊村淸水寺に參り候。應永廿八年の鐘のみが見るべき物に候、そこより十八町にて朝鮮鐘にて有名なる雲樹寺に參り候。鐘は木匡に押し込められてさながら猛獸を檻にでも入れたる樣な工合、人手にもふれしめぬ處すこぶる滑稽にもあり、腹立たしくも有之候。更に一里半の炎天、靑田中の樹蔭もなき道をテクリ。大よわりによわり既に日射病にでもなるべき處。數杯の氷水にてやつと蘇生の心地に候、夕七時一分にて更に西に今市に參る處に候、早々。

廿五日午後、安木驛にて。

○

留守中はいろ〱御世話に相成候事と奉謝候、伯耆大山にて天正時代の銘ある茶湯釜を見申候。又出雲の淸水寺にて鐵釣燈籠を見申候。此燈籠は釣手竹の節形、底に短き足三本、銘あれども腐

りてよめ不申候、形狀圖の如きものにて宮島式に御座候、頓首。

〇

安眠もし兼ねて午前五時起き出で候、宿屋の裏田圃にポン／＼と水雞のたゝく音を聞きつゝ此手紙を認候。豫定より一日早めに今日鰐淵寺に參る筈に候。廿九日頃隱岐の島へ渡る筈に候。著用の洋服は汗とほこりとにて汚れ果候。京都廣瀨氏方へ袴とかたびらを送り置かれ度候。京都へは來月三四日頃歸る筈に候。土用中にも候へば皆々御攝生專一と存候、匆々。

廿六日朝、今市にて。

〇

寺の門前に淸き溪川が流れ居候、水深五六寸より一尺位にて、中にハヤといふ二三寸より五六寸の魚澤山栖み居候、その河に下り立ちて顏を洗ひ汗臭き體をふき淸めなど致し候。ハヤを捕つて鹽燒にしたら旨からうと申候に、和尙曰くフライにした方が旨いと申候、然る處いつの間にか「此川の魚捕るべからず鰐淵寺執事」とある新しき制札が川の岸の楓の木にしばり付けられ居候、呵々。

和尙のたのみにて新しき大香爐に銘を彫る事になり候、今日午前中をつぶして大工の鑿を借り

受け、刄をつけ直して五十字許を彫刻致候。鑽の樣に自由ならず、困苦して出來上り候文字を拓本にして見申候處、古金文にもまさるべう覺えたる文字出來致候。和尚御世辭にほめて曰くユウユウとしてせまらざる好銘文なるかなと。小生對へて十年たゝば此銘文のみが國寶に指定せらるべしと呵々大笑致候。人里遠き山中の寺に參り氣ものんびり致候、關東と同じくこゝは朝夕蜩が鳴き申候、切戸にても峯山にても聞き候へば山陰道は一帶に蜩が居る處と見え候、老鶯もしきりに鳴申候、匆々。

廿七日、出雲鰐淵寺にて。

○

鰐淵寺はさすが出雲第一の古刹に候、寺寶の多き山陰第一に有之候。南朝時代公家の古文書も多く、畫幅の國寶になり居候も有之候。小生等は金工品が主なる目的に候へば書畫の類の拜觀は致さず候。不老瀧の裏、藏王窟にありしといふ高二尺六寸の觀音の銅像八角臺座に、壬辰年出雲國若倭部臣德太里爲父母作奉菩薩の鐫銘有之、持統天皇六年壬辰のものなるべく候。外にこれよりもやゝ古式なる高一尺四寸の觀音銅像有之候。次に永き年月見度しと存居候鑄損じの不動尊銅像見申候、面貌も胸間の瓔珞も頗る古式にて恐らくは平安朝初期なるべく考へらるゝものに候、

古代の鑄佛法研究には有益なる資料の一に有之候。此外仁平三年の經筒と共に同上窟内より發見せる古鏡十五面有之、山内祇園社の天井より發見せる鏡には建長の銘あるもの有之候。又珍しき掛佛も數面有之候。次に辨慶が伯耆櫻山大日寺より持つて來たと云ふ壽永二年の銅鐘は鐘樓に掛り居り銘文陽起のものに有之候。出雲へ御出の節は是非參らるべき寺と存候、秋は滿山の霜葉、春は全山の紅花にて一きはよろしき所と申候。高濱へは山一つ越して一里、遙堪へも一里に候、小生等は一夜寺に宿り、今日午後四時半寺を辭して谷川ぞひの景色よき雨の山路を遙堪に出で、更に一里の平坦の路を雨にぬれて杵築の町に入り申候。旅行以來初めて清潔な風呂に入り候。

廿七日夜八時、杵築町いなばやにて。

○

大社の寶物館中にて最も優品なる高倉天皇御寄進の秋野模樣塵地螺鈿櫛笥筥を前後左右より十二枚の寫眞に撮影、秀頼寄進の大鰐口の拓本をとり候、櫛笥筥は明治三十五年七月に國寶に指定せられたるものに候、倉の隅に鼠の巣と一所に埋もれてありしものゝ由に候、歸京後寫眞御目にかけ可申候へども、今の所現存櫛笥中の最優品と存候。小包にて和布の砂糖漬一折進上致候、御令嬢への御みやげに候、こゝ迄來て何がな乙な土產物と存じ、色々探し候へども何處にもあるセ

ルロイドの玩具の類、つまらぬ燒物、出雲石の細工物などにて、氣のきゝ候ものてんで無之候。日本中何處にても買へる物のみに候、鄕土的土産といふ物の必要有之候、頓首。

廿八日午後五時、杵築驛にて。

○

一畑藥師は參り候甲斐なく候、今朝一畑にて天倫寺へ行く廣瀨堀江兩君と別れ小生は出雲今市を經て宍道驛にて木次行に乘かへ加茂中と云ふ處にて下車、大竹光明寺の朝鮮鐘を見に行き候。銘文三所に有之候。出雲には三口の朝鮮鐘有之、雲樹寺と天倫寺のものは既に國寶に指定せられ居候へども、光明寺のものは何のせゐか國寶にもならずに鐘樓にぶら下り居候。再び加茂中より宍道驛にて乘かへ、夕方松江驛に下車、丁度停車場に迎へに來られ居候廣瀨君の案內にて岩田旅館へ著いたし候。宍道湖を見晴かす座敷に候、併し宮津の荒木の方氣持よく候、要するに海水と淡水との相違に候はん。

卅日朝、松江岩田旅館にて。

○

二白、不昧公好みの「山川」といふ菓子を送り申候、旅行以來の珍菓に候。

堀江君は鰐淵寺鐘銘にて氣付き、櫻山大日寺に何かあるべくと上井驛をさして行き候、堺にて落合ふ筈に候、余は松江市の南三里熊野大社へ參り候。紀州熊野神社の本宮と申候へども如何。社は天文に燒失して今猶規模頗る小さく候。寶物に鏡二面有之候。炎天の道を往復ともよく走る車夫にて候、習慣とは申ながらよく躰が續くものかなと感心いたし候。熊野村には素佐之男大神の御陵墓傳說地といふ須左之男山有之、又伊弉册尊御陵墓傳說地といふ比婆山有之、又稻田姬命御陵墓傳說地といふ稻田山など有之候。又熊野への途中大庭村には多くの古墳有之やに聞及候、東京博物館に大字草古天神古墳發掘品二十餘點有之やに聞及候、其道の人々の調查にまかせ度候。

卅日午後二時半、堺港に渡る船宿にて。

○

隱岐行の船出でざるまゝ、今朝美保が關に渡り候。美保神社はゑびす樣を祭り、出雲大社は大黑樣に候。片一方參詣をいむ由に候。なす事もなきまゝ宿にて釣竿をかりて釣を垂れ申候、神代にゑびす樣の鯛をつり候も此處に候。釣にもあきて酒をはじめ候、此港は船員の遊び場所の由にて藝者が大勢居る由に候、藝者を呼びこゝの唄をうたへと云へば、

關の五本松三本切りや二本あとは切られぬめをと松

とうたひ候、宿の主人何か書けとて扇面色紙短册など持ち來る。

美保が關いつもと松はいつも〳〵切らずありなむいつもと松は

などゝぬたくり申候。灣內水深く海水浴には不適當に候へども、水ひた〳〵と緣先まで滿ちたる工合、誠に心地よく候、海に浮べたるイケスより鮮魚をすくひての料理美味に御座候、早々。

七月卅一日夜、美保關明神館にて。

○

今朝美保關より隱岐丸に乘り隱岐へ渡る處に候、島前の群島の間を縫ひゆく樣壯快に候、先年御案內下され候瀨戶內海よりも遙かに美景と存じ候、小島に鵜の群れたるも描き古した畫圖には候へども實際に見れば畫よりも趣味多く候。此の美しき景色も船に弱き堀江君は船室に寢たまゝ出で來らず氣の毒に候。午後五時頃島後の西鄕港著の豫定の由に候。

八月一日、隱岐丸にて。

○

隱岐國造家傳來の驛鈴二口と隱岐倉印一面とは、當時島廳に保管されて居り、今朝島廳にて一見致候、鈴は白銅手にて音響すばらしく宜敷ものに候。驛鈴の眞正なるものとして唯一のものの

由に候へども大寶令の定むる所の剗數如何の問題に就ては大きに研究すべきものと存じ候。印の方は印面方二寸許り中高になり居候、鈕の傅色のみにてはとても天平以前の品とは見えぬものながら火中も土中もせぬ傳世品としては唯一のものに候へば、之を以て試金石とせすば何を以て他を鑑すべきぞと存候、波路遙けく渡り來りし甲斐ありて千古の珍品を見申候ことうれしき極みに候。それより飯の山といふ處の横穴群集古墳を見に參り候、武藏吉見の百穴に似たるものながら、中に一墳刻畫あるもの有之候、何とも分らぬものを線刻に致居候へども仔細に見れば、婦人が陰部を現せる立像中央に有之、其左方に鴟尾琴とも思はるゝもの立てゝ有之候。其外網干様の圖、そちこちに彫刻致し居候、草々。

八月二日夕、西郷港にて。

○

三日に隱岐を立つ筈の處、船は二日夜出帆と聞きあわたゞしく歸途につき朝堺港に無事著。鳥取に下車して鰻を食ひ、夜行にて今早朝京都著。明五日は宇治平等院の鐘が下されて居ると聞候間、其文樣拓本取に出掛け中筈に候、七日朝歸宅致候。いつもの樣に風呂をわかして置いて下され度候。誰にたのまれた譯でもないが、土用のさなかの旅行つく〴〵つらく候ひき、併し得る所

も多く候ひしかば、差引見聞をひろめ候事が收獲にて候はん。歸宅後ゆる〳〵御話申べく候。

八月四日、京都廣瀨氏宅にて。

（大正八年七月、美術月報）

第一信

鑑石園の園遊會を興味なかばにて別れ候事遺憾に候。併し門前にて田中智學先生を初め諸君の萬歳三唱裡に出立ち候事を難有存候。

四月三日國旗は軒毎にひるがへり、桃の美しく咲く町をへて、その夜は京都にとまり候。四日は夜十時迄汽車、連絡船にて五日の朝釜山へ、大邱より慶州石窟庵見物。先づ第一日の研學を終り候。石窟庵は一つにまとまりたるチンマリした石佛洞に候。

一行の八名は宮永東山、伊東陶山、山鹿清華、濤石安太郎、皆川月華、廣瀬都巽、内島北朗、小生、以上陶工三名、染織二名、鑄工二名、鑑賞家一名に御座候、早々。(朝鮮慶尙北道佛國寺ホ

テルにて、四月五日夜）

第二信

今日は月六度の市日にて、慶州の町は鮮人の白服にて埋まるにぎはひに候。其町々を古跡めぐりすべく自動車を走らするは心なきわざに候。

山は禿げ川は水かれて、ほこりの立つ道路は東京に似て居れども、北の禿山に松樹が大きくならねばいつまでも塵埃の古都に有之べきか。千年の昔を忍ぶべき石の佛と礎なしし帝陵が、吾人の感慨を深からしむるものに候。今より大邱に出て京城著は明朝七時に御座候、早々。（四月六日夕七時、慶州柴田旅館にて）

第三信

佛國寺に二體の銅佛像有之何れも新羅統一時代のものゝ由にて、座像の膝より膝の徑は一は四尺五寸、一は四尺二寸に候。支那風に胡粉を以て塗りつぶし候爲に、型持ちの樣子など少しも分らず、甚だ遺憾に存候。慶州博物館には高さ六尺許りの藥師銅立像有之、これも胡粉塗に候。幸

に背面より見るを得候處、背後に四所の窓形有之それも紙を張りて胡粉を塗りたる爲に、窓の形は不明なれども、新羅の小佛にてよく見受くる窓形に候。此銅像は柏栗寺のものゝ由に候。鑄技の研究上胡粉を落して昔の鍍金のまゝ見たく候。總督府博物館の人々の一考を煩し度存居候、匆々。(慶州より大邱の汽車中にて、六日夜八時)

第四信

京城著の終日を李王家博物館に暮し候、祕園の奥なる演慶堂と云ふ住宅風の御殿を拜觀致し候、容易に拜觀出來ぬ御殿の由にて候。夜、寺內軍事參謀長の招待にて朝鮮料理と伎生の一流どころを見せられ候。宴終り、金茱なる敎房に參り候、伎生の住宅風雅なるものに候、八日九日を古物研究に暮し候。(四月九日、京城にて)

第五信

四月十日平壤著。圖書館にて樂浪發掘の遺物を見物致し候。それより牡丹臺に登り、日淸役の物語を聞き、まきの茶屋にて鱖魚の料理に舌鼓をうち、大同江を舟にて下り、樂浪古墳を見物致

し候、今十一日は江西里に壁畫ある古墳見物の後、奉天に向ふ筈にて候。（四月十一日平壤にて）

第六信

二千年以前の樂浪の廢墟は、赭色の土に夏は高粱の茂るらしき畑中に、幾百かの古墳累々としてならび居り候。江西郡三墓里の壁畫ある石廊の古墳は高勾麗のものゝ由なるが、唐代頃に盜掘されたる由にて、內よりは何等の遺品をも見出さゞる趣に御座候。

鴨綠江の大なるに驚ろき候、朝の奉天に、紅塵のたちたるさまは、霞かとあやまたれ候。北陵を見て、德川氏の御靈屋はこれに倣ひたるかと感じたれど、そのうるさき程の細工は支那なる事を思ひ候。（四月十二日、奉天にて）

第七信

神代めいた朝鮮を經て鴨綠江を越ゆれば、家屋も人もころりと變つて、奉天を過ぎ大連の大和ホテルに投宿すれば現代味ゆたかな昭和の人となつた氣持と相成候。旅順の博物館は陶磁器の澤山有る處、優品頗る多く候。大連で切子硝子の製作所と、小森製陶所とを一見して今十五日天津

に渡航致候。（四月十五日、大連大和ホテルにて）

第八信

四月十五日午前十一時、長平丸にて大連出帆。

同十六日午前六時半塘沽港著、支那兵が鼠色の服を著て凡そ一大隊ばかり波戸場に整列し、其内の下士官らしいのが機關銃をかたげて、上陸客の荷物を、一々あけさせて檢査して居る。われ等一行の荷物は大小二十個ばかりある。檢査は何でもないが、後の荷造りが大へんだと驚いたが案ずるよりも産むが安くすんでホツト一安心したものゝ、いよ〳〵異國に來た感じを深くした。のみならず時計や懷中物を呉々も注意せよとツーリストの人や、天津から迎ひに來て呉れた常盤ホテルの人たちから忠告されて、いやな國へ來たもンだと不快に思つた。

汽車は午前九時半に發、午後二時半北京（北平）著の豫定。（汽車待つ間にターク驛にて、四月十六日前九時）

第九信

北京著の翌朝佐藤汎愛氏の案內で、先づ北京飯店の六階なる屋上から北京を鳥瞰する。北京城の黃釉瓦に陽が反射して黃金色にかゞやく宮城の屋根瓦の莊嚴さと、建物の參差として大小高低の結構の雄大なるとに先づ驚き候。

黃釉瓦は天子の居る宮城以外は絕對に用ゐぬ由である。我國の大極殿の碧瓦は、これに比べては甚だ貧弱である事を思ひ候。

文華殿に歷代の彫刻や繪畫を見、武英殿に珠玉の造花と宋代以後元明清の多數の陶磁器と、靑玉碧玉白玉黑玉などの細工物、文房具、象牙、七寶燒のもの、料(キコリ)竹彫などのおびたゞしき工藝品に驚き申候、歐米人はこゝに來て初めて支那の文化の偉大さに驚く由なれども、我等大倭國の工藝家も亦種々の材料と、種々の技巧とを以てしたるに、學ぶ所の甚だ大なるを感ずるものに候。

晉の昇平元年(西紀三八六)王徽製之と稱する七絃琴は我正倉院に見る樣なる古琴に候。

煥章殿の古銅器は、我住友家の蒐藏品を知つて居る者から見れば何でもないが、今迄傳聞した所によると、僞物ばかりだと云ふが、僞物は殆ど見かけない。

浴德堂は香妃の爲に建てた土耳古風の浴室で大理石でつくられてある。

浴德堂の前に、大株の丁香花が咲き亂れて、ふくいくとして匂ひを放つて、蜜蜂がしきりに飛んで居た。

香妃の肌から發散したといふ香氣は、かゝるにやありけむと思ひ候事に候。

紫金城の正門たる午門は歴史博物館にしてある。この建物が我丸ビルの二倍の高さであると聞いて、そんなにあるかと小さく見えるのを不思議に思つたが、廣い敷地に建つて居て、比較すべき樹木がないからであるのに氣がつく。敷地が瓦の樣な片々たる石片を、コバを見せて敷きつめてある。此の數を算して居たら幾年かゝる事だらうなどゝ、ささいな敷石の工事をさへ大事業であると思つた。（四月十七日、北海公園白塔山にて辨當を喰ひながら）

第十信

佐藤汎愛氏の晩餐に招かれ候、支那の招宴の客の作法などを聞き申候、同氏の庭には大きなる槐樹有之やつと芽をふき初め候、海棠が太湖石の傍に枝を廣げて咲き初め居り候、上野は今や櫻花らんまんの好期と存候。

み國べは花のさかりとなりぬらむ海のこなたに旅つゞけ居り

（四月十七日夜、北京東城洋溢胡同一二三館にて）

第十一信

自動車を走らせて萬壽山に到り候。これは清の乾隆十六年皇太后六十の萬壽節に大報恩延壽寺を建立し、山を萬壽山、湖を昆明湖、園名を清漪園と名づけ、乾隆以來夏の離宮であつた。百十年を經て咸豐十年（西暦一八六〇）英佛聯合軍の爲に破壞された。その後西太后が海軍擴張費數千萬兩を流用して修築したのが今の萬壽山で、園名を頤和園と名づけたといふ事に候。

門を入れば先づ仁壽門があり仁壽殿の庭上には大株の海棠が滿開である。玉瀾堂は光緒帝の居殿、その兩廂は康有爲事件に光緒帝及び皇后を西太后が幽閉したる牢屋。樂壽堂は西太后の便殿排雲門の東西に大鵬がつばさをひろげた樣に長い數百間の廊下が昆明湖に向つて連なる。排雲殿は賀をうけ又は政務を見られた所。その裏に德暉殿、その裏は山の中腹に據て絕壁の樣に垂直に白石を疊んだ上に佛香閣といふ八角殿堂が中空に聳えて、その裏手の山嶺の萬佛樓（智慧海）は萬壽山の安泰を祈る爲の佛閣が建てゝある。德暉殿の東方には大藏經を入れた轉輪藏があり、西には寶雲閣といふ青銅を以て鑄たる方三間四面の銅殿がある。此の銅殿たるや、鑄技と鑄湊ひの精

妙は日光東照宮の鑄ぬきの門や、上野の德川家靈廟、五代將軍の寳塔よりも更に數等優れた鑄造である。何處で誰が鑄たのか知りたいものだ。

長廊を傳つて西に出れば淸晏舫といふローマ風の石船がある。船內は佛國製の敷瓦を敷きつめて大きな硝子の鏡が間仕切りにあり、支那にしては珍しく二階造りの構造である。池の中央には龍王廟、これに玉帶橋、一名十七孔橋がかけてあり、この近くに大きな銅牛がある。

設計の奇妙、建築の奇拔、大理石や黃綠釉の彩陶の技巧等、たゞ〳〵感嘆これを久うすと申すの外御座なく候。

此頃我國では空を征服すといひ、山嶽を征服すと云ひ、自然を征服するといふ言葉——いやな言葉を耳にするが、北京の紫金城に於けるが如く、平原に大建造物を起し、萬壽山に於けるが如く山をきり開いて人工を以て大建築物を打ち建てるが如きを云ふならばよい。そこで初めて大自然の外に大人工美を現出してこそ自然を征服したれと云ひ得るであらう。我が國人の云ふ規模は頗る小さい。

第十二信

支那に於ける萬里長城こそは、世界に於ける自然に對抗した人工の大征服といへようが、それも蟻の塔ぐらゐの物に過ぎない。人間の事業の小なるをつく〴〵考へ申候。

石船の碼頭から船をやとひ、湖を更に山の裏にめぐりて上陸し、諧趣園といふ文人墨客を召集して雅遊を試みた處、德和園といふ三階建の劇場を見て、初めに這入つた仁壽門を出でゝ西山に向ひ候。（四月十八日午後、西山ホテルの丁香花一面に咲く庭に面して）

第十三信

內島北朗君發熱、拙者も昨日西山で飲みたるビールにあたり、昨夜より今曉迄腹痛に苦められ終日臥床致居候。

紫金城や萬壽山の建築美は、近代的に繁縟なるはさる事ながら、あの設計者の雄大なる氣持と細心の注意には敬服させられ候。歐米の美術や工藝や建築を皮相的に眞似る前に、一度は支那に渡つて近代の風格に接せらるゝ事を、我國の同胞たちに進言致候。

我東京美術學校の修學旅行の關西行を廣大延長して一路北京に來る事は一度渡支した拙者等から見れば易々たる事に御座候。學生のみならず中家大家一團をなして續々渡支して貰ひ度候。

畫題を求むる爲に渡航せられ候事は往々有之候様なれども、拙者が感じ候様の事は遂に聞きもらし居候。

北京は今より五百年前、明の永樂十八年に土墻を堂々たる磚壁に改築し、成祖は南京よりこゝに遷都して王城の壯麗は舊に倍する事になつた。爾來清朝は、明の遺製を繼承して僅に補飾しただけであると云ふ事だから、今我等の見る北京市街は、五百年以前に既に人車道の區別があり、下水道の設備もあつて、歐米の都市の道路に學ばずとも北京を以て模範とすべきであつたが、なぜ我國江戸時代にこれを學ばなかつたのであらうかと床に寢ながら考へ居候。(四月十九日)

第十四信

昨夜一行は、公使館の堀義貴氏の晩餐に招かれ候へども內島氏と拙者とは遺憾ながら不參、今日は元氣になり候まゝ一行と共に絨毯の織場を見に出かけ、夜は公使館の須磨彌吉郎氏に招かれ候。同氏珍藏の唐代美人の壁畫殊に優品と覺え候。同氏に依れば北京の琉璃廠にて見る書畫は、千幅に一幅買ひたいものがある位にて、氣に入り候ものにはめつたに出遇はぬ由に候。明二十一日はいよ〱大同府雲岡里の石佛へ參る豫定に有之候。(四月廿日夜認)

第十五信

十七時間汽車にゆられて大同城外東華旅館に著、直ちに馬を雇ひ、馬丁一人案内者として付添ひ出發、佐藤氏城内に人を訪ひ遂に一行に遲れた。行く事一時間ばかり朔風砂塵をまきたてゝ來る。風いよ〳〵吹きつのり逡巡として馬も亦進まず、山骨あらはなる山間に入れば風ます〳〵强く小砂利を吹飛ばし、砂よけ眼鏡もマスクも物の役にたゝず一筋の川を左に渡り右に涉る頃風やゝ靜まりて、川上遠く石佛寺を望みたる時のうれしさ御推察下され候。

山門に「石佛古寺」の額をかゝげ、小壁左右に「臺頭」「念佛」の文字ある門内に馬を乘入れ、庫裏にて滿身の砂塵を互に拂ひ落し顏洗ひなどして行厨を開く。遲れたる佐藤氏漸くに到著して一行安心致候。

丁度北京より來て、寫眞撮影や拓本をとつて居られる平田饒氏の案内で各窟を見る。寺のある處は假に中央窟と呼ばれ九窟並び、寺に向つて左方は西窟で六窟、右方は東窟で三窟、これを見廻る内に再び風が吹たつて窟内にまで砂の雨が降つて眼をあけて居られない恐しさに有之候。

石佛寺の前には河原がひろ〴〵と、ひらけては居れども水は少しばかり流れ、から〳〵乾いた

岩山には草木の青みが少しもなく、荒涼たる向ひ岸の山の上高く太陽あれども、淺葱色の盆をかかげた樣に見えて、頗る物すごい光景に御座候。折角の名作の佛像も感興を引く事が甚だうすきは頗る遺憾に候。

午後三時半馬を並べて歸路につく、一行の內若し美人が一人居るならば王昭君の胡地に入る圖そのまゝである事を想ひ候。

廣曠たる荒原、黃塵天を覆ひて胡人に似た一行のあはれな姿のみが郊野をさまよつて居るのみの外、何物も見えない。加之、家路に歸る馬ながら遲々として進まぬ所へ、陽は漸く沒したらしく、やゝ暗くなりかけて大同城の外壁がそろ〳〵見えだした邊から、再び强烈な風が吹立つて、咫尺を辨ぜざる砂塵の暗澹たる中をやつと宿に到著致候。いやはやひどい目にあひ申候。

一風呂あびたき所なれども、支那宿の事なればそれも叶はず、砂にまみれながら、南京蟲にさされながら、寢ね申候事に御座候。（四月二十二日、大同城外東華樓にて）

第十六信

雲岡行の昨日に引かへて、今日はのどかに陽は照り、分け入りし昨日の山眞近に見ゆ。蒙古に

近ければ風はさすがにつめたし。一行人力車連ねて大同城内に入り市街を見物、北京の樣に道幅も廣く中央と左右とに道を區劃する事も同じ、鍛冶屋が靑天井の道路にて仕事するは何の謂か、買物をせんとて立ち寄れば、その店頭に日本人珍しやとばかり大勢集まる事、我國にて紅毛碧眼人の後につくが如し、あなをかし。

午後二時汽車にて北京に向ふ、明朝六時半北京著の筈也。（四月二十三日、汽車中にて）

第十七信

天壇にては、眞柏や白檀の二三百年と思はる森林を見、孔子廟、國子監でも四五百年の老樹を見申候。その林に何といふ鳥か知らねど、尾の長き鳥の鳴くのを聞き申候。老樹と鳥の聲とを支那で初めて見聞き候。鵲の巢は到る處に有之電信柱まで巢を造るを見て亡國鳥なるを知り申候。

十一日間滯在の北京をあとに南方に出發致候。

北平よさらば北京よさらば、近くまた會ひ申さんよとて

（へいぴんに十日へにけり海棠のふゝめるが今花すぎにけり（四月廿六日、濟南行の車中にて）

第十八信

南京城内石橋の賓來館に一泊、風呂の湯の赤く濁りたるが氣持わるく、されど四邊の風物總て北方と變りて草木の青々たるが氣持よく候。

水牛の背にのる兒童のさま〴〵の形態は、南京より以南甚だ珍しからず、畫にかける牧童をまのあたり多く見申候。廿九日午後四時半上海著、四日目にて清潔なる風呂に入りてこゝに再び人心地つき申候。（四月三十日、上海萬歲館にて）

第十九信

安井辯護士にあひ、その紹介にて三井銀行支店長の土屋氏の盡力により丁度滯在中の河井荃廬氏と共に程霖生氏の古銅器を拜見致候。次の日は李國松氏の古銅器を拜見に罷り出で候。此間一行は蘇州へ、また杭州へ泊りがけに參り拙者と廣瀨君とはこゝに留まり候事に候。畫家ならぬ拙者は、地文を見るよりも、古代の人文を見て敎へらるゝ事多きを喜び居候。

李氏の蒐藏はなか〳〵優品揃ひにて、銘文のあるもの多數有之候。同氏は古文にも通じ、學殖深き金石家に御座候。

上海にも骨董商はかなり多く、幸ひ古田福三郎氏の案内にてくまなくめぐり候。北京の骨董街琉璃廠も、こゝも、奥深く藏して居る名品といふものより我國にもたらされた物の方が遙に優品多きを思ひ候。

一行の買得たものゝ內、陶磁器の破片には技術上有益なものが多かつた樣に思はれるが、其の零片斷簡に類するものは、或は新意を創める物もあり、新技巧を悟らしめるものも多々ある事に候はんか、見物と掘出ものとは兩立しないらしく考へられ候へども、一行はさすが工藝の專門家揃ひの爲に、甲者の買得たものが乙者が欲しがつたり、丙者のものを丁者が望んだりしたものも多かりし事は旅中の御笑ひ草に候ひき。(五月三日夜、荷物を始末して上海旅館にて)

第二十信

昨四日午前九時上海丸にて上海出港、今五日正午長崎港著。長崎港に入らんとして島山の美はしく綠色なるを見、朝鮮支那のひからびたる禿山と荒野とを見たる眼には、いかばかりそれが水々しい美さにてありしかを、貴下も御想像下され度候。大和島根のうるはしさは、異國を見て初めて知る所ならんと存候。この美しき國から、必ずや美しい工藝美術が今の御代に產れ出なけれ

ばならぬ事を思ひ候。

西洋からは食傷する程取り入れ、支那元明以後は茶道に適應するものゝみを採つて、他は顧慮せざりし資料頗る多かりしを思ひ候。御同樣深く考へざる可からざる事に有之候。（五月五日長崎驛にて）

第二十一信

四月三日に出發して五月五日に歸國致候事は、吉日に終始致し候事に候、近く國醇會にて旅行談をせよとの事に御座候。鑑石園に於ける送別會の御禮をも申上度、又拙者の感想に就ても御批判を仰ぎ度と存候。餘事拜顏申述候。恐惶謹言。（五月のよき日、梅花亭にて）

（昭和四年一月、美の國）

鎌倉に來て

東京では蟬時雨が滅多に聞かれないが鎌倉の寺をたづねて歩くと、森がふかくて晝間から蟬しぐれを浴びる、坊さん達はそれがうるさいとてつぶやく。

鎌倉に水が豐富にあつたら申分ないと思ふ。

萱草の花も一つ二つ見たが、鎌倉ではあまり多く見かけない。

樂蘭寺では藥師堂が震災で倒れ、佛像もひつくりかへつたまゝ打捨てゝある。文部省何にとかして貰ひたくても、國寶になつて居ないから手をつけてくれぬ。これは神奈川縣か、鎌倉の町で何とか保管の道を講じて貰ひたい。朽ちてしまつては後の人が惜むに違ひない、大した名作といふものもなささうであるが、朽ちるに任せるのは惜しいものだ。

本堂に愛染明王、脇に黑地藏といふのがある。大して黑くもないが盆の十六日に此の地藏亡者

濟度のために地獄へ出掛け、釜へ火をたきつける手傳をするやうな顏をしては火を消し、盆が濟んでから黑くなつて歸つて來るといふ話、坊さんうまい事を考へたものである。

始めて鎌倉の國寶館を見た、あまり見るほどのものもないといふ話を聞いて居たが、中々さうでもなささうである。大きな佛像や、十六羅漢圖、彫刻も澤山ある、自分は金物だけ見て來た。

國寶館に上總木更津八幡社の鐘がある、それが鎌倉の本覺寺に納まり、また一度他へ出したが不思議に不吉な事があつて、また本覺寺へ歸つたものであるといふ傳説があり、本覺寺といふ文字をたゝきつぶしてある、小ぢんまりしたよい鐘である。

比企谷の妙本寺の雲版は、直徑三尺位で建武四年の作とある。

八幡宮の寶物は玉石混淆であるが、中に私等の關係するもので小さな朝鮮鐘がある。至治四年と彫られてある。鏡も何十面かある、選り出せば二三面位はよいものがあるかもしれぬ。今は無いがこゝにもと賴朝公八歳の時の髑髏といふのがあつたさうな、こゝの宮司は骨董ずきで、何でも鎌倉時代に因緣のつきさうなものを盛んに集めた。こゝに國寶になつて居る裸體辨天がある。等身大のものでなか〳〵面白いものである。それに町の有志が著物をきせた所がいゝ、江の島にも今一つ同じやうなのがあるとのことであるが、別段風邪を引く譯でもない、裸體のまゝにして

置いて貰ひたい。

鎌倉はよく地震のある處で、町をつくるにはよくない、こゝは冬は暖かであるが、夏は一向涼しくないやうだ。

金澤の稱名寺にはもと舍利塔があつたが今はない。今ある禮盤樣のものは、それを載せるものらしい、その禮盤の裏に墨書でいたづら書がしてある。

永仁四年十二月十一日鎌倉大燒亡、大名小路の橋のもとよりいで來て、小町大町名越の入、皆燒けて、人四百人ばかり燒死にける、同五年二月廿三日この塔にまつる中の舍利殿作る、上總の國より上つて作る、金澤寺にて。

鎌倉極樂寺のかねの塔つくりて、化粧に五郎藤原秀吉（花押）藤左衞門尉になる、同弟左兵衞の尉に成る、藤原胤吉

とある。

又愛染明王の高さ漸く三四寸位の銅像がある、なか〳〵精巧なものである。博物館に陳列された事があつたのでよく見て置いたが、こし衣の邊に麻の葉、梅、菊などの金銀の象嵌がある。これは永仁五年二月廿七日金澤寺にて作るとある。作者は左兵衞入道淨胤子息藤右衞門尉藤原秀吉

とある。して見ると前の舎利塔と同年に作つたもので、作者も同じである。そして藤右衛門尉左兵衛尉の兄弟は上總の人、淨胤の子であるといふことも分る。

暫く行かぬうちに鎌倉が大分變つて、もとよりよくなつた處もあり、惡くなつた處もある。夏はなか〳〵賑ふが決して涼しくない處である。

まだ季節が早かつたせゐであらう、曼珠沙華の咲いたのを見なかつたが、こゝらに少しでも咲いてほしいと思ふところもあつた。

（昭和四年八月、藝術）

朝鮮支那旅行談

別段に珍しい研究といふやうなものはありませぬが、年齢の加減で、批判をして見たり考へても見たりしたことや、少しばかりの齎來品をこゝに持參致しましたので、只今から朝鮮支那の旅行に就いて其の感想をお話いたしたいと存じます。

先づ路順を申しますと、釜山へ上陸して最初に慶州で新羅の遺蹟を見ました。それから京城では主として李王家博物館と總督府博物館を見ました。そして平壤で樂浪の古墳に足をとゞめ更に旅順へ行つて同地の博物館を見たのであります。大連から愈ゝ日本の土地を離れ、船で塘沽に向ひ天津を經て北京にまゐりました。北京では僅かに前後十一日間の滯在で、その間四日間の日程で大同の石佛寺へ行き、再び北京から天津を經て南への旅をつゞけたのでありました。戰後南京行の汽車が貫通したのは最近のことであつて、濟南で旅館の主人の話によれば、日本人で北方か

ら南方へこゝを通るのは吾々一行が第三番目であつたさうであります。南京で一泊して直ちに上海に向ひ、上海から長崎に直航して漸く歸京いたしましたやうな次第で、その間僅かに三十五日程費した許りでありまして、纏つた研究等は勿論出來ませぬ、一つの博物館だけでも一兩日位では何にもならないのであつて、要するに漫然と見聞して素通りをした旅行に外ならなかつたのであります。本日こゝに朝鮮支那に度々渡られて詳しく御承知の人樣の前で、私のつまらないこのお話を申しあげるといふことは、まことに恐縮の至りでありますが、あとで御教示を願ふ事にしまして、お話を進めてこの責をふさぎたいと思ひます。

先づ朝鮮で感じました事は、土地が違ふ加減でありませうか、日本では想像もつかぬ程山が禿げてゐて全く常磐木の濶葉樹などは見えませぬ。日本に併合せられてからは大分山々に松の木を植ゑましたので、かなり山は賑かになつたさうでありますが、それでも雜木や下草はみな綺麗に刈りとられ、木の葉も芝もないといふ有樣で、これはオンドルで燃して了うたのでありまして、どの山もつる〱してゐて全く滅び行く姿をさらけ出してゐるやうであります。青いものとしては何も見えない殺風景な中に、葺をかぶせたやうな形のみすぼらしい藁葺の家が、ところ〲に見

えてゐるといつた狀態で、まだ芽をふかないアカシヤの木には鵲の巢がかけてあり、白い服の朝鮮人が朝からぶら〳〵野道を步いてゐましたが、これなども田畠の見廻りでもしてゐるのかと聽いてみますと、さうではない、たゞ遊びを樂んでゐる、女どもゝ暇さへあれば川端で洗濯をしてゐるといふ始末で、全く滅び行く國の姿としか思へませぬ。

さて第一に慶州を見たのでありますが、こゝは御承知の如く新羅時代の遺蹟のある所でありまして、古墳等も澤山にあり、有名な金冠を掘り出した金冠塚等もあります。それ等の發掘品は慶州博物館と京城の總督府博物館に陳列せられてありまして、寫眞や圖錄が出來てゐますので、皆さんは已に御承知及びのことゝ存じます。佛國寺の二體の銅佛と、今は慶州博物館にある栢栗寺の藥師銅像とは、惜い事に胡粉塗の爲に昔の技法を窺ふことが出來ませんでした。

京城では何といつても見ごたへあるのは李王家博物館でありますが、殊に各時代別によつて陳列せられた陶器は實に結構なものであります。金物の方も驚くほど見事で私にとつては非常に參考にもなり益することも極めて多かつたのでありました。この豐富なる古名器類は勿論李王家に長く傳はる什寶であらうと考へたのでありますが、ところが案内をして呉れた人の話によると、

その主要なるものは全部寺內總督時代に買ひ集められたものであつて、王室の方には古い時代のものは傳はらなかつたといふのであります。この案内をして吳れた人は總督府學務局の加藤灌覺氏で、こゝに居られる六角氏などもよく知つてゐる樣子であり、朝鮮語は勿論支那語から印度語それに西洋語も數箇國出來る程の博學で、種々朝鮮の事情を話して吳れたのでありますが、元來朝鮮では古物を尙ばぬ風があつて、現今已に先代のものはみな潰してしまひ、僅かに建物だけがやつと保存されてゐるやうな有樣で、李王家博物館も傳世のものとては高麗朝以後李朝時代のものしかなく、それ以前のものは殆ど發掘物がその重要な位置を占めてゐるといふ狀態でありました。總督府博物館の方は樂浪の發掘品が二階に並べてあつて、これを丁寧に見て行くと三四日は充分かゝるのでありますが、殘念ながらこれを一日で見てしまうて、直ちに平壤に向ふ事にしたのであります。

平壤では樂浪古墳を見ることが目的でありましたが、こゝには圖書館兼博物館といふやうなものがあつて、樂浪發掘の私人の出品なども可なり集めてあります。慶州でもさうでありましたが樂浪地方から出る鏡はみな綺麗なもの許りで、土質の關係でゞもありませうか、銹が餘り附いて居

らないやうでありました。支那で出土するものは隨分穢くなつてゐることを考へ合しますと、これは恐らく土質の關係であらうと思ひました。次に平南江西郡三墓里と云ふ所へ行つて壁畫のある古墳を見ました。小場恒吉君の摸寫されたのがあります。この古墳中のものは早い時代に盜掘せられて、何も殘つて居らないのは實に殘念でありました。先刻も申しあげましたやうに、朝鮮では新しい國が興ると、古い時代のものは何でも構はず破壞してしまうたので、由緒ある立派な古墳も多くは盜掘の難に遭うたやうです、古朝鮮の文化を語る優れた遺品も殆どみな失はれたことであらうと思はれます。新羅と樂浪とが遺されてあるのは、これには何か理由があることでありませうか。

朝鮮の地を離れて今度は旅順にまゐりましたが、旅順には關東廳博物館がありまして、こゝには滿鐵にゐた小森といふ人が熱心に蒐集した澤山の陶器と、その夥しい破片が陳列せられてゐます。これは陶器を研究する人にとつては極めて重要なものであらうと思ひました。大連のヤマトホテルで、一晩疲れた身體を休めることにしたのでありますが、今までの朝鮮の神代の樣な土地から急に新倫や、老鐵山麓發掘の數々のものにも珍しい物がある樣に思ひました。其他蒙古小庫

しい歐洲の文明の土地に來たやうな感にうたれて、その急激な變化を至極愉快に味はうたのでありました。

大連から海を越えて支那の塘沽に到著してみますと、埠頭には兵隊が整列して一々船から降りる人の荷物を検査してゐるではありませんか。吾々は同勢八人で然も大きな荷物を銘々二つ三つは持つて居り、八人分を合すと大荷車一臺に積んで運ばねばならない位であつたから、さあ困つたことになつたと心配してゐると、天津の旅館の人が手傳つて呉れて、うまく交渉して検査なく無事に通過したのであります。とにかく支那に到著して最初に感じたことは、非常に危険な國であるといふことであります。兵隊は埠頭許りでなく汽車に乘つてもその中にゐて、何だか嚇かされてゐるやうな有様でありました。

さて北京で見るべき所は澤山ありますが、先づ隙さへあれば骨董屋のある琉璃廠に行つたのでありまず。金をうんと持つて來ればいざ知らず、私等一行のやうに旅費の一部分を割いて安物を買ひに行つたのでは、骨董屋の方でも餘りいゝものは見せて呉れず、從つていゝものも集らなか

つたのでありました。今こゝに並べてあるやうなものが、その時買うたものでありますが併し澤山金を持つて行つても、また長く滯在してゐても、いゝものはなか〳〵手に入らぬらしいのであります。何でも三代の銅器等は發掘し得る地方へ然るべき筋の人が現場に手をまはして買ひ占めてしまふ、琉璃廠でも大きな骨董屋はまたこの方法でいゝものを買ひこんでしまふ樣子でありますす。一日北京公使館の二等書記官須磨彌吉郎氏の所藏品を見せて貰ひましたが、こゝに三面の唐代壁畫といはれるものがありまして、その中一面は美人を四人描いてある素晴らしい名畫で、著物の線等をよく見ますと、宋時代の製作ではないかと思はれましたけれども、とにかく見てゐるうちにみな醉へるがやうになつてしまうたのであります。須磨氏の話によると、赴任してから一年半位になるが、元來書畫が好きで、最初は役所へ出勤する前に琉璃廠の骨董屋を必ず一廻りしていゝものはないかと探したのであるけれども、最近は骨董屋の方から出勤前の時間に少くとも一日に五十幅位は持つて來るやうになつた、併し乍ら買へるやうなものは千幅に一幅位の割合であつて、二十日間にいゝものは一幅あるかなしである、殊にいゝ畫は少いと語られたほどでありました。砂礫のうちから珠玉を探すとはこんな事を云ふのでありませう。

私共の今度の旅行の目的の内には、大同に行くことも加へてありましたが、自分としてはただ

石の佛像を見に行くだけであるならば、もつと北京にゐて調べたい事も見たい所も數々であつたが、大同は北京から十七八時間位であるといふし、又一行にも勸められて、遂に慾氣を出して行つてきました。何でも午前十一時西直門から汽車に乘つて、翌朝はまだ暗い午前四時に大同の驛につきました。こゝで案內役兼別當が一人附添ひ十頭の馬を傭ひ入れて、いよ〳〵雲崗の石佛寺に向ふことにしたのでありますが、北京から同行した佐藤汎愛氏と骨董屋の貴志君とで同勢十人七時頃馬に乘つて出掛けたのであります。その時西の方から黑い雲が出て何だか天候が變つたやうにも思はれましたが、凡そ一時間ほどして恐ろしい風が吹き出しました。極度に乾燥してゐて殆ど草木のない支那大陸では、日本では迚も見ることも想像することも出來ぬほどのものすごい塵埃で、まるでむらがり寄せる東京の大火の黑煙のやうに、それが逆風であつたのでその困難當惑は並大抵でありませぬ。約三十分ほど後に、いよ〳〵山間に這入ることになつたのでありますが、木や草のない山は全く砂塵の暴風雨のやうで、マスクを掛けたり埃よけの眼鏡を懸けたりして、やつと三時間位で石佛のある寺の門前に到著することが出來たのであります。御承知のやうに雲崗の石佛は既に書物にもなつて居りまして、中央の九窟と東の三窟と西の六窟、その他二十ほどの石窟があるのでありますが、丁度北京から寫眞の撮影を兼ねて拓本をとりに一ケ月も來てゐる平

田といふ人が居りまして、あちらこちらを案内して貰ひましたが、再び風が強くなつて石窟の中に塵埃が舞ひ込むので、あちらこの名品も惡風のために感興を殺がれてしまうた次第であります。各窟を案内して吳れたその寫眞屋から拓本を何枚か買ひましたので、只今表裝をしてこゝに持つてまゐりましたが、大抵は手のとゞくやうな場所やアーチ型のやうな所に梯子をかけて採つた拓本でありますから、決して代表的なものではありませぬ。また周圍にある唐草のやうな所は省いて專ら佛像の所だけを採つてありますので、拓本で見ると非常に氣がきいてゐるやうであるが、實際のものはあまりいゝものではありませぬ。さて再び馬に乘つて歸途についたのであります。また風が吹き立つてきて、日がとつぷり暮れて大同の城壁が見え出す頃は、背後から吹きつける風で畠の塵埃が息一つつけぬまでに舞ひあがり、この時は馬にしがみついたまゝどこにどう持つて行かれるのやら、どうにでもなれと少々捨鉢の氣持でゐると、やつとのことで大同の旅宿におろされたのであります。同行が多かつたからよいものゝ、一人や二人では心細い限りでありましたらう。

さてこれが日本であれば、旅宿へ著いたのでありますからさしあたり風呂と酒であるが、さて

支那の酒は臭いし風呂とてもない、行水一つ出來ぬ有樣であつて、ほんの著のみ著のまゝで横になつたのであるが、日本から持つてきた蚤取粉をふりかけたけれども支那特有の南京蟲の襲來で寢つかれない、やうやく一晩苦しく寢て、翌朝汽車の時間まで大同の街を見物することゝして、一軒の骨董屋に寄つて色々尋ねたり買つたりすると、そこの主人は更に案內して次の骨董屋に連れて行つて吳れる、次の店の主人もまた一緒になつて次へ行く、といつたやうな工合で、十軒許りの骨董屋へまゐりましたが、併しいゝものとてはなくて、あれば日用の雜器のやうなつまらないものでありました。こゝにある小さい眞鍮色に地金の現れた銅印はその折に買つたもので、かやうなものは蒙古邊から持つて來るといふ話であつたが、さげ物の根付に用ゐられたやうなものもあり、この方は表の印面になつてゐる模樣が景敎の十字架を象つたものゝやうにも思はれますが、併し何に使つたかいまだにはつきりいたしませぬ。鏡類も見ましたが、銹で隨分穢いものが多く模樣も朝鮮風を帶びてゐて、恐らくは金あたりのもので田舍出來といつたやうな品が多いやうに思はれました。

次に北京で最も感じましたことを申しあげてみますと、北京へ初めて著いた翌朝に佐藤汎愛氏

の案内で北京ホテルの七階にあがつて北京城の全景を眺めましたが、丁度朝陽が黄色な屋根瓦にさしあたつて燦然と黄金色を放つてゐた偉觀は、實に何とも譬へやうもない美しいものでこの莊嚴な鳥瞰圖によつて素晴らしく偉大な設計に感心してしまつたのであります。武英殿や文華殿等はいづれも驚くべき大理石が用ゐられてゐまして、この北京城の立派さに比較するといくら日本で大きな建築といつても全く問題にはならないものであつて、日本の建築は僅かに支那の一部分を眞似たに過ぎないものだと思つた次第であります。歸つてから日本で有名な建築の博士に北京城の話をすると、その先生は北京城の建築はどうもごて〳〵してゐてつまらないものだといはれましたが、自分は今度見た紫禁城でも萬壽山でもその極く一部分を研究しても立派な博士論文になり、その工藝上の價値は全く素晴らしいものであると話して置いたのでありますが、過日我が校友會月報の四月號に正木校長のお話が載つてゐるのを拜見して、全く尤もなことだとこゝに我が意を强うした次第でありました。また孔子廟も見たのでありますが、その門に用ゐられてある黄綠釉のタイルには殊のほか愕きました。素地も堅牢であり然もかゝる厚い釉藥の用法は未だ日本では試みられてゐないものであつて、伊東陶山君や宮永東山君はその破片を拾つてこれを研究の材料にすると喜んだのであります。今まで畫家先生で支那へ行くものは甚だ多いが、それは景

色を寫しに行くだけであつて、吾々が今度感じたやうなことは未だ聽いたことはないのでありま す。吾々工藝家は是非とも行かねばならぬと思ふ。殊にまた陶作家や金工家や漆工家の研究する 材料は極めて多く、例へば牛皮の素地に漆を施した技法の如き、その面白いものはこゝに無盡藏 にあると思つたのであります。

最後に上海で四日間滯在いたしましたが、他の人々はみな蘇州か杭州に出掛けたのであります が、私はたゞ景色を見るだけではつまらないので、上海に止つて色々古いものを見て歩きました。 先づ三井の支店長に話をして程霖生氏の古銅器を見せて貰ふことにしたのでありますが、丁度主 人等は田舍の方に行つた留守であつたので、やつと家扶とでもいふやうな格の人が出して見せて 呉れました。その歸り途で中國書院といふ本屋へ寄つたところが、その店の主人の金といふ人はな か〳〵日本語が出來る人であつて色々話をしてゐるうちに、丁度その家に客に來てゐる人が銅器 を澤山持つてゐるといふことが解つて紹介して貰ふことになり、賣りはしないが見せるだけであ るならば宜しいといふことになつたので、翌日その家を訪ねたのである。この人は李鴻章の兄さ んの子とかで、李國松といふ人でありました。慥に程霖生氏の所藏品よりは優秀なものを持つて

居られました。新しい出土の銅器もありましたが、西清古鑑や寧壽鑑古に載つてゐるもの等も可なりあるやうで、何れも發掘品には相違ないが、已に傳世してから四五百年を經過するので、土氣等は勿論なく相當手ずれてゐて、極めて賞美すべきものであることを知つたのでありました。李氏は宋版の藏經の幾冊と、我柏木探古舊藏の左氏傳の卷子本なども見せて吳れました。

北京にもかやうな結構なものも澤山にあつたのだらうと思ひますが、かゝる個人の蒐集品は然るべき人の紹介狀を持つてゐないと見せて貰へないので、自分としてはいゝ機會であつたにかゝはらず、殘念なことをしたと思つてゐる次第であります。

本日のお話は、私の感想を今少し申したいのでありましたが、先づこの位にいたしたいと思ひます。土地の景色や風俗等に就てのお話もすべて省略いたしました、さて實際に行つて見ると支那といふ國は極めて近い所でありますから、是非工藝家はどし／＼と支那研究に出かけなければならないといふことを最後に希望として付け加へて置きます。

これからの世界の工藝界は「光は東方より」投げかけたいと思ひます。

（昭和四年七月、校友會月報）

正岡子規を中心に

北海道より正岡先生へ

出立の前に暇乞に是非一度御伺ひしたいと思うて居りましたが、その準備にせはしくて、すまないとは思ひながらたうとう立つてしまひました。扨横濱へ一泊して翌日午前八時出帆、六年ぶりで船にのりました。甲板へ出て霞がくれの陸を見る心持。何ともいはれません。それから進行する船の舳先を見ると紺青色の水を三角なりになつた船の舳先がシヤツ〳〵と切つて行く時その青い水の上へ眞白な浪が立つのが如何にも綺麗でいかにもイヽ感じがしました。丁度鹿島なだへかゝつた時。

サミドリノウシホチワキテユク船ノ舳先ニタテル浪ノ白木綿

これを手始に船中百首をやらうといふ積りの所、出たり這入たり、麥酒を飲んだり菓子を喰つたり、飯をたらふくむさぼつたためか、何となく氣持がわるくなつて來てたうとう皇大神もゆる

し給ふらむへドつく始末、最早此時には吾等同行者七人の內、三人までは弱り切つて寢てゐる最中でした。芳雨は酒を飮んでひとり恐悅、茂春は詩吟をやつて居る。生はたうとう寢る事になつてしまひました。夜が明けたのやら日が暮れたのやら、いつとなく寢てはさめ、さめては寢て折折芳雨にしひられる酒をのんでは見るが、あまり酒には醉はない。

やつと荻の濱へつきました。

氣分もやつと直つて、上陸する事になりました。こゝは思つたよりか淋しい港ではありましたが海べたの家の二階へ上つて寢ころんだ時の心持のよかつた事、靑い島山が灣をとりまいて帆前船が五六艘たゞようてゐる。其の內二三艘が今吾々の乘つて來た船の傍へ行つて荷を下す樣な按排で、聞ゆる物音は遠く船のりがさわぐ位のもの、それから耳をすましてゐると後の方の山で鶯がしきりに啼いてゐて、まことに靜かな處と思ひました。こゝに朝夕船の出入ばかりを詠めて生涯を送つたら、どうであらう、などと皆々話しながら酒をのんだりめしを喰つたりしました。

さかなは、あはびの酢づけばかり、外に馬鈴薯の煮ころがし、他に何か魚類はと云ふと、石ノ卷邊から來る鰻があるとの事、早速燒かせて喰うて見る、タレがない故たゞの醬油で、鹽が辛くて喰へたものでないとのこと、生は船で梅干ばかり喰うてゐた故くひあはせだというて、たうと

う其しほからい鰻のかば燒をくはんでしまひました。
此の時分地震があつた。
丁度九日の午後六時でした。
今夜は函館へつく都合があるから、明早朝までこゝに船が泊るといふことでありましたが、この家へとまる譯にも行きませんから、船へ歸つて寢ました。
翌日午前三時出帆、夜明方から金華山沖へかゝりはじめました。
ミチノクノ黄金花サク島山ノ沖ベタカナミアカトキニコユ
南部の海岸近く來たと聞く、船がこゝらを通ることは、決してない事だ、多分沖がしけと見込んだのだらう、と甲板から來ての芳雨の話。出て見ました。いかにも南部らしい景色でした。
ミチノクノミナミ海ベタナミ荒キ磯山ギシニ雲低ク居リ
ムツノ山沖ニサカリテワガ渡ル渡島ノ國ベ浪トホミカモ
又々醉ひ初めて苦しくてたまらん。芳雨は相變らず獨酌、早く上陸したい〳〵と思つて甲板へ出て見ると日はくれがたで、島も山も見えない。
アラ浪ノタカキガ上ノ舵枕イノネラエヌニハコグテ思ホユ

そろ〳〵函館近くなる。いかつり船〳〵といふので、出て見ると、まだ〳〵夜はあけないが、吾等がのつてる船の後にも先にも灯が一面に浮いてゐる。誠に綺麗でした。

ハコダテノ港ヲチカキ浪ノウヘニイカツリ舟ノ灯ノ多ミカモ

タヽナメテ烏賊ツル舟ノトモシ火ノユツ星ナシテ浪ニタヾヨフ

未明に港に船がつく、其の内に迎ひの別仕立のはしけ船が來る。こちらは七人、迎ひの者には新聞記者、畫家、軍人、他に委員一人と四人、都合十一人やう〳〵ハシケから上陸。

色青ざめ、肉落ちてよぼ〳〵になつちまひました。此日（十一日）一日は湯に入り酒をのんで寢て見たが、寢られない。

十二日事務所を函館公園にうつして、いよ〳〵支度にかゝる、十三日十四日のせはしさ、筆にも言葉にもつくされません。

十五日いよ〳〵開會、何せよ美術展覽會は當地で初めての事ではあるし、新聞や、辻々の高札廣告、湯屋理髪店の廣告でさわぎ立てゝある事故非常な景氣、しかし生憎大風故に觀覽人はあまりありませんでした。

又當地八幡社の祭禮が十四五六七とあるので、社殿に近き公園のこととて昨十六日の如きは大

風雨にもかゝはらず百五十人の入場者がありました。ゆうべ大暴風雨、今朝快晴、岸うつ波の音が初めておだやかになつて、後にそびゆる臥牛山のいたゞきに一點のガス(當地雲をガスと云ふ)をもとゞめません、用事も最早なくなつてひまになりましたから、やう〳〵の事で手紙を差上げる事が出來る樣になりましたが、せはしい會の總務掛を命ぜられてゐる故帳簿の整理や、來客の應接でせはしい間の事ですから亂筆で相すみません、御判讀ねがひます。

函館はわりあひにせまい所。
美人の多きところ。
人間がわりあひ正直なところ。
たばこの高いところ。
公園の茶みせで櫻もちより外に菓子のない處。
金持の多い處。
物價さへ安くば永住したい處。
まだ〳〵申上げたい事が澤山あります。あとより。頓首。八月十七日朝。

(明治三十四年十月、心の花)

根岸短歌會の起り

「日本」新聞へ「歌よみに與ふる書」が出る。つゞいて百中十首が出る。歌の林へ時ならぬものが出たが、しかし竹の里人といふのは何者だらう、といふ位で、其歌論にも歌にも餘り感服はしなかつた。余は「日本」を創刊以來讀んで居り、「俳諧大要」が出てゐる頃は殊に注意して讀んだのであつた。それより以前余は「小日本」も見てゐたから俳句に於ける正岡子規といふ名はよく知つて居つて、又何となくすきな名であつた。「獺祭書屋俳話」も買うて見た。兎に角其の頃から子規崇拜者の一人であつた。何時の事であつたか、根岸の鶯横町を通つて、「正岡常規」といふ名札の出てゐる門を過ぎた時、子規先生こゝにゐられるのかと思うて、しばらく立ち止まつて内の樣子をうかゞつた位であつた。竹の里人といふのは正岡子規子の事だ、と其後或人から聞いた時、ハア左樣かと二の句が出なかつた。

明治卅二年の正月余は新年雜詠三十二首を作つた。それを岡麓君、大橋文之君、山本鹿洲君の三人から新年の歌をもらひ受けて三十二番歌合せをこしらへた。誰かに判をしてもらひたい物だと思うてゐると、竹の里人がよからうといふ事を文之君が云ひ出した。

そいつは面白いと云ふのであつたが判をしてくれるかどうか分らない。マア行つて見るさといふので、山本鹿洲君が使番になつて行つた。歸つて來ての話に、直ぐ遇うてくれてそして心よく歌合の判をしてくれる事を承諾されたとの事であつた。ドンナ顏つきの人だつたかの、やれ何歳位の人だの、歌に就て話はなかつたかのと、余は根掘り葉掘り鹿洲君に聞いた。鹿洲君の話に、「歌の調といふ事に就て少しばかり話があつたが、君が云ふ所の調といふのと少しちがふ樣だ」と多の事であつた。調に二タ種あるものか、竹の里人の調といふのが間違つてゐるのであらう、と多寡を括つて、歌は自分等の方がえらい物だと、其頃は一人できめてをつた。今度一番、歌の調に就て詰問せにやならん、いつか一度行きたいものだと、ひそかに考へてをつた。

同年二月の初頃であつたらう。或朝谷中で麓君に出遇うた。竹の里人の處へ行つて見ようぢやないか、といふからそれは好都合と、根岸へ下りて鶯横町へ這入つて、初めて先生のお宅を訪問

したのであつた。からだの加減が悪いので臥せつてゐまして失禮ですがといふ先生のあいさつがあつた。肺病などの人は容貌がみんな似てゐるのか知らん、余の知つてゐる山田鬼齋先生にどこか似た所がある人だなと思うた。鹿洲君が置いていつた三十二番歌合の巻を取り出されて、しきりに判をせられながら、この調子がいゝとかわるいとかいはれてゐる。こゝだと思うて全體調子といふのはどういふのですか、と尋ねた。すると調といふ事に就てしきりに例をあげて説明された。成程鹿洲君が「少しちがふ樣だよ」といはれたのも無理がない。余等の調は千篇一律で只々すらりとした、悪くいふと口調のたるみ切つたのを以て調がいゝとして居たので、勢のあるとか、ぎく〳〵してゐてもぎく〳〵したなりに調子がとゝのうてゐるとか、いろ〳〵ある事を今日初めて悟つた次第であつた。

これでは頭から議論にも詰問にもなつた譯ではない。それから徳川時代の歌人で誰が一番すきか、と云ふやうな問も出された。余は諸平が一番すきぢやというた。諸平の歌で何といふのがいいと思ふかといふ質問などあり、又何か近作はありませんかともいはれるので、此の間巣鴨の某庭園の紅葉が非常によかつたので

立田姫五百機たてゝあかるたへてるたへなして織る紅葉かも

といふのを作りましたが、五の句がいけないですと云ふと、面白い歌だが左樣五の句が難がある樣に思ふといはれた。誰か歌の仲間をと思うてゐたのですが丁度幸な所ですから、此後も是非來てください。あなた方は歌會でもやつておいでですか、題があるなら聞かせて下さい、などゝ初めて遇うた人とは思へぬ程であつた。

同年三月十四日先生のお宅で歌の會をするから來いと云ふ事であつた。題は垣五首、蛙五首であつた。

十三日迄に歌稿を送つておいて十四日の午後、麓君と鹿洲君と余と三人で行つた。互選の結果先生は余が歌をのみとられた、大にうれしかつた。今迄は得意な歌が出來て人に見せても、てんで分る人がないので困つてゐた所であつたから。

四月十八日に又歌會が催された。其時は山吹五首、病五首であつた。瓢亭君、虚子君、青々君なども其時は出席されたと思ふ。百中十首以後あまり振はなかつたのが、歌の仲間が出來たので先生此頃は大によろこばれてゐたらしかつた。此の後月々歌會をやる事になつたが、これが根岸

短歌會の起りである。

（明治三十五年十二月、ホトトギス）

根岸夜話斷片

正岡子規先生との一夕の雜談に過ぎず、多く新造語の話に終始せり。家にかへりて記憶をたどり書きつられたることなれば、誤謬けだし尠からざるべし。其の責は余のうくるところ。

君たちは、今の所さういふ考になつたのぢやない。元からさうだ、元からすなほのがすきで、その上萬葉なり、何なりの使ひなれた詞をその儘使つた歌をこしらへて、新造語や何かばかりで作り上げた歌は、テンデきらひであつたのだ。

その點では、莉房君は別だ、ほめてもよい。君等に其の點がかけてゐるからさ。

君等は、今しきりと萬葉を見て、しきりと萬葉の詞をばかり使つてゐれば、それでいゝと思つてゐる。萬葉に豐旗雲とあると、すぐ豐旗雲と使つたり、道乃八十隈とあると、すぐ道乃八十隈と使ふ、萬葉の言葉をつかひこなせて來たのはうれしいが、併しながら萬葉の歌人が、新しく造

り出した詞を、直ちに其儘使ふナンて、――それでは、マルで泥坊だ、泥坊はしたくない。
そこへ行くと、莂房子ナンか歌一首こと〴〵く、自身の造語で成り立つてゐる、それだからクヅが多い、例へば間違つた言葉などを使つてゐたりなどしてゐる、がしかし苦心の結果實にいゝ歌がある。
君たちの方が、さうなると却つて間違つてゐる、平凡だ、だらけてゐる。
莂房子のは一寸何でも、つまらん物をつらまへても、もう新造語をしきりとやるから、歌が新しい。
それに詩から來るのが多い、兎に角漢學をやつてゐるから、そして詩などをよく譯すが、あれが新しい事をいうても、どこか古雅な新造語をやる、それで卑しくない。
近來、誰も長歌をやる樣になつたが、つまり諸君があれだけ萬葉の歌を餘計に知つて來たに止まるのだ。
莂房子の今日の氷柱の歌などは駄目だが、いつかの鑛毒の歌ナンか歌としては値うちがないが全篇悉く新造語でやつてる、實にえらい。
詩人だとか、歌人だとかには、全體先生だとか相談相手だとかはいらぬものさ、こんな者がい

るやうぢや詩人でもない、歌よみでもない。

昔から詩人や歌よみには、偏屈屋が多い。左樣、造語や何かゞ間違つてゐた事が、一人でわからんけりやアだめサ。悟りが開けて來なくては、詩人でも歌よみでもないのさ、一層よしてしまつた方がいゝ。會をするとか、題を出すとか、そんな事は彌次馬のワイ〳〵連中がする事だ、題がなくちや歌がよめないの、會があればキツト歌が出來るけれども、などゝいふのは駄目な連中のことさ。彌次馬がゐる樣ではしやうがない。

今まで諸君が會をやつてゐるから、だまつて居たのだが、一人で眞面目にならなくちやアとても駄目だ。

出來ないから當分やめて居ようかと思ひますなんて、それだから間違つてる。出來なけりやア半年でも一年でもだまつてゐればいゝ、どんな大家といはれる詩人でも、想の涸れてる時などはどうしたつて出來やアしない、そして又出來だすとひとりで、スウツと出來てくる、所謂天籟だ、それでなくちや駄目だ。

（明治三十五年二月、心の花）

連作に就て左千夫ぬしへ

啓

昨日は遠方の處御尋來、丁度かけちがひに本所方面へ參り留守にて大に失禮仕候、釜の蓋つまみ、何か新案可仕候。昨日午前ふくばかりに致おき候間早速鑄造可致候。今度は蠟型のまゝにて、さほど仕上せぬものにて、頗る雅味あるもの可作考に候。次に先生の肖像、カンテン買求め次第石膏にうつすべく候。

次に先夜根岸へ參り、連作の義に付、少々伺候事有之候間、かい撮んで一寸申上候。大兄の連作に就ての御意見は、先日御教示に預り候て、頗る御同感大賛成に候。根岸の先生は、連作を大兄の如く狹き意味にはとりたまはぬ樣に候。大兄の「心の花」五の一に述べられたる三種の例歌第一「松の露」、第二「ガラス戸の月」、第三「病中暮春」と段々に進歩せられたる樣、御記述

なされ候へども、先生は「連作には色々の風があるとしてもよいと思ふ。左千夫君の引かれた松の露のうたは、あれなどは餘程趣がかはつてゐる、古人にもあまり類歌がない樣だ」と申し居られ候、つまり「松の露」のうたは、大兄が去年の何月頃なりしか、先生に鯉を贈つた時に、盥に水を入れ鯉を放ちて、たちどころに五六首の俳句を作られた、あの俳句などと趣をおなじくして居る連作の歌であるやう思はれ候。アノ俳句は虛子君なども、大に贊同せられた樣聞きおよび候。つまり最もせまい松と露とのみにて、或は鯉と春水と盥とのみにて、一首の歌、一句の俳句が少しづゝ異つた事をいひしのみにて、そこに面白みがあるなるべく候。

「心の花」五の二にある、大伴茱の和歌連作論に引用してあるアケミのうた、あれでも連作といへるだらう、あまりパツとしてゐて、こゝといふ主眼がないのは、大兄も先日申され候へども、先生も右樣申され候。

連作は已に萬葉にある。それに佛足石の歌などは一番よい連作の例であるといふ事も、先生は申されたる樣に御座候。

つまり先生は君のいふ如く、連作は或る伏線（大兄の所謂主觀）あるを以て、連作のよいものとのみはしてゐ給はぬ樣考へられ候、アケミのうたも連作といへばいへるだらうとも申され候樣

に候。

先生の御說は先生の御說として置いて、大兄の連作に就ての御說は、近來の御卓見と存じ候。大伴某輩はたゞ歌が連なつてゐれば、それで連作と心得てゐる輩である樣覺え候。「心の花」に今一度連作に就ての御說明願はしく候。後輩によく〳〵敎へてやりたきものに候。連作といはずに何か他に新熟語をあてた方適當かとも存じ居候。

次に申上候、「心の花」五の二にある小生筆記の根岸夜話斷片のうち「葯房子の鑛毒の歌なんか歌としての値打がない」と記し候へども、あれは小生の誤りに候。兎に角あれ程の長篇を纏める力は、タイシタものに有之候。歌として十分値打は有之候。只よい歌である、結構なうたであるといふ事はいへぬだらうと申迄に候。これは正誤する積に候。

釜のふた出來上り次第、先生の御像も共に持參可仕候。龜井戶のあたり、梅見の御供仕度候。

其節先生よりの御話くはしく申上べく候。頓首。（二月十五日）

（明治三十五年三月、心の花）

こぶしに似たるもくれん、もくれんに似たるこぶし、何れを何れとわき難し、或人はいふ、もくれんには大木あり、こぶしは其の木小さしと、されど或人はいふ、吾等は二タかゝへもあるこぶしを知ると。又或人はいふ、もくれんはすく〳〵とのびたる枝の先に花咲けど、こぶしは節々まがりたる枝の先に花ひらくといふ、もくれんは花大きく、こぶしは花小さし。或人はいふ、もくれんには紫の花あれどこぶしは白き花のみといふ、議論區々歸する所を知らぬ樣なりしが、終に或人はいふ、もくれんは紫の花にて、同じ木ぶりに白き花の開くをはくもくれんといひ、こぶしは花白く、其の枝を折とらばよきにほひするものなりといふ事に定まりぬ。虛子庵の俳句會にも、もくれんと辛夷花とのけぢめに就きて、議論ありきといふ。其の席上うどんと蕎麥とあり、不思議にも、木蓮黨はうどんを食ひ、辛夷花黨はそばを食ひけるとぞ。うべ、うどんとそばは、も

くれんことぶしに似たりけりと格堂語る。かゝる爭ひの辛夷花の歌の會に會するもの七人。格堂。麓。潮音。與安嶺。蕨眞。及び芳雨と余なり、席上四點を得たるうた二首。

うら／＼と照る日の影に眞盛のこぶし花ゆれ春の風吹く　　麓

白妙の八片反りさく辛夷花夕風まけてはら／＼に散る　　格堂

上の句殊に辛夷花のさま見えてよければ選びぬ、されど下句難あり、むしろ辛夷花の形容のみに止めて下句削るべしといふ人あり。下句のよきがため、とりたりといふ人あり。二點のうた八首。

打畑に春雨ふれば我庭のこぶしの花はちりすぎにけり　　與安嶺

こぶしに限らず梅にても櫻にてもよし。あまり平凡なりといふ人あり、平凡なるが故にとりたりといふ人あり、こぶしと云ふ事あるがため、一首のうたをして新しくせりといふ人もあり。二點ともに天に選ばれたるなり。次のも二點とも天位に選ばれたるなり。

夕暮の山のいたゞき輝星（かゞせを）の天降りつくなす花さく辛夷　　秀眞

辛夷の花を星にたとふるはあまりに大業なりといふ人あり。カヾセヲは外國語なりや、それのみ面白ければとりたりといふ人あり。余こは實際に夕ぐれに見たるさまをよみたるなれば難をつ

くる人はつけよといふ。

辛夷花妙にてれゝば花蜂もえよりがてかも栄のはたにとぶ　蕨眞

根せりつむ田のへの岡の道そばのくぬぎがなかにこぶし花さく　秀眞

ふる草をやく野の原の朝明につかさのこぶしはなさきにけり　麓

畑中の神のやしろの椎のもり入日さしそひこぶしさく見ゆ　同

椎の森といふと黒く暗い感じがして辛夷花につりあはない様に思ふと云ふ人あり。椎の森に入日がさしてゐるため、そんな感じは起らぬといふ人あり。

鶯の來鳴きとよもす山あひの一本辛夷花さかりなり　麓

おくつきの辛夷の花は玉てれどなき人もへばとはに見かねつ　蕨眞

これは墓邊の辛夷花を連作にせる十首のうちなり。連作は一首づゝの各評には不利なりと云ふ者多し、されど二黠のうたになりたるが妙ならずやと或る人云ふ。一黠のうた十首。

かぎろひの夕日をうけて反り咲ける辛夷群花ちらまく惜しも　格堂

興安嶺の天位にとりたるなり。

唐人の住める館の北陰にちりかさなれるこぶし白はな　格堂

余が天位にとりたるなり。唐人の館と、辛夷とのとりあはせに、ほれたるなり。

納屋の西馬屋の東桃の木とこぶし木づたひうぐひすのなく　　秀眞

こもりたるおくつき處にし日さし辛夷のはなの玉照にさく　　蕨眞

おどろ鳴る若雷のあめはれに虹たつつゆふべこぶし花ちる　　麓

腰ぼそのすがる少女が朝よそひむかふかゞみに辛夷花のかげあり　　秀眞

何だかをかしな歌だといふ人あり。この少女が唐美人ならばよからんといふ人あり。勿論支那美人の積と余は答ふ。蕨眞いふ。辛夷花と美人はいかにも釣合はない。美人が幽靈の様だといふ。辛夷は墓の様な處に多くあるものとして連作までする蕨眞君なれば、調和せぬの、幽靈美人だのと非難も起るなるべしとて、大笑となる。

白羽舞ふ蝶の五百群玉ぬきてこぶしの花とおくつきにさく　　蕨眞

余もこれを採らうとしたれどおくつきにさくが、いやさにとらざりしなりといふ、一人二人賛成するものあり。白羽舞ふがヘンだと格堂いふ。「白妙」のでもよからずやと余はいふ。余後より思ふに墓處なればこそ白蝶と見たてたるもよからめと。

はしきやし妹が見めづる白玉の貝つくりなす辛夷花かも　　麓

白玉の貝つくりなすと形容したる所よしといふ人あり。

あしびきの山のたをりの花辛夷いやちりしくにへみ這ひうつる　麓

蛇が這ひ出すとは不思議なり、蕨眞君の墓の辛夷もあれば蛇も調和すべしなどひやかすものあり。

雨雲の底の入日に南ふく春のゆふぐれこぶしはなちる　麓

麓高點なり。五月課題は鮎。會場は上野東照宮五重塔下休憩所。今後毎月の會期は第三日曜日と變更す。會はてゝ人麿像品評あり、先月よりも人々の意にやゝ近づきたり、品評の後夜に入りて酒のみ笑ひ興じて居る時、義郎來り話いよ〱さかえて後散會。（四月十三日秀眞宅に開く）

（明治三十五年五月、心の花）

義郎子の『評釋萬葉私刪』をよむ

巻頭に末松博士の序があつて、次に子の小引がある、其の中に、

（上略）語義枕詞の如何を解かずして、直ちに大體の意義と趣味の如何に說き及ぼさしめたのである。

と記されてゐる。抑ゝ萬葉集を解釋した書物は幾十百種あるであらうか。實に澤山な書物があるであらう。然るに其等澤山の解釋書は語義を解いたり枕詞を講釋したりしてゐて、決して趣味といふ事には一も說き及ぼしてゐない、然るに義郎子の此の書が趣味に重きを置くと云ふのは大に余輩の珍とする所である。余等の師故竹の里人大人は、鼻もちならぬ月並俳句の全盛な時に出られて、趣味に重きを置かれて、ひたすら「感じ」を云ひ現す事に骨を折られたのである。其の餘波文章にも歌にも及ぼした、教を受けた余等同人は、世間に對つてナンにも誇る事はないが、唯

この趣味と云ふことに就ては誰にもヒケをとらぬ積りである。難解の言葉や枕詞なんかを講釋するのはそも〳〵末技である。

小引の次に「萬葉集について」といふのがある。其中に卷々についての特徴をしるされて一卷一卷を、

（上略） 橘の諸兄卿の選ばれたといふのは或はこれ迄かも知れぬ、云々。

というてある、これに就て余は異議のあるでもなんでもないが、ついでだから縣居翁の「萬葉考」を引合に出さう。

卷々の體古き新き有、それのみならず、年月の次もいと亂れて見ゆ、故に深く考へて、今改め正すこと左の如し、

一二 今に同　三 今の十三　四五 今の十一 十二　六 今の十四　是れまでを萬葉とす、七 今の十　八 今の七　九 今の五

十 今の九　十一 今の十五　十二 今の八　十三 今の四　十四 今の三　十五 今の六　十六 今に同　十七 同

十八 同　十九 同　二十 同　右の七より下は家々の類集にて一の歌集にあらず、（此事委しくは別記に見ゆ）

と記されてある。そして「別記」を見ると、

（上略）何ぞといはゞ、其の一二には古き大宮風(ブリ)にして時代も歌主もしるきをあげ、三には同じ宮風ながら、とき代も歌主もしられぬ長歌を擧げ、四五には（今の十一十四）同じ宮ぶりにして、代もぬしもしられぬ短歌を擧げ、六には（今の十四）古き東歌(アヅマウタ)を擧げて卷を結びたるなるべし。

それから、

かくて今の五の卷は、山上憶良大夫の歌集ならむ。

これは義郎子も、

一部殆んど山上憶良の集であつて、書牘詩文などもまじつてゐる。憶良が筑前の守であつた時に、其地で歌詠したものを書き集めたのを後に家持が筆を加へられたものらしい。

と云うてゐる、眞淵翁は又、

今の七と十の卷は、歌もいさゝか古く、集め體(ブリ)も他と異にて、此二つの卷はすがたひとしければ誰ぞ一人の集めし也、今の十五の卷は新羅へ遣されし御使人の歌どもと、中臣朝臣の、茅(チ)上娘子(カミ)と贈和(コタヘ)しとをもて一卷とせしにて、又たが集めしともしられず、今の十六の卷は、前

しりへには古くよし有歌も有を、中らには歌とも聞えず戯くつがへれるを載せて様ことなり、中に川村王、大伴家持の歌も入しかば古き集にあらず、こは家持卿の集のうちにやあらむ。十六の巻に就ては、余はいさゝか考へを持つてゐるが、今こゝで云ふ場合でないから、他日云ふ事にしよう。

今の三の巻てふより、四、六、八、九、十七、十八、十九、二十の巻々は家持卿の家の集たること定かなり。

なんどゝいふことが書いてある。義郎子の説も大同小異である。

さて是れからが愈々本文にとりかゝる譯だ、何といふ歌が開巻第一に置かれたらうと見ると、

天智天皇

渡津海乃、豐旗雲爾、伊理比沙之、今夜乃月夜、淸明己曾、

わたつみの　豐旗雲に　いり日さし　今宵の月夜　あきらけくこそ

百人一首に倣つて、天智天皇を眞先に出した譯でもあるまいが、「渡津海」の御製がのつてゐる、それはよしとして、何が故に萬葉にある通りの書き樣と、平がな交りとで、ゴ丁寧に二タ所へか

いたのだらう、何か義郎子に考へがあるのかしら、おまけに平がな交りの方は振かながしてある、蓋し萬葉ソックリの書方は例のサビのある書き様が捨てがたくて、載せて置いたのかしらん。ソレから萬葉集を見れば初めの方には、

あきの野に御草苅葺やどれりし兎道の都のかりいほしおもほゆ

にぎたづに船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今はこぎてな

といふすばらしいゝ歌が二つ、それをさし置いて「渡津海」を最初にのせたのは、二つは額田女王、これは天皇であるからでもあらうか。

扨て意義の解は如何と見れば、

思はずも日のかたむくまで、この印南野にわれは佇んで居た。

印南野にての御製であるかしらと萬葉集をひつくりかへして見ると、

中大兄、近江宮御宇天皇、三山歌一首。

と長歌があつて反歌が一首、次に又この歌がのつてゐるのである。無論三山の反歌ではない、印南野の作といふことも記してない、どう云ふ所から印南野に佇んでゐると云ふのであらうか。それから又少し先になつて、

その波と雲とが一緒になつて居るあの向ふの方に、どんな國があるのであらう。あの雲の上には萎まぬ花が永久に咲いてゐるのではあるまいか。自分はこの前の世にあのやうな雲の上に住つて居たのではあるまいか。

とはあまりにうがちすぎた、否むしろ蛇足ではあるまいか、この一節は除いてほしかつた。あとにかいてある事柄は先づ難はない様に思ふ。次に擧げた歌を見よう。

當麻眞人麿妻

吾勢枯波　何所行良武　已津物　隱乃山乎　今日香越等六

わが背子(せこ)は　いづく行(ゆ)くらむ　沖(おき)つ藻(も)の　名張(なはり)の山(やま)を　けふか越(こ)ゆらむ

といふのである、初めに意味を說いて次に、

夫を思ふ美はしい情が自然と湧出して一首をなす、豫めどうよまうといふ趣向が有つたものではない。誠に眞情の流露である。僞らず飾らずしかもそれが如何にも自然に出來てゐる、まづどの邊をゆくで有らうと大凡に思ひ、さうよ名張の山邊を今日はいつてるであらうと思ひ至つた。其の緩急抑揚實によろしきを得たもので有る。今試にこの歌の一字を改めて「今

日や越ゆらむ」としたらどうであらう。調が忽ち弱くなつて活氣ために減殺せられ、感興甚だ鈍くなるを覺ゆるであらう。

頗る余が意を得たものといふべしである。猶余は思ふ、この歌は、「らむ」といふ詞を二タ處用ゐてあつて、それが響く爲でもあらうが、聲を出して歌うて見るといかにもいゝ調子である、つまり韻をふんである爲に調子がいゝのであらう？

次にあげてある歌は、萬葉集の方でもすぐ次にある歌である。

石上大臣

吾妹子乎　去來見乃山乎　高三香裳　日本能不所見　國遠見可聞　從レ駕

わぎも子を　いざ見の山を　高みかも　大和の見えぬ　國とほみかも

これも意義を說いた後に

一枕詞があるために人をして、あらゆる聯想を恣にせしめるのである、我妹子の一語はこの歌の價値のよつて起る處で、また吾人が枕詞を用ゐる上について大に學ぶべきものが有る。

それはそれとして、「わぎも子をいざ見の山を」とをが重なつてゐる譯が說いてない。余は初

めこのをが如何にも耳ざはりで、かなはなんだ。つまり何となく重くるしく感じたのであつた。處が三の句がかも、五の句もかもである。それが爲にをの重なつてゐるのと相應じて調子がしまつてゐる樣に思つた。そして又前の歌のらむと同じ樣にかもで韻がふんである樣になつてゐる爲に、頗る調子がいゝ、丁度長歌の對句や、疊句などの樣な感じがして、誠に工合がいゝ。

一々批評するといふのも面倒な事であるから、四五枚飛ばして見る。

志貴皇子

蘆邊行　鴨之羽我比爾　霜零而　寒暮夕　和之所念

あしべゆく　鴨(かも)の羽交(はがひ)に　しもふりて　さむき夕は　大和(やまと)し思(おも)ほゆ

住みなれた都を離れてこの難波堀江に宿つて居ると常に都のことが思ひ出されるが、今この渚を飛ぶ鴨の羽交にいかにも寒さうに霜がおいてるのを見ると、都の方は雪でも降つてるかしら。

これも實はどこか分らぬ處であるのを、難波堀江とやつてゐる、そして「大和し思ほゆ」とあるのを「都」として說いてゐる。無論今の大和國ではあるまいが、「やまとし思ほゆ」と云うて

あつたにせよ、すぐに都といふ事は如何かと思ふ。當時の都は奈良であつたのだ。人麿の「明石の戸より大和島見ゆ」の樣に、或は須磨明石邊でよんだとも思はれるが、しかしそんな風に解かいでも、此の歌の如きは已に分り切つてゐるのであるから意義の解釋はむしろなくていゝ。たゞ一首のこの歌を朗吟して見ると、

寒い夕暮に蘆の生えてゐるあたりを鴨がとんで行く、其の鴨が寒さうでそゞろ大和の事が忍ばれる。

と有體に眞直ぐに歌の通りに感じたのではないか。「都の方は雪でも降つてるかしら」などとヨケイな事を云はいでもいゝと思ふ。

景を說いて後に情をいふには、其景（客觀）が非常にひきしまつて居なくては情（主觀）を強く感ぜしめることが困難で有る。この歌はこの點に於て大に注意すべき處がある。

と說くあたり流石に敬服した。

文武天皇

見吉野乃　山下風之　寒久爾　爲當也今夜毛　吾獨宿牟

みよし野の　やまの嵐の　さむけくに　はたや今宵も　わがひとり寝む

新勅撰に持統天皇として少しかへて出してあると思つた歌だが、調子がなだらかでしかもどこかしまつてゐて、だらけてゐない、頗るすきな歌である、義郎子はどんな事を云うてゐるかしらと見ると、まづ〳〵さほどの難はない、たゞ最初の說き起しが、

朝に見、夕に見、常向ひ居ても見あきのせぬいとほしい妻に別れて、云々。

とあるのが、ナンダか氣になつて不用な氣持がしたが、初學者に意義を解き聞かせるのには、なくてはならぬ事であらうから我慢して置く。

次に出てる歌は、「ますらをの鞆の音すなり」と、「わが大君物なおもほし」の二首であつてそして萬葉の一はこれきりであとは直ちに二卷へ移つてゐる。

あとは後日に讓ることとする。妄評多罪。

（明治三十六年十月、心の花）

擬古體とは何ぞ

一筆啓上、十一月發行の「新潮」に拙作「神杉の歌」御紹介下され候。日本派詩人の作として顧る者のなき星菫の當代に、有り難くも見て呉れる人ある事かたじけなき次第に候。當代の評者は吾等の作を單に擬古として取りあつかひ常に版で押した樣に一定致し居候。星菫をうたひ、わけの分らぬ新體詩を拵らへ、ヤタラに音便を用ゐる事は、成る程明治當代の新思潮とやらに有之候はん、吾等には其の所謂新思潮とやら無之ものなるべく、尤もニキビも無之あまつたるき音便も少々遣ひこなし難く候へば、日本開けてより此方一番すきな奈良朝以前の言葉が最も遣ひよく候。勿論少々は吾等の新造語が有つても、餘りによくこなれてゐるため、星菫の輩には單に擬古と見ゆべく候。「神杉の歌」、「其の想の凡を覆はんが爲上代の形容法と詞草とによる」とのゴタクに候。「其語法に至つては漢文渡來後の、一齋點法若くば歐洲文脈を辿るもの」に有之候由。カ

ウなつては、此の評者のいふ擬古も如何なるが擬古なるかをも知らざるものに有之候。評者は詩人か何か存じ申さず候へども、我國の古文の如何なるものかも知らず、或は中世語も近世語も御存知なきかの様に見うけられ誠に氣の毒に候。まづ人様の非をいはんよりは、引込んでちと本でも讀まれ候へ。あなかしこ。

（明治三十八年十二月、日本美術）

十とせの月日

正岡子規先生が現し世を去りたまひてより、今年この月の十九日であだかも十年の春秋を過ぎた。未來の十年はなかなかに永さうにも考へられるが、過去の十年といふ月日は、あまりに短く感じられる。

三十路あまり八つと數ふる吾が歳ゆ三つ若かりし大人の壽はや

○

世の耳目を欹たせて一事業を成しとげる人は、六十七十と生きて初めて人に知られるものである事を考へると、何業にかぎらず六七十年の月日を要するものであらうか。然るに其半期間の御壽命のほか有せぬ先生が、あれ程のことをなされたのは、つまり凡人の一年かゝるのを半年に仕遂げたわけだ。三十五歳の御壽命であつても七八十の老人と同じなのだ、私は三十八になるが今

猶先生を私よりも年寄と思つて居る。

世に生きて空しくあらば猫の兒が鼠をとるに遙か劣れり

或時の座談に、いまだ祝詞を見たことがないとの仰せであつた。早速古本屋から祝詞式を求めて先生へ獻じた。一と月か二た月たつ內に雜誌ほとゝぎすの改卷のはじめに先生の祝詞が出た。その時某田舍の中學で國語の教員をして居る友人が私に手紙をよこして、その祝詞を盛にほめてあつた。その後教員の男の上京した時に云ふには嘗ての正岡先生の祝詞は實に結構なものだ、全體祝詞は中學の生徒などに聞かせても講義しても意味が十分に分らないで困つてゐた、あの祝詞が出て以來、ほとゝぎすを持ち出して、それを讀みかつ意味を聞かせた所が、今度はよく生徒に分つた。其以來祝詞といふものは、どんなものかと聞かれた場合は、いつでもあれを持ち出して見せる例とした。國學者とか神主とかゞ作つた種々の祝詞を隨分澤山見てゐるが、未曾てあれだけの大文章を見たことがないとの事であつた。その後先生は、書く事は勿論、祝詞の話さへならなかつた。

〇

祝詞といふものは、太古の世、改つて貴人に物申す時の遺風であると思ふ。私は或時御醫者さ

んへの御禮に、贈物にそへて祝詞を送つて大によろこばれたことがある。正月の賀狀に祝詞をかいた。最近亡妻のために鐵塔婆を鑄て、裏に祝詞風の碑文を鑄つけた。

めぐし兒を置て夫我を置て同胞父母をさへおきて卅歳に一つ足はぬ齡もて此世逝しは去年の今日在邊我に嫁繼て八歳の月日は眞や短く有鶴鴨懷へば夢にも似有邊菜の花曇春の彼岸の果の今日一回年の忌日とて鐵もて塔を鑄沙門空巖師が所寫一切如來心祕密全身舍利寶篋印陀羅尼七卷を納めてこれの大塚なる墓にぞ置く南無梅窓院香譽嘉代大姉い彌陀の淨土に安らけく在れ

明治四十四年三月廿五日現世にさ殘る秀眞爾奏并鑄　助工谷中住廣耀齋平塚駒吉

大阪なる友人某、このことを聞いて云ふには、大阪邊ではお茶をブヾといふ、「ぶゞひとわざ」をしたものかなと冷笑された、冷笑なんてする奴が分らず屋だ。

〇

亡妻の遺骨を葬る時に、共に銅版の墓誌を埋めた。古い例はいろ〳〵あるが、その時のは圓形の鏡なりの銅版の一面へは妻の略歴を刻み一面に法號を刻りつけて、その傍に、さらに一首の歌をそへた。

汝がみほね土になるともからかねのこのたましろよとはにあり經む

千歳を經るもくちず腐れぬ銅などに、何の爲にこんな事をしたのか、たゞの平々凡々の妻女に過ぎぬではないかと人は云ふだらう。

○

墓誌といへば、故正岡先生の墓誌は、拓本をとつて置かなかつた。誠に殘念なことをした。大門通から眞鍮板を買つて來て、鳴雪翁が撰文をされて、誰やらが最も眞面目な書風だとかで、三並とやら云ふ方が書かれて、その書風通りではなかつたが、私が鏨で彫って大分くづしてしまつた。それを大龍寺の御墓の棺の上へのせて埋葬したのであつた。病みなされた脊椎、痛いと仰せられた御腰の骨、御苦痛はなくなつてその後十年、御髮、御肉つき、猶ありし昔のまゝで在らるる事かどうか。墓誌の銅版に綠青がさびてあるであらう。

○

私が歌を詠んだのは祖父の遺傳である。幼い時から、お前のおぢいさまは歌よみだ歌人だと話してきかされた。何とかして歌をよみたいと思つてよんだのは十二の時であつたらうか。十四五の時、或時老人が發句をやつてゐるのを見て發句をつくつた。東京へ遊學して添削をして吳れる人

があるのを幸、盛に歌を作つた。廿二三の時にどうやら歌といふものが分りかけた、廿四で一ぱしのよみ手の積になつた。岡麓君、桃澤茂春君たどゝはその頃からの歌仲間であつた。自慢ではないが、仲間では奇拔な歌よみの積で居つたが、仲間は左程に思つて呉れぬ。廿五の春正岡先生の御宅へ出る樣になつて、初めて伯樂に遇つた、千里の馬の積になつた。それも半年か一年で或事情で悲境に陷つて元氣がなくなつてしまつた。先生がなくなられる頃は、私の歌の慕はとぢたのである。その後五七年は笛や鼓の餘韻がある樣なものであつたらう。今ぢや千里の馬の骨のかけら程に思つて居る。骨をかき集めて、他の馬の皮をきて、再び舞臺に登つた所で、具眼者ならずともその剝製の馬たる事は、今かゝげた三首の歌を見ても知らるゝ筈だ。

（明治四十四年八月、アララギ）

左千夫君逝く

左千夫君が亡くなつた事が新聞へ出た。ほんとの事か知らと考へた。腦充血だとあるので、いつも腦がわるいと言ふ事を云はれて居たから、實際の事だらうと思つた。其の翌朝逝去の報知が來たので、いよ〳〵慥に亡くなつた事を知つた。

君と交際し始めたのは、明治三十三年の一月からである。丁度正岡先生が、『日本』新聞紙上で新年雜詠といふ題で短歌を募集した、その選歌を同紙上へ出した時に、左千夫君の歌が三首選に入つたのを發表掲載した。その日、根岸庵で同君に遇つたのが始めであつた。

この日丁度短歌會の日ではなかつたかと思ふ。例の通り、根岸庵の鈴のチリン〳〵となる門の戸を押しあけて玄關に這入ると、そこに男の下駄が一足ぬいである、先生の病牀の近くには一人の大男がむづと坐つてゐる。日頃見た事がないが、或は俳句の方の連中か、それとも歌の方へ新

しく這入る人かと思ひつゝ、先生に挨拶をして、その大男にも一寸おじぎをした。所が先生はすぐ僕に、この人は伊藤左千夫君といふ人だと云はれる、初めて聞く名であるから、ハ、アとか何とか返事をして、けげんな顔をしてゐると、また先生が、君は今日の新年雜詠の短歌を見なかつたかと云はれる。今朝はまだ見なかつたのである、そこにある新聞を見ると

〇

伊藤左千夫

葺きかへし藁の檐端に鍬鎌にしめ繩かけて年ほぎにけり

天近き富士のねに居て新玉の年迎へんとわれ思ひにき

ゆた〳〵と日かげかづらの長かづら柱に掛けて年ほぐわれは

と、三首の歌が出て居る。初めのはまづい、二番目のは隨分誇張した事を云つたものだ、全體此人はどんな考へでこんな事を詠むのだらう、三首目は如何にもこの體格に相應した詠口だと、私かに思つてゐると、先生がまた云ふには、この人は一昨年頃、伊藤春園の名で新聞で大に僕に喰つて掛つた人だ、と云はれたので、あゝさうか、たうとう僕等見たいに軍門に降參した所だなと思つた。後日岡麓君に、春園卽ち左千夫君の事を話したら、麓君の云ふには、春園を忘れたのか、僕は一二度遇つた事があるよといふ、どうしてかと聞いたら、桐の舍桂子とゝふ女歌人をわすれ

たかとまた云ふ。ナルホド考へ出したよ。

明治三十年頃であつたらうか、何の爲かよく記憶してゐないが、麓君と僕と鈴木好太郎君と三人で、女歌人の桐の舍桂子といふ人を訪問した事がある。ちさい子供に手習を敎へ、大きい女の子に裁縫や和歌を敎へて歌會も月々やつて居るといふ事であつた。麓君は其歌會で春園君に遇つたのらしいが、しかし言葉はかはさない樣子であつた。

後君に、桐の舍の門人か否かを聞いたら、時折歌會へ行つたので、門人ではないと云ふ事であつた。君の住居は本所錦糸堀、僕は二月頃綠町一丁目に移つた爲に、度々僕の家へは來てくれたが、僕はあまり行つた事が無かつた。一日暇があつて茅場町三ノ一八を尋ねたが一向知れぬ、柳島の方へ出てしまつて、或牛屋でバタを製するのを見て空しく歸つて來た事があつた。初めて君を訪問した時、君は非常に喜んで色々もてなして呉れた。其時初めて、君が茶の湯をやる事を知つた。祕藏の空中の茶碗を見せてくれたのもその時である。畫の話もする、陶器もいろ〳〵出して樂燒趣味をも語る。茶釜も出して釜肌の趣味をも說く、なか〳〵多方面に趣味を求める人だといふ事を知つた。正岡先生が櫻花といふ題を揭げて、第三囘目の短歌募集を初めた、その頃は君は、每晚の樣に僕の處へ來て共に應募歌を作つた。僕には茶菓を買ふ錢がない程貧乏であつた。

この頃の事であつたか、釣香爐が欲しいから作つて見ないかと君が云ふ。圖を二三考案したというて見せたが、なか〳〵要領を得てゐる、素人にしてはよく製作上の細かい處まで注意が屆いてゐる。僕は更に正確な圖をかいて、蠟形を作つて、模樣を入れて度々君に見せる、君がどうして良いか分らぬ所は僕の意見通りにする、如斯して二三月目にやつと二個の釣香爐が出來上つた事があつた。君に請求した作料は一箇月の暮しにも足らない程であつたが、大分高いものだ、餘り小言を云ひすぎたから小言賃も這入つて居るのぢやないかと云つて笑つた。

この釣香爐で思ひ出したが、丁度此頃正岡先生が蘂玉の釣香爐の圖を考案して送つてよこした、それを君に見せた時に、正岡先生はこんな事はやはり素人である、此の圖はどう製作してよいか見當が附かないと話し合つた事がある。君の考案で茶托を作つた事もあつた。安物の金襴手の香爐へ、青銅の火舍をつけた事もあつた。それがいつも考案が平凡ではなかつた。これ等は慥に茶の湯の道具を澤山見て居るし、畫や、蒔畫や、陶器を愛玩するから起つた事と思ふ。

時折は、こんな形の火鉢を見たとか、こんな模樣の蒔畫を見たと云うては、よく畫いて見せてくれた、陶磁器の話は大分君から聞かされて、僕の共趣味を悟つたのは、君が手ほどきをして呉れたのである。陶器の釉のかゝつたものを見なれてゐる君は、僕の常に作り出す作品の角が立ち

すぎたり、模様の肉の高低が際立つてゐるのを見て、ナゼ陶器の様に、とろりとした趣にせぬか、こんなに手の切れさうなではだめだと、遠慮なく非難する。僕が陶磁器は陶磁器、鑄物は鑄物の趣があると云ふと、それならば釜を見せるから來たまへと云つて、君の所藏の釜を見せにつれ出されたものだ。しかし君は、鐵鑄物のざんぐりした作風と、青銅のそれとを混同して居たのである。それは後日の事であつたが、結城素明君の處で、支那古銅器の圖錄を見て大いに感服した事を君自ら僕に話した事があつた。その時君と素明君との問答は、秀眞は青銅鑄物をやりながら、こんな結構な參考品の有る事を知らないらしいがどうしたものだと云ふと、素明君は言下に、こんなものの有る事は既に知つて居る筈だ、知つてゐるばかりでなく秀眞はこの方面では一番明るい筈だと云つたさうだ。君は言葉を更めて、古銅器の面白味を知つてゐるかと僕に云ふからそこで陶器趣味、鐵釜趣味、銅器趣味の各ゝの相違を說いて、大いに氣焰を吐いた事があつた。

こんな工合に美術品の方では、その茶の湯趣味から、頗る有益な話をいつも聞かされた。

自分の考案で棚を造らせたり、机を作らせたりするのを見た事もあつた。上總の埴谷杉をとりよせて造つた茶室は、何某宗匠考案といふ様なものではないが、兎に角左千夫趣味を發揮した茶室の様に思ふ。

君の年齢を知つたのは、正岡先生の讀平家物語といふ題で短歌を募集した時である。其の頃僕等仲間は日毎に平家を讀んだものだ。或る日君と根岸から歸る途中で俊寛の鬼界が島に死んだのは三十八歳である、僕も丁度其年だが、同年である事を思ふと同情の念が、いよ〳〵深くなるものであると語られる。其の時僕は二十八歳で丁度十ちがひになると思つた。この冬僕の貧乏はいよ〳〵極端になつた。妻は乳吞兒を置いて僕に何のことわりも無く家を出て實家へ行つてしまふ、乳がほしいので物も云へぬ兒は泣いて母をさがしまはる、近處には誰も相談相手が居ない。據なしに君の家へ行つて朝夕牛乳をもらふ事をたのむと、快諾して吳れたのみならず、さし當り困るだらうから米を買ふ金位少し持つて行くがいゝと云つて金まで貸して吳れる。今思ふと其時出水の後で、君や一家族の人達は、疊をつみ重ねた上にごた〳〵居られた時で、僕以上に物入りの時であつたのだ。僕の妻を元へ返すかどうするかの問題では困りぬいた。歌仲間はどれもこれも妻帶してゐるものはなくて、たゞ君一人である。從つて君の意見はよく僕の意にかなふのみならず、夫婦問題、男女の戀愛問題などに就いては、實に君の意見は機微をうがつたものであつて君の說を聞いてゐると心のくるしみやなやみが何時の間にか無くなつてしまふ。僕はその當時は實に妻といふ問題にとらはれ切つてゐた時分で、誰の意見よりも最も深く君の話に動かされて居たもの

だ。今から想ふと君の詞は一つか二つに過ぎなかつた。それは深い同情ある評に過ぎなかつたのだ、深く立ち入つて妻を元通りに歸せといふ意見でも歸すなといふ意見でもない。單に僕の思ふ通りの事を君の口から聞いて、そして同情せらるゝに過ぎないのであつた。僕はこの後、人の子の死を悔む時や、細君の死をいたむ時は、いつも君の僕に對した調子でやつてゐる。人に同情するといふ事は、其の人の悲しみに對して悲しみ、其の人の喜びに對して共に喜べばよい。理窟をこねて同情は出來るものではない、君は慥に僕よりも十程の兄であつた。かゝる事は歌から得た君の悟りであると思ふ。三十四年の秋、日暮里に移つてからは疎遠になつた。四十二年、僕は又田端の今の處へ移つた。君の歌や、歌論に就いては已に定論がある。しかし僕に云はすれば君の歌は連作論を唱へる頃から次第に微細な處に意を用ゐる樣になつた樣だ。これはその頃の短歌會同人の流行であつて、一は俳句のさゝやかな著眼に眞似た氣味がある樣だ。僕は大ざつぱな事を歌つて、たゞ調子――口調のすら〳〵としたのがすきな爲に遂に日暮里以後、君と殆ど調子が合はなくなつて、その爲に作歌もしなくなつてしまつた。君の根岸庵の歌會での歌のうちで今に記憶して居るのが二つある。

元の使者已に切られて鎌倉の山のくさ木も鳴り振ひけむ

これは鎌倉といふ題であつたかと思ふ。正岡先生も時折口すさんではいゝ歌だな、と云はれてゐた。今一つ

牛飼が歌よむときに世の中のあたらしき歌大いに興る

或時君と共に根岸庵へ行つた、正岡先生が思ひ出した樣に言はれるには、左千夫君の銅像をこしらへてそれに刻みつける君の歌は、この歌であらう、と云はれた時に、君の云はれるには、あれはもう古い歌です、自分ですきな歌だとは思ひません、と云つてゐた。僕は何年經つてもいゝ歌だと思ふが、何か外に近來の名作と自讃するのは何かと聞いたが、返事がなかつた。

今年四月廿七日、久し振りで僕の家へ來た。石井柏亭君の案內でポプラ倶樂部とやらへ行く積りだが一緒に行けと云ふ、僕は仕事の都合で行かずに居ると、午後二時頃歸るには早過るのに再び來られた。君と話す方が愉快だというて、いつもの癖の横になつて話しこむのであつた。嘗て君の賜物の尾張の御庭燒の皿へ菓子を盛つて出したら、久しく永く持つて居る、古い愛玩品を見ると大變なつかしいと言つて大いに喜ばれた。此の頃僕の求めた甑釜の風爐の形を如何したらよいかを相談した、その內考へて圖を送ると君は云はれた。君が今持てる釜の內に平蜘があるが、こ

れを透木でなしに唐銅風爐にしたい。これも考案して見ると云はれた。

夕方柳田國男氏が來られて三人共に近所へ出かけて飯をやる、君は今迄にない程珍しく盃を重ねられた。古く所持の釜は大方人に讓つたが、まだ二つ三つ持つて居る、是非見に來い、と云つて別れた。其釜は、君の四十九日忌に君の舊廬で見る事になつた。風爐の考案はあの世で、頭の痛む事もなく出來たらうか――無線電信でもこれぱツかりは通信が出來まいナア。

（大正二年十一月、アララギ）

長塚節のことゞも

幾年ぶりかで突然長塚の訪問をうけた、彼の長篇小說「土」の執筆中の話を聞かされた。「僕の樣なつまらぬ男でも一生懸命になれば一つの仕事はなし遂げられるものだ」といふ事を繰返して語るのであつた、推敲に推敲を重ねたらしいあの長篇の爲に、遂に名聲と共に不治の病をまで得るに至つた努力は大したものである。

その頃私等仲間で努力の作品だと云ふ大評判のものがあつた。京橋八官町の「吾樂」といふ同志の陳列場に出陳せられて居るもので、小場恆吉君といふ圖案の人が作つた緩綢彩色の木箱である。長塚が是非見たいと云つて見に行つた、其感想はからである。

「初めて見た時は其の美麗さに驚いた、幾度か箱の前を去り幾度か見かへした、しまひには美しい事は美しいが、何だか物足りなくなつてしまつた、思ふにあの仕事はやり盡してしまつ

て、觀者の感興をそゝる餘裕をなくしてしまつたものだ」と云ふ樣な意味の事を云つて居た。一見識ある見方だと思つて聞いた。

長塚の上手な寫生文、長塚の巧みな歌、その弊はこの手箱の批評を直ちに自分に持つて來べきであつたらう。「土」が「東京朝日新聞」に連載せられて居る頃、或友人が云つて居た、『左千夫がしきりに小說をかくのさへ面白くないと思つて居たところ、この頃長塚が又「土」といふのを長々と書いて居る、泥くさいものなどはよして呉れゝばよいに――」といふ事であつた。節の「土」以後、泥に眼ざめて土を冠らされたものが大分見え出して、土の禮讃がしきりに行はれて居る。泥くさいとけなした友人は今洋行中で、日本に土の禮讃が行はれて居る事を知らずに居る樣だ。

長塚が或時子規先生を訪問して、澤山の人々の手紙や何稿などの反故を貰へばよかつたのに、遠慮して少しばかりの反故を拾ひ出して歸つた。殘された反故は空しく紙屑屋の手に渡つてしまつたと云ふ、あたら資料を失つた事を今に殘念に思ふ。

長塚から學界に知られて居らぬ朝鮮鐘所のあり場を二つ三つ聞かされた事がある、「朝鮮鐘といふものは面白いものだ」と云つて居た。近江の西明寺や豐後の富貴寺等の彩色ある建築物も、

美術の專門家ですらもよくは知らないものを知つて居て比較談を聞かされた、近く出版せられる全集に鑄やこれ等の建築物の事が出ると云ふ、どんな研究があるか讀んで見たい。こんな美術上の事は同縣出身の緣ある文學士齋藤隆三君のさしがねに依るものが多い事と思ふ。

文章も歌も頗る氣がきいて居た彼長塚は、からだの樣子著物の著こなしもきちんとして、聊かも取亂した所がない、從つて人が少しでも變な樣子をして居ると、大口をあいて「アツハツハツハ――」と大聲で笑つたもんだ。左千夫の黑いふぐりが、あぐらの間に出現したのを拜ませられるや否や、あたりかまはず突として大聲に笑ひ出すことはしばしばである。彼或時私に云ふには「君は齋藤茂吉つていふ男を知つてゐるか、アレは實にをかしい男だよ、アノ男を訪問した時に、立ち歩く足許の樣子が、ばさばさして變てこだから注意して見たらば、足袋のコハゼをはめて居ないんだよアツハツハツハツハ…………そゝつかしいのだか、忘れたのだか知らないが實にをかしな男だ、ハツハツハツハ…………一度遇つて見たまへ」

快活に笑ひながら、こんな事を云つて居た。それは變てこな男に遇へと云ふ意味にもとれるし、嘲笑して居る樣でもあるし、愉快な男だから遇へといふ樣にもとれた。節の笑は私にはいろいろにとれる場合があつた。

森田義郎は、彼よりも年少であつた。義郎は左千夫を小さくした様な、ずんぐりした男で、彼の様に呵々大笑するといふ風はなくて、ケツケツケツケと笑ふ方である。どういふものか義郎は節をすかなかつた、「アノ小利口た節めが」といふ風であつた様に見えた。

同人中では左千夫が最も長老であるので、彼がしば〳〵訪問した事は無論であるが、最も心やすく交際したらしく見えたのは岡麓である様だ。どちらかと云へば私とは常に疎遠がちであつた。節に就て何か書けと云ふ註文でこんな事をかいたが、嘗て何かへ書いた事があるかも知れない、それとこれと少しの相違があるかも知れないが、今から思つてかう書いたまでのこと。

（大正十四年十二月、新小説）

長塚節君について

一昨十三日の午前の雪の降る中を平福君の訪問を受けました。この雪の中を穩田から何用が起つて來られたのであらうかと、土だらけの著物のまゝで失禮ではありましたが御目にかゝりました。今一人御つれの人がありました。それは御名だけを知つて居た沼波君でありました。御二人でこれから長塚君のお葬式に行かれるさうで、私をお誘ひに來られたのださうです。其時憶に貴方の御返事の模樣を聞きました。まだお端書は著きはしませんでしたが、歌の仲間は一人も會葬されぬ事を知りました。丁度此の日は早朝から雪ではあるし貴方から御返事がないし、誰も葬式に行かぬらしく考へましたから、學校への用事も斷り、鑄物をしようとして型を燒いて居た所でした。

私は節君の遺骨を東京驛で迎へる日は、大きな支障りが出來て、殘念ながら行く事が出來ませんでした。古い歌よみ仲間が誰も會葬せぬことは甚だ物足らず淋しい事であるだらうと考へまし

たが、型はだん〳〵燒けて來る樣子、弟子ばかりに鑄物をまかせて置く事も心配ではありましたが、一生に一度の故人の葬式に、是非行きたいと思つた初一念も果さぬのも心持よくないし、とつおいつの結果、平福君等と行くことにきめまして、午後一時幾分に日暮里から平行きの汽車に乘ると、節君の御舍弟の小布施さんの御一族が丁度上野から乘つて來られたのに同車致しました。其夜は小布施さんたちと明日を約して分れ、私等三人は石下の住吉屋へ宿りました。

十四日は裸體で洗濯の出來る樣な日本晴でありました。石下から一里餘の白妙の雪道を車にゆられて國生へ著いて、夥しい會葬者の中に交り込みました。

結城のや國生の聖はふる日と世はしろたへのよそほひせりけり

筑波根は銀の冠をいたゞきてこのはふりごと見そなはすらし

汽車の都合で、とこしへに鎭まる墓へは殘念ながら行く事が出來ず、鉦鼓の音を後にして、筑波山の夕やみに消えるのをふりかへりながら、この夜三人とも無事に歸京しました。貴方の御返書も拜見しました、弟子たちにまかせた鑄物も皆よく出來てゐました。數日來氣に掛つて居た會葬の事もし終へて、今日の晴と共にすが〳〵した氣持になりました。序でに平福君におあひの節宜しくお傳へを願ひます。平福君のお蔭で會葬が出來たのです。

節君の追悼號に何かとの御手紙でしたがまとまつた考へもありません、唯手紙が一二通ありますからお目にかけます。二の白半切の分は拙作おとぎり草の評と同封の返事と思ひます、おとぎり草は同人の評と共に日本週報へ載せた事と考へます、一の赤半切はいつの事か知れませんが、節君は何時もかやうないたづらをしてよこしました。今考へますと、私よりも六つも年したで、弟が兄貴にからかひづらをする様な氣持でゐたのでせう。

大正四年三月十五日朝

長塚節書簡の一

しばらく御目にも掛りません、近來はいかにお暮しですか。田舍の私は淋しくて面白くてたまりません。また氣まぐれにこんなものを作りました。怒らずに御覧のほど願ひます。怒るよう[illegible]なら日本堤をかよひなれた人には不似合と申したくなります。

明治〇〇年十月二十二日

〇秋の日にかはく更紗のさら〲にきかなくひさし老いにけらしも

〇更紗ほす庭のいなごはおのがじゝいもじ見むとてつどひ來らしき

○へなづちのよごれ見まくと泥田なるいなごのともはけだし來にけり
○眞途なくただらのおちに光るものいもじが目からきらゝかにして
○注連繩のすゝびし蔭にいそはくと煤びたらずやあたらいもじを
○おろそかに庭にな立ちそ山茶花の花さへいなといひて萎まむ
○此のごろはそとにもいでずといささかは白くぞあらむ煤びたれども
○芋の葉の妹もいなまむ二たびは日にはな燒けそさめけむものを
○土芋も洗へば白し鑄物する人をこひむは浴みしてのち

長塚氏書簡の二

拜復。久々にての御狀うれしく披見いたし候。玉稿朱書にして御返し申上候。有體に候へば全然失敗に候。取材の宜しきを得ざりしに歸し可申候。小生の作『馬醉木』に載せし候ものは不出來なるは申すに不及候へどもアッサリしたものはアッサリ表はさんが目的にて主觀の必要は認め候へどもいつも極り切つたる同人の主觀が氣に食はず候まゝ、あのやうなものも試み申候。此後も時々出し可申候、今月の分へも少々載せ申候。是非共有體に御批評下され度待居候、『海底問答』

に就き御稱揚恐縮に候。語句の粗笨なるは自らしもしか思ひ居候。左千夫君の批難はさることながら、潮音君は面白き由左千夫君の許へ申來候。岡君との間にはどうも申樣もなき面白可笑しきことに候。岡君にきゝたまへと申候。

明治〇〇年八月十一日

長塚氏書簡の三

此鐔が朝鮮製のものとしては第一らしい。少くとも今迄見た十六ロの內では第一である。一體雲州のものは霧のために綠靑の工合が素晴らしくい丶。只雲樹寺のは見るさへなか〳〵だから困つてしまふ。盜まれちやあ大變だといつてからうしておくのである。今日大社へ來た。（鐔に鬥打ちたる繪はがき、出雲杵築より）

（大正四年六月、アララキ）

正岡子規の歌について

私が正岡先生の家をはじめて訪れたのは、明治三十二年一月の末か、二月頃でゞもあつたらうか。

その時分の歌壇は、所謂新人として佐々木信綱氏や與謝野鐵幹氏が振つてゐられた時代だつたが、あゝした歌を好まぬ我々は『なあにあんなものは』などゝ云つて一向近づかうとも思つてゐなかつた。

明治三十年其頃だつたか、『子規遺稿』の中の『歌集』の一番はじめに出てゐる『愚庵和尙より其庭になりたる柹なりとて十五ばかりおくられけるに』、あの歌が發表されたのを見て、私は非常にそれを面白く讀んだのである。

○御佛にそなへし柹ののこれるをわれにぞたびし十まりいつゝ

○籠にもりて柿おくりきぬ古里の高尾の楓色づきにけん
○柿の實のあまきもありぬ柿の實のしぶきもありぬしぶきぞうまき

さうした歌は如何にも奈良朝ぶりな、さうして今迄の歌と違つた或る新しさを見出す事が出來た。

初めて訪問したのは岡麓君と一緒だつた、たづねて見ると『歌の仲間がなくつて困つてゐる、一緒に作らうではないか』と云ふことになつた。

その時分私や岡君やでやつてゐた歌の回覽雜誌があつた。あの俳句の十句集など丶同じで紙上互選をやるのである。それを話すると『是非入れてくれ給へ』と云つて、なんでもその回覽集に四五回出されたやうに記憶してゐる。歌集中の

亡き友を埋めし墓のかなめ垣かなめ茂りて我老いにけり

と云ふ『垣』三首は其の集の作と覺えてゐる。

なにしろ最初我々が逢つた時分の百中十首の歌などは俳句趣味を引き伸ばしたやうなものが多かつた。しかし一緒に作歌してゐるうちに段々變つた面白いものをよまれるやうになつた。

よく子規居士の歌を批評する人が、居士を萬葉尊崇のやうに云ふが、あれは大分間違つてゐると思ふ。實際子規居士の歌の萬葉調加味は、私達に餘程罪があるのだ。その譯は、はじめて逢つ

た時分、子規居士が、『歌集はおもに何を讀んでゐます』と問うたので先づ萬葉集と云ふべきを此頃では濱臣の歌集をと答へた。子規居士ほどの人だから其前に萬葉集は讀んで居ない筈はなかつたらうが、深く研究的に讀まれたのは、その我々との接觸後、又根岸短歌會で其後はじめた『萬葉集輪講』などが、あづかつて力のあつたことは疑ひを容れないと思ふ。

それにしてもそれは歌人の子規としての小部分で、決して今の『アララギ』の諸君が萬葉を唱へてゐるほどの萬葉崇拜では無かつたと私は信じる。崇拜でなくてむしろ神髓をつかむ考へであつた。子規の歌を論ずる人が、單に萬葉派を以て居士の歌の全部を批評しようとならば、それは非常な誤りだと私は思ふのである。

話が外れたが、兎に角歌會が初まつてから根岸短歌會は大分人が來るやうになつた。虛子君、碧悟桐君は勿論、今川柳を作つてゐられる久良岐君なども來た事があると覺える。さうした會を重ねてゐる內に、いつのまにか一つの正岡調が出來た。

最初、例の回覽集時代に、子規居士の歌を外のとまぜて書いて見ると、一向眼立たぬ。特に眼立つものがなかつたのだ、根岸短歌會が盛んになるにつれて、居士以外の人のは百中十首風であつたり、さうでもない一種のギゴチない正岡調が出來た、と思ふ。

正岡先生は歌を作る場合にも俳句を改革したと同じやうな心持で、つとめて今迄の調子、今迄の內容を避けよう、そして作らうとしてゐた、同時に口に出してもさう云つて居た。で、さうしたギゴチないゴツ〳〵した歌も出來たのであらう。我々などはあんまり感服もしなかつたが、赤木格堂君などは、よほどそのギゴチないのが御氣に召したと見えて、よくそれをまねたやうな歌を作つたものだ、と私には感じられだが、實はさうでなかつたかも知れない。

しかし私に云はせると、子規居士の歌の本當の持味は、さうしたのでなく、むしろなだらかなやすらかな所にあつたのではなからうか。それはたま〳〵よまれたなかに、私のすきな非常によい歌を發見するからである。

いつたい『子規遺稿』の中の歌集の部は、六人で選んだものだ。私、岡麓、蕨、伊藤左千夫、長塚節、今大阪に住つて居る畫家の安江秋水等である。なんでも明治廿五年から歌を集めたなかから拔いたのだが、三十年以前のは誰も拔かなかつた、やはり『歌よみに與ふるの書』など書いたり何かして、歌に油の乘つて來た時代だけ、三十年以後の作品の方が以前に比較してずつと良かつたのだ。勿論短歌革新の先生の歌といふ考へが選者等の頭にあつたからだ。

選をしたその時でも、折々とり出して讀む今でも、一種心もちの引かれる歌はと云へば、前に

云つたなだらかたやすらかな歌である。そしてその中には、いつ讀んでも飽かぬなにものかゞある、と思ふ。なだらかと云ふ事は、初めからの私の好みでもある。

前に擧げた愚庵への歌の外、誰でも好いと云ふ、

吾妹子が手馴の琴の絲の緒と長さあらそふ藤波の花

といふ歌や、

筒井筒井筒は朽ちて古柳柳絲しぬのぞく子もなし

などは古今の絕唱と思ふ。『病中對鏡』と前書をした、

昔見し面影もあらず衰へて鏡の人のほろ〳〵と泣く

これなどは古人も嘗て云つたことのない、すぐれた歌と私は思ふのである。

ところが子規居士は、さうした意味で我々が面白い良い歌として推賞する歌を、妙に自分からつまらないものとしてしまつて、頻りに卑下した、言譯がましい事をよく書いてゐる。連作のうちで（『子規遺稿』歌集部九十八頁）

夕餉したゝめ了りて仰向けに寐ながら左の方を見れば机の上に藤を活けたるいとよく水をあげて花は今を盛りの有樣なり。艶にもうつくしきかなとひとりごちつゝそゞろに物

語の昔などしぬばるゝにつけてあやしくも歌心なん催されける。斯道には日頃うとくなりまさりたればおぼつかなくも筆を取りて、

瓶にさす藤の花ぶさみじかければ疊の上にとどかざりけり

瓶にさす藤の花ぶさ一ふさはかさねし書の上に垂れたり　——下略——

おだやかならぬふしもありがちながら病のひまの筆のすさみは日頃稀なる心やりなりけりをかしき春の一夜や

の前後の文や、その次の

しひて筆を取りて

佐保神の別れかなしも來る春にふたゝび逢はむわれならなくに

いちはつの花咲きいでゝ我目には今年ばかりの春ゆかんとす　——下略——

心弱くとこそ人の見るらめ

の前書やがさうである、して見ると子規自身にしては是等の歌は異調であつたかも知れぬ。ところが我々に云はせるとこれらの諸作は、はるかにゴツ〳〵したギゴチない他の歌より優れてゐると思はれるのである。此の調子は死の眞近で大成されたのであつた。

私は思ふ。正岡子規と云ふ人はあゝした大病にならず、健康でさうして衣食が足りてゐたら、恐らく人の意表などに出るやうな事なしに、むしろ平易な事をし、しづかな一生を送つた人ではあるまいかと。限られたる命が、燃ゆるが如き勇猛心を起させて一正岡子規と云ふものにあゝした仕事をさせたのだが、子規その人の本當の持前は、却つて反對なそのやすらかな所にあつたのではあるまいか。しかし是は私だけの臆斷である。

それから是は誰も云つてゐないが、子規居士の長歌は實によい。この「遺稿」の歌集に載つてゐるなど悉くよい。

自分などが折々長歌を作つて先生に見せると、『長歌は、かうづら〳〵と文章に調子をつけたやうな、そしてそれに所々枕詞を入れたやうなものでは一向面白くない。すこし所々消してはどうか。こゝのこの一行を消すと面白くなりはせぬか』などゝよく云はれたものである。よく考へると成程自分達の長歌は云ひ過ぎたのが多い。それにくらべると子規居士のは云ひ足らぬと思ふやうな所はあるけれども、それが却つて全體を面白くしてゐる。矢張どこか非凡な所がある。

私は子規居士のやすらかな歌を推賞すると同時に、多くの人の云はぬ子規居士の長歌をも推賞したいと思ふ。

（大正十年九月、俳諧雜誌）

林潤集に序す

上總の埴谷は和名抄の鄕名に見え、後世千葉氏の一族埴谷大亟の占居した處で、成東の西北二里、山間の名邑である。小字寺ケ臺の妙宣寺は、應永年中埴谷豐前守景正の建てた寺で、僧日英を初祖として居る。日英の弟子の日親は、景正の子の埴谷大亟左近將監の次子で日蓮の宗義を修め、足利義政の時に所々を横行して他宗を誹謗し、屢〻宗論を起した爲に幕府の爲に禁獄せられ燒鍋を被らしめられたが、尙撓まずして法義を主張したといふ傑僧である、所謂鐺冠上人の出た寺、その寺には亡友蕨眞君のおくつきがある。

埴谷の御代官の名は數里四方に轟いて居た、その御代官の家に生れて根岸派歌人として立つた蕨の麻古登、眞一郎君は、二十五年來の歌仲間である。

根岸の子規庵に雨の日は草鞋ばきで來られた事があつた。私の家にも一二度山人の無作法を爭

してもらひたいなど丶云つて來られた。

私が歌に遠ざかつて居た間は、君とも往復がなかつたが、逝かるゝ一兩年前からは、上京の度毎に音づれてくれた、令弟橿堂君と同行で一泊されて歸られた事もあつた、舊友をなづかしく思ひ出した爲であらう。

君が斗酒尙辭せずと云ふ事を知つたのは晩年である。私もかなりゆける方だが、とても太刀打が出來ぬわいと或時つく〴〵思はせられた事があつた。睦岡のわらびおとどは水たまる池田の朝臣がみするなるらし、といふ竹の里人の歌があつた樣だ。酒の爲でもあるまいが赤鼻の部である。

君の文章も歌も談話も、充分に解しかねる事が往々あつた、詩人らしくひとり合點の所があつた樣だ。鐵冠上人の樣な手強く根氣づよく、思ふまゝを貫いて行かうといふ氣概がほのめいても居た。

君の談話中で今猶記憶に殘つて居る事がある。社會主義が世間の問題にされて論議せられる當時のことであつた。赤い顏をしながら鼻をます〳〵赤くして大杯を傾けつゝ語る。

山林を養成して居ると社會主義は到底駄目な事が分る、先づ杉の實の種子の優良なものを更に一粒えりにして蒔く、芽生の後既にその苗に優劣が出來る、林に移植する時迄にはかなりの落伍

者が出る。林に植ゑるには一本に幾尺かの地面を當てゝ同じ間隔を置いてやる。五年十年と過ぐる間には折角丹精してやる甲斐もなく發育のわるい木が出るから、他と平均せしむる爲に引拔いて代りの木を植ゑる。二十年三十年とたつ内には順よくのびて來たものが、根まはりの惡い爲に風に倒れたりなどする、同じに繁殖して行く樣にと人間が注意してやるにも拘らず、同じ樣でない奴が出て來る。今主義者の説に從つて、同じに財産を分配しても、幾年かの後には貧富の差が甚しく起つて來る事を山林から教へられる。社會主義は行はれ難い駄目な主義である。といふのが君の山林哲學であつた。

高祖父以來二百年もたたうと思はるゝ矛杉の山林を、幾十町歩かを有し、年々二三千本の苗木を養成しつゝ、後代の事を氣永に考へて、物質的には不自由なき山人も、周圍の村人の沒分曉の我利々々連中に困りぬいて、酒と歌とに僅に鬱悶をなぐさめ、自説と詠歌とを發表する機關として農林といふ小雜誌を月刊するのが唯一の樂みとして居られた樣だ。農林學校を設けて子弟を教育して居るものゝ、晩年には淋しさに堪へずして時々上京しては先輩知己を訪問したらしい。

三回忌に當る今年、令弟櫺堂君に依て編まれた君の歌集林澗集は、世に遺さるゝ君が唯一の記念碑である。

天を摩する矛杉も一朝斧をいれらるれば枯山と變ずるであらう、併し君の詠歌は後代までも君の所有であつて他人の冒す事が出來ぬのである。安らかに妙宣寺のおくつきに眠り居たまへ、埴谷の淸冽な泉が、歌の燒野を旅行く人の淸涼劑となるならば、由緒ある上總の埴谷は、再び君の林澗集に據つて世の記憶を新にする事であらう。永へに歌靈として鎭まりたまへ。

大正十三年七月盂蘭盆會

東武道灌山にすむいもじ下總國印西の人香取のほづましるす。

正岡先生の塑像

子規庵には先生の肖像が三つ遺されて居る。一つは先生自作の陶土製の首、一つは私の作つた石膏の床上像、一つは作者不明（恐らくは原安民か）の世に廣く知られた寫眞にある半面像の薄肉のもの。三番目の作者不明の薄肉のものは別として、一番目の先生自作の首と、二番目の寢像とに就ての古い思ひ出を記して見る。

一　先生自作の首

『子規全集十五卷』書簡集五五一に、明治三十三年（月日消印なし端書）本所緑町　丁目三十八番地の私宛の片假名交りの歌四首を載せて居る。

我顏ヲ鏡ニ寫シ共顏ヲ土ニカタドリ土ノ坊主成ル
我顏ヲ鏡ニ寫シタカタドリシ竹ノ里人手ツクネノ像

我顏ヲ見テカタドリシ土カタハ我顏ニ似ズアラヌ人ニ似ル

渾沌ガ二ツニ分レ天トナリ地トナルソノ土ガタワレハ

これは自作の像の前ぶれであつたのだ。

回顧すれば、肖像を作られた土はどこから得られたのであつたらうかとの疑問が起つた。事に依ると原千代子君から得られたものかも知らんとも考へて見た。そこで一應私の歌日記を繰り返して調べて見る。

明治三十三年三月十三日に、先生から釣香爐の圖を郵送され、同月十八日に不折君筆の釣香爐の圖七個を添へて四首の歌を送られた。(書簡集五四二、五四三)元來この釣香爐の圖を送られた動機は、左千夫君が私に釣香爐製作を托された事があつた事から起つたので、左千夫君が釣香爐の事を話された爲に、大に興に乘じて圖案されたので、先生から送られた圖は藥玉である。であるから不折君の圖に添へた先生の四首の歌の中にも、

我圖案ヲ不折見テ曰ク藥玉ノ釣香爐ナドハヨシテモラヒタイカナ

とあつて最後に、

來ル日ノ二十日アマリノ二日頃ニサチヲ來ルトフ君來給ハズヤ

とある。この先生の手紙の來た夜、丁度左千夫君が來られて二人で歌をよんで先生に送つた。

中村の不折がかけるつり香爐畫のまゝにして見るべかりけり　左千夫

模様より生れし不折がつり香爐畫のまゝ見れば見らくしよしも　秀眞

鐵瓶も藥罐もすべてくさりつけの手當り次第の釣香爐の圖

三月二十二日左千夫君と共に根岸へ行く、土を持つて行く。晝飯と晩飯と馳走になる、共に春雨十首をつくるなどと云ふ事が私の日記にあるから、この時持參の土で先生自ら作られた首であつたらう。土は今戸で買つて陶器の蓋付の壺に入れて濡れた布を土にかぶせて乾燥しない様にして持つて行つた事などを思ひ出した。

四月十日先生の母堂珍しく、初めて本所緑町の私の家に來られた、先生からの手紙の封筒には『首桶添』とかゝれて居て大事さうに持つて來られた母堂の手からは、ブリキの茶罐らしいものを渡された、まづ手紙を開いて見た。

顏カタゲノ御像御目ニカケ申候御序ニ御燒キ被下度候急ギ不申候若シ燒カズトモカタマルモノナラバ燒カズトモ善ク候

上ガタニウツシカタドル我顏ノスコシユガミテ猶面白シ

常臥ノ病ノヒマノツレ〴〵ニ土ヲツクネテ人ヲツクリヌ
土ガタヲ入レタル罏ヲ携ヘテ秀眞ガリ行ク途中氣ヲツケヨ
此次ニ何ヲコネンカ驚ク莫レ大慈大悲ノ觀世音菩薩
觀音ヲ寫生ナサント思ヘドモ觀音アラズ似タル女モガ
方丈ノ室ニコモリテ揑ネント思フ二丈五尺ノ土ノ盧舍那佛

圖が先生手づくねの土の像である、高さ四寸六分。

母堂は直ちに歸られる、そこで先生へ歌を送つた、私の歌日記によると次の如きものが書いてある。

マレ人ノマレニ來ヌルニ驚ケバ首桶モテクフタヽビ驚ク（正岡先生ノ母刀自ノ君ノ來タマヘルナリ）
首桶ノ蓋トリ放チ土型ノ御首ノ像ヲ拜ミ奉ル
コノ首ニ似タラン首ハ外ニアラズ根岸ニコヤス竹ノ里人
横ムキニムカセテ見レバ我見タル旅ノ寫眞ノ君ニ似タルカモ
マムキヨリモ横ムキヨリモヨク似タル上カラ見タル竹ノ里人ノ首

ツクネシハ竹ノ里人ツクネラレシコノ土ノ像ハ竹ノ里人

ホラホラニ内クジラネバ燒ケガタシ燒カズヲ有ラン一ツ石膏ニトリテ

陶土であるから燒けはするけれども、燒くには茶を入るゝ土瓶や土のかめの様に、内部がホラになつて居なければ燒け難い。だからこの首を原型として石膏像を一つ造らうと云つてやつたのである。

歌日記には首の塑像に關係した私の歌がまだある。卽ち

竹ノ里人ガ造ラレタル首ヲ見テ作ル長歌

トコナヘニトコフシニ、足タヽヌ竹ノ里人、ツレヅレニ鏡ニ對ヒ、土クネテヘラトリテ、自ラガ顏ヲ作レル、其ガ顏ヤ竹ノ里人、鑄物師ト名ニオフ吾ニ、土型ヲミセテノクラハ、コノ次ニ造ランモノヲ見テナ驚キソ、大慈大悲觀世音菩薩、ソガ次ニ造ランモノハ、二丈五尺アマリノビルサナノ佛ツクルトフ、アナアハレヲヽシキ企、シキ島ノ大和ノ國ノ、百千人土師ガトモガラ、タマキユナユメ

左千夫君ニイヒヤル

自ラガ鏡ノ人ヲ作ラレシ竹ノ里人ノ像君來テ見ラレヨ

『子規全集十五卷』の書簡五五七に虚子君に宛てた端書には『(上略)一昨々夜より少しく血痰あり平臥致居候其中つれ〴〵にたへず人の首一つこね申候、十八日(四月)』とあるが、去る十日の私の方への首はまだ私が預つて居る筈だから別にまた人の首を造られたものと思はれる。

『定本子規歌集』371頁、病牀週間記事のうちに

四月十六日(壺中の粘土を取出て)

常臥の病のひまのつれ〴〵に土をつくねて人を造りぬ

虚子君宛の端書と、この四月十六日の歌とは符合する、併しこの二度目の首は私の記憶にはない。去る十日に私の預かつた首は、燒けぬから一つ石膏にとると云ひ送つたのに對して、四月二十日には『燒カズトモヨシ』の歌の外に長歌共五首を送られた。首を燒くか燒かぬの問題には、此頃今戸の陶器師の乾也の處へ時々通つて居た原千代子君が關係して居る樣子であつた。五月十日に女史は子規庵を訪問してゐる、又私の歌日記に依ると、五月十九日に女史に會つた時の事を

するゑ造る千代子の刀自は土の顏やかぬよけむと大人につけてと

とある。結句がよく分らないが『燒かぬよけむと大人に告げて下さいよと云つた』の意味であるらしい。『折角に先生の御造りになられた首がムクの爲に萬一燒いてハゼてしまつては大變です

よ』など云つたものかも知れない。女史は五月十日には子規庵で三個の像を見たであらう。

ホラ〳〵ニホラニ造リテホラアタマノウツロアタマトナスベキモノヲ

ミチ足レルオモタキアタマ穴ヲナミ焼クトモ焼ケジカ焼カズトモヨシ

イカニシテ石膏ニ取ルカ殊ノ外ニ手數カヽラバ取ラズトモヨシ

この先生の歌は四月二十日戴いたもので、これに對して私から寒天型で石膏取りをする方法を云ひ送つた。

石膏ノ雌型モアレドカンテンノ雌型ニトリテ石膏ヲツグ

鍋ニシテカンテンヲ煮テ首像ヲ箱ノ中ニ入レテカンテンヲ滿タス

カンテンノカタマル待チテ取リ出デヽカンテン割レバ土ノ首出ヅ

土ノ首出シタル箱ノカンテンノ雌型ノ中ニ石膏ツギコム

土ノ首少シシメリテ生ニアレバカケズクヅレズ元ノ如クナリ

石膏ノ首ヲシ見レバカンテンノチヾマリケラシ首モチヾマル

石膏ヲカンテン型ニトリシ首少シ縮ミテ露伴ニ似タリ

土ノ首ハ土ガタナガラ置クヨケン日數シヘナバヒテ固マラン

カンテン型から取り出した石膏像と、その原型となつた先生自作の土像とは四月二十三日には既に子規庵に持つて行つた事と思ふ、なぜならば「定本子規歌集」390頁の一日一詠のうちに、

四月二十三日(塑像石膏像三個)

ともしびの光さしたる壁の上に土人がたの影うつりけり

とある塑像石膏像三個のうちの石膏像は私の方から届けたものらしい。今一つは先生自作の土像今一つは虚子君への端書の『人の首一つ』即ち四月十六日の『常臥の病のひまのつれ〴〵に』とあるその像であるらしいからである。併しこの像三個に就ては疑問がのこる。前述の原千代子君との『土の顔焼かぬよけむ』云々の歌は五月十九日の事だから此間かなりの日数がある、土の像は私の方にあつたか子規庵にあつたか。だがそれは像は子規庵へ歸つたが、あれは焼かぬ方がよいとの結論であつたのだらう。

五月卅一日の私宛の先生の端書に

一サカノ壺ニミテタルハニ土ヲツクネントシテイマダツクネズ

面ノ皮千ヒラカサネシ我面ハモユルホノホニ焼クトモ焼ケジ

こゝでは遂に焼けぬ事を詠まれたのであるから、像は何れにあつてもよい、むしろ焼けぬ像を見

ながら『燒くともやけじ』とよまれた方が自然でもある。

私の持つて往つた土は前に述べた樣に陶器の蓋付の壺に入れてあつたのだ。「一サカノ壺ニ」の方は壺にある限りの埴土をつくね終らずにまだ壺に滿ちてゐると云はれたのだ。此後は遂に土をつくねて物を作られたことがなかつたと思ふ。

二　塑像の置物臺

『子規歌集』によれば、四月十六日人を造り、十八日置物臺を造り、十九日湯ざまし樣の器を造られて居る。十八日の置物臺のことは廿日に私宛によこされた先生の歌があるのみならず、それは今も子規庵に遺つて居て塑像と共に珍品である。

キノフワガ造リシモノハ人ガタヲ載セテ置クベク花彫リシ臺

其ノ花ハ六ヒラノ花、其葉ハ牡丹ノ葉、花ト葉ト思ヒアハズ、葉ノアヒニ花ゾ咲キケル、

ヘナ土ヲコネテ造リシ、花ナレバ名ヲダニシラズ造リ花アハレ

これは全高三寸六分で、上方は圓盤、その徑三寸一分である、これも首と同樣に土の乾いたまゝのもので燒きしめてない。

三　子規居士床上の像

こゝに、床上の像と云ふのも妙な呼び方ではあるが、正岡先生の寢て居られる胸から上の像である。

長さ八寸七分、幅六寸八分の楕圓形の盤の上に枕をしたまゝの床上の像である。盤の下方横ざまに『子規先生像、辛丑秋秀眞謹寫』と篦彫りの銘がある。辛丑は明治三十四年だから、先生自作像の翌年である。二日三日根岸へ通つて先生の枕頭で寫した事をかすかに覺えて居るが、私の日記も此の頃は缺けて居る。『仰臥漫錄』を見たが十月九日の條に

ハガキヲ出シテ秀眞氏ニ來テ貰フ、十時過來ル、油土ニテ母ノ顏ヲ作ル。

とはあるが、先生の像の事は見當らない。

先生の肖像を造らうとした事は、前々からの考へでもあつた。私の日記にこれより以前七月二十日に義郎君が、秋水君の下宿に來て居たのを誘ひ出して午後二時頃共に根岸を訪うた時、先生は大分苦しんで居られたが、私等が訪問したのを悅ばれた樣子で、『昨日は誰も來なんだか』と妹君にきかれなどした、『カウして苦しんで……イツソ死んだがよいと思ふ……併し死にたくは

ない……』と切れ〳〵に云はれる、『一日でも永らへて下さい』と私が云ふと『一日生きて居ればー日だけ苦を增すだけだ……人は生かして置いて苦しむ事を願ふのか』と云はれてしく〳〵すすり泣をせられて涙を落される。私等も返す言葉がなくて泣いた。といふ樣な事が書いてあつて次に十四首の歌が記してある、その最後の二首に、

からかねに鑄てを百世に傳へんの御首のかたをうつしかねつも

後の世に傳へ置かむ御首かたいたやむ見ればうつしかねつも

とある、苦しみぬいて居る病人をモデルにして、肖像を作りかねる事を歌つたのだ。この後、故木村芳雨、桃澤茂春等と共に函館に展覽會をしに行つて、廿八日に芳雨と共に先生を尋ねた。『仰臥漫錄』に此時の事が書いてある。私の日記には、函館行の前に尋ねた時よりは苦痛も少なく、うめき給ふ事も靜かになり給ふ、されどいたくやせ給ひたり、と記してある。

前述の母堂の顏を作ると云ふ十月九日頃には油土なども持ち込んであつて、先生の像をつくる準備が出來て居たものであらう。

油土を石膏にうつした先生の像を屆けて置いた後、幾日かを置いて根岸へ往つた。石膏像の顏の四ケ所に墨書がしてある。額には

額ガ平カ過ギル

鼻根の左右に點線が有つて、

ツマリスギル

まなじりから、こめかみの間のくぼみに

コヽニモウ少シ土ヲツケル

右の上瞼の上に限なりの線を畫き、頰骨の上に、

眼裂ガ狹過ル

とある、先生自身鏡の顏とくらべても、これ程の事は知れぬ筈だが――併しどうした事かと暫時像に見入つて居ると、『宮本國手が云ふには、わしの眼は鳳眼と云ふ頗るいゝ眼だと云つた、この像は鳳眼になつて居ないさうだ』と先生が云つた。さてはこの墨書も宮本國手の說に據つてせられたのだナとわかつた。墨書に依つて直さうと思ひながら三十四年も暮れ、三十五年になる。先生の厄月だと云はれる五月五日から每日々々『病牀六尺』が『日本』新聞に出る、九回目の文中に

最早自分もあきらめて、其時恰も牡丹の花生けの傍に置いてあつた石膏像を取つて其裏に『自

題。土一塊牡丹生けたる其下に。年月日』と自ら書きつけ、若し此儘に眠つたらこれが絶筆であるといはぬ許りの振舞云々。

とある。この石膏の肖像が即ち、顏の四箇所に墨書のあるもので、今も裏には墨痕あざやかに、句の下には、

規　明治三十五年五月十五日

とかいてある。

鳳眼でなかつたり、眼元がつまり過ぎたり、額が平た過ぎたりした拙作でも、先生の自署ある貴重品であるから、永久に子規庵に保存したい、たとひ私の技倆の醜拙を千古に留めても。（三年八月十八日夜）

序に云つて置きたい事がある。嘗てある雜誌へ正岡先生に關する私の所感を載せた、ところが其の當時、岡麓君が私の子規先生觀に大なる異議を申立てられて、たしか『アララギ』に載せられたのであつたらう。子規先生の同門が御前のは間違つて居るとか、さうではないとか云ひ合ふのも變なものだと考へたから、私は默殺して今に至つた。素寒貧の鑄物師と、其の當時は素封家であると云はれた岡君との先生に就ての觀察の相違は當然である。それをお前のは違つ

て居ると云つた岡君の氣持が今に解せない。

麓　　五疊半の茶室の紅白薔薇　鹽谷判官　一力亭主

秀眞　天の香具山の眞榊　勘平　足利忠義

と先生が見立てた如く、岡君と私の見方も相違がある筈だ。岡君の異議に就ての私の默過を今こゝでけぢめを著けて置く。

（昭和三年九月、日本及日本人）

アララギ二十五年

拜啓、貴刊アララギ滿二十五年に相成候由、白髮の多くなり行く事も知らぬまに、歲月匆々と流れさる事に驚き申候。

貴誌の過去をかへりみ候へば、平福畫伯の高義によりて難關を打越され候も有之やに記憶致候、寫生主義に高嘯なされ候も思ひ出され候。

歌の雜誌はと聞かれてアララギの歌を見候へと申候事も數年以前に御座候、こゝ三四年拙老などが考居候歌とは大分ひらき有之樣存候、時の流れかとながめ居候事に御座候。

二十五周年一と月もかく事なき御努力、同じ根岸の流れをくむものとして衷心より御よろこび申上候。御手紙いたゞき候時より何をか書かんの一念有之候へども、公私多端只今は奈良に參るべく晚餐の膳の前にて取急ぎ亂筆、御免如斯御座候。

思ひ起せば雜誌御惠贈も二十五年に相成候、何をがな報いまいらせんか考案中に御座候、頓首

昭和七年十一月十一日夜（齋藤茂吉氏宛）

（昭和八年一月、アララギ）

けしと一つ松

寫生を標榜して畫道に精進せられた平福君の名が世に喧傳せられてからのこと、或時東京美術學校の校庭で同君に出遇つた。『寫生からぬけ出した畫をこれから拜見したいものだ』とぶつきらぼうに私が話しかけた。『此頃は僕はさう思つてゐる所だ、近い内に見せるよ』と云つて別れた。その後なるほど、感心させられた事があつたが、今それが何の畫であつたか忘れてしまつた。勿論時も記憶してない。

或時突然私の宅を訪れられた君が、皇后樣から戴いたと云ふ金一封を出されて、『僕の恩人に記念として贈りたいから何か小品を』と云はれたので、金水引のかゝつたまゝの一封と、君の顔とを見くらべながら私も少々驚き氣味でゐると、それには一切おかまひなしに、何やら細長い新聞に卷いたものを出されて、『これは僕の畫だがどうぞ貰つてくれ給へ』といふのでいよいよ驚

いた。無遠慮に早速ひろげて見ると淡彩紙本の罌粟の畫であつた。『今來る前に描いたので花の處が繪の具が乾かないから火鉢であぶつたのでまづい』といふのであつた。金水引の一封だけでよいものを、依賴畫でも容易にかけぬと云ふ評判の人が、これはまた何たる眞面目さであらうと感激した事であつた。

平福君からの記念の贈ものと云ふのに對して鳳凰の置物二種三四個を作つて、その頃の同君の上目黑の家に持參した。『美術品だ美術品だ』と云つてと見から見してゐられた。君の心中は果してよろこんで居るのかどうか分らなかつたが『美術品だ』と云ふ言葉も私には分らなかつた。

通されたそこは廣い畫室で、一方の壁には枠張のかきかけの畫が幾枚か重ねてあつた。その傍から取出したのは一本の赤松の畫の紙本であつた。『今少しだから失禮する――これは君にあげたいのだ』と云ひながら、亭々たる一本の松の幹から空に聳えた梢の葉の間にしきりに點を打ち込んでゐた。葉間のそれは松ぼくりである。間もなく出來上つたのを私の前に向け直して『いろいろ御手數をかけたから――どうかこれを』と云ふので、私は何と返事をしてよいか、何と禮を述べてよいかを知らなかつた。

誘はれて玉川に出て川向うの料亭で鮎をしこたま御馳走になつて、松の畫を携へて歸宅した。

今この松の畫の落款を見ると大正戊午（七年）大暑（七月）於氷川草堂百穗（印二顆）とある。

結城素明君からの通知で、小石川原町の高島米峰君の宅に集まれとの事で出掛けた。程なく平福、安藤弘、結城　波多野鍒治郎の四君が來られる。平福君の洋行の送別會をするのだと云つて自動車を一臺註文して六人山盛りに同乘する。『どこへ行くのか』と聞けば、『僕にまかせて置け』と結城君が云ふ。本郷通から根津、寛永寺坂、淺草、駒形橋へ出る。本所緑町の榛の木馬場こゝは香取が長屋ずまひをして居た所、波多野君の住居はついそこだ。北割下水は跡かたもないがそこは結城君の生家のあつた所、ついでに左千夫の舊居あとを、それから隅田堤に出て結城君の假寓された弘福寺に下車、どこもこゝも大正十二年の大震火災の復興で、まるきり昔見た面影もない。向嶋百花園、そこも變りはてゝ冬ざれ時とは云ひながら、梅の木の少くなつたばかりか、梅の蕾も數ふるばかり、百花園だと云ふからさうだと思ふ位の變り方である。

龜戸に、普門院の左千夫の墓に詣でゝ、さて天滿宮に賽して、そこでやつと吉村と云ふ割烹店に落ちつく。その時の書畫帖、米峰君が江東帖と題したものをあけてみれば、百穗君の筆で冬の藤棚下にそり橋を配したものなど、時は昭和五年二月九日であつた。

ある年秋田市に往つた。那波氏に招かれて所藏品を拜見した。百穗君の父君穗庵の畫幅を多く

見せられた。百穂君からの記念贈與品だと云つて拙作を見せられた。同君の恩人の一人がこの家である事を知つた。

盛名のある人の死を聞いて、あゝさうかと聞きながし得る人と、惜しい人を死なしたとつくづく惜まるゝ人とがある。百穂君は後者である。せめてこゝ五七年でもよい、その生命がほしかつた。

罌粟の畫はまづいと評した人があつた。まづくとも彼君の心づくしの賜である。松の畫と共にわが家の重寶でもある。

(昭和九年四月、アララギ)

子規先生の墓誌

子規先生逝いて三十三年、先生が生存したまふならば六十八歳であられる筈だ、生存したまはずとも私のあたまの内には、今でも根岸のおうちに、三十三年前の三十六歳の御容貌で、病苦とたゝかつて床上に仰臥せられて御座るやうに思はれてゐる。先生に對しては今も二十九歳の若ものである樣な氣持が私はしてゐる。

たとひ私が七十八十と生き永らへてゐるとしても、すべてに於て長者であり先生である感じは失はれる事ではあるまいと思つてゐる。

今年三十三回忌の法要を營まれる迄に、墓前には、先生御自筆の銅版墓誌を建てたいといふ人の希望を入れて、正岡家と子規庵維持會とで許容したから工事は著々進捗してゐる。

墓誌と云ふのは、半紙に認められたもので、それは明治三十一年七月十三日に、河東銓氏にあ

てた書簡中にあつたもので、今子規庵の書庫に收藏されてゐる。こゝにその書簡と、別紙に認められた墓誌とを掲げよう。(改造社版子規全集十六巻)

シヤンパント扇アリガトーシヤンパンハアノ日柳原ガ來テ飲マシタノニエオ飲ミイデナアシヤ自分ガ死ンデモ石碑ナドハイラン主義デ石碑立テヽモ字テンカ彫ラン主義デ字ハ彫ツテモ長タラシイコトナド書クノハ大嫌ヒデ寧ロコンナ石コロ(圖あり)ヲコロガシテ置キタイノデヤケレド萬一已ムヲ得ンコツテ字ヲ彫ルナラ別紙ノ如キ者デ盡シトルト思フテ書イテ見タコレヨリ以上一字增シテモ餘計デヤ但シコレハ人ニ見セラレン

規

銈　兄

「別紙」

正岡常規又ノ名ハ處之助又ノ名ハ升又ノ名ハ子規又ノ名ハ獺祭書屋主人又ノ名ハ竹ノ里人伊豫松山ニ生レ東京根岸ニ住ス父隼太松山藩御馬廻加番タリ卒ス母大原氏ニ養ハル日本新聞社員タリ明治三十□年□月□日歿ス享年三十□月給四十圓

これは先生三十一歳の時である、死を覺悟してゐることは無論であるが、平氣といふ事も當つてゐないかも知れない。病苦をまぎらす手段であつたかも知れない。『死ハ恐ロシクハナイノデアルガ苦ガ恐ロシイノダ病苦デサヘ堪ヘキレヌニ此上死ニソコナツテハト思フノガ恐ロシイソレバカリデナイ矢張刄物ヲ見ルト底ノ方カラ恐ロシサガ湧イテ出ルヤウナ心持モスル云々』と仰臥漫錄に書かれてゐる。大體に於て遠く超越した人生觀の上に成立つて居る。病苦にも孤獨にも不如意にも不平にも總ての上に安住して居る。あすをも知らぬ命であることを忘れて嬉々として子供のやうに遊んでゐる。そんなに大觀し透徹して居り乍ら又何處迄も人間から離れずに眞實の人情に生きて居る。人間を脫離してゐる點が却つて甚深微妙な響を發して云々』と『仰臥漫錄の後に』といふ文中に鼠骨老が書いてゐるのは當つてゐる。

墓誌を陽起鑄出した銅版は縱一尺一寸三分許、幅七寸三分許の大半紙大で、缺字のまゝで、この銅版を常陸産の黑味がかつた板碑風の石に凹入せしめて取付ける事になつてゐる。

三十七回忌は四年後であるから生きてゐられさうだが、五十回忌となると、虛子、碧梧桐も、鼠骨も、私も七十八歲となる、いたづらに長命もしたくないと云つたらば、『イヤがんばらうぢやないか』と鼠骨ががんばつて云つた。

寫眞は鑄銅の墓誌である、頗る不備の點があるので、今私はやり直さうとしてゐる。

（昭和九年九月、短歌研究）

子規先生手づくね像餘談

この前二十七回忌の雜誌（日本及日本人）に「正岡先生の塑像」を書いたあとで、信州の胡桃澤勘内君の訪問を受けた。その時はじめて先生手づくねの像を石膏に取つたものが同君の手許に在ることを知り、やがてその箱書を囑せられたのであつた。

子規庵に在るものとばかり思つてゐた石膏像が轉じて胡桃澤君の手許に在ることに就いては、それまで何の聞くところも無かつた。箱書を囑せらるゝに當つて同君から寄せられた二通の手紙を綜合して、その大要を記せば左の通りである。

この像は正岡先生歿後約十年、子規庵に置かれてあつたが、大正二年の夏頃、例の絲瓜の絶筆の表裝を賴まれるとて、母堂が伊藤左千夫の宅を訪問された際、之を左千夫に贈られた。左千夫はその後幾何も無く急死し、絶筆の方は二三箇月も搜索した末、やつと思ひがけぬ表具屋から出

て來たやうな始末であつたが、像の方は左千夫の通夜の晩にもそこに置かれてあつた。その後蕨桐軒を經て胡桃澤君の手に歸したといふのである。

私はその間の事情を一も知らぬ。胡桃澤君の手紙には唯眞閣落成後といふことが書いてあるが左千夫の年譜を見ると、この茶室の成つたのは四十三年五月で、大正二年までは足掛四年の間がある。左千夫が腦溢血になつたのは七月三十日だから、大正二年夏とすると本當に歿前幾何も無いことらしい。左千夫の手許に在つたのは極めて短い間であつたことになる。

この像の出來た徑路は、この前の時に詳記したから、繰返す必要も無いだらう。最初母堂がブリキ罐に入れて首を持つて來られたのが四月十日、「ホラ〱ニ內クジラネバ燒ケガタシ燒カズヲ有ラン一ツ石膏ニトリテ」と申し送つたのに對して先生から「ミチ足レルオモタキアタマ穴ヲナミ燒クトモ燒ケジカ燒カズトモヨシ」「イカニシテ石膏ニ取ルカ殊ノ外ニ手數カヽラバ取ラズトモヨシ」と云つて來られたのが同二十日である。土の首は燒くとすれば、もつと乾いてからでないといけないが、石膏に取るなら、煮たカンテンを著せるのであるから、寧ろ乾かないうちの方がいゝので、私は直に石膏に取つて先生のところへ持つて行つた。そこで「一日一詠」に

一　四月二十三日（塑像石膏像三個）

ともしびの光さしたる壁の上に土人がたの影うつりけり

とある順序になるのであるが、前に「この像三個に就いては疑問がのこる」と云つたのに對し、胡桃澤君の説は原作の塑像、石膏像二で三個になるのだらうといふのである。

石膏に取つたのは一つであつたか、二つであつたか、それも今でははつきりせず、私の日記を檢べても斷定する材料が無い。胡桃澤君が二個とする理由は、その一つを先生が幸田露伴氏に贈られた、といふ蕨桐軒の話によるものらしいが、これも果してどうであつたか疑はしい。この露伴氏云々といふことに就いては、私と共にこの首の相談に預つた原千代子君の書いたもの(「子規言行錄」所載)にも、「それが露伴に似て居るから、一ツをやらうと思ふてゐると、その時のおはなし」といふことがある。「その時」といふのは、私の石膏に取つたのを見た時といふことらしい。この「やらうと思ふてゐる」がいゝところぢやないかと思ふ。蕨桐軒はその頃先生のところに出入してゐたわけでなし、どうせ又聞の話に相違ない。又聞の話といふものは、「やらうと思ふてゐる」が「やつた」位にはなりかねぬものである。當時あれほど頻繁に出入してゐた吾々も、そんなことは一つも耳にして居らず、第一あの時分になつてから露伴氏とさういふ交渉があつたかどうかさへ疑問とせざるを得ぬ。たゞ「一つをやらうと思ふてゐる」とあるのを見ると、どうも

石膏に取つたのは二つであつたやうだ。

露伴氏に似てゐるといふことに就いては、私には別の思出がある。いつ頃かよく覺えぬが、友達三人ばかりで向島の土手を散歩したことがあつた。腹が減つたので燒芋を買つて、食べながら歩いてゐると、向うから來た人が吾々の樣子を見てニヤリと笑つて通り過ぎた。連の誰かゞ「あれは露伴だよ」と云つて敎へてくれた。私が露伴といふ人の顏を見たのはこれ一度きりなのであるが、その時どこか正岡先生に似てゐると感じた。石膏に取つたのが少しみじかくなつたのを見ていよ〳〵さう思つたので、先生に送つた歌の中に「石膏ヲカンテン型ニトリシ首少シチヾミテ露伴ニ似タリ」の一首があるのである。「露伴ニ似タリ」と云ひ出したのは恐らく私が最初ぢやないかと思ふ。

二つあつた石膏像の一つは先生生前に露伴氏に贈られ、一つは歿後十年を經て左千夫の手に入り、更に轉じて胡桃澤君に所有に歸したとすれば、話は至極片付がいゝわけである。併し私はやたらに話を片付けることを恐れてゐる。「ではあるまいか」程度のことを、である的に書いて行くと、遂にはそれが有力な資料らしくなつてしまふ。最初からの關係者である私は、特にさういふことを避けねばならぬ。

胡桃澤君所藏の石膏像は實物を一見して居らぬが、箱書をするに就いて寫眞を送つて來られた。それを見て見ると、子規庵に存する土の首は全高四寸六分であつたが、石膏の方は四寸八分五厘あるとその時の手紙にあつた。「少シチヾミ」て、それだけであるから五寸はあつたらう。土の方は燒けば二割は縮小するものであるから、乾固まるだけでも多少小さくなつたものかも知れない。石膏像の鼻や耳が少し傷いてゐるのは、左千夫のところに在つた頃からださうである。

正岡先生の三十三回忌に當り格別の思ひつきもないので、前に書いたところを補足すべく、いさゝか餘談を試みた。

（昭和九年九月、日本及日本人）

子規先生の三十三回忌にあたりて

正岡先生に關することも、ぽつ〳〵いろ〳〵なものに書いてしまつて、とり立てゝ話すほどのことも無い。私が親炙したのは晩年の五年間だけだが、年數の短い割に出入したことが多かつたから、却つてこれといふ事實を拾ひ出すのが困難なのかも知れない。

先生は私より七つ上だから、私が初めて御目にかゝつた時は、三十三歳だつたわけである。別にひどく年長だといふ感じも受けなかつた。第一印象は頗る平易な、寧ろ親しみ易い方であつた。歌會は明治三十二年から三十三年へかけて、卽ち私どもが出入するやうになつてから、ずつと引續いて催されたが、それに就ても格別な話は無い。さういふ席上でも、先生は皆の歌に就て、ひどく是非されるやうなことは無かつた。批評も簡單であつた。尤も一人で行つて教を乞へば、詳

しい批評もされたであらうが、皆のゐるところなどではそんなことは無かつたやうである。歌は後になつてはじめられたせゐもあつたらう、すべて皆と共にやると云つた風で、一向大將ぶるやうな樣子は無かつた。たゞ吾々の方では先生に敬意を拂つてゐたから、ちよつとした樣子や顏付でも、それがいゝか惡いかといふことは直ぐわかつた。

歌の仲間でも格堂、潮音、三子等の諸君は俳句と歌と兩刀遣だつたし、左千夫、麓の諸君も後に俳句を作るやうになつたが、私は俳句は駄目であつた。たゞ一度「ホトトギス」の募集句に出して、先生に拔かれたことがある。「鏡とぐ盥の水やけさの秋」といふ句であつたが、遂にそれきりでものにならなかつた。

文章の方は「ホトトギス」の短文に出した「星」といふのが最初だつたと思ふ。「犬」といふ題の時にも出した事がある。いづれも匿名であつたが、その書いた內容は今でもおぼえてゐる。

その後日記文を募つた時に、「鑄物日記」を書き、當時うちにゐた梅吉と云ふ小僧のすることを見てゐて、その日記を書いて出したことなどもある。先生から勸められて書いたのではない。「ホトトギス」を每號見てゐたから、自然出す氣になつたのである。

山會にも一二度出た。龍首の水瓶と何とかいふ題のものを持つて行つて讀んだら、報告文みたいだといふことで落第であつた。この文章に專門の方に必要があるので、美術學校の校友會雜誌に出したと記憶する。

先生の歿後子規庵で催された山會に「吾輩は猫である」が讀まれた時私は偶然行合してゐた。その時はまだ「吾輩は猫である」といふ題名が定つて居らず「怪猫傳」とか何とかいふことであつたやうだ。

先生は自分の專門以外のいろ〳〵なものに興味を持たれた。鑄物の方法などに就ても蠟型はどういふ風にして作るとか、銅はどういふ風にして鎔かすとかいふことを、かなりこまかく尋ねられた。俳句の材料にでもされるのかと思つてゐたが、そればかりではない、すべての事に亙つて注意を怠らなかつたのである。

さう云ふ注意力の爲であらう、歌會や何かで吾々の拔いた歌などもちやんとおぼえて居られたらしい。短冊などを書いて下さいと云ふとその歌を書かれることが多かつた。いつか阿迦雲の口繪に出した「天地に月人男てりとほり星の少女の隱れて見えず」の歌でも、前に「星の卷」で、

私が抜いたので、何か書いて下さいと云つたら、それを書かれたのであつた。

先生の顔は平穏な顔であつたが、その眼は時に凄い感じのすることがあつた。が鳳眼で切れの長いせゐもあつたらうし、寢てゐて首を動かすのが大儀だから、ジロリと眼だけ動かされる關係もあつたのであらう。

美術家などの物を觀る眼は、時に普通の人と違つた光を帶びることがあるらしい。私自身も嘗て或所でさう云はれたおぼえがある。その後或る洋畫家と一緒に旅をした時、その人は稀に見る溫厚の紳士であつたが、やはり時に物を觀る眼を凄く感じた。先生の眼もさういふ關係があつたかも知れない。とにかく睨みの利く眼であつた。

三十四年の秋、北海道の旅から歸つて先生を訪ねた。途中船に醉つた話をして大病人のやうになつたと云つたら、先生が、僕のはそんなものぢやないよ、と云はれた。いくら船に醉つたと云つても上陸して少したてば癒る、そんなわけのものぢやない、といふのであつた。

先生の晩年は、私も看護當番の一人として屢〻病牀に侍したから、その模樣はよく知つてゐる

が、あれだけの病苦に堪へるといふことは、大抵でなかつたらうと思ふ。痛苦に堪へず、叫聲を發せられるかと思ふと、しばらくたつて極めて平靜に話されたりする、先生は病苦によつて悟り拔いた人といふ感じがした。私は先生より二十何年か長生したわけであるが、現在の吾々から先生のことを考へて見ても、とても及びもつかぬと思つてゐる。これは七八十迄も私が生きたとしても。

先生が亡くなられてから二三日目の事、誰かが先生哀悼の新聞の切拔を澤山持つて來て、大臣なんて云つたつて斯う行くもんぢやありません、と云つて母堂に見せてゐたことがあつた。歿後間もなく出た「子規言行錄」には、この切拔が大分集められてゐる。先生に對する哀悼追慕の聲は、當時に於ても固より盛であつたが、三十三回忌の今日に及んで、愈〻その感化力の長きを思はざるを得ない。

（昭和九年九月、阿迦雲）

正岡子規と萬葉集

正岡先生と萬葉集との關係は大體二つの意味から觀察すべきだらうと思はれる。先生は批評家として萬葉集を如何に見られたかといふのが一、萬葉集は先生の歌を作られる上にどういふ影響を與へたかといふのが二である。私が先生に親炙したのは明治三十二年の二月――短歌革新に著手されてから丁度一年目――以後の足掛五年間に過ぎない。少しくそれ以前に遡つて、今云つた二點から先生と萬葉集との交渉を討ねて見ようと思ふ。

先生が萬葉集を讀まれたのは何時頃からかといふ問題は、遺憾ながら今日から明かにすることが出來ない。恐らく何人と雖も困難であらう。たゞ比較的早くからだといふことは、先生が學生時代に企てられた編纂物、「墨田川の文學を集めた「墨田の由緣」とか、時鳥の文學を集めた「八千八聲」とか富士山の文學を集めた「富士のよせ書」とかいふものゝ中に萬葉集中の歌が含まれて

ゐるのでもわかる。この編纂物は著手年代の明かなのもあり、明かでないものもあるが、明かなものと雖も、大凡何年以後に屬するといふことがわかるだけで、それを以て直に萬葉集を讀まれた時代を推定するわけには行かない。又さうしたものに著手される以前に果して萬葉集の歌を讀まれなかつたか否かといふことも、固より推斷を許さぬ問題であるから、これは率直に不明瞭といふのが至當である。併し何時から萬葉集を讀まれたにしても、當初は單に古典として、他の歌集を見るのと同じ意味に於て見られたのであつて、後年の如く特に萬葉集を尊重されたわけではない。これは或年代までの先生の歌を見てもわかることだし、「再び歌よみに與ふる書」の中でも「實は斯く申す生も數年前迄は古今集崇拜の一人」とはつきり云つて居られる。先生の書かれた俳句方面のものを見ると、蕪村の句を見ることは相當早かつたに拘らず、特に之を尊重されるまでには何年かかゝつてゐるらしい。和歌に於ける萬葉集もちよつと之に似てゐるが、間に費された年月は更に長いやうである。

先生が歌を論ぜられた最も古いもの、「文界八つあたり」（明治二十六年三月――五月）を讀むと和歌の腐敗墮落を痛擊し、「要するに今日和歌といふものゝ價値を回復せんとならば、所謂歌人（即ち愚癡なる國學者と野心ある名利家）の手を離して之を眞成詩人の手に渡すの一策あるのみ」

と斷じてあるが、具體的な問題にはあまり觸れてゐない。が、それより數箇月後の「春色秋光」の中にはいさゝか注目すべき一節がある。最初に額田王の長歌を引用したのは、春秋優劣比較の問題が早く萬葉時代に在るといふに過ぎないやうであるが、古今集の「世の中に絕えて櫻のなかりせば春の心はのどけからまし」「月見れば千々にものこそかなしけれわが身一つの秋にはあらねどの」二首に對して、萬葉から「いはゞしる垂水の上の早蕨のもえいづる春になりにけるかも」「けさのあさけかりがね聞きつ春日山もみぢにけらし我心いたし」の二首を擧げ、「春光は和氣洋々、秋色は西風寂寞、敢て古今集の一は雀躍し一は悲泣するが如く甚しからざるなり」と云はれたのは、簡單ながら萬葉、古今の內容に觸れた見解である。先生は未だこの差を以て文學的優劣を斷ずる料とはされなかつたけれども、自然不自然といふ點から兩者を比較されたものであることは想像出來る。

翌二十七年の「文學漫言」になると稍ゝ明瞭な萬葉、古今の比較が出てゐる。

萬葉集には奈良朝の歌多し。當時の人は質朴にして特別に優美なる歌を詠み出でんと工夫するにはあらず、只ゝ思ふ所感ずる所を直に歌となしたる者と思しく、何れの歌も眞摯質朴一點の俗氣を帶びず。固より平々凡々の歌多かれども時には雄壯勁健なる者あり、語淡にして

旨遠き者あり、今日に至りて猶絶調と言はるゝ者少からず。其平凡の者と雖も後世の巧を弄して却て失する者に比すれば夐かに數等の上に在り。古今集に至りては萬葉の如くむくつけき言葉無き代りには壯大の者もなく幽玄の者も無し。

といつて、例の古今集開卷第一の歌「年の內に春は來にけり一年を去年とやいはんことしとやいはん」を擧げ、「單に言葉の上の洒落にして何等の趣味をも含まざるにあらずや」と評して居られる。古今集をひどくこなしつけた「再び歌よみに與ふる書」にも、この歌は眞先に槍玉に擧げられてゐる。又

定家と同時に源實朝出で專ら萬葉を學び古今獨步の秀歌を多く詠み出でたりと雖も、是れ唯ゝ實朝一人が特に卓出せしに過ぎずして天下曾てこれに傚ふ者無かりしは實に眞成の歌人の世に絕えたる證にして、一方より見れば實朝が大見識を觀るに足る。

とあるのも、「歌よみに與ふる書」に照應して考ふべきものであらう。その他眞淵等の歌を評して「理論と實際とは竝行せざるか、將た口に萬葉を說きて心に萬葉を解せざるか、彼等が作る所の歌は少しく俗調を脫したるのみにして萬葉の雄壯、眞摯、平遠等に及ばざる者多し」と云つて居られるのを見ても、先生の歌に對する見識は大體方向がきまつてゐたものゝやうに思ふ。たゞ

この頃の先生の意見にはまだ何處か踏切つてゐない所がある。「古今は實に僞を作れりと雖も古今の歌には質朴なる點に於て稍〻萬葉に似たる所あり。景樹亦毒を後世に流したりと雖も、景樹の歌は玉石混淆して中に善き歌あり」の如き、先生の意見としては寛大でもあり、後のやうに鋭い勢を帶びてゐない。

當時の先生は和歌と俳句との間に何等かの調和を計らうといふ意見を持つて居られたやうである。その調和は「先づ和歌の言語に俳句の意匠を用ふるを以て第一」とし、「一言にして之れを云はゞ三十一文字の高尙なる俳句を作り出ださんとするに在る」といふ見解らしい。二十五年あたりから紀行の中などに散見する先生の歌は、今日讀んで見てもさほどの異色を認め難いが、二十七年になつて「小日本」に出たものゝ中には、いさゝか變化せんとする迹が看取される。

上野公園

御佛のいとも尊しくれなゐの雲か櫻の花のうてなか

足引の山は綠に賤が家の卯の花白し鳴け郭公

先生の歌の單獨に發表されたはじめであり、「竹の里人」の名を用ゐられたのもこの頃からであらう。當時は新派の歌といふものがまだ確立してゐなかつたが、普通一般の歌に比べると何だ

か新しい所がある。之を以て直に俳句の意匠を和歌に用ゐたものとするわけには行かないにしても、用語句法に於て多少在來の型を破らうとした點は認められると思ふ。更に同じ年の

嶋山を雲立ちおほひぬ伊豆の海相模の海に浪立つらしも

三韓舟中の作に擬す

雲かあらず烟かあらず日の本の山あらはれぬ帆檣の上に

燒太刀を手にとり見れば水無月の風ひやゝかに龍立ちのぼる

といふやうなものになると、和歌俳句の調和などといふ問題とは自ら別にして考へなければならない。この調子が雄渾に傾いてゐる事と、いさゝか古調を帶びてゐる點は前の二首と大分趣を異にしてゐる。これには自ら由つて來る所があるに相違無い。

先生が學校をやめると直ぐ籍を置かれた日本新聞社は、落合直文、小中村(池邊)義象の諸氏と關係があつたけれども、この邊からの影響では無論あるべくもない。先生の歌に影響を與へたものがあるとすれば、さういふ專門家でなしに寧ろ福本日南、愚庵和尚の二氏であらう。萬葉調歌人としては二氏より遡つて丸山作樂氏も當然擧げなければならぬが、先生に影響を與へた上からいへば丸山氏は直接的ではなかつたのである。

自分の居合せなかつた當時に立入つて、揣摩臆測を逞しうすることは差控へなければならない。併し歌の上で先生に最初に影響を與へた人はといへば、社の先輩としての福本氏、社友とでもいふべき位置に居つた愚庵和尚の外に覓めることは困難である。何時如何なる影響を與へたかといふやうな具體的事實は固より見當らない。たゞ漫然さう感ずる一證左として二氏の歌を擧げて置かう。

土崎眺望　　　　日南

立向ふ鳥の海山男鹿の崎海原かけて霞靆く（明治十九年）

航海中所看

落つる日の西のあなたにかゞよふは霞歟雲歟嶋歟あらぬ歟（同二十二年）

寄二永井行在一韓國一

鶉鳴く高麗の榛原君行かば徐に行け高麗の榛原（同二十四年）

那智の瀧にて　　　　愚庵

底つ巖根つきつらぬきて普陀落や奈落も碎け那智の大瀧（明治二十六年）

畝傍山の邊にて詠める

久堅の天の香具山うねび山耳なし山は神のます山（同）

石山寺の通夜に

まさきくて在せ父母御佛のめぐみの末にあはざらめやも（同）

「歌よみに與ふる書」の中に「左程に古調は擬し難きにやと疑ひ居候處近來生等の相知れる人の中に歌よみにはあらで却て古調を巧に模する人少からぬことを知り申候」とあるのは二氏のことであらうと思はれる。三十年十月に先生が愚庵和尚に酬いられた柿の歌は、短歌革新に著手される以前に在つて不思議に完成したものであるが、その時の手紙に「失禮ながら此頃の御和歌春頃のにくらべて一きは目たちて覺え申候おのれもうらやましくて何をかなと思ひ候へども言葉知らねばすべもなし」云々とあるのは、這間の消息を解する上に看過すべからざるものといふべきである。

三十一年になつて先生は遂に歌の上に踏み出された。「歌よみに與ふる書」は「仰の如く近來和歌は一向に振ひ不申候。正直に申し候へば萬葉以來實朝以來一向に振ひ不申候」といふ文句に始まつてゐるが、これは先生の歌に對する意見を最も端的に道破されたものであつた。私は當時毎日「日本」をひろげてその所論を見ながら、實はそれほどその內容に感心したわけでもなかつ

たが、あの當るべからざる勢にはひそかに驚いた。その頃の先生の手紙に「歌につきては内外共に敵にて候外の敵は面白く候へども内の敵には閉口致候内の敵とは新聞社の先輩其他交際ある先輩の小言に有之候まさかにそんな人に向て理窟をのぶる譯にも行かずさりとて今更出しかけた議論をひつこませる譯にも行かず困却致候併し歌につきてはたび／＼失敗の經驗有之候故今度ははじめより許可を出願して而後に出しはじめしもの此上は死ぬる迄ひつこみ不申候」（夏目漱石氏宛）とある。意氣込のえらかつたことも思ひやられるが、世間は固より社中の反對が多かつたといふのは如何にもといふ氣がする。

「歌よみに與ふる書」十篇の鋭鋒は主として當時一般の歌人並にその人達が尊重する歌に對して向けられたので、萬葉に對する先生の意見などはあまり現れてゐない。一千年來の歌の通弊を打破するを第一の急務とされたので、「生は和歌に就きても舊思想を破壞して新思想を注文するの考にて隨つて用語は雅語俗語洋語漢語必要次第用ふる積りに候」といつた調子であつた。應病與藥的なこの論法も他の誤解を免れなかつたらしい。併し先生の萬葉に對する意見は牢乎として拔くべからざるものがあつて、愚庵和尚宛の手紙に「既に萬葉の歌を善しとする上は古今集以下の歌は善しとは思はれぬ譯と存候（實朝卿のは特別に候）」とあり、「萬葉調などは大に好む所に御

座候」「萬葉調は大に興すべきものと存候」といふやうな事も見える。

尤も當時の先生の歌には萬葉調を以て目すべきものは見當らない。二十七年頃の歌から漸次柿の歌まで到達されたのを、わざ〳〵自分で殼を敲きこはして新に出直されたものかと思ふ。先生の所謂「三十一字の俳句」のやうなものも少からずある。調子は一體に簡勁で、漢語を盛に用ゐられたせゐか、パリ〳〵したやうなものが多い。當時としては非常に新しいもので、この新しさが歌論と相俟つて先輩の反對を買つたものかと思はれるが、それも舶來の新しさでなく、極めて日本的なものであつたことは注目すべき所であらう。

先生は「歌よみに與ふる書」と「百中十首」とを振出しに、「日本」紙上に歌論と歌とを續々發表して行かれた。「五七五七七」といふ文章は五七調と七五調とに就て說かれたものであるが、その中にかういふ一節がある。

前に述べし如く五七調と七五調とは互に長所あり、只〻場合の宜しきに從ひて擇ぶべし。一概に優劣すべき者に非ず。短歌の「のべつ調」と「十七」「十四」の調との二に於ける亦然り。世に萬葉崇拜派なる者ありて三句切の歌を難ず。彼等は「のべつ調」を尙ぶ故に此論を爲すにやあらん。されど、「十七」「十四」調は場合によりて「のべつ調」に勝る事ありとすれば

三句切固より難ずべきに非ず。歌を作るの要は只〻面白くするにあり。二句切と三句切とは我が關する所に非ず。「のべつ調」と「十七」「十四」調とは我が關する所に非ざるなり。

先生の論は常に進歩的であつた。萬葉集を尊重されたのも常に純粹な詩の立場に於てであつて海上派の人々のやうな守株の論は好まれなかつた。

又「一つ二つ」といふ歌評の中に佐々木信綱氏の「浪の音のあらきはまゝ邊に妹をおきてひとりぞなげく秋の長夜を」を擧げて「何の巧みもなけれどなか〳〵になつかしく面白く覺ゆ」といひ「われは歌の新しきを好む者なり。されど新しきは皆善しとにはあらず。……卑しき歌どもの中にたま〳〵萬葉らしきしらべを聞くはなか〳〵に新しからざらんや」ともある。この新しいといふ事の見解なども、極めて先生らしいものである。

三十二年の二月、卽ち私どもが子規庵へ伺ふやうになつてから、「萬葉集卷十六」が「日本」に出た、萬葉に關する先生の意見の稍〻纒まつたものである。劈頭先づ「萬葉集は歌集の王なり」と斷じ、「しかも此集今に至りて千年、未だ曾て一人の之を崇尙する者あるを聞かず」と喝破されたのは驚くべき鐵案と云はなければならぬ。先生は眞淵の萬葉論には慊らなかつた。さうしてその理由の一半を眞淵自身の歌に歸して居られる。この事は早く「文界漫言」に見えてゐる通りで

あるが「歌よみに與ふる書」にも「眞淵の家集を見て眞淵は存外に萬葉の分らぬ人と呆れ申候」とあり、こゝにも亦「余は眞淵を以て萬葉を解せざる者と斷言するに躊躇せざるなり」と云つて眞淵の歌に論及されてゐる。眞淵のみならず、先生の古人を評する場合は何時でもこの筆法であつた。實朝の歌を尊重されたのもその萬葉調に在ること勿論であるし、橘曙覽を賞揚する場合にも「曙覽の歌は比較的に何集の歌に最も似たりやと問はゞ我も人も一齊に萬葉に似たりと答へん。彼が古今、新古今を學ばずして萬葉を學びたる卓見は我第一に賞揚せんとする所なり。彼が萬葉を學んで比較的善く之を模し得たる技倆は我第二に賞揚せんとする所なり」(三十二年)といふ事を第一に擧げられた。田安宗武を論ずる場合も「田安宗武の天降言(あもりごと)といふを見て吾はいたく驚きたり。彼は萬葉の趣味を解するに似たり。彼は教を眞淵に受けたれども其歌の趣味を取る事は之れを眞淵よりせずして直に萬葉よりせるならん」(三十二年)といふ數語で始まつてゐる。平賀元義の場合は特に念入であつた。「德川時代のありとある歌人を一堂に集め試みに此歌人に向ひて、昔より傳へられたる數十百の歌集の中にて最善き歌を多く集めたるは何の集ぞ、と問はん時、そは萬葉なりと答へん者加茂眞淵を始め三四人もあるべきか。其三四人の中には餘り世人に知られぬ平賀元義といふ人も必ず加はり居るなり。次に此等歌人に向ひて、然らば我々の歌を作る場合

手本として學ぶべきは何の集ぞ、と問はん時、そは萬葉集なり、と躊躇なく答へん者は平賀元義一人なるべし。萬葉以後一千年の久しき間に萬葉の眞價を認めて萬葉を模倣し萬葉調の歌を世に殘したる者實に備前の歌人平賀元義一人のみ。眞淵の如きは只〻萬葉の皮相を見たるに過ぎざるなり」(三十四年)――これは元義の歌が最も渾然たる萬葉調だつた事にもよるが、同時にその人が全く埋沒してゐる所から、特に强調された點もあるのであらう。

それでは先生の歌に於ける標準は萬葉集以外に一歩も出なかつたかといふと、決してさうではない。實朝の「那須の篠原」の歌を評して「萬葉の歌は材料極めて少く簡單を以て勝る者、實朝一方には此萬葉を擬し一方には此の如く破天荒の歌を爲す。其力量實に測るべからざる者有之候」(「歌よみに與ふる書」)と云はれて居るのでも、その意向は推測出來るが、曙覽を評したものにはもう少し委しく記されてゐる。「彼魚彥が徒に萬葉の語句を模して萬葉の精神を失へるに比すれば曙覽が語句を模せずして却て萬葉の精神を傳へたる技倆は同日に語るべきにあらず。されば曙覽は徹頭徹尾萬葉を擬せんと務めたるに非ず。寧ろ其思ふまゝを詠みたるが自ら萬葉に近づきたるなり」(「曙覽の歌」)――魚彥は楫取魚彥である。魚彥と曙覽とを比して曙覽を勝れりとする先生の見地は古調に泥んで萬葉めかすを專一とする人々と同一に見るべきでない。「宗武」は萬葉を學び

て其骨髓を得たる者、其歌多くは萬葉調なり。されど萬葉を固守して其範圍を脱する能はざりしが如き無能者にはあらず。其歌に三句切の多き、てには止の多き等皆萬葉以外に得たる所なり」(歌話)といひ、「元義の歌は其取る所の趣向材料の範圍餘りに狹きに過ぎて變化に乏しきは彼の大歌人たる能はざる所以なり。彼にして若し自ら大歌人たらんとする野心あらんか其歌の發達は固より此に止まざりしや必せり。其歌の時に常則を脱する者あるは彼に發達し得べき材能の潜伏しありし事を證して餘りあり。惜しいかな」(墨汁一滴)といふが如き評語は、いづれもこの意味に於て注意すべきものである。

實朝、曙覽、宗武、元義は先生が萬葉以後に於て「四人を得たり」とされた歌人であつた。それに就て下された先生の評語には、右に擧げた如き兩面の觀察が含まれてゐるのであるが、當時の人にはなか〳〵了解しにくかつたと見えて、これにも種々な誤解者を生じた。先生の最初の歌や歌論に驚かされた人達は、その後の經過を以て古調に泥んで逆行するもの丶やうに考へたらしい。西洋詩の趣味を取込んで新派と稱する人々は特にこの點を攻撃した。前には過激に過ぎるとして反對を受けたものが、僅々一二年にして舊に泥む譏を受けるに至つたのは不思議な現象といふべきである。先生自身もこの事に就て左のやうに書いて居られる。

一昨年「歌よみに與ふる書」「人々に答ふる書」「百中十首」など新聞に載せし頃之に反對せし人の今はやう〳〵其説を改めたるも少からず。其中に百中十首の頃の歌をほめて今日の歌を誹り、却て退歩したりといふ人あり。此人若し一二年の後には、更に今日の歌をほめて其時（即一二年後）の歌を退歩せりといふには非るか。こは餘り無禮なる申分なれども之を數年來の俳句界に驗するに此類の事極めて多し、一般世人の好尙は專門家の好尙におくるゝ事一二年なりとは歌俳句の上に限らざるべし。（明治三十三年六月、「竹里歌話」）

今でも時に「百中十首」時代の縱橫自在を倘んで、その後の歌を萎靡したやうに云ふ人が無いでもない。「小日本」あたりから三十年の柹の歌まで進んで來られた先生が、次第に晚年のやうな道を辿られるに至つたのは、極めて當然な話であるが、その間に華かな「百中十首」時代が介在する爲にかういふ解釋を生ずるのであらう。「百中十首」風の歌は先生の歌が大成する上に是非通過されねばならぬ關門であつたか、先生の歌壇に於ける事業を進めるに當つて先づかういふ幅の廣い道を切り拓く必要があつたのか、私は兩方とも各一半の理由をなしてゐはしまいかと考へる。「百中十首」時代には限らない、私どもが行くやうになつてからでも、先生の歌には晚年のやうなものではなかつた。調子の上にも取材の上にも種々な試みがあつたことは事實であるが、「百中十

首」以來の殼を脫がれるまでには相當間があつたやうに思ふ。三十二年の末の歌會に「帝國議會」といふ題で、和田不可得君が「すめろぎのまけのまに〳〵かしこみて國はからずば此國をいかに」といふ歌を作つた。之を推奬した先生の長い批評の中に次のやうな言葉がある。

抑も昨年和歌革新の聲起りしより今日に至る迄の有樣を見るに、幾多革新派の人が和歌に於て最多く革新の必要を感ぜしは想の上に在りて調の上に在らず。彼等は從來の和歌が僅少の材料に限られ單調陳腐に陷るを見て、此病を救はんがためにあらゆる材料あらゆる趣向を取り用ゐんことを歌界に向つて忠告し、且つ自ら率先して新奇なる作を世に公にしたり。中には徒に新奇を弄して却て卑俚に墮つる者少からずといへども、東に倒れし者を起さんとして西に傾かしむるは勢の免れざる所何事を爲すにも初期に於て必ず此弊害を見る。獨り和歌に於て咎むべきにあらざるのみならず、寧ろ必要なりしなり。然れども彼等は只〻病を救ふに急なるがために卽ち新思想を入るゝに急なるがために、其新思想を如何なる調にて歌はゞ可なるべきかといふ問題には未だ觸著せざるが如し。こは我最遺憾とする所なり。想と調と孰れか重くして孰れか輕き、そは我れ答へ能はず。輕重は答へ能はずといへども兩者共に必要にして偏廢する能はざるは論を竢たず。既に歌の一要素として存する間は、其歌を作るに調

をなほざりにして、只〻三十一文字に綴るを以て滿足するが如きは到底完全なる歌といふべからず。自ら新派と稱する人の作歌に調のとゝのひたる者甚だ少きを以て、新派も猶未だ不具を免れずと思へり。然るに此「すめろぎ」の歌の如く趣向尋常にして調のとゝのひし者が高點を得るを思ふに、我同好の諸君は既に心を歌の上に用ゐらるゝを知るに足る。我甚だ此傾向を喜ぶ。

「百中十首」風の讃美者からは、かういふ説は退歩とも見えたかも知れないが、先生の歌の發達を見る者には看過すべからざるものである。新派と稱する歌の中に根岸派なるものが特異な地歩を占めるに至つたのはこれ以後の事であり、共鳴者の數が自ら限られるやうになつたのもこれ以後であつた。

先生の作歌も選歌も次第に萬葉調に進んで行つた。併し萬葉の調子を摸し得ればそれで能事畢るといつたやうなものではなかつた。これは先生が魚彥を採らずして曙覽を採られたのでもよくわかるが、先生の歌といふものは終始一貫して常に新しいものであつたと私は思ふ。話は少し後の事になるが、序だからこゝに述べて置かう。先生が私どもの歌に對して莂房子の歌を推されたた事があつたのも、新造語が多い事、而もどこか古雅な新造語をやるといふに在つたやうだ。たゞ萬

葉の言葉さへ使つてあればいゝといふやうたものではなかつた。根岸派の同人が先生の晩年に盛に長歌を作つたのは、當時の歌壇などとは交渉の無い、全く萬葉から來た影響であつたが、先生晩年の長歌、殊に數句から成る短いのを讀むと、今でも實に新しい感じがする。あゝいふ長歌は先生獨得のものとしか思はれない。

併し世間ではさうは見なかつた。この頃圖らずも古い「心の花」をあけて見たら、竹柏園主人卽ち今の佐々木博士が根岸派を評して「桂園派の歌人は、桂園一枝と古今正義とを金科玉條にして、他に幾百の家集歌論あるを知らず、只吾佛尊しで、景樹をのみえらいと思うて居る。桂園派の衰へたはそれが主な原因の一である。今の根岸派の諸君も此轍を踏まねば宜いと思ふ。もし段段と研究して行つたならば、詩歌は感情をいひ顯はすものであるに、殊更に耳遠い萬葉の古言をのみ用ふる弊を悟る時が必ず來るであらうと思ふ」(三十五年八月)云々とあるのが目についた。これはその前の號に先生の歌に關する談話が出た中に、「古今集のやうな歌は見るに足らぬから古今集を摸する事は宜くあるまい」とあつたのに對する說であるが、要するに「萬葉集との甲乙優劣はさしおいて、萬葉に長所ある如く古今に長所あり、古今に短所ある如く萬葉にも短所がある」といひ、「歷史的の研究をなみして、萬葉のみを摸すべしといふは、未だ深く究めざるの過と

いうて宜い」といふ程度のものである。古今排撃は先生最初からの主張であつたのに、まだこの邊で問題になつてゐるのを見れば、當時の歌壇と如何に開きがあつたかゞわかるであらう。根岸派の歌は決して萬葉の古言をのみ用ゐたのではなかつたのだが、一寸見にはさう見えたものらしい。その頃は私ども二三の者が「心の華」の編輯に關係して居つて、毎號同誌上に歌や文章を發表しつゝあつたけれども、本當に雜居してゐるだけでお互の歌に就ては全く沒交渉であつた。

　竹柏園主人は又長塚節の「四月の末には京に上らむと思ひ設けしことのかなはずなりたれば心もだえてよめる歌」――「靑傘を八つさし開く棕梠の木の花さく春になりにたらずや」以下九首――を先生が「未曾有の出來」と推奬されたのに對し、「長塚君の歌を、正岡君は結の句が十分に働いて居るとて賞めて居らるゝが、たゞ萬葉の詞を自由に驅使し得たといふに止まつて、此歌の內容の何處に新しい所があるかと考へて見たら、どんなものであらう」と評してゐる。この長塚の歌は非常に先生の氣に入つたらしく、「仰臥漫錄」の終の處にわざ〳〵新聞を切抜いて貼付けてある。今更古證文を引合に出して、この歌の價値を論じようといふのではない。たゞ當時の根岸派に對する批評の一斑として、こゝに擧げて見たまでゝある。根岸派の歌といふと一概に古語を用ゐるといふ點にだけ重きを置いて、何等內容の吟味に及ばなかつた樣子は先づこんなものであつ

た。森田義郎がはじめて正岡先生を訪ねた時、先生は「同じく萬葉を摸して居ても、他の諸君は多く言葉を取るが吾々は調子に重きを取るので、夫れが第一相違の點である」と云はれたさうだ。さういふ調子の問題にまで觸れる批評は殆ど無いといつてよかつた。

三十三年四月十五日、はじめて先生を中心に萬葉集の輪講會が開かれた。「山吹の花咲く宿に萬葉の歌の講義の會を開きぬ」と詠まれたのはこの時である。これは何回位續いたものか記憶に無い。「萬葉集を讀む」といふ題で「日本」に發表されたのが、その一回分のものだつたかどうか、それも今では不明である。開卷第一首から始められて居るから、長歌短歌を併せて順々に進まれる豫定だつたのであらう。この研究が大成されないまでも、今少し進行してゐたらと思ふものはひとり私どものみではあるまい。

先生のこの研究に於ける態度は「文字語句の解釋は諸書にくはしければこゝにいはず。只我思ふ所をいさゝか述べて教を乞はんとす」といふ調子で、極めて特色あるものであつた。開卷第一の雄略天皇の御製に就て五七調でない長歌を面白いとされた中に、「此歌には限らず萬葉中の歌を以て單に古歌として歷史的に見る人は多けれど其調を學びて歌に詠む人は稀なり。其人のいふ所を聞けば調古くして今の耳にかなはずといふにあり。我等は歌の古きところが大に耳にかなふや

うに覺ゆれども人々の感情なればせん方も無き事なり。萬葉を善しといふ人すら猶五七調の歌を善しとして此歌の如きを排するは如何にぞや」といふ事がある。この調の問題は眞淵が屢〻氣にした所で、又先生が眞淵に慊焉たる一理由でもあつた。併し先生自身の長歌としては恐らくは最初のものでないかと思はれる阪井久良伎の女兒を擧げたのを賀した長歌(三十一年)の外は、遂に五七調以外の長歌を作るに至らなかつたやうである。

又「幸讃岐國安益郡之時軍王見山作歌」に就て次のやうな言葉がある。

普通に萬葉集を讀むには解釋する側より見る故多少の意匠を凝らしたる句に逢へば只難澁の句とのみ思ひそれをとにかくに解釋するを以て滿足する者多し。然れども歌として萬葉を研究せんとする人は、作者の側に立つて熟考するの必要あり。例へば「いでましの山ごしの風の」といふ句の意義を知るに止めず、更に進んで作者は如何にして此句を作りしか、若し我作らば如何に作るべきかと考へ見よ。さて後に此句が夷の思ふ所に非ざるを知らん。萬葉の歌人は造句の工夫に意を用ゐし故に面白く、後世の歌人は造句を工夫せずして寧ろ古句を襲用するを喜びし故に衰へたり。今の萬葉を學ぶ者萬葉を丸呑にせず萬葉歌人工夫の跡を嚙み碎きて味はば、明治の新事物も亦容易に消化するを得んか。

先生がたゞ萬葉の成語や熟語を襲用するを以て滿足されず、造語、造句を必要とされた事は前にも一寸書いた。これは先生の歌集を仔細に見て行けばわかる事である。この他「豐旗雲」といふ語に就て「雲が旗のやうに靡きたるを見て旗雲といふ熟語をこしらへ、それが大きいから豐といふ形容を添へて豐旗雲といふ熟語をこしらへたり。豐旗雲を只成語として見ず、古人が如何にして此熟語をこしらへしかを考へ、自己がある物を形容する時の造語法を悟るべし。成語ばかりを用ゐて歌を作らんには言葉の範圍狹くして思ふ事を悉く言ひ得ざらんか」と云ふ事もあるが、やはり同じ意味から來てゐる。これらは全く先生が常に「解釋する側」より見ずに「作者の側」から見た結果であつて、萬葉研究と作歌との間に一致點を求められるのもこの爲なのである。學問として萬葉を取扱つた人は古來いくらもあるが、眞に歌として先生のやうな立場から見られた人が先生以前に果して幾人あつたらうか。「此集今に至りて千年、未だ曾て一人の之を崇尙する者あるを聞かず」といふ言葉も、「萬葉以後一千年の久しき間に萬葉の眞價を認めて萬葉を模倣し萬葉調の歌を世に殘したる者、實に備前の歌人平賀元義一人のみ」といふ言葉も、是に於て强く耳朶を打つものがある。

私は最初に先生と萬葉との關係は、批評家及作家の兩面から觀察する必要があるといつた。併

しこれは本來一如たるべき性質のもので、先生は實にその分つべからざる事を論じた最初の一人だつたのである。以上書いて來た所も批評家の方面と作家の方面とが錯雜してゐるやうであるが、この兩々相俟つて進むところに先生の面目があるのだから已むを得ない。近來萬葉集關係の書類は年と共に激增して、眞に汗牛充棟も啻ならざる槪がある。まことに萬葉研究未曾有の盛時といふべきであるが、その內容に就て見れば先生と同一立場に於て發達したものとも考へられない。先生の言說が今日の萬葉流行の先驅をなした點は慥だけれども、今日の狀態が先生の滿足に値するか否かは聊か疑問である。

先生と萬葉に就てはまだ擧げなければならぬものが澤山ある。片言隻句の中にも閑却すべからざるものが少くない。けれどもそれらを悉く涉獵して擧似する事は、かういふ限られた頁の中では不可能である。それらは遺憾ながら他日を期する事にした。初期は比較的年次を逐うて敍し、後半に至つて必ずしもそれに從はなかつたのは、後の材料が多きに過ぐる爲でもあるが、短歌革新の經過にいさゝか注意を拂つた點もある。出來るだけ簡單に種々な事を說かうとした結果、引用文その他に不十分な所があるかも知れない。その邊は直接先生の著作に就て見られん事を希望する。

終に史的推移を示す作歌をあげて置く。

愚庵和尚より其庭になりたる柹なりとて十五ばかりおくられけるに

御佛にそなへし柹ののこれるを我にぞたびし十まりいつゝ

籠にもりて柹おくりきぬ故里の高尾の楓色づきにけん

柹の實のあまきもありぬ柹の實の澁きもありぬ澁きぞうまき

おろかちふ庵のあるじのあれにたびし柹のうまさの忘らえなくに（明治三十年）

百中十首の歌

緣先に玉卷く芭蕉玉解けて五尺の綠手水鉢を掩ふ

ゐのしゝはつひに隱れし裾山の尾花が上に野分荒れに荒る

榛の木に鵐芽を嚙む頃なれや雲山を出でゝ人畑をうつ

寐靜まる里のともし火皆消えて天の川白し竹藪の上に

城中の千戶の杏花咲きて關帝廟下人市をなす（金　州）（明治三十一年）

晚年の短歌

瓶にさす藤の花ぶさみじかければたゝみの上にとゞかざりけり

瓶にさす藤の花ぶさ一ふさはかさねし書の上に垂れたり

春の日の雨しき降ればガラス戸の曇りて見えぬ山吹の花

いちはつの花咲きいでゝ我目には今年ばかりの春行かんとす

夕顔の棚つくらんと思へども秋待ちがてぬ我いのちかも

くれなゐの薔薇ふゝみぬ我病いやまさるべき時のしるしに

若松の芽だちの綠長き日を夕かたまけて熱いでにけり

いたつきの癒ゆる日知らにさ庭べに秋草花の種を蒔かしむ　（明治三十四年）

晩年の長歌

煮兎憶諸友

下總のたかしがもとゆ、贈り來しにこ毛兎を、厨刀音かつ〳〵と、牛かひの左千夫がほふり、ふた股の太けき煮て、桐の舍もあきみつもをす、あなうまそびらの肉の、炙れるをむさぼるは吾ぞ、殘れるをほづまもがも、家遠み呼ばんすべなみ、もみぢ葉の赤木も岡も、あはれ幸なし

おくられものくさ〴〵

一、史料大觀（台記、槐記、扶桑名畫傳）

このふみをあまし〻人、このふみをよめとたばりぬ、そをよむとふみあけみれば、もじのへになみだしながる、なさけしぬびて

一、假面二つ茱より

わざをぎのにぬりのおもて、ひよとこのまがぐちおもて、世の中のおもなき人に、かさんこのおもて

一、草花の盆栽一つは麓より

秋くさの七くさ八くさ、ひとはちに集めてうゑぬ、きちかうはまづさきいでつ、をみなへしいまだ

（明治三十五年）

（昭和八年五月、萬葉集講座）

索引

隨感隨想

詞藻

古美術行脚

正岡子規を中心に

（をはり）

（正　誤）

△五三頁二行目、闘保之は闘保之助。

△二四三頁一三行目、乾材は乾漆材。

△四〇四頁一三行目、朝鮮鐘所のあり場春は――鐘のあり場所。

昭和十一年三月十五日印刷
昭和十一年三月二十日發行

正岡子規を中心に 奥附

定價 三圓

不許複製

著者検印

著者 香取秀眞 東京市瀧野川區田端四三八

發行者 鈴木神樹 東京市麹町區下二番町五四

印刷者 大山尊宗 東京市神田區神保町三ノ二三

發行所 學藝書院
東京市麹町區下二番町五四
振替東京六七四二四

香取秀眞先生二名著

全歌集　天之眞榊

著者は子規直門根岸短歌會發起者の一人であつた。

現下日本鑄金界の重鎮として又金工史家として、活躍されてゐる傍ら、三十一文字に托して詠唱される詩想は純情にして直截、その鑄刻の結晶は眞に萬葉の眞髄に徹する歌調である。年二十四より去年六十一歳までの三十八年間の作品二千數百首。その量に於いて、其質に於いて全く專門歌人をして顔色なからしめ得るもの、これ實に明治大正昭和の歌壇上燦然たる大歌集であり、永遠に日本文學史上に遺る名著であらう。全部新鑄十二ポイント活字を用ひ、著者各歳の年譜を加へ更に詳細なる索引を附錄として萬全を期した。菊判六百頁、素絹裝特製箱入、定價五圓五十錢、稅二十錢。

限定本三百五十部限り、速かに御註文を乞ふ。

隨筆　ふいご祭

○烏帽子着よふいご祭のあるじ振（似眞秀）子規

藝術を論じ、金工を教へ、趣味を語る。興趣滿點！更に正岡子規の一面を描いて是程貴重なる文獻は絕無であらう。作家としての著者、研究家としての著者、筆の人としての著者、人間としての著者等の全貌を展開した稀有の名隨筆集。

四六版上製　價二圓六十錢　稅十五錢

内容一斑

日本の有する藝術美
原始的金屬の溶解鑄金を語る
藝術味としての金工
國寶的存在の金工
工藝品のやはらか味

工藝美術に就て
明治大正工藝小史
自叙
東京美術學校純正工藝科併置の可否
美術館建設に就て
文展裝飾美術部新設

初めての帝展第四部の鑑査審査
水滴の話
和鏡の研究と採集
震災に罹つた大佛
花瓶の話
唐金と鐵の手入

振替東京六七四二四　學藝書院　東京市麴町區下二番町五四